２０１６年度

東洋大学審査学位論文

インド密教の五護陀羅尼研究

文学研究科 インド哲学仏教学専攻 博士後期課程

4120110001 園 田 沙弥佳

２０１６年度

東洋大学審査学位論文

インド密教の五護陀羅尼研究

文学研究科 インド哲学仏教学専攻 博士後期課程

4120110001　園 田 沙弥佳

目　次

序論　本論文の目的と方法.....7

1.　初期密教における陀羅尼経典.....9

2.　本研究の目的と方法.....11

2.1　本研究の目的.....11

2.2　五護陀羅尼の先行研究および本論文の研究方法.....12

第１部　インド密教における五護陀羅尼の展開.....15

第１章　『五護陀羅尼』経典の成立と特色
―『大寒林陀羅尼』を中心として―.....17

1.　『五護陀羅尼』の概要.....19

1.1　先行研究およびテキスト.....19

1.2　『大随求陀羅尼』.....24

1.3　『守護大千国土経』.....25

1.4　『孔雀王呪経』.....28

1.5　『大寒林陀羅尼』.....29

1.6　『大護明陀羅尼』.....30

2.　『大寒林陀羅尼』における諸問題.....32

2.1　mahāśītavatī と mahāśītavanī の問題.....32

2.2　サンスクリット、漢訳、チベット語訳の経題.....33

2.3　経題における‘daṇḍa’の問題.....33

2.4　2 種の『大寒林陀羅尼』の構成.....34

2.4.1　『大寒林陀羅尼』A 本の内容構成.....34

2.4.2　『大寒林陀羅尼』B 本の内容構成.....37

3.　考察.....41

第２章　神格化された五護陀羅尼 45

1.　五護陀羅尼経典の神格化 47

2.　『成就法の花環』*Sādhanamālā* 先行研究およびテキスト 50

3.　五護陀羅尼各明妃の成就法の内容構成 52

3.1　No.194「大随求明妃成就法」 52

3.2　No.195「大随求明妃成就法」 53

3.3　No.196「随求明妃成就法」 55

3.4　No.197「聖孔雀明妃成就法」 55

3.5　No.198「聖大千摧砕明妃成就法」 56

3.6　No.199「聖密呪随持明妃成就法」 56

3.7　No.200「聖大寒林明妃成就法」 56

3.8　No.201「偉大な五護陀羅尼儀軌」 56

3.9　No.206「五護陀羅尼成就法」 57

4.　考察 62

4.1　五護陀羅尼の成就法の特徴 62

4.2　五護陀羅尼マンダラの機能 66

4.3　五護陀羅尼各明妃の図像的特徴 68

4.3.1　大随求明妃 70

4.3.2　大千摧砕明妃 71

4.3.3　孔雀明妃 72

4.3.4　大寒林明妃 72

4.3.5　密呪随持明妃 73

結論 79

略号表および参考文献一覧 85

第２部　『大寒林陀羅尼』および『成就法の花環』五護陀羅尼の成就法和訳 ...91

1.　『大寒林陀羅尼』和訳 93
1.1『大寒林陀羅尼』（ŚV-A 本）和訳....93
1.1.0　使用テキスト....93
1.1.1　ŚV-A 本和訳....94
1.2『大寒林陀羅尼』（ŚV-B 本）和訳....101
1.2.0　使用テキスト....101
1.2.1　ŚV-B 本和訳....101

2.　『成就法の花環』「五護陀羅尼成就法」和訳....123
2.0　使用テキスト....123
2.1　No.194「大随求明妃成就法」 124
2.2　No.195「大随求明妃成就法」 125
2.3　No.196「随求明妃成就法」 128
2.4　No.197「聖孔雀明妃成就法」 129
2.5　No.198「聖大千摧砕明妃成就法」....129
2.6　No.199「聖密呪随持明妃成就法」....130
2.7　No.200「聖大寒林明妃成就法」 130
2.8　No.201「偉大な五護陀羅尼儀軌」 130
2.9　No.206「五護陀羅尼成就法」 132

第３部　サンスクリット校訂テキスト、チベット語訳および漢訳テキスト 143

1.　『大寒林陀羅尼』テキスト....145
1.1　『大寒林陀羅尼』（ŚV-A 本） 145
1.1.0　使用テキスト....145
1.1.1　ŚV-A 本サンスクリット校訂テキスト 146
1.1.2　ŚV-A 本チベット語訳テキスト....156
1.1.3　ŚV-A 本漢訳テキスト 161

1.2『大寒林陀羅尼』（ŚV-B 本） 164
1.2.0　使用テキスト.....164
1.2.1　ŚV-B 本チベット語訳テキスト.....164

2.　『成就法の花環』「五護陀羅尼成就法」テキスト 189
2.0　使用テキスト.....189
2.1　『成就法の花環』サンスクリット校訂テキスト 190
2.1.1　No.194「大随求明妃成就法」 190
2.1.2　No.195「大随求明妃成就法」 191
2.1.3　No.196「随求明妃成就法」 193
2.1.4　No.197「聖孔雀明妃成就法」 194
2.1.5　No.198「聖大千摧砕明妃成就法」 195
2.1.6　No.199「聖密呪随持明妃成就法」 196
2.1.7　No.200「聖大寒林明妃成就法」 196
2.1.8　No.201「偉大な五護陀羅尼儀軌」 197
2.1.9　No.206「五護陀羅尼成就法」 198
2.2　『成就法の花環』チベット語訳テキスト 206
2.2.1　No.194「大随求明妃成就法」 206
2.2.2　No.195「大随求明妃成就法」 208
2.2.3　No.196「随求明妃成就法」 210
2.2.4　No.197「聖孔雀明妃成就法」 212
2.2.5　No.198「聖大千摧砕明妃成就法」 213
2.2.6　No.199「聖密呪随持明妃成就法」 213
2.2.7　No.200「聖大寒林明妃成就法」 214
2.2.8　No.201「偉大な五護陀羅尼儀軌」 214
2.2.9　No.206「五護陀羅尼成就法」 215

序論

本論文の目的と方法

1.　初期密教における陀羅尼経典

陀羅尼とは、密教において呪文の一種として考えられており、その機能はマントラ（mantra, 真言）あるいは呪文（vidyā）と混用されることが多い。呪文としての陀羅尼と真言は同じ意味合いを持つが、長いものを陀羅尼、短いものを真言とする説もある[1]。初期の密教経典（所作タントラ）[2]の大部分は、いわゆる陀羅尼経典が占めている。

陀羅尼は本来、呪文としての機能は持っていなかった。呪文は原始仏教や部派仏教において、「真実語」（saccakiriyā, satyavacana）[3]や「パリッタ」（paritta, 護呪経典）[4]という言葉に該当するといわれる。陀羅尼を示すサンスクリットの dhāraṇī は、語根√dhṛ から派生した語で、一般的には「記憶」「憶持（心の中に持ち続けること）」等と訳されており、呪文の一種としての陀羅尼の役割とは異なった意味を持っている。

『摩訶般若波羅蜜経』の注釈書『大智度論』（鳩摩羅什訳、405 年[5]）において、陀羅尼は機能別に 3 種類に分類されている[6]。1 つ目は聞いた経法を忘れないための「聞持陀羅尼」、2 つ目は諸法の大小、美しいもの醜いものを分別して知るための「分別知陀羅尼」、3 つ目はいかなる言葉を聞いても喜ばず、怒らず、悪口に対し恨まないための「入音声陀羅尼」の 3 種である[7]。

一方で、初期の大乗経典の中でも『法華経』では精神統一と除災の陀羅尼が合わせて

---

1 （佐和 1975: 490）

2 チベット大学僧 Bu ston Rin chen grub（14 世紀）の「タントラ四分法」による。タントラ経典のうち、文献の多くが 4～6 世紀に現れ、陀羅尼や明呪の威力や尊格への祈願を通して現世利益を得ること目的とした「所作タントラ」kriyātantra、根本タントラを『大日経』とする「行タントラ」caryātantra、『真実摂経』を根本タントラとする「瑜伽タントラ」yogatantra、男女の性的交わりを主要な瑜伽修習法とした「無上瑜伽タントラ」anuttarayogatantra の 4 つに分ける（桜井 1996: 2-3）

3 （塚本 1989: 27）

4 スリランカ、ビルマ、タイなどの南方仏教圏の比丘たちによって、除災の為に現在も一般に読誦されるという経典。主要なものは、蛇に慈悲を示して蛇の害から身を守る呪である「犍度呪（けんどじゅ）」khandha-paritta、孔雀が狩人から身を護る呪である「孔雀呪」mora-paritta、アスラ （asura 阿修羅）との戦闘においてインドラ （indra 帝釈天）の旗の先をみてアスラの恐怖からのがれる呪である「幢首呪（とうしゅじゅ）」dhajagga-paritta、そして毘沙門天王がヤクシャ（yakṣa 夜叉）に信をおこさせるために説いた「アーターナーティヤ呪」āṭānāṭiya-paritta の四種である。陀羅尼が積極的に福徳をもたらす面を重視するのに対し、パリッタは消極的に災害から免れる面を強調しているという点で区別されるとの説がある。（塚本 1989: 25）（氏家 1984: 29）（山田 1989: 160）

5 （大野 2001）

6 『大智度論』巻五、初品菩薩功徳釋論第十（大正 25, p. 96 上）

7 （氏家 1984: 38）（塚本 1989: 28）

説かれている。鳩摩羅什訳（406 年）の『妙法蓮華経』「陀羅尼品第二十六」[8]には、除災のための陀羅尼が説かれている。そこでは薬王菩薩、勇施菩薩、毘沙門天王、持国天王、十羅刹女等が説く 5 種の陀羅尼で、受持、読誦、書写し、説法する法師を守護するための陀羅尼が説かれている。竺法護訳（286 年）の『正法華経』においても、呪文の部分が漢訳されているといった違いはあるが、同じく 5 種の陀羅尼（総持句五首）が説かれる[9]。一方「普賢菩薩勧発品第二十八」[10]は『法華経』を受持する者が普賢菩薩を見て歓喜する場面が説かれており、そこでは三昧 samādhi[11]と共に陀羅尼を得るという記述がみられる[12]。また、『法華経』を受持、読誦、書写する法師に対し、人ではないものによる破壊（悪霊から害されること）を免れ、女人から惑わされ乱されることを避けるための守護呪としての陀羅尼の機能が記されている。

この陀羅尼を説く両品を含む後半部は、『法華経』の原形と言われている前半部の諸品よりも成立がおくれる。したがって、『法華経』の中に陀羅尼が説かれたことで初期の大乗経典の中に陀羅尼が含まれていたとはいえないが、3 世紀の竺法護訳『正法華経』に除災の機能を持つ陀羅尼が説かれていることにより、呪文としての陀羅尼は漢訳年代からみても 3 世紀のインドにおいて行われていたと言われる[13]。

4 世紀ごろに成立したとされる『瑜伽師地論』[14]には、陀羅尼が 4 種類に分かれている。つまり、経典をつねに持して忘れないための「法陀羅尼」dharmadhāraṇī、陀羅尼のもつ念力と知恵の力によって経典の意味をつねに持して忘れないための「義陀羅尼」arthadhāraṇī、菩薩の悟りや知恵の獲得のための「能得菩薩忍陀羅尼」sattvakṣāntilābhadhāraṇī、そして三昧を自在になす力によって災を除く呪文としての「呪陀羅尼」mantradhāraṇī の 4 種である[15]。この『瑜伽師地論』では三昧のための陀羅尼、三昧の力によって除災する陀羅尼、そして呪文としての陀羅尼が説かれており、陀羅尼の機能の分類が明確になっている。

以上のことから、『大智度論』では陀羅尼の機能は主に憶持に関するものだが、3 世紀ごろの『法華経』においてはそこに呪文の機能をもつ陀羅尼があらわれた。そして 4 世紀ごろの『瑜伽師地論』では記憶と呪文の機能をもつ陀羅尼について、体系的に 4 つの分類がなされていたことがわかる。精神を集中する状態が続けば、頭脳は明晰になり、結果的に記憶力の増進につながるため、経典の内容をよく記憶することも可能であると

---

8 『妙法蓮華経』陀羅尼品第二十六（大正 9, pp. 58 中～59 中）
9 『正法華経』総持品第二十四（大正 9, p. 130 上～下）
10 『妙法蓮華経』普賢菩薩勧発品第二十八（大正 9, p. 61）
11 （氏家 1984: 47-48）
12 （松長 1998: 10-11）
13 （塚本 1989: 28-29）
14 『瑜伽師地論』巻四十五、菩薩地第十五初持瑜伽處菩薩分品第十七（大正 25, pp. 542 中～543 中）
15 （塚本 1989: 28）

いう[16]。精神統一を目的とした陀羅尼と、除災等を目的とした呪文が結合あるいは同一視される経緯に関しては未だ明確ではないが、遅くとも 3〜4 世紀には陀羅尼に呪の機能が付加されていたと推測されている。

陀羅尼の先行研究に関しては、氏家が[1984] [1987]において陀羅尼が大乗仏教や密教におけるマントラと陀羅尼の変遷と同化について、その過程を述べている。近年では大塚[2013a 等]が『孔雀経』『檀特羅麻油述経』『十一面観音神呪経』『牟梨曼陀羅呪経』等といった、各陀羅尼経典の特色や歴史的背景について詳細な考察を行っている。

後期密教の時代になると陀羅尼経典が神格化する例があらわれ、尊格として信仰の対象となった。本論文では五護陀羅尼を例にして、陀羅尼経典が神格化した際の尊格の性格を、経典と比較しながら考察する。

2.　本研究の目的と方法

2.1　本研究の目的

本研究はインド密教における陀羅尼経典の一種である「五護陀羅尼」*Pañcarakṣā*（パンチャラクシャー）を対象に、初期密教経典である五護陀羅尼、およびそれらが女尊として神格化された際の五護陀羅尼の明妃について述べた文献および図像研究による検討を通じて、五護陀羅尼信仰の展開を明らかにすることを目的とする。

本論文で取り扱う五護陀羅尼もまた、先に述べたような様々な呪の機能が期待されている初期密教経典に属する。インド密教における五護陀羅尼とは、『大随求陀羅尼』*Mahāpratisarā*、『守護大千国土経』*Mahāsāhasrapramardanī*、『孔雀王呪経』*Mahāmāyūrī*、『大寒林陀羅尼』*Mahāśītavatī*、そして『大護明陀羅尼』*Mahāmantrānusāriṇī* の 5 種の陀羅尼経典、およびそれらの経典が神格化された女神のグループを示す。五護陀羅尼の各経典は単独で成立し、主にネパール、チベット、中央アジア、中国、日本、インドネシアに広まった。

五護陀羅尼の各経典が成立した初期密教時代は、年代的に 3〜7 世紀中頃までと比較的間隔がある。前述したように、大塚[2013]はこれをさらに 3 期に分割している。それらのうち第 1 期（3〜5 世紀中頃）にあらわれる陀羅尼は、大乗の空思想や陀羅尼思想から展開した「密教系ダラニ経典」と、小乗部派のパリッタ（護呪）から展開した「密教系護呪経典」に分類できるという。「密教系護呪経典」には、『孔雀王呪経』および『大寒林陀羅尼』の成立に関係した経典が含まれている[17]。さらに第 3 期（6 世紀後半〜7 世紀前半）には『大随求陀羅尼』の類本が新出している[18]。

その後、五護陀羅尼に属する 5 つの経典がそれぞれ神格化され、五護陀羅尼明妃とし

16　（塚本 1989: 27）
17　（大塚 2013: 8)
18　（大塚 2013: 14-15)

て信仰の対象となった[19]。五護陀羅尼の各明妃が成立した時期は未だ明確ではないが、遅くとも 7、8 世紀までにはそれぞれ単独で神格化された。11～12 世紀にインドで編纂された成就法の集成である『成就法の花環』*Sādhanamālā* や『完成せるヨーガの環』*Niṣpannayogāvalī*、チベットで 19 世紀に再編された『西蔵マンダラ集成』*rGyud sde kun btus*（『タントラ部集成』）[20]には五護陀羅尼明妃の成就法や 5 尊を中心とするマンダラの記述が見られる[21]。そして五護陀羅尼経典の写本においても、各明妃の姿が描かれることが多い[22]。

本研究では、五護陀羅尼の経典および神格化された女尊としての五護陀羅尼成就法の構造、そしてそこにあらわれる各女尊の図像的特徴などから、五護陀羅尼の展開の特色を明らかにしたい。

2.2　五護陀羅尼の先行研究および本論文の研究方法

五護陀羅尼経典の先行研究には、[田久保 1972]の『孔雀王呪経』、[Iwamoto1937a]の『守護大千国土経』、[Iwamoto1937b]の『大寒林陀羅尼』、[Iwamoto1938] [Hidas2011]の『大随求陀羅尼』、[Skilling1994]の『大護明陀羅尼』のサンスクリット校訂テキストがある。各経典の和訳については、[岩本 1975] （『守護大千国土経』『孔雀王呪経』）、英訳には[Hidas2011]（『大随求陀羅尼』）がある。筆者は[園田 2016a] [園田 2016b]において『大寒林陀羅尼』の和訳を発表した。そのほかに奥村[1973]の『大寒林陀羅尼』について概略的な報告や、奥山[1998]の『大護明陀羅尼』に関する考察、倉西[2013]による五護陀羅尼経典の概略および『孔雀王呪経』の考察、大塚[2010]による『大寒林陀羅尼』成立についての考察、および[大塚 2013]の『孔雀王呪経』等の初期密教経典の詳細な研究がある。

一方、女尊としての五護陀羅尼の成就法については、バッタチャリヤ Bhattacharya [1968a]が『成就法の花環』のサンスクリット・テキスト校訂を行っている。また、五護陀羅尼の図像に関する先行研究に関しては、『成就法の花環』を校訂したバッタチャリヤ[1968b]が『成就法の花環』に含まれている諸尊の図像的特徴を詳細に述べており、それらの中に五護陀羅尼の各明妃も含まれている。頼富・下泉[1994]は五護陀羅尼の各明妃の功徳や図像的特徴について述べ、Lewis[2000]は五護陀羅尼の経典および神格化の概要について説明しているが、それぞれ具体的な成就法次第は述べていない。

また、『大寒林陀羅尼』、『大護明陀羅尼』の 2 つのバージョンの存在が[Skilling1992]によって指摘されている。『大寒林陀羅尼』に関してはその後も複数の先行研究で 2 つのバージョンが指摘されていたが、チベット語訳にのみ存在するバージョンの内容に関

---

19 （立川 2004: 108）（立川 2009: 135）（倉西 2013: 158）

20 （bSod nams rgya mtsho, Tachikawa1989）

21 『西蔵マンダラ集成』に含まれている五護陀羅尼マンダラについては、本論文 p.49 の図 6, 7 を参照。

22 第 1 部第 1 章 1.2~1.6 の図 1～5 参照

してはこれまで具体的に取り上げられてこなかった。本論文ではこの『大寒林陀羅尼』の 2 本のバージョンを比較検討する。

インドやチベット、ネパール等においては 5 つの経典が集まって五護陀羅尼として扱われてきたが、漢訳においてはそれぞれ単独の経典として訳出されており、一括して扱われることは一般的ではなかったようである。経典研究自体も単独の経典として取り上げられることが多く、一方で、経典と神格化された五護陀羅尼を包括的に扱っている研究は少ない。本研究は初期密教経典に属する五護陀羅尼経典の特色を検討するとともに、神格化された五護陀羅尼女神の成就法について考察するものである。本論文においては、経典と図像に関する多角的な五護陀羅尼信仰の研究を通じて、密教の時代の経過における五護陀羅尼の信仰形態の変遷という新しい視点を、当該分野の研究に提供できるものと考える。

本論文は「第 1 部　インド密教における五護陀羅尼の展開」、「第 2 部　『大寒林陀羅尼』および『成就法の花環』五護陀羅尼の成就法和訳」、「第 3 部　サンスクリット校訂テキスト、チベット語訳および漢訳テキスト」から成る。

第 1 部では経典としての五護陀羅尼、およびそれらが神格化され信仰された際の五護陀羅尼明妃の姿について検討する。

「第 1 章『五護陀羅尼』経典の成立と特色―『大寒林陀羅尼』を中心として―」では、各五護陀羅尼経典の内容構成と特色について考察するが、特に、先行研究で指摘されている『大寒林陀羅尼』の 2 つのバージョンについて取り上げる。『大寒林陀羅尼』の第 1 のバージョンでは世尊がラーフラ尊者に陀羅尼を授け、第 2 のバージョンでは世尊と四天王の対話が中心となっている。前者は先行研究によって 4 世紀頃に成立した『檀特羅麻油述経』から影響を受けたといわれている[23]。後者は五護陀羅尼文献の『守護大千国土経』等と構成が類似している。本論文では 2 本の『大寒林陀羅尼』、および、他の経典との関係性を比較考察し、『大寒林陀羅尼』の特色を明らかにする。

次に「第 2 章神格化された五護陀羅尼」では、『成就法の花環』と『完成せるヨーガの環』における五護陀羅尼の成就法次第とともに図像的特徴を比較考察し、神格化した五護陀羅尼の特色を明らかにする。上記 2 本のテキストにあらわれる五護陀羅尼各明妃の単独の成就法や、マンダラにみられる観想上の各明妃の姿を取り上げ、神格化された五護陀羅尼の機能について考察する。

第 2 部は『大寒林陀羅尼』の 2 つのバージョン、および『成就法の花環』No.194～201, 206 の和訳である。

第 3 部は第 2 部で扱ったサンスクリット校訂テキスト、チベット語訳テキスト、漢訳テキストを含んでいる。

これまで述べたように、本論文では初期密教経典の陀羅尼のうち、経典が後になって女尊として神格化した一例として五護陀羅尼を取り上げ、その展開をふまえた上で、経

[23] [大塚 2010]

典が神格化した際の陀羅尼の機能の変遷について明らかにしたい。古くからの呪文、人々から求められるままに発展し信仰されてきた経文が、なぜ女尊として神格化、可視化されるに至ったのか。また、その役割はどのように変化してきたのか、本研究を通してその一端を明らかにしたい。

第１部

インド密教における五護陀羅尼の展開

第 1 章

『五護陀羅尼』経典の成立と特色

―『大寒林陀羅尼』を中心として―

1. 『五護陀羅尼』の概要

1.1 先行研究およびテキスト

五護陀羅尼経典のサンスクリット･テキストの具体的な成立年代は明らかではないが、『孔雀王呪経』は 4 世紀頃の鳩摩羅什訳が存在し、五護陀羅尼の中で最も早く成立したと見られている。一方で最後に成立した経典は、終結部に他の五護陀羅尼の経典名が記述されている『守護大千国土経』であるという。『大随求陀羅尼』は北インドで遅くとも 6 世紀には知られ、さらに 8 世紀初頭には五護陀羅尼の一つとして組み込まれてネパール、チベット、中央アジア、中国、日本、インドネシアに広まったといわれている[24]。

また、奥山[1998: 71]によると、『守護大千国土経』（施護訳、983 年）および『大寒林聖難拏陀羅尼経』（法天訳、984 年）と『大護明大陀羅尼経』（法天訳、984 年）の漢訳年代から見て、サンスクリット・テキストの五護陀羅尼の下限年代は 10 世紀末まで引き上げられると推測されている。一方大塚[2010]は、『大寒林陀羅尼』が成立する際に影響を受けたとみられる『檀特羅麻油述経』（曇無蘭訳）の翻訳年代は 4 世紀であると指摘している。

序論でも簡略に述べたが、各経典のサンスクリット校訂テキストには田久保の『孔雀王呪経』（田久保 1972）をはじめ、岩本の『守護大千国土経』（Iwamoto1937a）、『大寒林陀羅尼』（Iwamoto1937b）、『大随求陀羅尼』（Iwamoto1938）といった一連の研究がある。和訳に関しては、[岩本 1975]の『守護大千国土経』、『孔雀王呪経』があげられる。近年では Hidas（2011）によって 7 世紀頃のギルギット写本をもとにした『大随求陀羅尼』の校訂テキスト、および英訳がなされた。筆者は[園田 2016a]において『大寒林陀羅尼』の和訳を行い、さらに[園田 2016b]において別バージョンの『大寒林陀羅尼』の概要を発表した。2 つの『大寒林陀羅尼』については、後述する「2.『大寒林陀羅尼』における諸問題」において詳細に述べる。

また、Skilling [1992]によって『大寒林陀羅尼』『大護明陀羅尼』には 2 つのバージョンが存在することが指摘された。そこでは『大護明陀羅尼』と『ヴァイシャーリープラヴェーシャ』、およびこの経典が組み入れられている根本説一切有部律の『薬事』*Bhaisajyavastu* との関連性が指摘され、その後 [奥山 1998]によって『大護明陀羅尼』の成立過程が考察されている。

また、倉西[2013a]は五護陀羅尼経典の概要と『孔雀王呪経』の内容構成について述べている。さらに倉西[2013b]は「五護陀羅尼をただ密教経典と断定せず、僧俗等の区別に関わらない通仏的な役割を持った『守護呪文献』というジャンルである」という Skilling の説[1992][1994]を取り上げ、このような新しい見方は興味深いと述べている。

大塚[2010]は『大寒林陀羅尼』と『檀特羅麻油述経』等との関係性を取り上げ、後者が『大寒林陀羅尼』に発展し、そこに儀軌が追加されさらに展開していったことを論証

[24] [Hidas2011: 21]

している。また、大塚[2013]は『孔雀王呪経』等の初期密教経典を取り扱い、3〜7 世紀にわたる初期密教時代を 3 期に分割した上で、初期密教の成立過程について詳細に考察した。

上述のように五護陀羅尼研究のテキストの和訳や校訂が進められているが、それぞれの経典は単独で取り扱われていることが多く、経典と神格化された五護陀羅尼を包括的に扱っている研究は少ない。本論文では現在指摘されている 2 種の『大寒林陀羅尼』経典を中心に取り上げ、その 2 つのバージョンを比較検討する。さらに『成就法の花環』*Sādhanamālā*（略号 SM）において説かれている神格化した五護陀羅尼明妃の姿を通して、五護陀羅尼信仰の展開について考察する。

五護陀羅尼は、『大随求陀羅尼』、『守護大千国土経』、『孔雀王呪経』、『大寒林陀羅尼』、『大護明陀羅尼』の順序で挙げられることが多い。理由は明確ではないものの、上記の順序はほぼ一定している[25]。

なお、前述したように『大寒林陀羅尼』『大護明陀羅尼』は内容が異なる 2 つのバージョンが存在し、現在確認されている五護陀羅尼に所属する経典は合計 7 種類である[26]。ネパールなどに現存するサンスクリット写本では以上の内の 5 つの経典が一括されて五護陀羅尼として構成されることが多い。以上の先行研究をふまえたサンスクリット校訂テキスト、チベット語訳および漢訳テキストの対照は、以下の表 1 のとおりである。

経典名 （尊格名）	サンスクリット・ テキスト（校訂）	漢訳	チベット語訳
『大随求陀羅尼』 （大随求明妃）	*Mahāpratisarā* （Iwamoto1938） （Hidas2011）	『普遍光明清浄熾盛 如意宝印心無能勝 大明王大随求陀羅尼経』 唐　不空訳 （大正 20, No. 1153） Ad.746-774	*'Phags pa rig sngags kyi rgyal mo so sor 'brang ba chen mo* （*Ārya mahāpratisarā vidyārājñī,* 『聖大随求明呪経』） Ota. No.179, Toh. No.561, ナルタン No.494, チョネ No.184, ラサ No. 518 Jñānasiddhi, Dānaśīla, Ye shes sde 訳
		『随求即求大自在 陀羅尼神呪経』 唐　宝思惟訳 （大正 20, No. 1154） Ad.693	
『守護大千国土経』 （大千摧砕明妃）	*Mahāsāhasra-pramardanī* （Iwamoto1937a）	『守護大千国土経』 宋　施護訳 （大正 19, No. 999） Ad.983	*sTong chen po rab tu 'jogs pa shes bya ba'i mdo* （*Mahāsāhasrapramardana sūtra,* 『摧破大千経』） Ota. No.177, Toh. No.558 Śīlendrabodhi, Jñānasiddhi, Śākyaprabha, Ye shes sde 訳

25 （Iwamoto1937a: 6）（塚本 1989: 64）
26 （奥山 1998: 74-75）

<table>
<tr><td rowspan="6">『孔雀王呪経』
（孔雀明妃）</td><td rowspan="6">*Mahāmāyūrī*
（田久保 1872）</td><td>『仏母大孔雀明王経』
唐不空訳
（大正 19, No. 982）
Ad.746-774</td><td rowspan="6">*Rig sngags kyi rgyal mo rma bya chen mo*
（*Mahāmāyūrī vidyārājñī,*
『大孔雀明呪王』）
Ota. No.178, Toh. No.559
Śīlendrabodhi, Jñānasiddhi, Śākyaprabha, Ye shes sde 訳</td></tr>
<tr><td>『孔雀王呪経』
梁僧伽婆羅訳
（大正 19, No. 984）
Ad.506-520</td></tr>
<tr><td>『大孔雀呪王経』
義浄訳
（大正 19, No. 985）
Ad.706</td></tr>
<tr><td>『大金色孔雀王呪経』
（大正 19, No. 986）
失訳</td></tr>
<tr><td>『大金色孔雀王呪経』
（大正 19, No. 987）
失訳</td></tr>
<tr><td>『孔雀王呪経』
（大正 19, No. 988）
姚秦鳩摩羅什訳
（4 世紀頃）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">『大寒林陀羅尼』
（大寒林明妃）</td><td>*Mahāśītavatī*
（Iwamoto1937b）</td><td>『大寒林聖難拏陀羅尼経』
（大正 21, No. 1392）
宋法天訳 Ad.984</td><td>*'Phags pa be con chen po shes bya ba'i gzungs*
（*Ārya mahādaṇḍa nāma dhāraṇī,*
『聖持大杖陀羅尼』）
Ota. No.308=583,
Toh. No.606=958,
ラサ No.519, ナルタン No.495
Jñānasiddhi, Dānaśīla, Ye shes sde 訳</td></tr>
<tr><td>（欠）</td><td>（欠）</td><td>*bSil ba'i tshal chen po'i mdo*
（*Mahāśītavana sūtra,*
『大寒林経』）
Ota. No.180, Toh. No.562, ラサ No.519, ナルタン No.495
Śīlendrabodhi, Jñānasiddhi, Śākyaprabha, Ye shes sde 訳</td></tr>
<tr><td rowspan="2">『大護明陀羅尼』
（密呪随持明妃）</td><td>*Mahāmantrānusāriṇī*
（Skilling1994, 608-622）</td><td>『大護明大陀羅尼経』
（大正 20, No. 1048）
宋法天訳 Ad.984</td><td>（欠）[27]</td></tr>
<tr><td>（欠）</td><td>（欠）</td><td>*Gsang sngags chen po rjes su 'dzin pa'i mdo*
（*Mahāmantrānudāri sūtra,*
『大真言随持経』）
Ota. No.181, Toh. No.563
Śīlendrabodhi, Jñānasiddhi, Śākyaprabha, Ye shes sde 訳</td></tr>
</table>

表 1.『五護陀羅尼』サンスクリット校訂テキスト、チベット語訳および漢訳テキスト対照表[28]

[27] 根本説一切有部律の『薬事』「ヴァイシャーリープラヴェーシャ」（Ota. No. 1030 [Ge 34a^2-42a^2], Toh. No. 1 [Kha37a^1-40b^1]）との関連性が指摘されている。

[28] この表は[Iwamoto1938][塚本・松長・磯田 1989] [奥山 1998]を基に筆者が作成した。

また、8～9 世紀にかけてチベットで編纂された現存する最古の仏典目録といわれる『デンカルマ』[29]（dKar chag ldan kar ma）、『パンタンマ』[30]（dKar chag 'Phang thang ma）においても、「五大陀羅尼」（gzungs chen po lnga）というカテゴリーの中に五護陀羅尼の各経典が収録されている。[川越 2005: 1]によると、『デンカルマ』『パンタンマ』間における五護陀羅尼各経典の偈の数は異なるという。経題も多少異なっているものの、収録されている順番は、同時期に成立した『デンカルマ』『パンタンマ』間で同じである。なお、『デンカルマ』および『パンタンマ』における五護陀羅尼各経典の対照は、以下の表 2 のとおりである。

	『デンカルマ』	『パンタンマ』
	「五大陀羅尼」（gzungs chen po lnga la）	
『孔雀王呪経』	No. 329 'phags pa rma bya chen mo	No. 316 rig sngags kyi rgyal mo rma bya chen mo
『守護大千国土経』	No. 330 'phags pa stong chen mo rab tu 'joms pa	No. 317 stong chen mo rab tu 'joms pa
『大随求陀羅尼』	No. 331 'phags pa rig pa'i rgyal mo so sor 'brang ba chen mo	No. 318 rig pa'i rgyal mo so sor 'brang ma chen mo
『大寒林陀羅尼』	No. 332 'phags pa gsil ba'i tshal chen mo	No. 319 bsil ba'i tshal
『大護明陀羅尼』	No. 333 'phags pa gsang sngags rjes su 'dzin pa	No. 320 gsang sngags rjes su 'dzin pa

表 2. 仏典目録『デンカルマ』『パンタンマ』における五護陀羅尼経典対照表[31]

次に、仏教資料文庫、東大写本、京大写本に収録されている五護陀羅尼（Pañcarakṣā）のサンスクリット写本をあげる。

[Takaoka ed. 1981]（仏教資料文庫）

Pañcarakṣā　A58, 100, 176, KA5, GA3, 6, 10,15, CA4,19, 74-5, CH47, 76, 139, 165, 196, 253,312,318, 340, 436, 437, 445, 544, 545-B, 546, 547, 564, 565, 572, DH38-A, 39, 61, 67, 72, 73, 83, 106, 112, 135, 157, 164,165, 259, 316, 324, 387, 402, 406, 426, 432, 436, JN3

Pañcarakṣāvidhi（vidhāna）CH288-A, 470, DH157

Mahāpratisarā　DH18, 27, 87, 430, Mahāsāhasrapramardanī DH166

[29] （芳村 1974）

[30] [川越 2005: 1]によると、『パンタンマ』は『デンカルマ』『チンプマ』（dKar chag mChims phu ma）と並ぶ、チベット前伝期（9 世紀前半ごろ）に編纂された現存する最古の仏典目録である。チベット大蔵経（Toh. No.4346, Ota. No.5851）に含まれている『デンカルマ』以外の二編は、これまで存在しないと言われていたが、2003 年に中国（北京）で出版された。これによって、『パンタンマ』の全体が初めて公になったという。

[31] この表は[芳村 1974] [川越 2005]を基に、筆者が作成したものである。

[Matsunami 1965]（東大写本）

下の表 3 は、東大写本松濤目録（Matsunami 1965）および松濤ノート（Matsunami（年代不明））に収録される *Pañcarakṣā*（五護陀羅尼）の写本 No.を対照させたものである。

NN.	ON.	MN vol.(page)	NN.	ON.	MN vol.(page)
220	276	14(68)	227	444	15(17)
221	286	16(5)	228	450	31(28)
222	288	15(29)	229	452	25(14)
223	289	15(63)	230	455	31(31)
224	291	15(3)	231	482	15(11)
225	334	15(9)	232	568	不明
226	439	15(6)	233	236	不明

表 3. *Pañcarakṣā*（五護陀羅尼）松濤目録、松濤ノート対照表[32]
NN. = NewNumber, ON. = OldNumber, MN= [Matsunami（年代不明）]

[Goshima・Noguchi1983]（京大写本）

mahāpratisarā No.60, mahāsāhasrapramardanī No.61, mahāśītavatī No.62

また、筆者は未見であるが、[Konishi 1990]によるとカルカッタの Asutosh Museum に所蔵されている五護陀羅尼の写本は 1105 年にあたる年号を奥付にもち、南アジアにおけるネパール紙に書かれた紙本文書のなかで最古の例であるという。そのほか、『五護陀羅尼』として一括されたタングート・テキスト（11~15 世紀頃）が現存する[33]。Grinstead [1971: 1]は、タングート・テキストの『孔雀王呪経』が大正 No. 982『仏母大孔雀明王経』に相当すると述べている[34]。

一方、漢訳では五護陀羅尼経典はそれぞれ単独の陀羅尼として訳出されており、過去において一括された痕跡はないという[35]。

以上に述べた五護陀羅尼に属する各経典はそれぞれ別個に成立し、原形の成立が最も古い文献は『孔雀王呪経』、最も新しい文献は『守護大千国土経』であるということが[Iwamoto1938]によって論証されている。以下では、各経典の歴史的背景と概要について述べよう。

[32] [Matsunami 1965]および松濤ノート[Matsunami（年代不明）]を参考にして、筆者が作成したものである。
[33] （Grinstead 1971: 9）
[34] （Grinstead 1971: 1）
[35] （岩本 1937: 8）（岩本 1975: 272）

1.2 『大随求陀羅尼』

前述したように、[Hidas 2011]によると、『大随求陀羅尼』は 6 世紀までに北インド周辺で成立したという。この経典は国土、村落、牧草地の守護、また飢饉や病気からの保護を目的とし[36]、除厄招福の現世利益のみではなく、さらに出世間の功徳も説く。日本でも「随求陀羅尼」として知られ、平安時代以降から唱えられていたが、民衆に広まったのは『諸回向清規』に掲載される江戸時代からといわれている[37]。

対応する漢訳経典の一つである不空訳『普遍光明清浄熾盛如意宝印心無能勝大明王大随求陀羅尼経』[38]は、「上巻」、「下巻」、「得（修行）菩薩随求大護王明王陀羅尼第二」の 3 つからなる。「上巻」、「下巻」共に故事を引用し、この経を聴くことの功能、受持読誦の利益、また、書写帯持の功徳が述べられ、次に五言頌によって書写陀羅尼法が訳されている。特に上巻の最初の陀羅尼は長編である。インド、中国、日本を通じて広まり、その霊験談も多いという[39]。

また、唐宝思惟の『随求即得大自在陀羅尼神呪経』[40]は本経と同本だが、偈や陀羅尼等が所々省略されている。岩本[1938: 1]はこの経典が五護陀羅尼 5 編のうちで最も文学的であることや、挿入された説話にヴァーラーナシーのブラフマダッタ Brahmadatta 王が登場することから[41]、釈迦の前世の物語である「ジャータカ」（本生譚）との関係性などを指摘している[42]。なお、『大随求陀羅尼』は神格化されると「大随求明妃」、「大随求菩薩」、「マハープラティサラー」等と呼ばれる（図 1 参照）。

図 1. 大随求明妃

14 世紀頃、東インド、バレンドラ・ブーミ派

（東京国立博物館 2015: 131）

『大随求陀羅尼』は全体が二章からなる。具体的には、二種の陀羅尼呪、四種のマントラ、九種の物語、護符の作り方、関連儀礼の説明が説かれている[43]。経典のあらすじ

---

36 （中村 1988: 644）

37 （渡辺 2012: 173）

38 （大正 20, No. 1153）

39 （小野 1985: 234）

40 （大正 20, No.1154）

41 岩本 1937a にはブラフマダッタ王の記述が計 5 ヶ所あった。

42 （山田 1989: 159）
「ジャータカ」からどの説話が引用されているのか具体的には述べられていないが、[中村 1984]『ジャータカ全集』全巻にわたってヴァーラーナシーのブラフマダッタ王が頻出していることが確認できる。

43 （倉西 2013b: 162-163）

は以下の通りである[44]。

世尊が霊鷲山にいた時、菩薩や声聞の会衆、デーヴァプトラ、アシュレーンドラ、ナーガ王、キンナラ王、ガンダルヴァ王、ヴィドヤーダラ王、ガルダ王、ヤクシャ王、500人の息子をつれたハーリーティーや、その眷属等が集まっていた場面が説かれる。そして、大随求陀羅尼の様々な効能と、第一の陀羅尼呪が説かれる。

次に、大随求陀羅尼による功徳が説かれた九つの例えが示される。第一に、カピラヴァストゥの王子ラーフラバドラ[45]の例えである。ラーフラバドラの母であるシャーキャ族の娘ゴーパーのが火炉に自らを投げ打った際、ラーフラバドラは母の子宮の中で大随求陀羅尼を心で唱えた。すると火は冷たくなり、ゴーパーの身体は火によって傷つくことはなかった。第二に、シュールパーラカ Śūrpāraka の商人の長の息子の例えが説かれる。息子は呪文を修得しており徳釈迦竜王に攻撃したが、竜王の怒りをかい、噛まれて致命傷を負った。呪文を熟知した多くの人々が呪文を唱えたが、毒を抜くものはなかった。しかし、ヴィマラシュッディ Vimalaśuddhi と呼ばれるシュールパーラカの在家の女性が大随求陀羅尼を唱え、毒を浄化したという。第三に、ヴァーラーナシーのブラフマダッタ王の例えが説かれる。大臣がブラフマダッタ王に、隣国からヴァーラーナシーに攻撃が始まることを報告した。すると王は「心配ない、私は大随求陀羅尼を持している」と答え、頭を様々な香りの香水で洗い、きれいな布をまとい、大随求陀羅尼を描き、髻を結い、大随求陀羅尼を鎧とした。隣国の王の脅威はこの陀羅尼によって退けられたという。以下、第四に大随求の語源、第五に商人ヴィマラシャンカ Vimalaśaṅkha の船が海の怪物と嵐から守られる例え、第六にプラサーリタパーニ王 Prasāritapāṇi に息子が授けられる例え、第七にシャクラがアシュラとの戦いに打ち勝つ例え、第八に如来がマーラによる攻撃から守られる例え、第九に罪の生活から守られる例えが説かれる。

続けて、腕に結び付ける護符の作り方やその効能と、第二の陀羅尼呪が説かれる。続けて、儀礼の際に着用する服や、曼荼羅の描き方、そして香水、花、果物、種、ミルクなどの供物が示される。

最後に、この陀羅尼を保持するものは神々によって様々な障害から守護され、利益を得られることが説かれる。世尊からこれらのことを聞いた一切の菩薩や衆生たちは歓喜した。

以上が『大随求陀羅尼』の概要である。

1.3 『守護大千国土経』

悪霊からの守護を目的として用いられる。[Iwamoto1937a]は五護陀羅尼 5 編のうち、この経が最も密教的色彩が濃いことを指摘し、さらにこの経が 5 編中最後期の成立であ

---

[44] 内容については[Hidas 2011]の校訂本および英訳を参照した。

[45] ラーフラバドラとは、般若経の空思想を基礎付けた『中論』の著者であるナーガールジュナ（150～250 年）の後継者の一人であると言われている。（佐々木他 1966: 84-89）

ることを論証した[46]。なお、『守護大千国土経』は神格化されると「大千摧砕明妃」「マハーサーハスラプラマルダニー」等と呼ばれる。（図 2 参照）

図 2. 大千摧砕明妃（Takaoka1981: A100）

『守護大千国土経』のサンスクリット名は「マハーサーハスラプラマルダニー」*Mahāsāhasrapramardanī* である。マハーサーハスラ mahāsāhasra は「大千」、プラマルダニーpramardanī は「退治すること」を意味する[47]。この経に対応する漢訳経典である『守護大千国土経』[48]は上中下巻からなる。四天王[49]の神呪よりも本経の神呪の功徳が広大であることや、その修法が記されている[50]。『守護大千国土経』の内容については以下のとおりである[51]。

ある時、世尊は霊鷲山の南側に、シャーリプトラ、マハーマウドガリヤーヤナ、マハーカーシャパ等の 1230 人の僧の大衆と共に住していた。その時、世尊は天眼によって、ヴァイシャーリーで起こった天災を見た。そこは大地震が起こり、大雷雲があらわれ、十方が暗闇であった。リッチャヴィ族の集落では、一切の人々が悪霊に憑りつかれていた。皆が恐れおののき、泣きながら、仏、法、僧を望んでいた。仏教徒以外の者も、このような災難から逃れる方法を考えていた。

そこで世尊は神通によって奇跡を示したため人々は安堵し、サハー世界の主のブラフマンや、神々の王であるシャクラ、四天王とその眷属、28 人のヤクシャの将軍、子供を連れたハーリーティー等が集まり、世尊に礼拝した。

世尊は四天王に「汝らの眷属はこの世のものを悩ませてはならない」と話し、四天王は自身の眷属であるヤクシャ等が憑りついた場合の症状と、それらを四天王の力によって鎮めるための呪を世尊に答えた。

四天王が説いた呪文に対し、世尊はさらなる守護の呪を説いた。世尊の呪を聞いた四天王は恐れ驚いて合掌して、『守護大千国土経』は偉大な神呪であると言った。その時、

---

46 （山田 1989: 160）（塚本 1989: 64）

47 岩本[1975: 272]によると、国土を守護することから『守護大千国土経』という経典名に漢訳されたが、その後、以上のような働きをするラークシャシー（羅刹女）の名とされたという。

48 『守護大千国土経』（大正 19, p.578）

49 北方の薬叉の主である毘沙門天王、東方の彦達嚩 gandharva の主である持国天王、南方の矩畔拏 kumbhāṇḍa の主である増長天王、西方の龍の主（龍王）である広目天王の 4 尊。

50 （小野 1985: 49-50）

51 内容については上記漢訳と[Iwamoto1937a]の校訂本、および[岩本 1975]の和訳を参照した。

世間の祖父であるブラフマン（大梵天王）[52]は世尊の前で四天王に対し「人間たちは無関心な汝らに苦しめられている」と言った。四天王はそれを認め、害する者を捕らえると答えた。恐ろしい姿と行為で世間を恐れさせる様々な悪鬼、悪霊は世尊の前に集められ、呪の鎖に捕らえられた。罪深い彼らは人間を害しながらも、生まれ変わることを望んでいたという。

毘沙門天は世尊に、北方にある自国のアダカヴァティー宮殿の美しい様子や、その場所が天神衆の憧れの的であることを述べた。その中で、自分が美味しい飲み物を飲み愛欲にふけっている間に眷属が逃げ出し、それらが様々な姿をとって生き物を苦しませたことを述べた。さらに、自らが彼らを罰するための呪文を世尊の前で述べた。そして次々と他の四天王も自らが彼らを罰するための呪文を述べた。続いてブラフマンも立ち上がり、彼らを罰するための呪文を述べた。

「仏はある者や国等のために出現するのではなく、天や人間、悪魔や眷属等を含めた生命ある者たちの住む世界にあらわれるのである」と世尊は語った。続けて、「これより霊鷲山を降りて仏のなすべきことをすると」言い、1250 人の僧とブラフマン、四天王等の天神衆とその眷属と共にヴァイシャーリーに向かった。

ヴァイシャーリーのリッチャヴィ族の者は光り輝く世尊を見て、安堵し、歓喜し、近づいて平伏した。世尊はリッチャヴィ族の頭をなで、彼らを立ち上がらせ、何も恐れることはないとなだめた。

世尊は『守護大千国土経』という神呪の女王の数々の功徳を説き、それを聞いたブラフマンは、「それはどのようなものでしょうか」と尋ねた。世尊は偈と呪文によって、『守護大千国土経』の呪文は人間を一切のあらゆる鬼霊から解き放つものであることを答えた。

『守護大千国土経』が説かれた時、世界は六種に振動し、ヤクシャ、羅刹や、幾百の鬼霊が悲鳴を上げて逃げようとしたが、ブラフマンや神々の主インドラによって妨げられ、呪によって苦悶した鬼霊らは世尊に救いを求めた。

それに対し世尊は慈しみをもって、戒律を学ばせた。アルジャカの花房のように頭が 7 つに裂け、ヤクシャの病や皮膚病に罹らせる「守護大千国土経」を駆使し、思いのままに過ごそう、と語った。その時ヴァイシャーリーでは恐怖、病気、災難から解放され、リッチャヴィ族の人々は安楽になった。

さらに世尊は、王国の区切りを決めようとする王や、病人、悪霊に取りつかれた者、丹毒、吹き出物、痔ろう等の治療を行う者、抗争や喧嘩、あるいは敵軍等を征服したい者のための儀礼や呪文を説く。ブラフマン、シャクラ、四天王、ハーリーティー等は、この「守護大千国土経」を唱えた者を守護することを世尊に約束し、席を立った。

それから僧たちは、世尊が 5 種の偉大な経典（すなわち『守護大千国土経』『孔雀王呪経』『大寒林陀羅尼経』『大随求陀羅尼経』『大護明陀羅尼経』）を説いたことと、出家

[52] pitāmaha ブラフマンの呼び名（岩本 1975: 384）

した後に托鉢で五葷が入っていた際の対処法を訪ねた。世尊は五葷が入っていても五葷が入っていないものとする呪文を授けた。世尊のこれらの言葉を聞き、僧や菩薩、天やアスラ等の世間の者は皆歓喜した。以上が『守護大千国土経』の内容である。

1.4 『孔雀王呪経』

漢訳では『孔雀王呪経』[53]、『仏母大孔雀明王経』[54]等に相当し、蛇に咬まれた時に治療する為の陀羅尼として用いられた。 『孔雀王呪経』は日本に伝えられた最古の経典の一つであるともいわれている。[大塚 2013]によると、『孔雀王呪経』に述べられる陀羅尼呪は『説一切有部律』「薬事」中に説かれる孔雀物語のものと酷似しているという。

なお、『孔雀王呪経』は神格化されると「孔雀明妃」、「孔雀明王」、「マハープラティサラー」等と呼ばれる（図 3 参照）。

図 3. 孔雀明妃
14 世紀頃、東インド、バレンドラ・ブーミ派
（東京国立博物館 2015: 127）

以下に『孔雀王呪経』の内容について述べる[55]。はじめに、帰依文が述べられる。死者を蘇生させ、悪人を遠ざける『孔雀王呪経』へ、続けて、仏、法、僧団や、過去 7 仏、阿羅漢、マイトレーヤ等への帰依が述べられる。デーヴァ、ナーガや諸鬼神に対して自らの言葉を聞くように述べ、香や花、燈火等の供物を供えてから、一切の恐怖、災難から守られるよう祈願される。

次に、『孔雀王呪経』が説かれるきっかけとなった出来事が語られる。世尊がシュラーヴァスティの給孤独園に住していた時、スヴァーティーが黒蛇に右の親指をかまれ、身体に毒が回ってしまった。それを見たアーナンダは世尊に助けるすべを求めた。世尊は『孔雀王呪経』の呪文と、身体に陀羅尼を結びつけること等をアーナンダに教えた。

ここで、ジャータカが語られる。世尊は昔、スヴァルナ・アヴァバーサ（黄金の輝き）という名の孔雀の王であった。敵に捕らえられた時、とある呪を心に思い浮かべた。すると敵から解放され、その孔雀王は無事に自国に帰ることが出来たという。

このドラヴィダ語[56]の呪文によって守護され、陀羅尼を身に結びつける間は、危害を

---

53 『孔雀王呪経』（大正 19, p.446）
54 『仏母大孔雀明王経』（大正 19, p.415）
55 内容については上記漢訳と[田久保 1972]の校訂および[岩本 1975]の和訳を参照した。
56 現在の南インドにおけるドラヴィダ語族を示す。タミール語、テルグ語等の 4 種の言語の総称であるという（岩本 1975: 16）

加えようとするいかなる者も近寄ることが出来なくなると説かれる。また、この呪文を犯し、汚す者があれば、その者の頭はアルジャカの花房のように 7 つに裂けるという。

次に、この呪文をもって、四方を守護する四天王、四維を守護する四大薬叉将軍をはじめとする薬叉衆による守護や、菩薩のことを母胎にいる時から守るというピシャーチャ女、羅刹女、マートゥリ等による守護が説かれる。続いて 182 の竜王、諸々の河川の女王、山の王者、天空の星宿、曜星、聖仙、プラジャーパティ（造物主）、劇毒、大樹の名が記される。

以上のことが過去七仏、マイトレーヤ、神々の王のシャクラ、世界を守る四天王、サハー世界のブラフマンなどによって是認される。

この呪文を紐を結んで身に付けるとき、死罪にあたる者は懲役、懲役にあたる者はムチの刑等に減刑され、火難、水死、毒等の難はなくなるという。そして、前世の業が成熟して短命に終わる場合は別として、長命になるという。さらにはこの呪を、長雨、干ばつの時に用いると竜族の者が喜び、長雨の際には雨を止ませ、干ばつの際には雨を降らせて人々を喜ばせるという。

この呪を心に念じただけで一切の恐怖は鎮まり、敵意のある者は去り、さらに呪の全文を身体に結び付けたなら、必ず安楽を得られると述べられる。アーナンダは世尊より授けられたこの呪によって、スヴァーティーを蘇生させた。

このように世尊が語ると、その場にいたアーナンダ、スヴァーティー、その他一切の者は歓喜した。以上が『孔雀王呪経』の概要である。

1.5 『大寒林陀羅尼』

『大寒林陀羅尼』には現在２つのバージョンが確認されている。後述する「3. 『大寒林陀羅尼』について」において詳しく取り上げるため、ここでは簡単に述べる。なお、『大寒林陀羅尼』は神格化されると「大寒林明妃」、「マハーシータヴァティー」等と呼ばれる（図 4 参照）。

図 4. 大寒林明妃

14 世紀頃、東インド、バレンドラ・ブーミ派

（東京国立博物館 2015: 129）

ネパール写本、漢訳、チベット語訳で共通する『大寒林陀羅尼』では、大寒林（屍林）において数々の障りを受けて苦悩しているラーフラに対して、世尊が諸々の障りを防ぐための「大寒林」（mahāśītavatī）と呼ばれる陀羅尼を授ける（以下、ŚV-A 本と略す）。

一方、チベット語訳にのみ存在する『大寒林陀羅尼』は主に世尊と四天王が対話する形式で進められており、先に述べた『大寒林陀羅尼』のようにラーフラは登場しない（以下、ŚV-B 本と略す）。ŚV-A 本は五護陀羅尼経典の中で最も分量が少ない経典であることに対し、ŚV-B 本の分量は最も多くなっている。両者の共通点は 2 つとも「大寒林」で説かれていることだが、前者が後者の略本という関係ではないと推測される。その点に関しても、後述の「3. 『大寒林陀羅尼』について」にて比較考察する。

1.6 『大護明陀羅尼』

『大護明陀羅尼』は病気に対する保護、除障を目的とする経典とされる[57]。『大護明陀羅尼』は神格化されると「密呪随持明妃」、「マハーマントラーヌサーリニー」等と呼ばれる（図 5 参照）。

図 5. 密呪随持明妃
14 世紀頃、東インド、バレンドラ・ブーミ派
（東京国立博物館 2015: 130）

本経典はサンスクリット写本、漢訳があり、チベット語訳は存在しない。また、『ヴァイシャーリープラヴェーシャ』[58]と内容がほぼ一致している（以下、MN-A 本と略す）。『ヴァイシャーリープラヴェーシャ』は根本説有部律の『薬事』[59]に収録されており[60]、[奥山 1998]によって根本説有部律と MN-A 本との関連性が考察されている

経典の冒頭、世尊はラージャグリハの近くのカランダカニヴァーパの森に住しており、ヴリジを遊行してヴァイシャーリーに到着し、アームラパーリーに滞在したという。世尊はヴァイシャーリーに蔓延している疫病を鎮めるため「大護明陀羅尼」と、呪文を唱える際の作法についてアーナンダに授けた。アーナンダは世尊から言われたように、都城ヴァイシャーリーに行き、門の敷居に足を置いて、この「大護明陀羅尼」を唱えたという内容である。この経典にはヴァイシャーリーを訪れた世尊が病気を防ぐための大護明陀羅尼を授け、アーナンダがそれを実践する場面が説かれている。また、この『大護明陀羅尼』も前述した『大寒林陀羅尼』と同様にチベット語訳の別本が存在する（以下、MN-B 本と略す）。

---

57 （山田 1989: 160）

58 サンスクリット校訂テキスト[Skilling1994: 566-569], チベット語訳（Ota. No.142=714=978, Toh. No.312=628=1093（248）

59 Ota. No.1030[Ge 34a2-42a2], Toh. No.1[Kha37a1-40b1], 大正 No.1448

60 （Skilling1992: 128, 142）。ギルギットの梵文写本ではこの場面を欠いている（奥山 1998: 77）。

五護陀羅尼経典は 5 種類（バージョンが異なるものをあわせると 7 種類）の存在が現在確認されている。以上に述べた五護陀羅尼経典の概要を次の表 4 にまとめた。

	『大随求陀羅尼』	『守護大千国土経』	『孔雀王呪経』	『大寒林陀羅尼』		『大護明陀羅尼』	
				ŚV-A 本	ŚV-B 本	MN-A 本	MN-B 本
場所	霊鷲山	霊鷲山 ヴァイシャーリー	シュラーヴァスティの給孤独園	大寒林	大寒林	ヴァイシャーリーのアームラパーリー	シュラーヴァスティの給孤独園
主要人物	菩薩や声聞の会衆	四天王 ブラフマン　等	スヴァーティーアーナンダ	ラーフラ	四天王	アーナンダ	ブラフマン
概要および挿入される物語	カピラヴァストゥのラーフラバドラ王子の守護、シュールパーラカの在家の女性による毒の浄化、ヴァーラーナシーのブラフマダッタ王による敵国からの防護、商人ヴィマラシャンカの航海の守護　等	ヴァイシャーリーで様々な悪鬼による障りを受けていたリッチャヴィ族の除災	スヴァーティーの除毒、孔雀王スヴァルナ・アヴァバーサの話（世尊の前生譚）	大寒林で障りを受け苦悩するラーフラに世尊が障りを防ぐ陀羅尼を授ける	四天王の大寒林陀羅尼に対して世尊がより優れた大寒林陀羅尼を授ける	ヴァイシャーリーで世尊が病気を防ぐための陀羅尼を授け、アーナンダがそれを実践する	大護明陀羅尼によって如来や阿羅漢もまた等しく悟りを得る話

表.4　五護陀羅尼概要一覧[61]

以上の 5 本の経典が集められ、五護陀羅尼が構成された。いずれも初期密教経典の特徴に見られるように、除災、病気平癒、安寧や守護といった機能を期待されている呪文が説かれている。一方で、それぞれ 2 つのバージョンの存在が指摘されている『大寒林陀羅尼』および『大護明陀羅尼』は、前者が「アーターナーティヤ経」、後者は『薬事』『ヴァイシャーリープラヴェーシャ』等のパリッタの一種と類似していることが[Skilling1992][奥山 1998]によって指摘されている。以下では『大寒林陀羅尼』とみなされる 2 経典について取り上げ、それぞれの内容構成と特色について比較しよう。

[61] この表は[田久保 1972][Iwamoto1937a][Iwamoto1937b][Iwamoto1938][岩本 1975] [Hidas2011][園田 2016][Skilling1992][大塚 2010]を参考に、筆者が作成したものである。

2. 『大寒林陀羅尼』における諸問題

2.1 mahāśītavatī と mahāśītavanī の問題

五護陀羅尼経典の一つ『大寒林陀羅尼』には２つのバージョンが存在することが、先行研究によって明らかになっている。

第一は、サンスクリット・テキスト、漢訳、およびチベット語訳が存在する『大寒林陀羅尼』、第二はチベット語訳のみ存在するといわれる『大寒林陀羅尼』である。第一の『大寒林陀羅尼』を ŚV-A 本、第二の『大寒林陀羅尼』を ŚV-B 本と称する（以下表 5 参照）。

	サンスクリット・テキスト（校訂）	漢訳	チベット語訳
ŚV-A 本	*Mahāśītavatī* （Iwamoto1937b）	『大寒林聖難拏陀羅尼経』 大正 21, No. 1392 宋法天訳（Ad.984）	*'Phags pa be con chen po shes bya ba'i gzungs* （*Ārya mahādaṇḍa nāma dhāraṇī,*『聖持大杖陀羅尼』） Ota. No.308, Toh. No.606 Jñānasiddhi, Dānaśīla, Ye shes sde 訳
ŚV-B 本	（欠）	（欠）	*bSil ba'i tshal chen po'i mdo* （*Mahāśītavana sūtra,*『大寒林経』） Ota. No.180, Toh. No.562 Śīlendrabodhi, Jñānasiddhi, Śākyaprabha, Ye shes sde 訳

表 5. 2 種の『大寒林陀羅尼』（サンスクリット校訂本・漢訳・チベット語訳対照表）[62]

『大寒林陀羅尼』の経題に関して、漢訳にあらわれる「寒林[63]」とは「死体置き場」「火葬場」の意味である[64]。サンスクリット・テキストでは‘*Mahāśītavatī*’、チベット語訳およびタングート目録では‘*Mahāśītavanī*’と称されている。

ここであらためてサンスクリット原題の‘Mahāśītavatī’という語について検討すると、mahā を「大」、śīta を「寒」、vatī を「～を持つ」とし、全体で「大いなる寒さを持つ者」と解釈することが出来る。一方、サンスクリット・テキストの『孔雀王呪経』において「シータヴァナに幸いあれ、マハーシータヴァナに幸いあれ[65]」という呪がある。vanī（vana の女性形）であれば「森」や「林」と訳出することが可能であり、mahāśītavanī から mahāśītavatī に転じた可能性が考えられる。

[62] この表は[奥山 1998]、[塚本、松長、磯田編 1989]を基に筆者が作成した。
[63] 求那跋陀羅訳『雑阿含經』、『別譯雑阿含經』、闍那崛多訳『佛本行集經』、阿質達霰訳『大威力烏樞瑟摩明王經』 等で「寒林」という語が使用されている。
[64] [岩本 1975: 379-380]および[塚本、松長、磯田編 1989: 90]参照。
[65] [田久保 1972: 37]および[岩本 1975: 251]参照。

2.2 サンスクリット、漢訳、チベット語訳の経題

ŚV-A 本の経題については、以下のような問題点が指摘されている。まず、A 本の経題はサンスクリット・テキストで *Mahāśītavatī*『大寒林[陀羅尼]』、漢訳では『大寒林聖難拏陀羅尼経』である。一方で、チベット語訳のみ*'phags pa be con chen po zhes bya ba'i gzungs*『聖持大杖陀羅尼』[66]とされている。

各々のテキスト中に見られる ŚV の呼称も、サンスクリット・テキストでは、'mahāśītavatī'（大寒林）、チベット語訳では 'be con chen po'（大杖）と呼ばれている。漢訳では「難拏大明陀羅尼」が用いられ、経題にある「寒林」は省略されている[67]。

また、ŚV-B 本はチベット語訳にのみ存在する。チベット大蔵経の Ota. No. 177～181、Toh. No. 558～563 には五護陀羅尼経典群が連続して収録されており、ŚV-B 本は Ota. No. 180、Toh. No. 562 にあたる。一方で、ŚV-A 本は Ota. No. 308、Toh.No.606 に該当し、前述した五護陀羅尼経典群とは別個に収録されている。

さらに、8～9 世紀にかけてチベットで編纂された『デンカルマ』においても、五護陀羅尼に該当する「五大陀羅尼」（gzungs chen po lnga）に収録されているのは ŚV-B 本であり、それについては既に[芳村 1974: 148][Skilling1992: 139][奥山 1998]等の先行研究によって指摘されている。

以上のように、ŚV-A 本はサンスクリット・テキストおよび漢訳、そして経題は異なるが同等の内容であるチベット語訳が存在する一方、B 本ではチベット語訳のみ存在が確認されている。これに関しては、後述する「2.4　2 種の『大寒林陀羅尼』の構成」において詳しく述べる。両者とも『大寒林陀羅尼』とみなされているものの、その内容は大きく異なっている。

2.3 経題における'daṇḍa'の問題

『仏書解説大辞典』[68]、『密教大辞典』[69]において「難拏」は歓喜の意味とあるが、[奥村 1973: 42-43]によるとサンスクリット語の 'daṇḍa'（杖）の音訳と考えるべきであるという。前に示した表 2 を参照すると、確かにチベット語訳 ŚV-A 本の経題は 'be con'（杖）が用いられ、さらにそのサンスクリット語訳も daṇḍa で一致している。そのため、漢訳の「難拏」は前述の奥村の説のように、サンスクリット語の daṇḍa を音訳したものと推察出来る。

しかしながら、サンスクリット・テキストの経題では daṇḍa の語は見られず、'mahāśītavatī'（大寒林）が用いられている。チベット語訳において 2 つの経典とも Jñānasiddhi、Ye shes sde が関わっているにもかかわらず、どのような経緯でこのような

---

[66] Ota. No. 308, Toh. No.606

[67] 漢訳における「難拏」とチベット語'be con'の関係については、後述する「経題における'daṇḍa'の問題」を参照。

[68] 7 巻 p.224

[69] p.1441

相違が生まれたのかは未だ明確ではない。またその一方で、漢訳の経題『大寒林聖難拏陀羅尼経』では‘daṇda’と‘mahāśītavatī’の両方の語が訳出されている。

以上、2 つの ŚV の経題における諸々の問題点を挙げた。次項では ŚV-A 本、B 本の内容構成を取り上げ、その特徴を比較考察する。

2.4　2 種の『大寒林陀羅尼』の構成

前述したように、『大寒林陀羅尼』には ŚV-A 本、ŚV-B 本の 2 つのバージョンが存在することが先行研究によって指摘されている。

ŚV -A 本の原典成立年代は現在のところ明らかでない。[大塚 2010]によると、A 本は『檀特羅麻油述経』（曇無蘭訳、訳出活動年代 A.D.381~395）[70]から影響を受け、その翻訳年代からみて、A 本の原典成立は 4 世紀まで遡ることができるといわれている[71]。なお、本経典の先行研究に関しては、[奥村 1973]による ŚV-A 本の概略的な報告や、[Skilling 1992][奥山 1998][大塚 2010]において他経典との比較がある。なお、筆者は[園田 2016]において ŚV-A 本の和訳を発表した。

A 本、B 本両者とも『大寒林陀羅尼』とみなされているものの、その内容は大きく異なっている。以下では ŚV の持つ問題点、および両バージョンの内容構成と、その特色について述べたい。

2.4.1 『大寒林陀羅尼』A 本の内容構成

[0] 帰依文
[1] ラーフラ尊者の苦悩
　[1.1] 寒林における障り
　[1.2] 世尊への謁見
[2] 世尊の問いかけ
[3] 寒林陀羅尼
　[3.1] 目的
　[3.2] 陀羅尼前半部
　[3.3] 陀羅尼後半部
　[3.4] 陀羅尼の保持と効能
[4] ラーフラ尊者たちの歓喜
[5] 奥付

表 6.『大寒林陀羅尼』A 本内容構成[72]

以下に述べる『大寒林陀羅尼』の内容構成は、岩本裕が校訂したサンスクリット校訂本（岩本 1937）を基に、チベット語訳には以上の Ota. No. 308、Toh. No.606、漢訳は大正 No. 1392 を参考にした。以下、表 6 の見出しに沿って概要を述べていく。

[1] ラーフラ尊者の苦悩

はじめにマハーシータヴァティーに対しての帰依文が記された後、ラーフラ尊者が大寒林において受けている様々な苦しみについての背景が説明される。具体的には、デーヴァ（天）、ナーガ（竜）、ヤクシャ、羅刹等の障り（graha）[73]や、トラ、カラス、フクロウ、虫、そして人や人で

[70] 『佛説檀特羅麻油述經』（大正 21 No. 1391 曇無蘭訳）サンスクリット・テキストおよびチベット語訳は現存しないが、偽経問題の報告はないという。[大塚 2010: 147-169]

[71] ŚV に明呪を増補して『佛説寶帯陀羅尼經』（大正 21 No. 1377 施護訳）が成立、さらに儀軌を付加させた『佛説聖莊嚴陀羅尼經』（大正 21 No. 1376 施護訳）が発展、形成されたという。

[72] 内容構成については[Iwamoto1937b]、および Ota. No.308、Toh. No.606 を参照し、筆者が作成した。

[73] graha は「掴むこと、捉えること」等の意味である。ここでは、ヤクシャや羅刹に「とり憑かれること」と推測される。

はない者[74]等によってラーフラ尊者が傷つけられていることが述べられている。

ラーフラ尊者は世尊のもとに赴き 3 度右繞した後、世尊の前で涙をこぼした。

[2] 世尊の問いかけ

そこで世尊は、ラーフラ尊者に対して「どうして涙を流すのか」と問いかけ、ラーフラ尊者はその胸中を打ち明けた。ラーフラ尊者の苦悩を聞いた世尊は、次に「大寒林」と呼ばれる陀羅尼を授ける。

[3] 寒林陀羅尼

世尊は、四種の聴聞者（比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷）や、一切衆生を大寒林陀羅尼による覆いで守護し、守護呪の効能で長期にわたって財、利益、楽、繁栄をなし続けるため、次に述べる大寒林陀羅尼を記憶し、その陀羅尼を身体に結びつける（bandha）ようにと説いた[75]。

[大塚 2010: 150]によると、以上のような陀羅尼を身体に結び付けるといった呪術的行為（結呪作法）は、呪文を唱えて諸天、諸鬼神に祈り、守護のために護符を身に付けるといったヒンドゥー教の民間信仰に根差したものであり、仏教教団においても 3〜4 世紀の頃にはこの呪術行為が表面化していたという。

次に陀羅尼を手や首に結び、結界を張って場を守護し、塗香、花、印契によって供養することが述べられる。続いてこの陀羅尼によって、武器、毒、病気、呪い、ヴェーターラ（屍鬼）[76]、火、毒水等の害がなくなるといった現世利益的な効能について説かれる。また、害をなすものに対して「額がアルジャカの花房のように 7 つに裂けるだろう（頭破作七分）」といった句が述べられる[77]。

---

[74] サンスクリット・テキストには“manuṣyāmanuṣa”、チベット・テキストでは‘mi dang / mi ma yin pa’、漢訳では「人非人」とあるが、具体的に何を指しているかは不明である。

[75] 陀羅尼呪の中には見られる「黄金の胎」は、紀元前 1500〜1000 年に成立したといわれるもっとも古い賛歌の集成『リグ・ヴェーダ』に登場する。宇宙の創造を「造一切者」、「黄金の胎」などに求める創造賛歌である。（佐々木 1966: 8）

[76] 岩本の校訂本では vetāḍa とあるが、vetāla（毘陀羅、起屍鬼）のことと思われ、死体に乗り移り言葉を発するといった動作をさせるものといわれている。
また、岩本（1975: 329, 387）によると、『守護大千国土経』にも表れるという。

[77] saptadhāsya sphuṭen mūrdhā arjakasyeva mañjarī /「頭がアルジャカの花房のように 7 つに裂けるだろう」（頭破作七分）。他の五護陀羅尼経典のうち『孔雀王呪経』『守護大千国土経』以外にも、『中阿含經』、『妙法蓮華經』「陀羅尼品」、『大方等大集經』、『金光明最勝王經』等にもこの句が表れる。「頭が七つに裂けよ」とは『スッタニパータ』「彼岸道品」に宗教的権威を持つバラモンの言葉として用いられていたという。（中村 1958: 210-217）を参照。
『スッタニパータ』の注解書である『パラマッタ・ジョーティカー』（村上・及川 2009: 18）では、呪詛の作法として「牛糞を地面になすりつけて、花をまき散らし、草を敷き拡げ、左足を長口のある水瓶の水で洗って、七歩ほど行って、自分の足裏をこすって」とあり、その後、７日目にあなたの頭は７つに裂けてしまえとバラモンが告げたという。
さらに、この句で例えられる植物であるアルジャカ（arjaka 学名 Ocimum Gratissimum）は、『孔雀経』に属する不空訳『佛母大孔雀明王經』、義浄訳『佛説大孔雀呪王經』の中では「蘭

[4] **ラーフラ尊者たちの歓喜**

世尊は以上の陀羅尼を説き、ラーフラ尊者をはじめその場にいた一切の者、デーヴァ、人間、アスラ、ガンダルヴァを伴う世間は大いに歓喜した[78]。

[5] **奥付**

インドの学者ジナミトラ、翻訳官イェーシェーデーによって成立した。（なお、奥付はチベット語訳にのみ存在する。）

ŚV-A 本に説かれる陀羅尼の特色は、以下の通りである。冒頭に、ラーフラ尊者が世尊にデーヴァ、ナーガなどによる障害と、トラ、カラスなどによる苦痛が述べられている。それぞれのテキストを比較すると、鬼神、動物の種類や順序に相違点はあるものの、いずれも身体や心における様々な悩みについて述べられることが共通している。

ラーフラに対し世尊は、この陀羅尼を身体に結びつけることによって自身および四種の聴聞者や一切衆生すべての立場の者は、長期にわたってあらゆる方面から守られると説く。具体的な功徳としては現世利益的な性格が強調されており、財、利益、繁栄をなし、楽を与えるほかにも、王、賊、武器、杖、斧、毒、水、火、災害といった難を防ぎ、死、争い、不浄を鎮め、一切の恐怖、戦慄を取り除くという。さらに熱病などの一切の病気や呪いからも保護し、人や人ではないものは現れなくなるといった守護的機能や、障りをなす者の額をアルジャカの花房のように 7 つに裂けるという「頭破作七分」の例えが説かれている。

また、手やのどといった身体の各所に大寒林陀羅尼を結びつける際に「塗香」、「花」、「印契」、テキストによってはさらに「灯明」や「杖」を用いて（守護を）なすべきであると説かれており、それらを用いて供養をし守護を祈願するものと考えられる。具体的な供養の対象は明らかではないが陀羅尼経典を供養する行為と考えられ、後に陀羅尼が神格化される過程の片鱗がここでうかがえる[79]。

以上が ŚV-A 本の特色であるが、同じく ŚV とされる別本の B 本とは内容を異にすることが明らかになっている。以下、B 本の内容構成および特色を比較検討したい。

香梢」と訳している。また、『金光明最勝王經』等においても同じ語が使用されている。一方で『中阿含經』、『妙法蓮華経』「陀羅尼品」では「阿梨樹枝」、『正法華經』では「華菜」、さらに『添品妙法蓮華經』では「摩利闍迦」と訳されている。訳語が明確ではないのは、どのような植物か不明であるためという（岩本 1975: 376）。また、チベット語の ar dza ka は「cotton（綿）」の意とあり、まさしく綿花のように皮がはじける様子があらわれていると推測される。

78 『般若心経』の終結部分に（ラーフラではなくシャーリプトラが表れている等の違いはあるものの）ほぼ同一の場面がある。（渡辺 2008: 付録 35-36 参照）

79 [渡辺 1995: 143]によると、南インドで生まれた「般若経」はドラヴィダ的な女性神崇拝と関連して発達し、『八千頌般若経』においては仏母として神格化されているという。また、般若波羅蜜は 5 世紀までに神格化されたとされ、12 世紀ごろ編纂された SM No.151-159 の般若波羅蜜成就法では女神化した般若波羅蜜が説かれており、[佐久間 2015]で詳細に研究されている。

2.4.2 『大寒林陀羅尼』B 本の内容構成

前述したように ŚV-B 本はチベット語訳のみ存在する。以下では Ota. No.180, Toh. No.562 を参考に、ŚV-B 本の概要について以下の表 7 の見出しに沿って説明する。

[0] 帰依文と陀羅尼の機能 [0.1] 帰依文 [0.1.1] 過去、未来、現在の仏 [0.1.2]仏弟子 [0.1.3]四天王など [0.2] 大寒林陀羅尼の功徳と陀羅尼呪 [1] 世尊と四天王の対話 [1.1] 四天王の謁見 [1.2] 四天王と世尊の問答 [1.3] 四天王と世尊の第 2 の問答 [1.4] 大寒林陀羅尼の功徳 [1.5] ヤクシャ、羅刹女たちの様相 [1.5.1] 多くのヤクシャ [1.5.2] 頭が切断されたヤクシャ [1.5.3] 馬車と呼ばれる羅刹女 [1.5.4] 長首と呼ばれる羅刹女 [1.5.5] 餓鬼、ヤクシャ、羅刹 [1.5.6] 様々な神々やガルダたち [1.5.7] 鬼子母神と呼ばれるヤクシャ女 [1.5.8] 8 尊の母神	[2] 四天王の大寒林陀羅尼 [2.1] 毘沙門天の陀羅尼呪 [2.2] 持国天の陀羅尼呪 [2.3] 増長天の陀羅尼呪 [2.4] 広目天の陀羅尼呪 [2.5] 四天王の誓願 [3] 世尊の大寒林陀羅尼 [3.1] ブータと羅刹を苦しめる陀羅尼呪 [3.2] 障りをなす者が十方に去る陀羅尼呪 [3.3] 世尊に陀羅尼呪を乞う四天王 [3.4] 一切のブータを防ぐ陀羅尼呪 [3.5] 陀羅尼による地や空の変化 [3.6] 毘沙門天が唱えるべき陀羅尼呪 [4] 貴い大寒林陀羅尼の保持、読誦 [4.1] 傷つける者からの防護 [4.2] ヤクシャの優婆塞の歓喜 [5] 行者の心構え [6] 世尊の言葉を信じない者 [7] 四天王の帰還 [8] これまでの概要説明と四衆の歓喜 [9] 儀軌 [10] 奥付

表 7. ŚV-B 本の内容構成[80]

[0] 帰依文と陀羅尼の機能

初めに、三宝やディーパンカラ（燃灯仏）、過去七仏、弥勒仏等の仏、舎利弗、目犍連等の仏弟子、そして四天王などに対する帰依文が説かれる。この大寒林の経は四天王による偉大な守護であり、一切衆生は様々な邪悪な者や障りから守護される。また、悪鬼の頭が 7 つに裂けるように[81]、とここで述べられる。

[1] 世尊と四天王の対話

世尊がラージャグリハの大寒林に住していた時、四天王は世尊のもとを訪れて礼拝した。毘沙門天は「世尊の身体を傷つける者はいないのか」などといった疑問を世尊に呈

[80] 内容構成についてはチベット語訳（Ota. No.180, Toh. No.562）を参照し、筆者が作成した。

[81] mgo po che lab bdun du 'gas ta re（Ota. No.180 では sing とあるが、Toh. No.562 では ta re（正に）とあり、後者を採用した）

する。世尊は「傷つける者はいない」などと答え、続けて「汝らの諸々の眷属が、私の眷属（衆生）を傷つけようとしている」と言った。さらに「僧院や僻地の屋敷で、世尊の聴聞者たちに危害を与える者たちがいる。傷つける者どもは退散せよ。四天王は私の言うことを聞け」と答えた。以下、大寒林陀羅尼の様々な功徳が偈をもって述べられる。また、経典にもとることを行った者は、頭が 7 つの欠片に割れるという。

ここでは、頭が切断されたヤクシャや、馬車と呼ばれる羅刹女、長首と呼ばれる羅刹女、ハーリーティ（鬼子母神）とよばれるヤクシャ女など、変化自在のヤクシャや羅刹の様々な恐ろしい姿が説かれる。

[2] 四天王の大寒林陀羅尼

それから四天王は上着の片方を肩にかけ、右膝で地面にひざまずいて合掌してから世尊に敬礼し、同時に声をそろえて、この大寒林陀羅尼は四天王によって四衆を守護するものであることを言った。

[3] 世尊の大寒林陀羅尼

それに対し世尊は四天王の明呪に理解を示した一方、世尊自身が保持している大寒林陀羅尼をここで改めて説いた。そしてこの経をよく聞き、心に保ちなさいと告げた。

世尊が唱えた大寒林陀羅尼によって大地は揺れ、ブータや羅刹は苦しみ叫んだ。様々な障りは十方に逃げ惑っている姿を見て、世尊はさらに慈しみの心で陀羅尼呪を述べる。

次に世尊は「偉大な明呪である大寒林陀羅尼に反してはいけない」と忠告する。さもなくば身体が滅して死んだ時に、六道輪廻の下層に卑しい存在として転落し、地獄の衆生たちとして生まれ、輪廻するという。

四天王は、今までに聞いたことがない世尊の大寒林陀羅尼を聞いて、驚いて畏れおののき、悲しくなって落ち込み、合掌して世尊に敬礼した。そして、敵意を持ったブータを退け、「世間に安楽をなす明呪を私たちにどうかお説き下さい」と声をそろえて懇願し、世尊はそれに答えて陀羅尼呪を説いた。

世尊の陀羅尼によって大地が揺れ、地面を金剛に変化し、それらが四方にあまねく広がり、空が金色に変化するという。

ガンダルヴァたちを目の前に集めてすりつぶし、一切のブータを退散させ、四衆たちを見守り、防御し、邪悪な者から隠し、安寧になり、幸福に暮らすようにするため、毘沙門天はこの明呪を説くべきである、と世尊は述べる。

[4] 貴い大寒林陀羅尼の保持、読誦

『大寒林陀羅尼』を保持し、身に付け、読誦し、完成させ、身につけることによって、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷は誰であっても、自身を守り、自身を[邪悪な者から]隠し、他者を守り、他者を隠す。人ではない存在から攻撃されている者たちがこの大寒林

の経を読誦するなら、人ではない存在たちはそこに退散せず、すぐに死ぬと説かれる。
信心の心を持つ優婆塞のヤクシャたちは、四天王のもとを訪れ、名乗り出て、『大寒林陀羅尼』を保持することを述べ、優婆塞のヤクシャたちは毘沙門天の城を訪れて毘沙門天の前で集まり、歓喜した。信心深い優婆塞のヤクシャたちには服や、食物、寝床、座、病気の薬、諸々の日用品が与えられ、彼らを喜ばせるという。
以上の理由から、この大寒林陀羅尼は貴いと説かれる。

[5] 行者の心構え
この『大寒林陀羅尼』を保持する者は、アルコールを飲まず、未精製の砂糖（粗糖）、ハチミツ、ゴマ、動物の肉、魚の肉の 5 種類の食事を避けるべきであると述べられる。

[6] 世尊の言葉を信じない者
世尊の言葉に不信心な者たちは、この『大寒林陀羅尼』によって不慮の死をとげて、滅び、ついには去るという。それはなぜかというと、彼ら誤った見方をする者たちを追い出すからであると説かれる。それから四天王は世尊に偈によって、世尊の『大寒林陀羅尼』によって衆生が傷つけられないことや、邪悪な者は散り散りになると言った。

[7] 四天王の帰還
そして四天王は世尊の足に礼拝し、たちどころに消え去った場面が述べられる。

[8] これまでの概要説明と四衆の歓喜
夜中に住していた四衆のために、世尊は夜明けからこれまでのいきさつを話した。

[9] 儀軌
この儀軌は 3 つの白いもの（ミルク、ヨーグルト、バター）を食べ、断食することや、四天王の姿を黄土色、もしくは赤土によって書き、あらゆる香りを持った四角いマンダラを完成させ、仏の目の前で 3 回この陀羅尼を唱えるべきであると説かれる。（なお、Ota. No. 180 ではここで終わっている。）

[10] 奥付
この『大寒林陀羅尼』は、シーレーンドラボーディ Śīlendrabodhi、ジュニャーナシッディ Jñānasiddhi、シャーキャプラバ Śākyaprabha、翻訳官イェーシェーデーYe shes sde が翻訳したという。また、後にショヌペル gZhon nu dpal[82]によって、大翻訳官の経典から編纂したことが記述されている。

[82] 'Gos lo tsā ba gzhon nu dpal（1392-1481）*The Blue Annals* の編纂者。[Roerich1979: I p.98, II p.499]

以上のように、ŚV-B 本は帰依文から始まり、大寒林陀羅尼の効能や、悪鬼の頭が 7 つに裂けるように、と述べられている。次に、世尊がラージャグリハの大寒林に住していた時、四天王が訪れた場面が説かれる。そこで毘沙門天が世尊に疑問を呈し、世尊がそれに答える。さらに世尊は四天王に忠告し、大寒林陀羅尼の様々な功徳が偈をもって述べられる。ここでも、経典にもとることを行った者の頭が 7 つに割れると説かれる。そして、ヤクシャや羅刹の様々な恐ろしい姿が説かれる。

それから四天王は四衆を守護するために、自身らが保持している大寒林陀羅尼をそれぞれ述べた。世尊は四天王の陀羅尼を聞いた後、世尊自身が保持している大寒林陀羅尼を説き、ブータや羅刹たちは苦しみ叫び、十方に逃げ惑った。そのような世尊の大寒林陀羅尼を聞いた四天王は驚き、合掌して世尊に敬礼した。ブータを退け、世間に安楽をなす明呪を私たちにどうかお説き下さいと声をそろえて懇願した。この大寒林陀羅尼が貴い理由や、アルコールを飲まない等といった食物の規定、そして世尊を信じない者が病で死ぬことが説かれる。四天王は仏陀に敬礼し、足に礼拝し、帰還した。

世尊はこれまでのあらましを話し、それを聞いた比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷たちは歓喜した。そして、食事や四天王の描き方、マンダラの規定など、この経典に関わる儀軌が述べられ、奥付に本経典の訳者が示される。

この ŚV-B 本は 9 世紀前半頃にチベットで編纂された仏典目録『デンカルマ』の「五大陀羅尼」に含まれているという[83]。『大寒林陀羅尼』と見なされる ŚV-A 本および ŚV-B 本は、双方とも大寒林で説かれている陀羅尼であることは共通しているものの、それ以外は内容が異なっている部分が多い。例えば、ŚV-A 本で主要な登場人物であるラーフラが ŚV-B 本では登場していない。次節ではこれまで取り上げた 2 つの『大寒林陀羅尼』の相違点や特色について述べよう。

83 （奥山 1998: 70）

3.　考察

ここで、2 種の『大寒林陀羅尼』を比較検討してみる。まず、ŚV-A 本ではラーフラ尊者が大寒林において数々の障りを受けて苦しみ、世尊のもとを訪れて涙を流していた。世尊が理由を尋ねたところ、ラーフラ尊者はその胸中を打ち明ける。世尊は諸々の障りを防ぎ、障りをなす者の頭が 7 つに割れる「大寒林」という名の陀羅尼をラーフラ尊者に授ける。それを聞いたラーフラ尊者やその場にいたものは、即座に歓喜した、という内容を持つ。一方で、ŚV-B 本は帰依文から始まり、大寒林（屍林）における世尊と四天王の対話、様々な障りや災難と大寒林陀羅尼の効能、様々なヤクシャたちの恐ろしい姿や、世尊と四天王の陀羅尼呪、そして儀軌によって主に構成されている。

ŚV-A 本と B 本の間では、主に以下の点が共通している。まず、この陀羅尼が「寒林」śītavana で説かれていることや（A 本[1.1], [2]、B 本[1.1]）、「結呪作法」による四衆の守護（A 本[3]、B 本[4]等）、そして「害をなす者の頭が 7 つに裂ける」という表現である（A 本[3]、B 本[0], [1]）。

結呪作法とは陀羅尼を体に結び付け守護を期待する儀礼的行為である。また、B 本、A 本では頭が 7 つに割れるという、いわゆる「頭破作七分」が説かれている。さらに A 本では「アルジャカの花房のように」と付加されている。

そのほか、双方で列挙されている障りをなす者たちについて、ŚV-A 本と比べて ŚV-B 本の方が挙げられる鬼神や災いの種類は多い（ŚV-A, B 本に述べられている障りをなす者たちの対照について、以下の表 8 に示した）。グフヤカ、プータナ、スカンダ、伝染性等、B 本にしか見られない数々の障りもある（表 8 の 27～43 参照）。一方、A 本にはトラ、カラス、フクロウ、豹等といった、B 本に説かれていない実在する動物が障りをなす者としてあげられている（以下表 8 の 18～26 参照）。

以上、ŚV-A 本と B 本間の主な異同をあげたが、全体の内容構成からみても両者に隔たりが大きいことは明らかである。特に、ŚV-A 本における主要な登場人物のラーフラが B 本では登場しない。また、B 本の終結部分には、A 本にはないこの経典に関わる儀軌としての記述がみられる。この 2 点が A 本の構成とは大きく異なる点である。

むしろ ŚV-B 本は A 本よりも、五護陀羅尼経典の一つである『守護大千国土経』[84]の方に共通点が見いだせる。『守護大千国土経』では、四天王が陀羅尼を述べた時に世尊はさらに優れた守護の呪を説き、四天王は恐れ驚いて合掌した場面が説かれる。ŚV-B 本[4]においても、四天王がそれぞれ自身の「大寒林陀羅尼」を世尊に述べると、続けて世尊は自身が保持する「大寒林陀羅尼」を説き、四天王にこれを保持するように告げた。これまで聞いたことのない陀羅尼を聞いた四天王は恐縮して、この優れた明呪を説くようにと懇願した。このように、『大寒林陀羅尼』と双方ともに見なされている ŚV-B

[84] [岩本 1975][Iwamoto1937a]参照。

本と ŚV-A 本間よりも、ŚV-B 本と『守護大千国土経』間の方が内容構成の一部が類似していることがわかる。

B 本に見られるような四天王が世尊に自身の陀羅尼呪を述べる場面は『長部』「アーターナーティヤ経」と共通していることが[Skilling1992: 141]によって指摘されている。さらに『法華経』「陀羅尼品」にみられる毘沙門天と持国天が法師を守護するための陀羅尼呪を世尊に述べる場面とも類似している。ただし、ここでは両経典とも B 本にあるような四天王の陀羅尼呪に対して世尊が改めて自身の陀羅尼呪を説く場面はない。

これまで述べたように ŚV-A, B 本は双方とも『大寒林陀羅尼』とされる経典だが、その内容の隔たりは大きい。少なくとも、分量の多い B 本が広本、少ない A 本がその略本という関係とはいえないだろう。

1.1「先行研究およびテキスト」にも述べたように、9 世紀前半頃にチベットで編纂された仏典目録『デンカルマ』『パンタンマ』において、『大寒林陀羅尼』は「五大陀羅尼」の下に収録されている。『デンカルマ』に含まれている『大寒林陀羅尼』は ŚV-B 本であると言われており 、同時期に編纂された『パンタンマ』でも同様の可能性がある。少なくともチベットでは 9 世紀前後には ŚV-B 本が五護陀羅尼の一つとして知られていたと考えられる。

以上のことから、おそらくインドでは『大寒林陀羅尼』ŚV-A 本、ŚV-B 本の原型が存在し、インド、チベットにおいて別個に発展していったと推測される。そのうち、ŚV-A 本はネパールなどの写本や漢訳において『大寒林陀羅尼』として残されたが、チベット語訳では五護陀羅尼のグループに入らず、別名（『聖持大杖陀羅尼』）が与えられた。チベット語訳には ŚV-B 本が収録されており、残存したと考えられる。

前述した経題やチベット語訳等の問題点に関しては先行研究によって指摘されているものの、なぜ『大寒林陀羅尼』がこのように 2 つの系統に分かれて展開したのか、その背景については今後の考察の課題としたい。

	ŚV-A 本			ŚV-B 本
	サンスクリット・テキスト	チベット語訳	漢訳	チベット語訳
1	deva デーヴァ	ཧྷ་ デーヴァ	天(デーヴァ)	
2	nāga ナーガ	ཀླུ་ ナーガ	龍(ナーガ)	ཀླུ ナーガ
3	yakṣa ヤクシャ	གནོད་སྦྱིན་ ヤクシャ	藥叉(ヤクシャ)	གནོད་སྦྱིན་ ヤクシャ
4	rākṣasa ラークシャサ	སྲིན་པོ་ ラークシャサ	羅刹(ラークシャサ)	སྲིན་པོ་ ラークシャサ
5	maruta マルタ			
6	asura アスラ	ཧ་མ་ཡིན་ アスラ		ཧ་མ་ཡིན་, ཧ་མིན་ アスラ
7	kinnara キンナラ	མི་འམ་ཅི་ キンナラ	緊捺囉(キンナラ)	མི་འམ་ཅི キンナラ
8	garuḍa ガルダ		蘖*嚕荼(ガルダ)	ནམ་མཁའ་ལྡིང་ ガルダ
9	gandharva ガンダルヴァ	དྲྀ་ཟ་ ガンダルヴァ		དྲྀ་ཟ ガンダルヴァ
10	mahoraga マホーラガ	གྲུ་འཕྱེ་ཆེན་པོ་ マホーラガ	摩護囉誐(マホーラガ)	
11	manuṣya 人	མི་ 人	人	མི་ 人
12	amanuṣya 人ではない者	མི་མ་ཡིན་པ་ 人ではない者	非人（人ではない者）	མི་མ་ཡིན་པ 人ではない者
13	preta プレータ	ཡི་དྭགས་ 餓鬼	餓鬼(プレータ)	ཡི་དྭགས་ 餓鬼
14	bhūta ブータ	འཇིགས་པོ་ ブータ	部多(ブータ)	འཇིགས་པོ ブータ
15	piśāca ピシャーチャ	ཤ་ཟ་ ピシャーチャ	比舍佐(ピシャーチャ)	ཤ་ཟ ピシャーチャ
16	kumbhāṇḍa クンバーンダ	གྲུལ་བུམ་ クンバーンダ	供畔拏(クンバーンダ)	གྲུལ་བུམ་ クンバーンダ
17		རླུང་ལྷ་ 風神		རླུང་ལྷ 風神
18	dvīpin トラ			
19	kāka カラス	བྱ་རོག་ カラス	烏(カラス)	
20	ulūka フクロウ	ཨུ་ག་པ་ フクロウ	獯狐(フクロウ)	
21	kīṭa 昆虫	རྐྱ་ཁྲུད་ 虫	蟻	
22	sarīsṛpa 地を這う虫		蟲	
23		གཞོ་ ヒョウ	豺	
24		ཀླུ་གླུས་ サソリおよび蛇		
25			狼	
26			鵲(カササギ)	
27				གཟུགས་བ་པ་ グフヤカ
28				ཕུག་ཏ་ プータナ
29				རྐེ་མ་ཕྱེད་ スカンダ
30				འཚེ་ལྟུང་ 災害の原因
31				ཨུ་མཱ་ཕྱེད་ ウンマーダ
32				ཕྱིན་དྲུ་ལྟུ་ 巡り
33				ཟུམ་བ་ 歩き回る者
34				འདུན་པ་ 快楽に忠実な者
35				ངན་ཕྱེད་ 黒魔術
36				གཟི་ཕྱིན་འཕོག་པ་ 輝きを奪う者
37				བརྗེད་ཕྱེད་ 忘念鬼、阿跋摩羅 apasmāra
38				རིམས་དྲག་པོ་ 悪性伝染病
39				རིམས་ཞག་གཅིག་པ་ 一日の伝染病
40				རིམས་ཞག་གཉིས་པ་ 二日の伝染病
41				ཞག་གསུམ་པ་ 三日
42				ཞག་བཞི་པ་ 四日
43				ལྷག་འཛིགས་ ヴィデーハ

表 8. ŚV-A 本, B 本に見られる障りをなす者たちの対照表
（*「蘖」の文字は[大塚 2011: 161]より引用した。）

第 2 章

神格化された五護陀羅尼

1. 五護陀羅尼経典の神格化

南インドで生まれた『般若経』はドラヴィダ的な女性神崇拝と関連して発達し、初期大乗経典の『八千頌般若経』においては諸々の仏を生み出す母（仏母）として神格化された[73]。般若波羅蜜は 5 世紀までに神格化され[74]、般若波羅蜜のサンスクリット prajñāpāramitā が女性形であることから、主に女尊の姿をとる。

インドにおいて紀元前 1000～500 年ごろにかけて編纂されたバラモン教の聖典であるヴェーダにおいては[75]、サラスヴァティーやラクシュミーといった女神が主に崇拝されており、7～8 世紀にヒンドゥー教で女神崇拝が勢力を増し始めるまで女神自体の勢力は微少であった。日本においても仏教パンテオンの分類は、主に「仏」「菩薩」「明王」「天」に分類され、女神は主に「菩薩」もしくは「天」に分類されていた。しかしながら、インド、ネパール、チベットの密教においては、「女神」が独立したカテゴリとして分類されるようになり[76]、女尊は密教のパンテオンの中で重要なカテゴリーの一つとされている。

陀羅尼を示すサンスクリット dhāraṇī が女性形であることから、陀羅尼は主に女尊として神格化することが多い。五護陀羅尼もそれぞれ明妃としてあらわれ、『大随求陀羅尼』は「大随求明妃（マハープラティサラー）」、『守護大千国土経』は「大千摧砕明妃（マハーサーハスラプラマルダニー[77]）」、『孔雀王呪経』は「孔雀明妃（マハーマーユーリー）」、『大寒林経』は「大寒林明妃（マハーシータヴァティー[78]）、『大護明陀羅尼』は「密呪随持明妃（マハーマントラーヌサーリニー[79]）」等と呼ばれている（表２参照）。

例えば、孔雀明妃は孔雀が毒蛇を食べることからその除毒の能力が神秘化され、4～5 世紀に大孔雀明妃として女神の姿をとった[80]。中国、日本では仏母孔雀明王と呼ばれ信仰されており、二臂[81]、四臂、六臂などの姿をとる。息災延命、除難、請雨のために修される孔雀経法の本尊は金色の孔雀の上に坐し、体色は白で、慈悲の相を示す。四臂の

---

73 （渡辺 1995, 143）
74 （佐久間 2015）
75 （佐々木 1966, 8-9）
76 （立川 2015, 23-5）
77 NPY No.18 では「マハーサーハスラプラマルディニー」mahāsāhasrapramarddinī と表記されるが、本論文では特に記述がない限り「マハーサーハスラプラマルダニー」mahāsāhasrapramardanī に統一する。
78 SM No.200, 201, 206 では「マハーシタヴァティー」mahāsitavatī と表記されるが、本論文では特に記述がない限り、「マハーシータヴァティー」mahāśītavatī に統一する。
79 SM No.206 では「マハーマントラヌサーリニー」mahāmantranusāriṇī、[Bhattacharya 1968b]では「マハーマントラーヌダーラニー」mahāmantrānudhāraṇī と表記されるが、本論文では特に記述がない限り、「マハーマントラーヌサーリニー」mahāmantrānusāriṇī に統一する。
80 4～5 世紀に孔雀がヒンドゥー教の影響を受け、神格化されたという（岩本 1975,26）
81 胎蔵界曼荼羅蘇悉地院（そしつじいん）における孔雀明妃がその例である。（中村 1988, 644）

うち、右の二臂に開敷蓮華と倶縁果を、左の第一手は胸の前で吉祥果、第二臂は孔雀の尾羽を持つ。また、背後に広がった孔雀の尾は本尊の光背をあらわしているという[82]。

そのほか、大随求明妃は日本において大随求菩薩、大随求明王等と呼ばれており、京都の清水寺にある随求堂や、和歌山の高野山金剛峰寺の成福院等で奉られている。

女尊の中でも特に五護陀羅尼は重要な尊格の一つとなり、主にネパールやチベットで普及し信仰の対象となった。近年 Lewis[2000]は主にネパールで信仰されている五護陀羅尼経典の概説と神格化について述べている。五護陀羅尼の 5 尊はそれぞれ単独として神格化され、5 尊が一括して一つのマンダラとして構成される場合もある（図 6, 7 参照）。

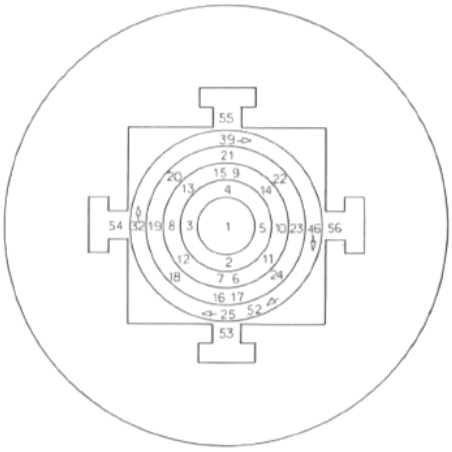
後期密教の時代になると、五護陀羅尼の各経典がそれぞれ神格化され、明妃として信仰の対象となった。[Bhattacharya1968b]によると、五護陀羅尼が神格化した場合五尊の女神はどの尊格でもマンダラの中心に位置することが出来るが、大随求明妃が中心に設定されると、その周囲の四方は他の五護陀羅尼 4 尊に囲まれるという。

先に述べたように、五護陀羅尼の各明妃は遅くとも 7、8 世紀までにはそれぞれ単独で神格化され、成就法に説かれるようになった。11～12 世紀に編纂された成就法の集成である『成就法の花環』やマンダラの観想法が説かれる『完成せるヨーガの環』*Niṣpannayogāvalī*（略号 NPY）においても、五護陀羅尼各明妃が単独、または 1 つにまとめられてマンダラとして収録されている。以下では主に『成就法の花環』に述べられている五護陀羅尼の成就法を取り上げ、神格化した際の姿や図像的特色について述べよう。

[82] （中村 1988, 644）

図 6.　五護陀羅尼 56 尊の女神マンダラ

[bSod nams rgya mtsho and Tachikawa1989: 5]



1（中央）大随求明妃
2（東）大千摧砕明妃
3（南）孔雀明妃
4（西）密呪随持明妃
5（北）大寒林明妃
6~15 十方の守護神
16~24 九つの天体
25~52 二十八宿
53~56 須弥山の周囲４州の守護神

図 7.　五護陀羅尼 56 尊の女神マンダラ（配置図）

[bSod nams rgya mtsho and Tachikawa1991: 6-7]

2. 『成就法の花環』*Sādhanamālā* 先行研究およびテキスト

「成就法」（サーダナ, sādhana）とは、行者が特定の尊格あるいはマンダラを観想、すなわち仏のイメージを眼前に表して一体となる行為を主体とした行法である[83]。

インド密教の学匠アバヤーカラグプタ Abhayākaragupta によって 11～12 世紀頃に編纂された[84]『成就法の花環』*Sādhanamālā*（略号 SM）は『成就法集』*Sādhanasamuccaya* とも呼ばれ、成就法を集大成した文献の一つである。SM は、サンスクリットで綴られた成就法集としては現存する最大のもので、312 種の儀軌が集められている。また SM の梵文写本は、30 本以上の存在が確認されている[85]。そのうち最古のものは、1165 年に書写された 138 種の成就法が集められているケンブリッジ大学図書館所蔵のネパール写本（Add.1686[86]）である[87]。

SM の漢訳は発見されていないが、チベット語訳は二種現存している。第 1 は 162 種類の文献が収録された『百成就法集』*sgrub thabs bsdus pa* と呼ばれるテキストで、アバヤーカラグプタが中心となって翻訳した[88]。第 2 は『成就法の大海』*sgrub thabs rgya mthso*[89]と呼ばれ、翻訳官タクパギェルツェンが 1286 年に訳了し、245 種の成就法が集められている[90]。

SM の先行研究には、バッタチャリヤ Bhattacharya のテキスト校訂本の他、佐久間留理子、清水乞、下泉全暁、立川武蔵、森雅秀、山口しのぶ、吉崎一美、頼富本宏等の研究がある。

SM を校訂したバッタチャリヤ（1968b）は上記文献に含まれる諸尊の図像的特徴を詳細に述べており、この文献は密教的図像学の基本的なものとして知られている。吉崎（1980）は SM のバッタチャリヤ校訂本とサンスクリット写本 4 本（東京大学所蔵）、チベット写本 3 本（Ota. 版）の比較対照を行っている。また、頼富氏・下泉（1994）によって No.98「ターラー成就法」、山口（1997）によって No.251「サンヴァラの七字真言」、奥山（2005）によって No.217「ヴァジュラヴァーラーヒー成就法」の和訳がなされている。さらに、佐久間（2011）によって No.6～20,22,23 等の観自在の成就法、さらに 2015 年に No.151, 156 の般若波羅蜜成就法の詳細な研究が行われている。

---

83 [奥山 2005: 173]
84 [奥山 2005: 178] [佐久間 2011: 17]
85 [奥山 2005: 173]
86 [Bendall1883: 174]
87 [塚本、松長、磯田:1989: 383] [奥山 2005: 173]
88 Toh. No.3143～3304[奥山 2005: 173]
89 Toh. No.3400～3644[奥山 2005: 173]
SM に含まれる成就法の数は、伝播の過程において、特定の尊格グループに関する成就法が新たに加えられ増補されていったという。[奥山 2005: 176]
90 [奥山 2005: 173]

頼富・下泉 1994 においては具体的な成就法次第は述べられていないものの、五護陀羅尼の 5 名の明妃の功徳や図像的特徴について説明されている。筆者は[園田 2014][園田 2015]において、五護陀羅尼の観想に関係する SM No.195 , No.206について発表した。

前述したバッタチャリヤの校訂本[91]では、如来や観音などの尊格ごとにグループ分けされている。その中で No.194～201 および 206 には、五護陀羅尼明妃の成就法が説かれている。バッタチャリヤ校訂本と東大写本（Matsunami 1965）、National Archives, Kathmandu, No.3-387（以下略号 NAK と称す）、ならびにチベット語訳（Toh., Ota.）の対応関係は右の表 9, 10 に示した[92]。

次項では、SM において神格化された五護陀羅尼明妃 5 尊の成就法について述べる。

SM No.	対応する五護陀羅尼明妃	No.451	No.451	No.451	NAK
194	大随求明妃	150 a6	108 b3	155 a4	164a8
195	大随求明妃	150 b4	108 b8	155 b3	164b7
196	大随求明妃	151 b1	109 a9	156 a6	165b3
197	孔雀明妃	151 b6	109 b6	156 b6	166a4
198	大千摧砕明妃	152 a4	110 a1	157 a4	166a11
199	密呪随持明妃	152 a5	110 a3	157 a6	166b3
200	大寒林明妃	152 b1	110 a4	157 b1	166b6
201	5 尊(マンダラ)	152 b2	110 a6	157 b2	166b9
206	5 尊(マンダラ)	153 b5	111 a5	159 a1	168a5

表 9. SM バッタチャリヤ校訂本（Bhattacharya 1968a）およびサンスクリット写本（[Matsunami 1965] No.451~453, NAK）に見られる五護陀羅尼の成就法対照表

SM No.	Toh. I	Toh. II	Toh. III	Toh. IV	Ota. I	Ota. II	Ota. III	Ota. IV
194	3251	3376	3583	3119	4074	4197	4405	3940
195			3584				4406	
196			3585				4407	
197	3252	3378	3586	3120	4075	4199	4408	3941
198	3253	3379	3587	3121	4076	4200	4409	3942
199	3254	3380	3588	3122	4077	4201	4410	3943
200	3255	3381	3589	3123	4078	4202	4411	3944
201	3256		3590		4079		4412	
206			3596				4418	

表 10. SM バッタチャリヤ校訂本（Bhattacharya 1968a）およびチベット語訳（Toh., Ota.）に見られる五護陀羅尼成就法対照表

[91] [Bhattacharya 1968a]

[92] [吉崎 1980]および[塚本、松長、磯田編 1989]を参考に筆者が作成した。

3. 五護陀羅尼各明妃の成就法の内容構成

SM No.194～200 は単独の五護陀羅尼各明妃の成就法、SM No.201 および 206 は五護陀羅尼各明妃が一括されたマンダラの成就法である。No.194, 196～201 は各明妃の姿の観想が各々の次第の大部分を占めているが、尊格と行者の合一等は前提のものとして省略されていると推測される。[頼富・下泉 1994: 40]によると、尊格との合一を図るためには具体的な尊格の姿が必要であり、成就法によっては図像規定のみが要点として記述されることがあるという。なお、各明妃ごとの図像的特徴については「4.3 五護陀羅尼各明妃の図像的特徴」で述べる。

以下では SM に述べられた五護陀羅尼各明妃の成就法と、一括してマンダラとなった際の成就法に関して構成を述べていこう。

3.1　No.194「大随求明妃成就法」

これから述べる No.194～196 は、いずれも大随求明妃単独の成就法である。No.194 では、まず大随求明妃に対して帰依文から始まる。次に、以前に話された方法によって[93]空性を観想した直後に、a 字から生じた月輪において、黄色の praṃ 字から生じた光線を変化させ、大随求明妃を観想するべきであるという。

大随求明妃の体色は黄色で、四面八臂であり、それぞれの顔に三眼を持つ。中央の顔は黄色、右の顔は白、後ろの顔は青、左の顔は赤色である。八臂のうち、右の臂に剣、輪、三叉戟（さんさげき）、矢を持ち、左の臂によって斧、弓、羂索、金剛杵を持つ。遊戯坐で坐し、赤く輝いているマンダラ（日輪）のようなきらびやかな衣服を身にまとい、白色の上着を着て、様々な宝石の王冠をつけている。

そのような大随求明妃を考えてから、次に述べる 3 つの文字を布置体の各所に布置する。身口意の月輪に、それぞれオーム、アーハ、フームという、白と黄と青の 3 つの文字を観想する。さらに乳房の間において月輪の上にある praṃ 字を考え、女神たちによって自分自身が供養されていると、疲れが生じない程度に観想する。

疲れた時には、自らの心臓の月輪において、最高の真珠の首飾りのような真言を見ながら「オーム、宝珠を持つ女神よ、金剛女よ、大随求明妃よ、フーム、フーム、パット、パット、スヴァーハー」と読誦すべきであるという。

以上が No.194 の大随求明妃の成就法である。本成就法は冒頭で「以前話された方法によって」とあり、儀軌の内容が省略されていることがわかる。ここで述べられる「以前話された方法」が何を指しているのか具体的な言及はないが、前述したように、SM では尊格との合一や観想の準備、空の観想等の行為は既に知られているものとして省略

[93] pūrvvoktavidhānena

されることが多くあるという[94]。

3.2　No.195「大随求明妃成就法」

SM における五護陀羅尼明妃の成就法のなかで、No.195「大随求明妃成就法」および No.206「五護陀羅尼成就法」は比較的儀軌の内容が詳しく説かれ、構成が理解しやすい。したがって、上記の 2 つの成就法に関しては内容構成の見出し（表 11 参照）に沿って説明していく。

[0]帰依文
[1] 観想の準備
　[1.1] 月輪の観想
　[1.2] プラム（praṃ）字の布置と供養
[2] 大随求明妃の観想と種字の布置
　[2.1] 四梵住の観想
　[2.2] 空性智金剛の真言
　[2.3] 大随求明妃の姿の観想
　[2.4] 種字の布置と大随求明妃との一体化
[3] 阿閦如来の観想
[4] 百字真言
　[4.1] 百字真言の準備
　[4.2] 精神的に疲れた時に唱える真言
　[4.3] 百字真言
[5] 成就法を行う時間帯について

表 11.　SM No.195「大随求明妃成就法」次第[95]

[1] 観想の準備

この成就法においては、はじめに観想の準備が行われる。密教行者は精神を集中し、その後心臓においてパン（paṃ）字が変化した二重蓮華の上で、ア（a）字が変化した月輪を観想する。（表 1[1.1]）

次にプラム（praṃ）字の布置と供養が行われる。先ほど観想した月輪の中に黄色いプラム字を置く（布置する）。その後、プラム字から放出された光線によって、きらびやかな座に坐す、諸々の師である仏菩薩を引き寄せて、目の前に招く。その後、仏菩薩に礼拝（vandanā）、供養（pūjanā）、懺悔（pāpadeśanā）、福徳随喜（puṇyānumodanā）、三宝帰依（triśaraṇagamana）、発菩提心（bodhicittotpāda）、福徳回向（puṇyapariṇāmanā）、許しを得る（kṣamāpana）等の行為を行う。([1.2])

以上の「礼拝」から「許しを得る」までの 8 種の行為のうち、清水乞氏は、「礼拝」、「供養」、「懺悔」、「福徳随喜」、「三宝帰依」、「発菩提心」、「福徳回向」の 7 種は「七種無上供養[96]」(saptavidhānuttarapūjā) であると述べている。また、SM No.24、No.56、No.98 においては「七種無上供養」と明記された上で（各成就法間で行為の順序や内容に異同があるが)、7 種の行為が記されている[97]。この No.195 の中でこれらの行為が七種無上供養であるとの記述はないものの、行為の内容からみて七種無上供養に該当すると思わ

[94] [頼富・下泉 1994: 53]

[95] 上記表は、[Bhattacharya1968b:398]、[Matsunami 1965]No.451～453 sādhanasamuccaya、National Archives, Kathmandu, No.3-387、および Ota. No.4406 を参照し、筆者が作成した。

[96] 花や線香、灯明等を捧げることを一般的に意味する供養（pūjā）とは区別される行為であるが、礼拝、供養、懺悔等から成る行為をまとめて「七種無上供養」と呼ぶ。[清水 1977: 68]

[97] [清水 1977: 66-68]
また、清水氏の同文献において指摘される「七種無上供養」の中に「許しを得ること」は含まれていない。

れるため、本論文では以上の行為を七種無上供養として扱う。以上で観想の準備が整う。

[2] 大随求明妃の観想と種字の布置

続いて、大随求明妃の観想と種字の布置が行われる。まず慈、悲、喜、捨（四梵住）を観想し（[2.1]）、次に「オーム、私は空性智金剛を本性とする者である[98]」という空性智金剛の真言を唱えて空性を観想する。（[2.2]）

その後行者は、自身の心において直ちに月輪の上の黄色のプラム字を観想し、それを変化させて大随求明妃を観想する。その姿は美しい黄色の体色で、宝冠をつけおり、黄色と白と青[99]と赤の四面で、三眼八臂である。右の臂によって剣、輪、三叉戟、矢を持ち、左の臂によって羂索、斧、弓、金剛杵を持っている姿の女神で、蓮華の上にある月輪の上の座において、遊戯坐で坐している。また、様々な宝石でできた装飾品に飾られている。（[2.3]）

さらに行者の頭、のど、心臓、そして心臓に準じる部分[100]に、それぞれ月輪の上に乗る白のオーム（oṃ）字、赤のアーハ（āḥ）字、黄色のプラム字、黒のフーム（hūṃ）字を置き（布置）、種字を唱えながら、行者自身と女神を一体化させる。（[2.4]）

[3] 阿閦如来の観想

その後、阿閦如来を招いて灌頂を受け、王冠において阿閦如来の観想を行う（[3]）。

[4] 百字真言

行者自身の心臓から供養の女神達を広げて、供養してから百字真言を唱える。その際には疲れが生じない程度に観想すべきであるという。（[4.1]）

続けて、精神的に疲れた時に唱える真言、および百字真言が述べられる。（[4.2] [4.3]）

[5] 成就法を行う時間帯について

この成就法は起床時に行うべきと示され、最後に女神に帰って頂く許しを請い、大随求明妃の成就法が終了する。（[5]）

以上が No.195 の成就法のプロセスである。ここでは阿閦如来が大随求明妃の族主として提示されるが、[Bhattacharya 1968b : 243-244]によると大随求明妃の族主は宝生如来とあり、SM No.201 には宝生如来が化仏として示されている。一方で、大随求明妃の図

---

98 oṃ śūnyatājñānavajrasvabhāvātmako 'ham

99 バッタチャリヤの校訂本と東京大学所蔵梵文写本松波目録 No.451, sādhanasamuccaya と No.453 sādhanasamuccaya では「黄色（pīta）」とあるが、東京大学所蔵梵文写本松波目録 No.452 sādhanasamuccaya と National Archives, kathmandu, No.3-387 では「青（nīla）」、及びチベット訳において「青（sngon pa）」と記されている。四面の色の内、黄色は重複するため、National Archives, kathmandu 及びチベット訳にある「青」を採用した。

100 心臓に準じる部分（upahṛdaya）とは、具体的にどの部位を示すか明らかではない。

像的特徴は大日如来に従っているという説もある[101]。孔雀明妃が不空成就如来の化身とされる以外は、大随求明妃を含めた五護陀羅尼の各明妃がどの仏の化身であるかは、諸説があって一定しないともいわれている[102]。

3.3　No.196「随求明妃成就法」

まず、観想の準備から始まる。生死病苦などに悩んでいる一切の人々に対して、慈、悲、喜、捨の意をなしてから、真言行者は、目の前に、知識という１つの美しい姿を観想する。

そして、黄色い praṃ 字から成る、地面で輝いているア字の月輪の形を観想して、二重蓮華の上の中央にある月輪の上の座に坐している以下の大随求明妃の姿を観想する。

大随求明妃は中央の顔が黄色、右面が黄色（または青）、背面が白、左面が赤みがかった茶色で、それぞれ三眼である。衣服はきらびやかな、赤く輝いているマンダラのような（日輪）、美しく魅力的な胸が収められている上着である。小枝のような臂によって、右手に剣、輪、矢、三叉戟、左手に斧、繁栄の羂索、金剛杵、弓を持つ。成就者は自らがプラティサラーとなるべきである、と説かれる。

次に、3 つの文字を観想する。「オーム、アーハ、フム」と唱え、文字によって自身の心臓に山を見てから、月輪の上にある白を[103]、結合された方法に黄色を[104]、さらに自分自身に青を[105]観想する。

月輪において一対の乳首の中央に現れた praṃ 字から出現した光線によって、観想の尊格の完成によって満たされた彼の女神の集団によって、自分自身の姿を観想させるべきであるという。

このように拡散、収縮させているうち、疲労のきざしが出て、真珠のひもが出現した時は、心臓の上の月輪の上にマントラの王を観想し、「オーム、宝珠を持つ女神よ、金剛女よ、大随求明妃よ、フム、フム、パット、パット、スヴァーハー」と唱えるべきである。心が浄化された者は、常に敬意を持って何度も唱えるべきであると説かれる。

3.4　No.197「聖孔雀明妃成就法」[106]

以前に話された方法によって、二重蓮華の上の月輪の上において、緑の māṃ 字より生じた以下の孔雀明妃を観想する。

孔雀明妃の体色は緑の色で、三面六臂で各々の顔は三眼である。左右の顔の色は黒（青）と白である。右の三つの手には孔雀の尾羽と矢を持ち、与願印を結ぶ。左の三つ

---

101 [立川 2004: 110]
102 [田中 1992: 148]
103 candragataṃ sitaṃ
104 vidhiyutaṃ pītaṃ
105 nīlātmakam
106 [Bhattacharya1968b: 217]

の手には、宝石の山、弓、水瓶を膝元に持つ。

きらびやかな装飾品に飾られ、美しい味（情熱的な愛の心情[107]）で、若い。月輪の[上の]座において、月の輝きを放ち、半跏坐に坐す。不空成就如来の王冠をつけた孔雀明妃を自分自身に観想すべきであるという。

頭、のど、心臓、心臓に準じる部分に、それぞれ、オーム、アーハ、マーム、フーム、という、四つが集まった文字を観想させ、拡散収縮をさせる。

そして「オーム、孔雀明妃よ、知識の王妃よ、フーム、フーム、パット、パット、スヴァーハー」という真言を読誦する。

3.5　No.198「聖大千摧砕明妃成就法」

以前に話された方法によって、二重蓮華の上の月輪の上において、buṃ 字より生まれた大千摧砕明妃を観想する。その姿は白く、一面六臂である。右の三臂には剣、矢を持ち、与願印を結んでいる。左の三臂には弓、羂索、鉄製の斧を持つ。また、大日如来の王冠を被り、月輪の輝きを持つ大千摧砕明妃の姿を観想する。

以上が No.198 の成就法である。冒頭に「以前話されたように」とあるが、具体的に何を指しているのかは明確ではない。

3.6　No.199「聖密呪随持明妃成就法」

密呪随持明妃の姿は一面四臂で、体色は黒である。右の二臂には金剛杵を持ち、与願印を結ぶ。左の二臂には斧と羂索を持つ。hūṃ 字の種字から生じた明妃で、阿閦仏の王冠を被っており、日輪の座で輝いている。

3.7　No.200「聖大寒林明妃成就法」

大寒林明妃は一面四臂で、体色は赤である。右の二臂に数珠を持ち、与願印を結ぶ。左の二臂に心臓の方向に向けた金剛鉤針と書物を持つ。jīm 字から生じた明妃で、阿弥陀仏の王冠を被り、日輪に半跏坐で坐し、様々な装飾に飾られ、太陽のように輝く。

以上が SM No.194～200 に見られる単独の五護陀羅尼に属する単独の明妃の観想法の内容構成である。No.195 以外の成就法は、その大部分が図像の規定で占められている。次に、五護陀羅尼の各明妃が一括して述べられている成就法について取り上げる。

3.8　No.201「偉大な五護陀羅尼儀軌」

本成就法と次項に述べる No.206 には、五護陀羅尼各明妃 5 尊全員の姿が説かれている。こちらの成就法は主に図像の規定のみとなっている。

大随求明妃は体色が黄色で、三面十臂の女神である。中央の面は黄色で、左右はそれ

[107] [Bhattacharya1968b: 234] displays the sentiment of passionate love.

ぞれ黒（青）と白である。右の五臂に剣、金剛杵、矢、与願印を結び、心臓の近くで傘を手に持つ。左の五臂には弓、旗、宝石の山、斧、法螺貝を持つ。宝生如来の王冠を被り、青黒い鎧兜と赤い上着を着け、半跏遊戯坐に坐し、光り輝く装飾品で飾られる。

孔雀明妃は体色が緑で、一面二臂の女神である。光り輝く孔雀の尾羽と与願印を両手に持つ。大千摧砕明妃は前述したような明妃であるという。密呪随持明妃は一面四臂で体色が黒の女神である。右の臂には剣を持ち、与願印を結ぶ。左の臂には斧、羂索を持つ。大寒林明妃は一面四臂の女神である。体色は赤く、右の臂には剣を持ち、与願印を結び、左の臂には斧、羂索を持つ。終わりに、真言と種字について述べられる。

以上が No.201 の儀軌の次第である。大千摧砕明妃の姿については「前述された」とあり、No.198「聖大千摧砕明妃成就法」を示していると推測されるが、テキスト中に言及はない。また、最後に説かれる真言と種字についても具体的な記述はない。

3.9　No.206「五護陀羅尼成就法」

この成就法は五護陀羅尼マンダラの観想を中心に行う前半部と、実際のマンダラの制作及び供養を中心に行う後半部の 2 つの部分からなる。以下、表 12 の内容構成に従って No.206 の次第を述べる。

[1] 五護陀羅尼マンダラの観想 [1.1] 観想の準備 [1.1.0] 中尊大随求明妃への帰依文 [1.1.1] 場の加持 [1.1.2] 供養と四梵住の観想 [1.1.3] 空性の観想 [1.2] マンダラの外郭および五尊の明妃の観想 [1.2.1] マンダラの外郭および大随求明妃の観想 [1.2.2] 大随求明妃の真言 [1.2.3] 大千摧砕明妃の観想 [1.2.4] 大千摧砕明妃の真言 [1.2.5] 孔雀明妃の観想 [1.2.6] 孔雀明妃の真言 [1.2.7] 密呪随持明妃の観想 [1.2.8] 密呪随持明妃の真言 [1.2.9] 大寒林明妃の観想 [1.2.10] 大寒林明妃の真言 [1.3] 三昧耶チャクラと智チャクラの観想と ２つのマンダラの合一 [1.4] 身体各部における観想と女神の布置 [1.5] 真言の読誦	[2] マンダラの制作 [2.1] 五護陀羅尼マンダラを描く目的 [2.2] マンダラ制作 [2.2.1] マンダラの作壇と土地神を鎮める儀式 [2.2.2] 四方四維にいるガンダルヴァ等の供養 [2.3] マンダラの供養 [2.3.1] 密教行者の心構え [2.3.2] 諸尊の観想 [2.3.3] 仏陀、諸尊等への帰依文 [2.3.4] 五護陀羅尼マンダラ諸尊の供養 [3] 五護陀羅尼の儀軌の効能

表 12.　No.206「五護陀羅尼成就法」次第[108]

[108] 上記表は、[Bhattacharya1968b:398]、[Matsunami 1965]No.451～453 sādhanasamuccaya、National Archives, Kathmandu, No.3-387、および Ota. No.4406 を参照し、筆者が作成した。

[１] 五護陀羅尼マンダラの観想

[1.1] 観想の準備

まず観想の準備として、中尊大随求明妃への帰依を行う。その後密教行者自身の口等を清めて座し、真言を唱えて座の守護の加持を行う。その後、自身の心臓において a 字を月輪に変化させ、罪の懺悔、三宝帰依、発菩提心、回向等の行為を行った後に[109]、四梵住および空性を観想する。

以上のような準備の後、五護陀羅尼マンダラの観想に入る。

[1.2] マンダラの外郭および五尊の明妃の観想

次に行者は、金剛籠、金剛境界、金剛天蓋、須弥山、楼閣[110]（大解脱の都）などのマンダラの外郭を観想した後に、praṃ 字から変化した大随求明妃を観想する。次に、東において hūṃ 字の印がある金剛から変化した大千摧砕明妃、南において māṃ 字の種字から変化した孔雀明妃、西において maṃ 字の種字から生じた密呪随持明妃、北において trāṃ 字の変化より生じた大寒林明妃を観想する。

大随求明妃の体色は白色で、頭頂は仏塔で飾られている。月輪の上にある日輪の上に乗り、金剛結跏趺坐に坐す。四面八臂で、中央の顔は白、右は青黒色、後部は黄色、左は赤色である。右の臂に輪、金剛、矢、剣を持ち、左の臂に金剛と羂索、三叉戟、弓、斧を持つ。菩提樹によって飾られており、耳飾り、首飾り、足首の飾り、金の臂釧、腰飾りといった一切の装飾品を身に付けている。梵天、ヴィシュヌ、大自在、歓喜自在、天、竜、ヤクシャ、ガンダルヴァ、等の神々によって崇拝される。また、貪・瞋・癡（三

---

109 清水乞氏によると、「懺悔 pāpādesanā」、「発菩提心 bodhicitta-」、「回向 parināmanā」、「三帰依 trisarana-」等の行為は「七種無上供養[109]」（saptavidhānuttarapūjā）であると述べている。SMNo.24、No.56、No.98 においては「七種無上供養」と明記された上で（各成就法間で行為の順序や内容に異同があるものの）、7 種の行為が記されているという。[清水 1977: 66-68]

大随求明妃単独の成就法である No.195 においては、「七種無上供養」の記述はないものの、「礼拝（vandanā）、供養（pūjanā）、懺悔（pāpadeśanā）、福徳随喜（puṇyānumodanā）、三宝帰依（triśaraṇagamana）、発菩提心（bodhicittotpāda）、福徳回向（puṇyapariṇāmanā）、許しを得る（kṣamāpana）等の行為を行う」とあり、行為の内容からみて七種無上供養に該当すると推測される。（園田 2014, pp.104-105）

この No.206 においても、「罪の懺悔」から「許しを得る」までの 5 種の行為をみると七種無上供養に該当すると思われるが、 [清水 1977, 67-69]で示されている SM 中に表れる七種無上供養の表においては No.206 について言及されていない。さらに同表によると、4～10 種類の七種無上供養が示されており、その順序と内容はそれぞれの成就法によって相違している。また、清水氏の同文献において指摘される「七種無上供養」の中に「許しを得ること」は含まれていない。

なお、先に述べた礼拝、供養、懺悔等から成る行為をまとめて「七種無上供養」と呼ぶが、花や線香、灯明等を捧げることを一般的に意味する供養（pūjā）とは区別される。（清水 1977, 66-68）

110「大解脱の都（mahāmokṣapura）」。金剛ターラーの成就法である No.97、110 において、大日如来を本質（vairocanasvabhāvaṃ）とする楼閣（kūṭāgāraṃ）とある。

毒）を羂索で真二つに切り、敵のマントラや印、毒薬、邪悪な心を持つ者を粉々に砕く女神である。最上の供養に満足する一切の仏菩薩の聖なる一団を守護する女神で、大乗仏教の教理を書いたり読んだり読誦したり、自習、聴聞、憶持に集中した者たちを守護する女尊であるという。大随求明妃の真言は「オーム、宝珠を持つ女神よ、金剛女よ、大随求明妃よ、フム、フム、パット、パット、スヴァーハー」である。

続けて、大千摧砕明妃の観想が行われる。位置は大随求明妃の東の方角で、青黒色で、黄褐色の髪を逆立てた女神で、人間の頭蓋骨で飾られ、眉を寄せて牙をむいている顔である。遊戯坐に坐し、マハーブータとマハー夜叉を踏みつけている。ヴァタ の樹に飾られ、金の腕輪、首飾りと足首の飾りを着けている。右の臂に与願印と金剛、鈎針、矢、剣、左の臂にタルジャニー印と羂索を、斧、弓、蓮華の上の 16 の宝石を持っている。中央の顔が青黒、右が白、後部が黄色、左が緑で、すべての顔に三眼を備えている。大きな力を持ち、獰猛な外観である。七母神などの女神たちを威嚇し、レーヴァティーなどの星宿や惑星を恐れさせ、ヴァースキ蛇王等の八大竜王の恐ろしさを成す女神で、ヴァータ、ピッタ、シュレーシュマ(カパ)を浄化する女神で、獰猛な闇である雲を引き裂き、また、一切の突然死を防ぐ女神であるという。大千摧砕明妃の真言は「オーム、最上の甘露の女神よ、最も良い最上の清浄な女神よ、フム、フム、パット、パット、スヴァーハー」という。

その後、孔雀明妃が観想される。体色は黄色で、結跏趺坐に座し、三面八臂である。中央の顔は黄色、右面は青黒色、左面は赤色をしている。宝石の宝冠を持ち、アショーカ aśoka の樹 によって飾られ、一切の装飾品を身に着けている。右の臂に与願印、宝石の水差し、輪を、剣を持ち、左の臂に乞食の鉢、孔雀の尾羽、水差し上の二重金剛、宝石の旗を持つ。恐ろしい黄褐色の髪を持つ者や、羅刹女の邪悪な心を粉々に砕く女神である。蛇等の生贄に坐す女神で、天・竜・夜叉・乾闥婆たちや、二七星宿や九曜等によって称賛され、一切の無生物・生物の毒を食らう女神である。孔雀明妃の真言は以下のようである。孔雀明妃の真言は「オーム、甘露のごとき女神よ、胎を保護する女神よ、引き付ける女神よ、フム、フム、パット、パット、スヴァーハー」である。

そして、密呪随持明妃の観想が行われる。密呪随持明妃の体色は白色で、三面十二臂、中央の顔は白、右は青黒、左は赤色をしている。日輪の上に展右の姿勢をとり、首飾りとくるぶしの飾りとイヤリング、そしてシリーシュ sirīṣ の樹で飾られている。第一の両臂に転法輪印、第二の両臂に禅定印、残りの右の臂に与願印、施無畏印を、金剛、矢を、左の臂にタルジャニー印と羂索、弓を、宝石のついた傘、蓮華のマークの水差しを持つ。8 名の護世神をはじめとする神々によって崇拝されるべきであり、四天王によって称賛される。密呪随持明妃の真言は「オーム、けがれのない女神よ、偉大な女神よ、甘露のごとき女神よ、金剛女よ、フム、フム、パット、パット、スヴァーハー」である。

最後に、大寒林明妃の観想が行われる。体色は緑色で、日輪の上に展右の姿勢をとり、三面六臂でそれぞれの顔に三眼を持つ。中央の顔は緑で、右は白、左は赤である。如来

の化仏をつけた宝冠を被り、チャンパカの樹で飾られ、一切の装飾品を身に着け、神々しい服を身につけている。右の臂には施無畏印、金剛杵、矢を持ち、左の臂にはタルジャニー印と羂索、弓、宝石の旗を持つ。カーマ神をはじめとする神々に崇拝される。ハーリーティー等のヤクシャ、ヤクシャ女を破壊する女神で、カラスやふくろう、ハゲワシ、タカ、鳩等を追い払う女神で、ブータ、プレータ(餓鬼)、ピシャーチャ(毘舎闍)ヴェーターラ、羅刹等を魅了する女神である。大寒林明妃の読誦の真言は「オーム、支えよ、支えよ、集めよ、集めよ、感官の力を浄化する者よ、フム、フム、パット、パット、スヴァーハー」である。

以上で中心となる 5 尊の明妃の観想が終わる。次に、これら五尊のマンダラの観想を行っていく。

[1.3] 三昧耶チャクラ（マンダラ）と智チャクラの観想と２つのマンダラの合一

以上のようなマンダラを観想し、その後行者は智チャクラを引き寄せて、自身の三昧耶チャクラに引き入れる。その後２つのマンダラが１つになるのを観想してから、自分自身が灌頂を受けているところを観想する。以上が三昧耶チャクラと智チャクラの観想と２つのマンダラの合一の場面であり、この成就法の核心的な部分である[111]。

[1.4] 身体各部における観想と女神の布置

続いて行者の両目に癡金剛女である大随求明妃、両耳に瞋金剛女である大千摧砕明妃、鼻に慳金剛女である孔雀明妃、口に貪金剛女である密呪随持明妃、触に嫉金剛女である大寒林明妃を布置する[112]。

[1.5] 真言の読誦

五護陀羅尼マンダラと行者自身が合一した後、静まった心で途切れなく真言の読誦（japa）が行われる。以上で五護陀羅尼マンダラの観想が完了し、次に実際にマンダラを描く行為が述べられる。

[２]マンダラの制作と供養

[2.1] 五護陀羅尼マンダラを描く目的

まず「一切衆生の利益のために五護陀羅尼マンダラを描く」という目的が説かれる。この儀軌の前半部において密教行者は五護陀羅尼マンダラと一体となった。ここから一切衆生たちの利益のために実際にマンダラを描き、供養等を行う。

---

[111] [頼富・下泉 1994: 40]
大随求明妃の単独の成就法である No.195、No.196、No.206、そしてターラーの成就法である No.98 における尊格と行者の合一を示唆する場面についての比較は[園田 2014:104-105]において述べた。

[112] これらの尊格は蘊、界、処の本質であるという。

[2.2] マンダラ制作

次に、白と赤の粉を用いて土地神を鎮める儀式が述べられた後、マンダラの周囲にいるガンダルヴァ等の供養をする。地には牛糞を塗り、栴檀の塗香で儀礼の場を清め、八葉蓮華を描く等といったマンダラの作壇を行う。

[2.3] マンダラの供養

その後、真言の唱え方や食物の規定等の密教行者の心構えが示され、再度諸尊を思い返して観想し、仏陀、諸尊等への帰依文が説かれる。そして諸尊の名前が添えられたドゥルヴァ草とジャスミンを用い、真言を唱え、ヨーガを行うことによって、五護陀羅尼マンダラ諸尊の供養がおこなわれる。

[3] 五護陀羅尼の儀軌の効能

最後に、五護陀羅尼の成就法を行うことによって得られる効能について述べられ、No.206 五護陀羅尼成就法が終わる。

以上、No.201, 206 に説かれている五護陀羅尼の各明妃が一括して述べられている成就法の内容構成について述べた。特に、最後に述べた No.206 の成就法は比較的構成が把握しやすい。次節では他の成就法の次第を取り上げて比較検討し、五護陀羅尼成就法の機能や特色について明らかにしていく。

4. 考察

4.1 五護陀羅尼の成就法の特徴

五護陀羅尼マンダラを観想する際には、大随求明妃が中尊となることが多く、SM や NPY においても大随求明妃が中心に描かれている。また、収録されている単独の五護陀羅尼各明妃の成就法も、大随求明妃のみ複数存在する（SM では大随求明妃の成就法が 3 本、ほかの明妃は各 1 本にとどまる）。さらに、他の五護陀羅尼各明妃と一括された成就法であっても、大随求明妃の姿に関しては比較的詳細に説かれている。

これまで述べたように、SM における五護陀羅尼明妃の成就法のなかで No.195「大随求明妃成就法」および No.206「五護陀羅尼成就法」は儀軌の構成が理解しやすい。ここではそれぞれの成就法に共通してあらわれる大随求明妃（SM No.194～196, 201, 206）に注目し、単独の五護陀羅尼明妃の成就法が持つ特色を明らかにする。

まず、単独の大随求明妃の成就法である No.194～196 の次第を比較すると、No.194、No.196 は真言等が省略されているといった違いはあるものの、大きな違いは見られない。ここでは No.194～196 についての共通点と特徴を見ていこう。

まず、空性の観想については No.194～196 に共通して表れる。No.195 ではさらに具体的に「オーム、私は空性智金剛を本性とする者である」といった空性智金剛の真言が説かれている。

次にオーム字、アーハ字、フーム字といった 3 つの種字を観想する場面がある。それに続いて、No.194,196 には胸の間にプラム字を観想すると説かれているが、No.195 ではさらに、黄色のプラム字を心臓に置く（布置する）とある。この成就法に度々あらわれる黄色のプラム字とは、大随求明妃の黄色い体色と、プラティサラー明妃の頭文字プラムから由来するものと思われる。

そして、疲労を感じた時に唱える真言についても同様に「オーム、宝珠を持つ女神よ、金剛女よ、大随求明妃よ、フーム、フーム、パット、パット、スヴァーハー[113]」と、終盤で共通して述べられている。

一方で相違点として、四梵住の観想については No.194 においてのみ述べられていない。また、七種無上供養を含む 8 種類の行為や、阿閦如来の観想、百字真言、供養する時間帯は No.195 にのみ説かれており、No.194、No.196 には述べられていない。

次に、SM の中で大随求明妃が他の五護陀羅尼各明妃と一括される形で述べられている No.201、No.206 の次第を取り上げ、さきに述べた大随求明妃単独の成就法 No.195 のプロセスと比較していこう。

まず No.201 には五護陀羅尼各明妃の 5 尊の明妃の姿が説かれる。冒頭で各明妃についてそれぞれ短く述べられるが、大随求明妃については他の 4 尊に比べると比較的詳しく説明されている。最後に真言について短く述べられ、終結する。この No.201 は五護

[113] oṃ maṇidhari vajriṇi mahāpratisare hūṃ hūṃ phaṭ phaṭ svāhā

陀羅尼各明妃と真言についての簡単な説明のみ述べており、他の成就法とは構成が大きく異なる。しかし、先にも述べたように[114]SM では既に知られている儀礼に関しては省略されることが多い。この No.201 も冒頭に「伝統的な方法で五尊の偉大な女神たち[の観想]を述べよう」とあり、基本的な行為は前提のものとして省略されたと思われる[115]。

次に、No.206 には五護陀羅尼各明妃の成就法が詳細に説かれている。はじめに観想の準備として帰依文を唱え吉祥坐に坐し、真言を唱えて場の加持を行う。その後、中尊である大随求明妃が伴う従者たちに供養する。花、線香、灯明、塗香等を置いた後に、七種無上供養の一部である懺悔、三宝帰依、発菩提心、福徳回向が行われ[116]、そして許しを乞う等の行為を行う。そして四梵住の観想を行い、空性智金剛の真言を唱える。

次に楼閣と五護陀羅尼各明妃に属する各明妃の観想をした後、「約束のマンダラ[117]」である三昧耶チャクラ（samayacakra 三昧耶マンダラ）と「智恵のマンダラ」である智チャクラ（jñānacakra 智マンダラ）の観想と合一が行われる。そして身体各部における観想と女神の配置、真言を読誦し、最後に五護陀羅尼の次第（まとめ）が行われる。特にまとめにおいては、マンダラの線を描き、土地神を鎮めることや、密教行者の心構え、マンダラ諸尊の供養などの五護陀羅尼各明妃のマンダラの儀軌についても述べられており、この No.206 は特に詳細な成就法であるということがわかる。

以上 No.195, 201, 206 において共通することは大随求明妃の姿の観想のみである。ただし、No.201 は成就法自体が短いということもあり、これを除いた No.195, 206 を比較すると、観想の準備、七種無上供養、大随求明妃の姿の観想、四梵住の観想、空性の観想、空性智金剛の真言が共通している。次に、以上で述べた大随求明妃と、SM No.98「ターラー成就法」とを比較し、大随求明妃の成就法の特色について見ていこう。

SM No.98 に説かれているターラー女神は、インド密教においてポピュラーな女神である。この成就法は SM の中でも比較的まとまった内容を持つということもあり[118]、今回併せて比較の参考とした。[Bhattacharya1968b: 200]のサンスクリット・テキスト、および[頼富・下泉 1994: 40-52]の和訳を参考に、この成就法の構造を述べよう。

---

[114] 3.1 No.194「大随求明妃成就法」参照

[115] また、大千摧砕明妃の姿については「前述のような女神である」と記述するにとどまっている。

[116] [清水 1977: 67-69]の七種無上供養の一覧表に No.206 は含まれていない。

[117] [清水 1977: 70] [奥山 2005: 185] [佐久間 2011: 212-213]によると、約束のマンダラとは「三昧耶薩埵」samayasattva、samayamūrti、samayadevatā（行者が意図的に把握しようとする本尊の仮の姿）としてのマンダラ、智恵のマンダラとは「智薩埵」（jñānasattva 三昧耶薩埵に応じて仏から働きかけてくる、本質的な存在）としてのマンダラに相当するという。行者が仮の尊格である三昧耶薩埵を自身と不二一体のものと観想し、真実の尊格である智薩埵と合一する。この行者と尊格の合一は、成就法の多くにおいて説かれるという。[奥山 2005: 185] 聖なるもの（尊格）を俗なるもの（行者）に引き入れて神秘的合一を行う際には、瞑想の中で一時的に聖なるものの姿を取らなければならないため、行者は三昧耶薩埵（本尊の仮の姿）を観想する必要があるといわれている。[頼富・下泉 1994: 50-51]

[118] [頼富・下泉 1994: 40-52]

まず成就法のはじめにターラーに帰依し、場所、座の指定をして観想の準備を行う。次に種字の観想等を行い、花、香煙、香料などを捧げて諸仏に供養する。さらに七種無上供養を行い、四梵住と清浄であることを観想し、空性智金剛の真言を唱える。その後ターラーの姿を観想した後に、その神秘的合一（行者と仏の合一）を行い、終結する。最後にこの成就法の功徳と作者が記される。

No.195 と No.206 の大随求明妃成就法と、No.98 のターラー成就法を比較すると、観想の準備、七種無上供養、四梵住の観想、空性智金剛の真言、主要な仏（女神）の姿の観想、種字の布置が共通している[119]。

元来成就法とは、行者が悟りや超自然的能力を得ることを目指して、その尊格と自分自身（聖と俗）の合一を目的としたものである[120]。No.196 には「行者は、自身が大随求明妃となるべきである」（pratisarā bhūyāt svayaṃ sādhakaḥ）、No.206 には「智恵のマンダラを引き寄せて、称賛し、［智恵のマンダラと約束のマンダラを］引き合わせ、［智恵のマンダラを］自身の約束のマンダラに引き入れるべきである」（jñānacakram ākṛṣya saṃstutya sañcāryya svasamayacakre praveśayet /）と説かれている。

ターラーの成就法である No.98 においても、「［ターラーと行者が］不二であることを確信すべきである」（advaitam adhimuñcet /）と、ターラーと行者の合一の場面が述べられている。以上の表現のうち、特に No.206 の「引き入れるべきである」（praveśayet）という語は、成就法において尊格と行者の合一の際用いられる最も一般的な表現である。

一方で、No.195 に説かれる合一の場面は‘devīrūpam adhitiṣṭhet’と述べられており、‘adhitiṣṭhet’（adhi-√sthā ～の上に立つ、留まる、守護する、支配する）という語が使用されている。この動詞から派生した語である adhiṣṭhāna は密教で一般的に「加持」と訳され、「自分自身に大随求明妃を加持する（力を与える）べきである」と訳すことも可能である。しかしながら、No.196, 206、そして No.98 において、種字の布置と尊格の観想の後に尊格と行者の合一の場面が説かれていることから、No.195 もまた、尊格の観想の後に説かれる adhitiṣṭhet は尊格と行者が合一する行為を示していると考えられる。したがって、adhitiṣṭhet を「留まる」として、「自身に大随求明妃を留まらせる（同一化させる）べきである」と訳し、大随求明妃と行者の合一の場面であると解釈した。

しかしながら、大随求明妃は現世利益的な功徳が期待される『大隨求陀羅尼』が神格化した女神であり[121]、単体では守護を目的とした性格が強い。尊格と行者の合一を示唆する場面に praveśayet などの一般に用いられる動詞を使わずに、adhitiṣṭhet という語を

---

[119] ただし、七種無上供養の内容については、No.195 において礼拝・供養・懺悔・福徳随喜・三宝帰依・発菩提心・福徳回向・許しを得ることの 8 種が述べられ、No.206 は懺悔・三宝帰依・発菩提心・福徳回向・許しを請うことの 5 種、そして No.98 のターラー成就法では懺悔・福徳随喜・勧請・回向・三宝帰依・依仏道・不作悪式の 7 種が挙げられている。[清水 1977: 66-68]の表によると、SM には 4～10 種類の七種無上供養が示されており、その順序と内容は相違している。

[120] [頼富・下泉 1994: 40]

[121] [大塚 2013a: 15-16]

用いるこの No.195 においては、陀羅尼経典である『大随求陀羅尼』が持つ守護的な局面が強く表されているのではないかと思われる。No.98 および No.195, 196, 206 に見られる尊格と行者の合一の場面で用いられる表現については、以下の表 13 にまとめた。

	No.98	No.195	No.196	No.206
	「ターラー成就法」	「大随求明妃成就法」	「随求明妃成就法」	大随求明妃 （「五護陀羅尼成就法」）
尊格と行者の合一	advaitam adhimuñcet 「［ターラーと行者が］不二であることを確信すべきである」	devīrūpam adhitiṣṭhet 「自身に大随求明妃を留まらせる（同一化させる）べきである」	pratisarā bhūyāt svayaṃ sādhakaḥ 「行者は、自身が大随求明妃となるべきである」	jñānacakram ākṛṣya saṃstutya sañcāryya svasamayacakre praveśayet 「智恵のマンダラを引き寄せて、称賛し、［智恵のマンダラと約束のマンダラを］引き合わせ、［智恵のマンダラを］自身の約束のマンダラに引き入れるべきである」

表.13　SM ターラー成就法（No.98）および大随求明妃の成就法（No.195,196, 206）に見られる尊格と行者の合一の場面で用いられる表現[122]

以上、SM No.194～196 と No.206 における大随求明妃の成就法にみられる次第は、各成就法間に異同があるものの、基本的なプロセスがいくつか確認できた。

これらの成就法は、まず観想の準備から始まり、空性の観想、黄色のプラム字から生じた大随求明妃の姿の観想、種字の布置の観想、そして成就法の目的である行者と仏の合一が共通して説かれている。他は各々の成就法によって観想の準備の内容の差異や、空性智金剛の真言、四梵住、疲労した際の真言等の有無に違いがあることが明らかになった。なお、No.194 のみ四梵住の観想については述べられず、さらに No.195 に説かれている七種無上供養、阿閦如来の観想、百字真言、供養する時間帯が、No.194、No.196 には説かれていないことが確認できた。

特に No.195 においては、尊格と行者が合一する場面に adhitiṣṭhet という語を用いており、このテキストにおいては『大隨求陀羅尼』が神格化した大随求明妃が本来持つ守護的な性格が強く表れていると考えられる。以上が大随求明妃の成就法の機能である。次に、SM No.206 における五護陀羅尼マンダラの特徴を述べよう。

122　この表は[Bhattacharya1968a] [頼富・下泉 1994: 40-52]を参考に、筆者が作成したものである。

4.2 五護陀羅尼マンダラの機能

先に述べたように、SM No.206 は五護陀羅尼マンダラの成就法について説かれており、他の五護陀羅尼の成就法と比べるとその内容は最も詳細なものになっている。その次第は、前半部においては行者が尊格と合一し、後半部において尊格と合一した行者が実際にマンダラを描いた後に改めて供養を行うという内容である。

マンダラが説かれている成就法の構造がわかりやすいものの一つとして、SM No.110「金剛ターラーの成就法」があげられる。SM No.110 はターラー女神のマンダラ観想を比較的詳細に述べた成就法である。この No.110 においてもまた、本論文で取り上げた No.206 と同様に三昧耶チャクラと智チャクラの合一の場面が説かれている。

No.110 の内容構成は、帰敬から始まり、四梵住の観想、罪の懺悔や回向等といった行為、空性の観想、楼閣等といったマンダラ外郭の観想等を行う。その後、諸尊の具体的なイメージを観想し、尊格と行者の神秘的合一を行う。そして最後に陀羅尼を唱えることによる効能が説かれる。以上のプロセスは No.206 と類似しているものの、この No.110 にはマンダラの制作が述べられておらず、この点が No.206 と相違する。

SM の中で観想とマンダラの制作の両方を述べているテキストに、No.15「カサルパナ世自在成就法」がある。No.206 と No.15 の両者は一つの成就法の中において、観想とマンダラの制作についての言及があるという点で構造的に類似しているように思われる。以下、No.206 と No.15 を比較し、両者の成就法の特徴を述べよう[123]。

No.15「カサルパナ世自在成就法」では、まず行者はカサルパナ世自在に敬礼し、自らが世自在になる旨の誓願を立てる。続いて観想の核の設定、師と仏と菩薩の招請と供養、空性の観想、本尊、脇侍の観想が行われる。次に、実際に目前でマンダラを描き、観想した諸尊をそのマンダラに招き入れ、供養を行う。最後に供養に先立つ心の浄化の呪文が述べられて成就法は終了する。

以上に述べたように、No.15 では、はじめに諸尊を観想した後に、その諸尊を実際に描いたマンダラに引き入れ、供養するというプロセスが述べられている。すなわち No.15 では尊格を配置するための「器」の役割としてのマンダラを描き、観想した「中身」である尊格を実際のマンダラに呼び寄せ配置する。

一方、本稿で内容構成を述べた No.206 では四梵住、空性の観想等といった観想の準備の後、楼閣や五護陀羅尼各明妃が観想され、三昧耶チャクラと智チャクラの観想と２つのマンダラの合一を行い、この場面でマンダラの観想が完成する。そしてその後、マンダラと合一した行者が実際にマンダラを描き、供養する。

すなわち、No.206 においては前半部で五護陀羅尼マンダラ等を観想し、三昧耶チャクラと智チャクラを合一させ、マンダラと行者が一体となる。その後、後半部において一切衆生の利益という目的で実際にマンダラを作り、供養を行う。

No.15 において行者が実際に描くマンダラは、観想した尊格を配置させるための「器」

[123] 和訳に関しては[佐久間 2011: 307-310]を参考にした。

としての役割を持っているが、No.206 では既にマンダラと合一した行者がマンダラを実際に描き、そのマンダラは専ら一切衆生の利益のために使われるということが明示されている。この点が No.206 の特色であると言える。

なお、8～9 世紀頃にアーナンダガルバ Ānandagarbha によって制作された金剛頂経系の儀軌である『一切金剛出現』*Sarvavajrodaya* においても、観想と作壇という両者のマンダラを用いた儀礼について述べられている。そこにおいては前半部でマンダラの観想が行われ、後半部で実際にマンダラを描かれており、No.206 のプロセスと類似している[124]。しかしながら、『一切金剛出現』では弟子の灌頂儀礼のためにマンダラを作壇しており、一切衆生の利益のためマンダラを描く No.206 とはマンダラ制作の目的が異なっている。以上のマンダラの機能の比較を下の表 14 に示す。

		SM No.15	SM No.110	SM No.206	『一切金剛出現』
		「カサルパナ世自在成就法」	「金剛ターラー成就法」	「五護陀羅尼成就法」	
描かれたマンダラの機能	前半	諸尊を観想した後に、尊格を配置するための「器」の役割としてのマンダラを作成する。	楼閣等といったマンダラ外郭の観想等を行う。	楼閣や五護陀羅尼各明妃を観想し、三昧耶チャクラと智チャクラの観想と 2 つのマンダラの合一を行う。	マンダラを観想する。
	後半	観想した「中身」である尊格を実際のマンダラに配置する。	諸尊の具体的なイメージを観想し、尊格と行者の神秘的合一を行う（実際にマンダラを作成する記述はない）	マンダラと合一した行者が一切衆生の利益のために実際にマンダラを描き、供養する。	弟子の灌頂儀礼のためにマンダラを作壇する。

表.14　SM No.15, 110, 206 および『一切金剛出現』におけるマンダラの機能の比較[125]

このように、一つの成就法の中で観想とマンダラの制作が行われている SMNo.15 と No.206、および『一切金剛出現』の内容を比較すると、実際に描かれるマンダラの機能に違いが見られることが明らかになった。その他 No.206 には、他の五護陀羅尼の成就法と比べて「抜苦与楽」「四梵住」「五識」「三毒」「蘊・界・処」等といった仏教教理上の概念が多く説かれていることや、五護陀羅尼各明妃の体色や持物、種字等の図像的特徴等、様々な特徴がある。

---

124 和訳に関しては高橋尚夫 1987「金剛界大曼荼羅儀軌一切金剛出現—和訳（完）—」『豊山学報 32』, pp.79-120、高橋尚夫 1988a「金剛界大曼荼羅儀軌　一切金剛出現　第一瑜伽三摩地品　和訳」『密教文化 161』, pp.113-150、高橋尚夫 1988b「金剛界大曼荼羅儀軌一切金剛出現—余滴—」『豊山学報 33』, pp.81-138、および、密教聖典研究会 1986「Vajradhātumahāmaṇḍalopāyika-sarvavajrodaya—梵文テキストと和訳—（I）」『大正大学綜合仏教研究所年報第 8 号』, pp.224-257、密教聖典研究会 1987「Vajradhātumahāmaṇḍalopāyika-sarvavajrodaya—梵文テキストと和訳—（II）」『大正大学綜合仏教研究所年報第 9 号』, pp.222-294 を参考にした。

125 この表は[高橋 1987: 79-120][高橋 1988a: 113-150][高橋 1988b: 81-138][密教聖典研究会 1986: 224-257][密教聖典研究会 1987: 222-294] [佐久間 2011: 307-310]を参考に筆者が作成した。

4.3 五護陀羅尼各明妃の図像的特徴

SM をはじめとする成就法をあつかう文献には、成就の対象となる尊格の図像に関する特徴についての記述が多く含まれるため、しばしば実際の作例の根拠として用いられた。[森 1997: 70]によると、仏像の特徴が瞑想法の文献の記述にしばしば合致するのは、仏教における造像と観仏の伝統が密接に結びついていたためであるという[126]。

また、SM No.206 と同様、NPY No.18 においても五護陀羅尼各明妃の記述がある。NPY とは『ヴァジュラーヴァリー』*Vajrāvalī*、『ジュヨーティルマンジャリー』*Jyotirmañjarī* とならび、アバヤーカラグプタが編纂した密教儀軌三部作を構成する文献の一つとして知られている[127]。26 章で構成され、26 のマンダラの特徴が述べられている[128]。それらのうち、No.18 に五護陀羅尼マンダラが説かれている。NPY No.18 は No.206 のように金剛天蓋、楼閣等のマンダラの外郭は記されていないものの、四方に住する五護陀羅尼の各明妃は四維の女神や門衛女たちに囲まれている（以下、次ページの図 8, 9 参照）。

ここでは、SM に述べられる五護陀羅尼の各明妃の図像的特徴について述べる。前述した NPY に見られる五護陀羅尼マンダラで説かれている姿についても比較する。

また、五護陀羅尼の作例や観想上の姿について述べられている以下の文献も適宜参考にした。

a）Bhattacharya,Benoytosh.1968b.*The Indian Buddhist Iconography.* Calucutta.

b）Lokesh,Chandra. 2003. *Dictionary of Buddhist Iconography Volume7,9.* International Academy of Indian Culture and Aditya Prakashan. New Delhi.

これらの参考文献の中にはテキストと相違する個所が多々あったため、参考として（a ○○）は a の文献の記述、（b ○○）は b の文献の記述としてそれぞれ記載する。

---

126 （森 1997: 70）

127 NPY は観想上のマンダラを扱われている文献で、儀礼のためのマンダラを説いた『ヴァジュラーヴァリー』の補完的な立場にある。

128 NPY は各尊の面数、臂数、体色、持物、坐法、衣装、装身具などの特徴が詳細に記されていることから、これまでしばしばマンダラの図像学的な解説書と見誤らせ、さらに同じく観想法を説く文献 SM とともに『インド仏教図像学』（*Indian Buddhist Iconography*）でもっぱら依用されたことが、このことを決定づけたという。（森 2006: 209-210,222）

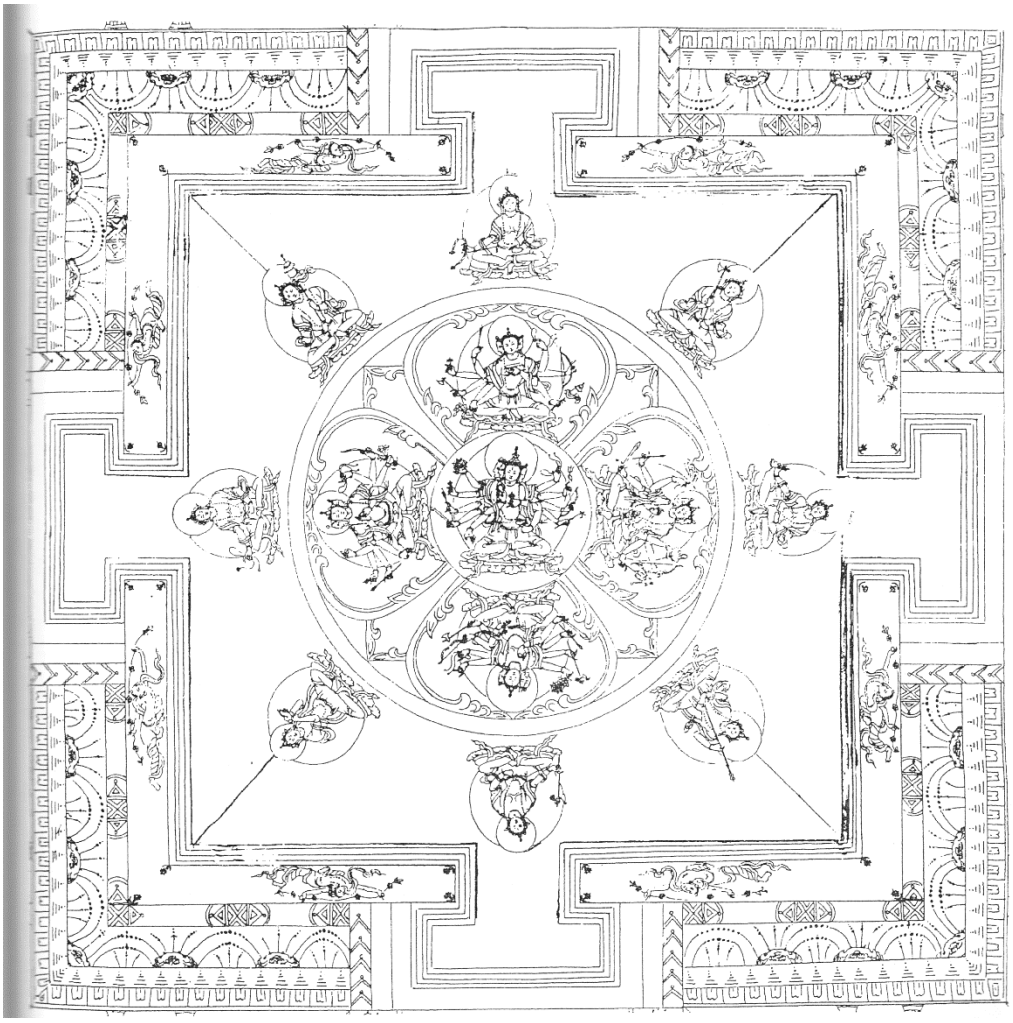
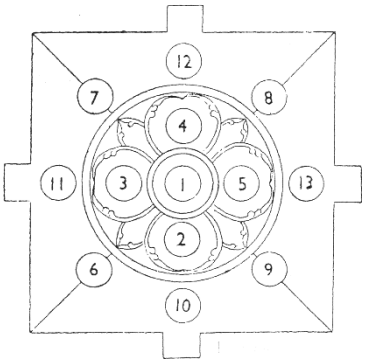


図 8.　NPY No.18 五護陀羅尼マンダラ[Lokesh, Chandra 2003:2543]



1（中央）大随求明妃
2（東）大千摧砕明妃
3（南）密呪随持明妃
4（西）大寒林明妃
5（北）孔雀明妃
6（東南）カーリー
7（南西）カーララートリ
8（西北）カーラカンティー
9（北東）マハーヤシャー
10（東門）金剛鉤女
11（南門）金剛索女
12（西門）金剛鏁女
13（北門）金剛鈴女

図 9.　NPY No.18 五護陀羅尼マンダラ（配置図）[Lokesh, Chandra 2003:2542]
（右の表は[Lokesh, Chandra 2003:2542] および NPY No.18 を参考し、筆者が作成したものである。各番号は左の図と対応している。）

4.3.1 大随求明妃

No.194～196 における大随求明妃の成就法に共通して説かれることは、大随求明妃は黄色のプラム字から生じた四面八臂で、三眼で、二重蓮華の上の月輪の上で遊戯坐に坐し、王冠をかぶり、持物は右手に剣、輪、三叉戟、矢、左手に斧、弓、羂索、金剛杵を持つ女神という点である。

相違点も含め具体的に見ていくと、大随求明妃は No.194～196 において、体色と正面の顔の色が黄色ということは共通して述べられているが、右面、背面、左面の色で異同が見られる。No.194 と No.195 ではそれぞれ白、青、赤だが、No.196 ではそれぞれ黄白、白、赤茶と、色が異なる。

王冠は No.194 では宝石、No.195 では冠には阿閦如来の像がついている。No.196 には王冠の記述がない。

持物は No.194～196 において、八臂のうち右手に剣、輪、三叉戟、矢、左手に斧、弓、羂索、金剛杵を持つことは共通している。しかし持物の持ち手においては以下のような異同が見られる。まず No.194 では右の第一臂に剣、第二臂に輪、第三臂に三叉戟、第四臂に矢を持ち、左の第一臂に斧、第二臂に弓、第三臂に羂索、第四臂に金剛杵を持つ。次に No.195 では右の第一から第四臂と、左の第四臂は No.194 の持ち手と同じだが、左の第一臂は羂索、第二臂は斧、第三臂は弓を持つ。そして No.196 では右の第一、第二臂は No.194, 195 と一致しているが、右の第三臂に矢、第四臂に三叉戟、左の第一臂に斧、第二臂に羂索、第三臂に金剛杵、第四臂に弓を持つ。

以上が No.194～196 における大随求明妃の図像的特徴である。各成就法を比べて持物の持ち手や臂の数、中央の面以外の色などに相違がみられるが、顔と腕の数と体色、正面の顔の色、持ち物、座法はそれぞれ共通していることがわかる。

一方で、大随求明妃単体の成就法である No.195 と、他の五護陀羅尼各明妃の 4 名の明妃と一括される形で述べられている成就法 No.201, 206 を比較すると、体色については No.195, 201 では黄色 pīta だが、No.206 では白 gaura[129]となっている。次に面と臂の数は、No.195, 206 では四面八臂で、No.201 は三面十臂である。持物については、持ち手はそれぞれ一致していないが、剣、矢、弓、金剛杵、斧を持っていることが同じである。以上のように、No.195, 201, 206 を比較した際にみられる大随求明妃の図像的特徴の共通点は、前述した No.194～196 に比べると少ないことがわかる。

NPY の大随求明妃は四面十二臂の女神として表れる。顔の色は正面が黄色、右面は白、背面は青黒（b 黒）、左面は赤である。日輪の光背は黄赤（b 体色が黄色、光背が赤）に輝き、頭は仏塔で飾られ、金剛結跏趺坐に座している。持物は右の第一臂に宝石の山（b 輪）、第二臂に輪（b 金剛杵）、第三臂に金剛杵（b 矢）、第四臂に矢（b 剣）、

[129] gaura には他に「白」「黄色」の意味もある。孔雀明妃（黄色）および密呪随持明妃の体色（白 śukla）に重複しないためにも大随求明妃の体色は「淡い赤」が適当かと思われたが、チベット語訳に「白 dkar po」とあるため、こちらを採用した。

第五臂に剣（b 与願印）、第六臂に与願印（b 宝石の山）を持ち、左の第一臂に金剛杵（b 羂索）、第二臂に羂索（b 三叉戟）、第三臂に三叉戟（b 弓）、第四臂に弓（b 斧）、第五臂に斧（b 法螺貝）、第六臂に法螺貝（b 金剛杵）を持つ。大随求明妃の図像的特徴についてまとめると、No.206 を除いて、体色が黄色の女神ということが共通している。特に No.194～196 間では、三眼を持った四面八臂で、頭には王冠をかぶり、持物は右手に剣、輪、三叉戟、矢、左手に斧、弓、羂索、金剛杵を持ち、遊戯坐に坐す女神として表れている。

4.3.2 大千摧砕明妃

マハーサーハスラープラマルダニー明妃は、No.198 において一面六臂、No.206 では東の方角に位置する、四面八臂で三眼の女神である。

種字は No.198 では buṃ 字、No.206 では hūṃ 字（の印がある金剛）から生じるという。

肌の色は、No.198 では、正面は白い顔（b 体色は白）である。No.206 では体色は青黒、四面のうち正面が青黒、右面は白、背面は黄色、左面は緑である。

持物に関しては、No.198 では六臂のうち、右の第一臂に剣、第二臂に矢、第三臂に与願印、左の第一臂に弓、第二臂に羂索、第三臂に宝石（b 斧）、を持つ。No.206 では八臂のうち、右の第一臂に与願印と金剛杵（b 剣）、第二臂につき棒（b 弓）、第三臂に矢（b つき棒）、第四臂に剣（b 与願印と金剛杵）を持ち、左の第一臂にタルジャニー印[130]と羂索（b 蓮華の上にある 16 の宝石）、第二臂に斧（b 弓）、第三臂に弓（b 斧）、第四臂に蓮華の上にある 16 の宝石（b タルジャニー印と羂索）を持つ。

座は No.198, 206 で共通し、遊戯坐に坐している。No.198 では特に、マハーブータとマハーヤクシャを踏みつけた遊戯坐であると述べられている。

王冠に関しては、No.198 で大日如来の化仏がついた王冠をつけている。

その他の特徴として、No.198 では装飾品に飾られた、艶めかしい女神であると述べられ、No.206 では黄褐色の髪を立てた、獰猛な顔（むき出した牙、寄せられた眉）をした女神で、金の腕輪、上腕のブレスレット、首飾り、くるぶしの飾り、人間の頭蓋骨と、ヴァタ（イチジク）の樹で飾られている。

NPY の大千摧砕明妃は、大随求明妃の東に住する四面十臂の女神である。体色は白、四面のうち正面が白、右面が青黒（b 黒）、背面が黄色、左面が緑である。月輪の光背で、遊戯坐に座している。十臂のうち、右の第一臂に蓮の上にある八輻輪（b 剣）、第二臂に与願印（b 矢）、第三臂に突き棒、第四臂に矢（b 与願印）、第五臂に剣（b 蓮の上にある八輻輪）を持ち、左の第一臂に金剛杵（b 羂索）、第二臂にタルジャニー印（期剋印）（b 弓）、第三臂に羂索（b 斧もしくは羂索）、第四臂に弓（b タルジャニー印）、第五臂に羂索（b 金剛杵）を持つ。

130 期剋印（きこくいん）。人差し指を立て、威嚇する印相。

4.3.3 孔雀明妃

孔雀明妃は No.197 において三面六臂で三眼、No.201 では一面二臂、No.206 では南の方角に位置する三面八臂で三眼の女神である。

種字はマーム（māṃ）字で、色は No.197 において緑、No.206 は黄色である。

肌の色は No.197 において体色は緑、三面のうち（正面は緑）、右面は黒、左面は白である。No.201 も体色は緑である。No.206 は体色は黄色であり、三面のうち正面は黄色、右面は青黒（b 黒）、左面は赤色の顔を持つ。

持物は、No.197 では六臂のうち、右の第一臂に孔雀の尾羽、第二臂に矢、第三臂に与願印をあらわし、左の第一臂に宝石の山、第二臂に弓、第三臂にひざに置いている水瓶を持つ。No.201 では右の臂に孔雀の尾羽、左の臂に与願印をあらわす。No.206 では八臂のうち、右の第一臂に与願印（b 剣）、第二臂に宝石の水差し（b 輪）、第三臂に輪（b 宝石の水差し）、第四臂に剣（b 与願印）を持ち、左の第一臂に乞食の鉢（b 宝石の旗）、第二臂に孔雀の尾羽（b 水差しの上の二重金剛）、第三臂に水差しの上の二重金剛（b 孔雀の尾羽）、第四臂に宝石の旗（b 乞食の鉢）を持つ。

座法は、No.197 で月輪の上で半跏坐、No.197 では日輪の上で結跏趺坐に坐す。

王冠は No.197 では不空成就の化仏がついた王冠、No.206 では宝石の王冠をつけている。

その他の特徴として、No.206 はアショーカの樹で飾られている。

NPY の孔雀明妃は大随求明妃の北に住し、三面八臂の姿をしている。月輪の光背で、結跏趺坐に坐している。体色は緑で、三面のうち正面は緑右面は黒、左面は白である。八臂のうち右の第一臂に孔雀の尾羽（a 宝石）、第二臂に矢、第三臂に与願印（b 剣）、第四臂に剣（b 与願印）を持ち、左の第一臂に乞食の鉢、第二臂に弓、第三臂に宝石がこぼれおちる膝の上にある水差し（b 二重金剛と宝石の印がある旗）、第四臂に二重金剛と宝石の印がある旗（b 宝石がこぼれおちる膝の上にある水差し）を持つ。

4.3.4 大寒林明妃

大寒林明妃は、No.200, 201 では一面四臂、No.206 では北の方角に位置する、三面六臂で三眼の女神である。

種字は No.200 では jīm 字、No.206 では trāṃ 字である。

肌の色は No.200, 201 は赤い体色（面も赤）である。しかし No.206 のみ三面のうち正面は緑で、右面は白、左面は赤となっている。

持物は No.200 では四臂のうち、右の第一臂に数珠、第二臂に与願印、左の第一臂にに金剛杵と心臓を指した鉤針（b 金剛突き棒）、第二臂に胸の近くにある書物を持つ。No.201 では四臂のうち、右の第一臂に剣、第二臂に与願印、左の第一臂に斧、第二臂に羂索を持つ。No.206 では六臂のうち、右の第一臂に施無畏印（b 矢）、第二臂に金剛

杵、第三臂に矢（b 施無畏印）を持ち、左の第一臂ににタルジャニー印と羂索（b 宝石の旗）、第二臂に弓、第三臂に宝石の旗（b タルジャニー印と羂索）を持つ。

座法は、No.200 では半跏（趺）坐、No.206 では結跏趺坐に坐す。

王冠は No.200 では阿弥陀仏の化仏がついた王冠、No.206 では如来の王冠をつける。

その他の特徴としては、No.206 では日輪の光背を持ち、チャンパカの樹で飾られている。

NPY の大寒林明妃は、大随求明妃の西に住する三面八臂の女神である。体色は赤で、三面のうち正面が赤、右面が白、左面は青黒（b 黒）である。日輪の光背で、半跏坐に坐す。八臂のうち、右の第一臂に施無畏印と蓮（b 剣）、第二臂に矢（b 金剛杵）、第三臂に金剛杵（b 矢）、第四臂に剣（b 施無畏印と蓮）を持ち、左の第一臂にタルジャニー印と羂索、第二臂に弓、第三臂に宝石の旗、第三臂では経典を胸元に持つ。

4.3.5 密呪随持明妃

密呪随持明妃は No.199, 201 では一面四臂、No.206 では西の方角に位置する、三面十二臂で三眼の女神である。

種字は No.199 ではフーム（hūṃ）字、No.206 ではマム（maṃ）字である。

肌の色は No.199, 201 では体色が黒、No.206 では体色が白で、三面のうち正面の色が白（b 黒）、右面が青黒（b 白）、左面は赤である。

持物は No.199 では四臂のうち、右の第一臂に金剛杵、第二臂に与願印、左の第一臂に斧（b 羂索）、第二臂に羂索（b 斧）を持つ。No.201 では四臂のうち、右の第一臂に剣、第二臂に与願印、左の第一臂に斧、第二臂に羂索を持つ。No.206 において十二臂のうち、左右の第一臂に転法輪印、第二臂に禅定印を結ぶ。右の第三臂に与願印、第四臂に施無畏印、第五臂に金剛杵、第六臂に矢を持ち、左の第三臂にタルジャニー印と羂索、第四臂に弓、第五臂に宝石の傘（b 宝石棒）、第六臂に蓮華マークの水差しを持つ。

座法は No.206 では日輪の上で展右の姿勢である。

王冠は No.199 では阿閦仏の化仏がついた王冠、No.206 では宝石の王冠をつけている。

その他の特徴としては、No.206 では首飾り、くるぶしの飾り、イヤリングをつけ、シリーシュの樹で飾られている。

NPY の密呪随持明妃は、大随求明妃の南の方角に住する、三面十二臂の女神。日輪の光背で、金剛結跏趺坐に坐す。体色は青黒（b 黒）で、三面の色は中央の面が青黒（b 黒）、右面は白、左面が赤である。十二臂のうち、左右の第一臂と第二臂は SM No.206 と同様に、転法輪印、禅定印を結ぶが、他の臂の持物は異なっている。右の第三臂には金剛杵、第四臂に矢、第五臂に与願印、第六臂に施無畏印を持ち、左の第三臂にタルジャニー印と羂索、第四臂に弓、第五臂にひとかたまりの宝石、第六臂に蓮のマークがついた壺を持つ。

以上が SM、NPY に説かれている五護陀羅尼各明妃の姿である。次の表 15～17 はこれまでに述べた五護陀羅尼各明妃の図像的な特色の一覧である。なお、いずれの表も[Bhattacharya1968b][Lokesh,Chandra2003]を参考に筆者が作成した。

	No.194	No.195	No.196	No.197	No.198	No.199	No.200
	大随求明妃	**大随求明妃**	**大随求明妃**	**孔雀明妃**	**大千摧砕明妃**	**密呪随持明妃**	**大寒林明妃**
体色	黄			緑	白	黒	
顔	四面三眼	四面三眼	四面三眼	三面三眼	一面	一面	一面
正面	黄	黄	黄	緑	白	黒	赤
右面	白	白	黄白	黒			
背面	青	青(黄)	白				
左面	赤	赤	赤茶	白			
臂	八臂	八臂	八臂	六臂	六臂	四臂	四臂
右手 1	剣	剣	剣	孔雀の尾羽	剣	金剛杵	数珠
右手 2	輪	輪	輪	矢	矢	与願印	与願印
右手 3	三叉戟	三叉戟	矢 (b 三叉戟)	与願印	与願印		
右手 4	矢	矢	三叉戟 (b 矢)				
左手 1	斧	羂索	斧	宝石の山	弓	斧 (b 羂索)	金剛鉤針
左手 2	弓	斧	羂索 (b 弓)	弓	羂索	羂索 (b 斧)	胸の近くの書物
左手 3	羂索	弓	金剛杵 (b 羂索)	膝にある水瓶	斧		
左手 4	金剛杵	金剛杵	弓 (b 金剛杵)				
王冠	様々な宝石の王冠	宝冠		不空成就の化仏	大日如来の化仏	阿閦仏の化仏	阿弥陀仏の化仏
座	遊戯坐	遊戯坐	遊戯坐	半跏坐			半跏坐

表.15 SM における五護陀羅尼成就法（No.194～200）

	No.201(五護陀羅尼マンダラ)					No.206(五護陀羅尼マンダラ)				
	大随求明妃	**孔雀明妃**	**大千摧砕明妃**	**密呪随持明妃**	**大寒林明妃**	**大随求明妃**	**大千摧砕明妃**	**孔雀明妃**	**密呪随持明妃**	**大寒林明妃**
位置			前述の如く				東	南	西	北
体色	黄	緑		黒	赤	白(gaura, dkar po)	青黒	黄	白(śukla)	緑
顔	三面三眼	一面		一面	一面	四面三眼	四面三眼	三面三眼	三面三眼	三面三眼
正面	黄	緑				白	青黒	黄	白(b 黒)	緑
右面	黒					青黒(b 黒)	白	青黒(b 黒)	青黒(b 白)	白
背面						黄	黄			
左面	白					赤	緑	赤	赤	赤
臂	十臂	二臂		四臂	四臂	八臂	八臂	八臂	十二臂	六臂
右手1	剣	孔雀の尾羽		剣	剣	輪	与願印と金剛杵(b 剣)	与願印(b 剣)	転法輪印	施無畏印(b 矢)
右手2	金剛杵			与願印	与願印	金剛杵	鉤針(b 弓)	宝石の水差し(b 輪)	禅定印	金剛杵
右手3	矢					矢	矢(b 鉤針)	輪(b 宝石の水差し)	与願印	矢(b 施無畏印)
右手4	与願印					剣	剣(b 与願印と金剛杵)	剣(b 与願印)	施無畏印	
右手5	胸元に傘								金剛杵	
右手6									矢	
左手1	弓(b 斧)	与願印		斧	斧	金剛杵と羂索	タルジャニー印と羂索(b 蓮華上の16 の宝石)	乞食の鉢(b 宝石の旗)	転法輪印	タルジャニー印と羂索(b 宝石の旗)
左手2	旗(b 宝石の山)			羂索	羂索	三叉戟	斧(b 弓)	孔雀の尾羽(b 水差しの上の二重金剛)	禅定印	弓
左手3	宝石の山(b 旗)					弓	弓(b 斧)	水差しの上の二重金剛(b 孔雀の尾羽)	タルジャニー印と羂索	宝石の旗(b タルジャニー印と羂索)
左手4	斧(b 弓)					斧	蓮華上の 16 の宝石(b タルジャニー印と羂索)	宝石の旗(b 乞食の鉢)	弓	
左手5	法螺貝								宝石の傘(b 宝石棒)	
左手6									蓮華マークの水差し	
王冠	宝生如来の化仏					仏塔		宝冠	宝冠	如来の化仏
座	半跏遊戯坐					金剛結跏趺坐	遊戯坐	結跏趺坐	日輪上で展右	日輪上で展右

表 16. SM における五護陀羅尼成就法（No.201～206）

	No.18「五護陀羅尼マンダラ」				
	大随求明妃	大千摧砕明妃	密呪随持明妃	大寒林明妃	孔雀明妃
位置	中心	東	南	西	北
体色	黄色	白	青黒 (b 黒)	赤	緑
光背	黄赤 (b 体色は黄、光背は赤)	月輪の輝き	日輪の輝き	日輪の輝き	月輪の輝き
顔	四面	四面	三面	三面	三面
正面	黄色	白	青黒 (b 黒)	赤	緑
右面	白	青黒 (b 黒)	白	白	青黒 (b 黒)
背面	青黒 (b 黒)	黄色			
左面	赤	緑	赤	青黒(b 黒)	白
臂	十二臂	十臂	十二臂	八臂	八臂
右手 1	宝石の山 (b 輪)	蓮華の上にある 八輻輪(b 剣)	転法輪印	蓮と施無畏印 (b 剣)	孔雀の尾羽 (a 宝石)
右手 2	輪 (b 金剛杵)	与願印 (b 矢)	禅定印	矢 (b 金剛杵)	矢
右手 3	金剛杵 (b 矢)	鉤針	金剛杵	金剛杵 (b 矢)	与願印 (b 剣)
右手 4	矢 (b 剣)	矢(b 与願印)	矢	剣(b 施無畏印と蓮)	剣(b 与願印)
右手 5	剣 (b 与願印)	剣 (b 蓮華の上に ある八輻輪)	与願印		
右手 6	与願印 (b 宝石の山)		施無畏印		
左手 1	金剛杵 (b 羂索)	金剛杵 (b 羂索)	転法輪印	タルジャニー印と羂索	器の中の比丘
左手 2	羂索 (b 三叉戟)	タルジャニー印 (b 弓)	禅定印	弓	弓
左手 3	三叉戟 (b 弓)	羂索 (b 斧もしくは羂索)	タルジャニー印と羂索	宝石の旗	宝石がこぼれおちる 膝の上にある水差し (b 二重金剛と宝石の 模様がある旗)
左手 4	弓 (b 斧)	弓 (b タルジャニー印)	弓	胸元にある経典	二重金剛と宝石の模 様がある旗(b 宝石が こぼれおちる膝の上 にある水差し)
左手 5	斧 (b 法螺貝)	羂索 (b 金剛杵)	ひとかたまりの 宝石		
左手 6	法螺貝 (b 金剛杵)		蓮のマークが ついた水差し		
座	金剛結跏趺坐	遊戯坐	金剛結跏趺坐	半跏趺坐	結跏趺坐

表.17 NPY における五護陀羅尼成就法(No.18)

以上 SM と NPY において、五護陀羅尼の姿には相違が見られた。まず SM No.206 と NPY No.18 における五護陀羅尼の各明妃の位置関係に関して、大随求明妃はマンダラの「中央」に、大千摧砕明妃は「東」に位置するとあり、この二尊の位置関係は両テキストで一致している。しかし孔雀明妃の位置する方角は SM No.206 では「南」だが、NPY No.18 では「北」に存在すると述べられている。以下同様に、大寒林明妃の位置は SM No.206 では「北」、NPY No.18 では「西」と記されており、密呪随持明妃の位置する方角は SM No.206 では「西」、NPY No.18 では「南」とあり、テキストによって異同があることがわかる。

一方で共通点は、大千摧砕明妃の座法は遊戯坐とあり、これは SM No.198, 206 と NPY No.18 で同じくしている。また、大寒林明妃の座法は、No.200 と NPY No.18 で共通して半跏（趺）坐に坐している。孔雀明妃の体色と顔の色は、SM No.197 と NPY No.18 において共通している。また、各明妃の持物は儀軌によって異同が見られる中で、孔雀明妃に関してはいずれかの手で孔雀の尾羽を持ち、与願印を結んでいることが儀軌の中で共通している。

同じ尊格について述べられた儀軌であっても、その姿は必ずしも一致するものではない。このことはサンスクリット・テキストとチベット語訳間のみならず、サンスクリット写本間においても同様であった。

しかしながら、大随求明妃に関してはテキストによって持物の持ち手が異なることはあるものの、その種類（剣、矢、弓、金剛杵、斧）や黄色い体色、そして、マンダラとして描かれる際には中央に位置することなどが共通しており、この点が大随求明妃の特色といえよう。さらに、大随求明妃の図像的特徴は他の 4 尊と比較して詳細に記述されており、五護陀羅尼の中でも重要な尊格として位置付けられていると考えられる。

結 論

これまで、インド密教における陀羅尼経典の一種である五護陀羅尼経典、およびそれらが神格化した際の成就法の特色について述べた。「五護陀羅尼」とは特定の 5 種の初期密教経典、およびそれらが神格化した女尊のグループを指す。インド密教における五護陀羅尼とは、『大随求陀羅尼』*Mahāpratisarā*、『守護大千国土経』*Mahāsāhasrapramardanī*、『孔雀王呪経』*Mahāmāyūrī*、『大寒林陀羅尼』*Mahāśītavatī*、そして『大護明陀羅尼』*Mahāmantrānusāriṇī* の 5 種の陀羅尼経典である。五護陀羅尼の各経典は単独で成立し、主にネパール、チベット、中央アジア、中国、日本に広まった。

そもそも陀羅尼とは密教において呪文の一種として考えられ、真言や呪文と混用されることが多い。陀羅尼を示すサンスクリットの dhāraṇī は「記憶」「憶持」等と訳され、呪文の一種としての陀羅尼の役割とは異なった意味を持っていたが、遅くとも 3〜4 世紀には陀羅尼に呪の機能が付加されていたと推測されている。五護陀羅尼に属する経典もまた、様々な呪の機能が期待されている初期密教経典に含まれる。

五護陀羅尼経典の成立年代は明確ではないが、3 世紀頃に成立したといわれる『孔雀王呪経』が最も早く、終結部に他の五護陀羅尼の経典名が記述されている『守護大千国土経』が最後に成立したという。さらに、『大随求陀羅尼』は遅くとも 6 世紀には北インドで知られ、さらに 8 世紀初頭には五護陀羅尼の一つとして組み込まれてネパール、チベット、中央アジア、中国、日本に広まったという。

五護陀羅尼の各経典は守護のための陀羅尼や供養の儀軌のほか、様々な説話や物語が説かれている。特に、五護陀羅尼のうち『大随求陀羅尼』は最も文学的であるといわれ、挿入されている物語の数も五護陀羅尼経典のなかで最も多い。そのいずれもが『大随求陀羅尼』によって救済される主旨である。『守護大千国土経』は、四天王がヴァイシャーリーにおいて様々な障りを受けるリッチャヴィ族に対する悪鬼の類を鎮める呪を世尊に述べたが、世尊はさらに優れた守護呪を説いて衆生に安寧をもたらすという場面が説かれる。『孔雀王呪経』は世尊がシュラーヴァスティの給孤独園に住していた時、黒蛇に噛まれたスヴァーティーを世尊の「孔雀王呪経」によってその毒を浄化することが説かれている。また、経典中では世尊が昔、スヴァルナ・アヴァバーサという名の孔雀の王であったという、いわゆるジャータカ（本生譚）が語られる。また経典中には、呪文がドラヴィダ語であるとの記述がある。

そして『大寒林陀羅尼』においては 2 つのバージョンが指摘されている。これについては以下に述べる。『大護明陀羅尼』は、世尊がヴァイシャーリーに蔓延している疫病を鎮めるための「大護明陀羅尼」をアーナンダに授ける場面が説かれる。この『大護明陀羅尼』は根本説有部律の『薬事』「ヴァイシャーリープラヴェーシャ」と内容をほぼ同じくしており、先行研究によって関連性が考察されている[131]。また、この『大護明陀羅尼』にもチベット語訳の別本が存在が指摘されており、そこでは世尊がシュラーヴァスティの給孤独園に住している場面が説かれている。

[131] [奥山 1998]

「第 1 章 2.『大寒林陀羅尼』における諸問題」で詳しく述べたように、『大寒林陀羅尼』には 2 つのバージョンが確認されており、その経題には問題点がいくつか見られる。内容に関しては、ネパール写本、漢訳、チベット語訳の『大寒林陀羅尼』（ŚV-A 本）では、大寒林において数々の障りを受けて苦悩しているラーフラに対し、世尊が諸々の障りを防ぐための「大寒林陀羅尼」を授ける場面が説かれている。この ŚV-A 本は 4 世紀の『檀特羅麻油述経』から影響を受け、その ŚV-A 本に明呪を増補して『佛説寶帶陀羅尼經』が成立、さらに儀軌を付加させた『佛説聖莊嚴陀羅尼經』が発展、形成されたという[132]。

一方で、チベット語訳にのみ存在する別本（ŚV-B 本）では、ラーフラは登場せずに世尊と四天王が大寒林で対話する形式で進められる。この場面は「アーターナーティヤ経」に関連すると先行研究によって指摘されており[133]、さらに初期の大乗経典である『法華経』「陀羅尼品」においても同じような場面が見られる。また、ŚV-B 本では四天王が陀羅尼を述べた後に世尊がさらに優れた陀羅尼を説き、それを聞いた四天王は驚き畏れて合掌する。この場面は『守護大千国土経』とも共通している。

双方とも「大寒林」で説かれた陀羅尼であり、種類や数に異同があるものの、衆生に障りをなす者たちが列挙されていることが共通している。また、「結呪作法」による四衆の守護や、「害をなす者の頭が 7 つに裂けよ」といった表現があることも同様である。

これまで述べたように ŚV-A, B 本は双方とも『大寒林陀羅尼』と見なされる経典だが、その内容は両者の間で大きく異なっている。少なくとも、分量の多い B 本が広本、少ない A 本が略本という関係ではないといえよう。

9 世紀前半ごろチベットで編纂された、現存する最古の仏典目録とされる『デンカルマ』『パンタンマ』において、「五大陀羅尼」の下、他の五護陀羅尼経典とともに『大寒林陀羅尼』が収録されている。さらに先行研究によると、『デンカルマ』には ŚV-B 本の方が収録されていることから、同時期に編纂された『パンタンマ』においても『デンカルマ』と同様、ŚV-B 本が収録されている可能性がある。インドでは『大寒林陀羅尼』ŚV-A 本、ŚV-B 本の原型が存在し、インド、チベットにおいてそれぞれ別個に発展していったと推測される。そのうち、ŚV-A 本はネパールなどの写本や漢訳において『大寒林陀羅尼』として残ったが、チベット語訳では五護陀羅尼として収録される際に ŚV-B 本の方採用された。そして ŚV-A 本のチベット語訳は五護陀羅尼のグループに含まれず、別名（『聖持大杖陀羅尼』）が与えられたと推測される。『大寒林陀羅尼』が 2 つの系統に分かれて展開した背景については、今後の考察の課題である。

以上の五護陀羅尼の各経典は 7～8 世紀にはそれぞれ単独で神格化し、11～12 世紀頃に編纂された密教諸尊の成就法集『成就法の花環』（SM）や『完成せるヨーガの環』（NPY）において五護陀羅尼明妃の成就法が収録されている。その中で、SM No.194～200 は単

132 [大塚 2010]
133 [Skilling1992][奥山 1998]

独の五護陀羅尼各明妃、SM No.201 および No.206 は五護陀羅尼各明妃が一括されたマンダラの成就法が説かれている。五護陀羅尼の各明妃は単独で成就法が説かれる場合と、5 尊が一括されて一つのマンダラとして観想される場合がある。単独の五護陀羅尼明妃の成就法（No.197, 196～200）および五護陀羅尼全員が説かれている No.201 は比較的短編であり、内容の大部分もしくは全てが図像的な特色に関する記述で占められている[134]。

SM No.206 で説かれている五護陀羅尼マンダラを観想する際には大随求明妃が中尊となっており、NPY においても大随求明妃が中心に描かれている。SM No.201 では各明妃の位置の記述はないが、大随求明妃が初めに説かれ、他の 4 尊より図像的特徴が比較的詳細に記述されている。また、単独の五護陀羅尼各明妃の成就法も、大随求明妃のみ複数収録されている[135]。これらのことから、五護陀羅尼の中でも特に大随求明妃は重要な尊格であるといえるだろう。

SM に収録されている五護陀羅尼明妃の成就法のなかでは、No.195「大随求明妃成就法」および No.206「五護陀羅尼成就法」が儀軌の構成について理解しやすい。単独の成就法である No.195 では、尊格と行者の合一を示唆する場面において、‘praveśayet’などの一般に用いられる動詞を使わずに‘adhitiṣṭhet’という語を用いる。これは陀羅尼経典である『大随求陀羅尼』が持つ守護的な局面が強く表されている。

また、五護陀羅尼の各明妃がマンダラとしてあらわれる No.206 では、観想上のマンダラと、実際に制作するマンダラが説かれている。No.206 と内容構造が似ている No.15「カサルパナ世自在成就法」を例にあげる。No.15 では、諸尊を観想した後に尊格を配置するための「器」の役割としてのマンダラを作成し、そして観想した「中身」としての尊格を実際のマンダラに配置することが説かれている。次に、金剛頂経系の儀軌『一切金剛出現』*Sarvavajrodaya* を見てみると、観想上のマンダラと実際に作壇するマンダラが説かれているが、後者のマンダラは弟子の灌頂儀礼のために描かれる。No.206 は既にマンダラと合一した行者がマンダラを実際に描き、それは一切衆生の利益のために使われることが明示されており、この点が No.206 の特色である。

以上がこれまで述べた五護陀羅尼経典および神格化された五護陀羅尼の成就法の特色である。序論でも述べたが、陀羅尼という音が説かれた経典から女神へと視覚的に展開していった時、どのような変化が起きたのか。

例えば、孔雀明妃はあらゆる毒を浄化する女神であると説かれる。これは『孔雀王呪経』が期待される機能や、蛇毒に侵されたスヴァーティーを蘇生させた物語と類似している。

一方、大寒林明妃に注目すると、SM No.206 において「ハーリーティー等のヤクシャ、ヤクシャ女を破壊する女神」「ブータ、プレータ、ピシャーチャ、ヴェーターラ、羅刹

---

134 詳細については第 2 章「3.五護陀羅尼各明妃の成就法の内容構成」を参照。
これらの成就法は図像規定が要点として記述されているため、尊格と行者の合一等の場面は省略されたものと考えられる。

135 SM No.194～196

等を魅了する女神」であると説かれている。これらの障りをなす者たちはいずれも、大寒林明妃の元となる経典である『大寒林陀羅尼』にあらわれるものである。さらに「カラスやふくろう、ハゲワシ、タカ、鳩等を追い払い」とあることから、ŚV-A 本に説かれている動物があらわれていることがわかる。したがって SM No.206 にあらわれる大寒林明妃の姿から、11～12 世紀に SM が流布する時期に ŚV-A 本の系統が主流なものとして残っていたことが推測される。

このように五護陀羅尼経典が女神として神格化した際には、それぞれの陀羅尼経典の持つ機能や性格が影響して各女尊の姿が形成してきたと考えられる。五護陀羅尼という 5 つの陀羅尼経典が守護を期待する呪文との結びつきは色濃く残しつつ、それぞれ女神として神格化した。

当初、初期密教における陀羅尼経典は、経典を読誦、保持することによって除毒や雨乞い、病気の治癒等、主に自己の現世利益や除災を得るために唱えられていた。それが SM が編纂された後期密教の時代になると、行者は尊格と一体化し、自身が尊格となって他者を救済する機能があらわれるようになった。「自己」から「他者」へ、その救済の目的および対象が、元来持っていた五護陀羅尼経典から五護陀羅尼の女尊へと展開した際に付加したと思われる。

[一次文献および略号一覧]

大正　　大正新脩大蔵経

MN-A 本　*Mahāmantrānusāriṇī* 『大護明陀羅尼』→Skilling, Peter. 1994. *Mahasutras: great discourses of the Buddha volume1, 2.* Oxford: Pali Text Societ. 608-622.

MN-B 本　*Mahāmantrānusāriṇī*『大護明陀羅尼』→gsang sngags chen po rjes su 'dsin pa'i mdo『大真言随持経』(Ota. No.181, Toh. No.563)

NAK　National Archives, Kathmandu, No.3-387

NPY　*Niṣpannayogāvalī*『完成せるヨーガの環』→ Bhattacharya,Benoytosh. 1972. *Niṣpannayogāvalī*, Baroda.

Ota.　(西蔵大蔵経北京版)『影印北京版西蔵大蔵経—大谷大学図書館蔵—大谷大学監修西蔵大蔵経研究会編輯総目録附索引』→[鈴木1962]、D. Suzuki (ed.) The Tibetan Tripitaka. 1962. Peking Edition. 鈴木学術財団

SM　*Sādhanamālā*『成就法の花環』→ Bhattacharya,Benoytosh (ed.). 1968a. *Sādhanamālā* vol.II. Baroda.

ŚV-A 本　*Mahāśītavatī* → Iwamoto Yutaka. 1937b. *Beitrage zur Indologie.* Heft2, *KLEINERE DHARANI TEXTE*, Kyoto: Shōbundō.、『大寒林聖難拏陀羅尼経』(大正 21, No. 1392)、phags pa be con chen po shes bya ba'i gzungs『聖持大杖陀羅尼』(Ota. No.308=583, Toh. No.606=958)

ŚV-B 本　*Mahāśītavatī* → bsil ba'i tshal chen po'i mdo『大寒林経』(Ota. No.180, Toh.No.562)

Toh.　(西蔵大蔵経デルゲ版)『西蔵大蔵経総目録東北大学所蔵版』→[東北帝国大学 1934]、The Nyingma edition of the sDe-dge bKa'-'gyur and bsTan-'gyur by the Head Lama of the Tibetan Nyingma Meditation Center. Oakland: Dharma Publishing.1981.

[参考文献一覧]

(日本語文献)

1. 秋山昌海 1985『仏像印相大事典』国書刊行会.
2. 浅井覚超 1988「『大随求陀羅尼経』梵蔵漢対照研究」『密教文化 162 号』高野山大学密教学会.
3. 網代裕康 2011「理趣経「百字の偈」」『大法輪 78(12)』大法輪閣.
4. ウェイマン, アレックス 2005「密教　Esoteric Buddhism」種村隆元訳『エリアーデ仏教事典』法藏館.
5. 岩本裕 1975『佛教聖典選 第七巻 密教経典』読売新聞社.
6. 氏家覚勝 1984『陀羅尼の世界』東方出版.
7. ———. 1987『陀羅尼思想の研究』東方出版.

8. 大塚伸夫 2010「『檀特羅麻油述経』に見る初期密教の特徴」『高野山大学密教文化研究所紀要』23, 高野山大学大学院, 147-169.
9. ———. 2013a『インド初期密教成立過程の研究』春秋社.
10. ———. 2013b「初期密教経典の全体像—初期密教の萌芽から展開・確立へ—」高橋尚夫・木村秀明・野口圭也・大塚伸夫編『初期密教』春秋社.
11. 大野栄人 2001「『大智度論』の中国的展開」『愛知学院大学人間文化研究所紀要』16, 愛知学院大学, 1-44.
12. 奥村泰全 1973「大寒林陀羅尼経の概略について」『密教学会報』12, 高野山大学密教学会, 39-43.
13. 奥山直司 1998「初期密教経典の成立に関する一考察—『マハーマントラーヌサーリニー』を中心に—」松長有慶編『インド密教の形成と展開』法藏館, 67-86.
14. ———. 2006「成就法の花環」松長有慶『インド後期密教[上]方便・父タントラ系の密教』春秋社.
15. 小野玄妙編 1985『仏書解説大辞典 第二、五、七、九巻』大東出版.
16. 鎌田茂雄 2002『一切経解題辞典』大東出版.
17. 片山一良 2005『長部（ディーガニカーヤ）パーティカ篇 I』大蔵出版.
18. 川越英真 2005『dKar chag 'Phang thang ma』東北インド・チベット研究会
19. 倉西憲一 2013a「『孔雀王呪経』」高橋尚夫・木村秀明・野口圭也・大塚伸夫編『初期密教』春秋社, 148-157.
20. ———. 2013b「『パンチャラクシャー』（五つの守護呪）」高橋尚夫・木村秀明・野口圭也・大塚伸夫編『初期密教』, 158-165.
21. 熊田由美子監修 2007『仏像の辞典』成美堂出版.
22. 国訳密教儀軌編纂局 1976『国訳秘密儀軌 第十巻』国書刊行会.
23. 古坂 紘一 1993「大随求陀羅尼における梵蔵漢文の比較対照」『インド学密教学研究 : 宮坂宥勝博士古稀記念論文集通号 2』(宮坂宥勝博士古稀記念論文集刊行会) 法蔵館.
24. 児玉義隆 1991『梵字必携: 書写と解読』朱鷺書房
25. 小林圓照 2009「ヴァイシャーリー疫病救済譚と『却温黄神呪経』の編成」『印度學佛教學研究』57（2）, 日本印度学仏教学会, 1106-1098.
26. 佐久間留理子 1990「インド密教の図像学的資料(1) : 『サーダナ・マーラー』における獅子吼観自在の成就法」『国立民族学博物館研究報告 15 巻 2 号』国立民族学博物館.
27. ———. 2011『インド密教の観自在研究』山喜房佛書林.
28. ———. 2014「ネパール仏教絵画に見る観自在菩薩」『奥田聖應先生頌寿記念インド学仏教学論集』佼成出版社, 1108-1117.
29. ———. 2015「般若波羅蜜成就法の研究—バッタチャルヤ校訂本『サーダナ・マ

ーラー』151, 156 番を中心に—」『東海佛教』60, 東海印度学佛教学会, 150-164.
30. ———. 2015『観音菩薩　変幻自在な姿をとる救済者』春秋社.
31. 桜井宗信 1996『インド密教儀礼研究—後期インド密教の灌頂次第—』法藏館.
32. 佐々木教悟他 1966『仏教史概説インド篇』平楽寺書店.
33. 佐々木閑 1985「『デンカルマ目録』にあらわれる根本有部系経典群」『仏教研究』15, 国際仏教徒教会, 95-108.
34. 佐和隆研編 1975『密教大辞典』法藏館.
35. 清水乞 1977「インドの密教儀礼と造形—サーダナマーラーを中心として」『日本仏教学会年報 43』大谷大学内日本仏教学会西部事務所.
36. ———. 2000「観音の原像をめぐって」『観音信仰事典』（速水侑編）戎光祥出版.
37. 杉山二郎、前田常作監修 2006『日本仏像大全書』四季社.
38. 鈴木学術財団 1962『影印北京版西蔵大蔵経—大谷大学図書館蔵—大谷大学監修西蔵大蔵経研究会編輯総目録附索引』.
39. 園田沙弥佳 2014a「『成就法の花環』におけるマハープラティサラー成就法」『東洋大学大学院紀要』50, 東洋大学大学院, 101-123.
40. ———. 2014b「『サーダナ・マーラー』における五護陀羅尼の成就法」『印度學佛教學研究』63（1）, 日本印度学仏教学会, 435-438.
41. ———. 2015「『サーダナ・マーラー』No.206「五護陀羅尼成就法」について」『東洋大学大学院紀要』51, 東洋大学大学院, 127-147.
42. ———. 2016a「『大寒林陀羅尼』*Mahāśītavatī* について」『東洋大学大学院紀要』52, 東洋大学大学院, 217-235.
43. ———. 2016b「『大寒林陀羅尼』*Mahāśītavatī* 異本について」『印度學佛教學研究』65（1）, 日本印度学仏教学会
44. 高橋尚夫 1987「金剛界大曼荼羅儀軌一切金剛出現—和訳(完)—」『豊山学報 32』1-42.
45. ———. 1988a「金剛界大曼荼羅儀軌 一切金剛出現 第一瑜伽三摩地品 和訳」『密教文化 161』151-164.
46. ———. 1988b「金剛界大曼荼羅儀軌一切金剛出現—余滴—」『豊山学報 33』1-58.
47. 田久保周誉校訂 1972『梵文孔雀明王経』山喜房佛書林.
48. 立川武蔵 1986「金剛ターラーの観想法」町田甲一先生古稀記念会編『論叢仏教美術史』吉川弘文館.
49. ———. 1989「ネワールの法界マンダラの伝統とサンスクリット・テキスト」『法界語自在マンダラの神々』（国立民族学博物館研究報告別冊 No.7）国立民族学博物館.
50. ———. 1990『女神たちのインド』せりか書房刊.
51. ———. 2004『曼荼羅の神々—仏教のイコノロジー』ありな書房.

52. ———. 2009「『完成せるヨーガの輪』研究（三）」『人間文化（24）』愛知学院大学人間文化研究所.
53. ———. 編・著 2015『ネパール密教』春秋社.
54. 立川武蔵・頼富本宏編 1999『インド密教』春秋社.
55. ———.編 1999『チベット密教』春秋社.
56. 田中公明 1992『曼荼羅イコノロジー』平河出版社.
57. ———. 『インドにおけるマンダラの成立と発展』春秋社.
58. 種村隆元「密教の出現と展開」奈良康明・下田正弘編『新アジア仏教史 02 インドⅡ仏教の形成と展開』佼成出版，2010.
59. 塚本啓祥・松長有慶・磯田熙文編 1989『梵語仏典の研究　Ⅳ密教経典編』平楽寺書店.
60. 東京国立博物館 2015『特別展コルカタ・インド博物館所蔵 インドの仏 仏教美術の源流』日本経済新聞社.
61. 東北帝国大学 1934『西蔵大蔵経総目録東北大学所蔵版』
62. 中村元訳注 1958『ブッダのことば—スッタニパータ』岩波書店.
63. ———. 監修・補注 1982-1991『ジャータカ全集１～１０』春秋社.
64. ———. 編 1988『図説仏教語大辞典』東京書籍.
65. 那須政隆監修 1975『続国訳秘密儀軌 第七巻』国書刊行会.
66. 幅田裕美 1994「大経（mahāsūtra）としての大乗＜涅槃経＞」『印度學佛教學研究』43（1），日本印度学仏教学会, 140-143.
67. 速水侑 1987『呪術宗教の世界—密教修法の歴史—（塙新書 63）』塙書房.
68. 藤巻一保 2006『イラストでわかる 密教 印のすべて』PHP 研究所.
69. 古田紹欽・金岡秀友・鎌田茂雄・藤井正雄監修 1988『仏教大事典』小学館.
70. 松長有慶 1980『密教経典成立史論』法蔵館.
71. ———. 2006『インド後期密教[下]般若・母タントラ系の密教』春秋社.
72. ———. 編 1998『インド密教の形成と展開』法蔵館.
73. 密教聖典研究会 1986「Vajradhātumahāmaṇḍalopāyika-Sarvavajrodaya—梵文テキストと和訳—(I)」『大正大学綜合仏教研究所年報第 8 号』.
74. ———. 1987「Vajradhātumahāmaṇḍalopāyika-Sarvavajrodaya—梵文テキストと和訳—(II)」『大正大学綜合仏教研究所年報第 9 号』.
75. 村上真完・及川真介訳註 2009『仏のことば註: パラマッタ・ジョーティカー』春秋社.
76. 森雅秀 1997『マンダラの密教儀礼』春秋社.
77. ———. 1999「マンダラの形と機能」『シリーズ密教通号 2』.
78. ———. 2001「マハーマーヤーの成就法」『密教図像 11 号』.
79. ———. 2002「インドの不空羂索観音像」『佛教藝術 262 号』毎日新聞社.

80. ———. 2006「インド密教儀礼の集大成」松長有慶『インド後期密教[上]方便・父タントラ系の密教』春秋社.
81. ———. 2007「『サーダナマーラー』「仏頂尊勝成就法」和訳及びテキスト」『真言密教と日本文化—加藤精一博士古稀記念論文集』ノンブル.
82. 八尾史 2013『根本説一切有部律薬事』連合出版, 123-128.
83. 山口しのぶ 1997「サンヴァラの七字真言—『サーダナ・マーラー』No.251—」『印度学仏教学研究第 46 巻第 1 号』日本印度学仏教学会.
84. ———. 2005『ネパール密教儀礼の研究』山喜房佛書林.
85. ———. 2008「カトマンドゥ盆地のナーマサンギーティー文殊について」『東洋大学文学部紀要 印度哲学科編』第 61 集, 148-170.
86. 山田龍城 1959『梵語佛典の諸文献』平楽寺書店.
87. 吉崎一美 1980「Sādhanamālā 研究・資料編（1）」『東洋大学大学院紀要 第 16 集』.
88. 芳村修基 1974『インド大乗仏教思想研究—カマラシーラの思想—』百華苑.
89. 頼富本宏 2003「『金剛頂経』入門（十八）様々な実践儀礼—百字真言と四智梵語」『大法輪 70(5)』大法輪閣.
90. 頼富本宏・下泉全暁 1994『密教仏像図典』人文書院.
91. 渡辺章悟 1995『大般若と理趣分のすべて』北辰堂.
92. ———. 2008『般若心経——テクスト・思想・文化』大法輪閣.
93. ———. 2010「大乗教団のなぞ」奈良康明・下田正弘編『新アジア仏教史 02 インドⅡ仏教の形成と展開』佼成出版.
94. ———. 2012『絵解き般若心経　般若心経の文化的研究』ノンブル社.
95. 和久博隆 2013『新装版仏教植物辞典』国書刊行会.

（外国語文献）

96. Bendall, Cecil. 1883, *Catalogue of the Buddhist Sanskrit Manuscripts in the University Library, Cambridge.*
97. Bühnemann, Gudrun and Tachikawa, Musashi (eds.)1991,*Niṣpannayogāvalī Two Sanskrit Manuscripts from Nepal,* The Center for East Asian Cultural Studies.
98. Bhattacharya, Benoytosh. 1968b. *The Indian Buddhist Iconography.* Calcutta.
99. Goshima, Kiyotaka and Noguchi, Keiya. 1983.*A Succinct Catalogue of the Sanskrit Manuscripts in the possession of the Faculty of Letters* Kyoto University. compiled by K. Goshima and K. Noguchi. Kyoto.
100. Grinstead, Eric. 1971. *The Tangut Tripitaka part.6,* University of Toronto.
101. Hidas, Gergely. 2011. *Mahapratisara Mahavidyarajni: Critical Edition with Annotated Transalation: The Great Mulet Queen of Spells.* New Delhi.
102. Iwamoto, Yutaka. 1937a. *Beitrage zur Indologie.* Heft1, *Mahāsāhasrapramardanī*

(Pañcarakṣā Ⅰ). Kyoto: Shōbundō.

103. ———. 1938. *Beitrage zur Indologie*. Heft3, *Mahāpratisarā(Pañcarakṣā Ⅱ)*, Kyoto: Shōbundō

104. Konishi, Masatoshi. 1990. “Old Paper Used for Asutosh Museum Manuscript of *Pañcarakṣā.” Journal of the Japanese Association for South Asian Studies No.2*. New delhi.

105. van.Kooij, K. R. 1978. *Religion in Nepal*. LEIDEN E.J.Brill.

106. Lokesh, Chandra. 2003. *Dictionary of Buddhist Iconography Volume7, 9*. New Delhi: International Academy of Indian Culture and Aditya Prakashan.

107. Lewis, Todd T. 2000. *Popular Buddhist texts from Nepal : narratives and rituals of Newar Buddhism*. State University of New York.

108. Matsunami, Seiren (comp.). 1965. *A Catalogue of the Sanskrit Manuscripts in the Tokyo University Library*（『東京大学附属図書館所蔵　梵文写本解説目録』）. Tokyo.

109. ———. (comp.)年代不明. *Catalogue of the Kawaguchi-Takakusu Collection of Sanskrit Manuscripts. Note-book 1-35*.

110. Roerich, George N.(ed. and tr.) 1979. The blue annals vol. 1, 2. Delhi: Motilal Banarsidass.

111. Skilling, Peter. 1992 "The Rakṣā Literature of the Śrāvakayāna.", J*ournal of the Pali Text Society, vol. 16*. 109-182

112. bSod nams rgya mtsho, Tachikawa, Musashi. 1989. *The Ngor Mandalas of Tibet Plates*. Tokyo: The Center for East Asian Cultural Studies.

113. bSod nams rgya mtsho, Tachikawa, Musashi. Shunzo, Onoda, Keiya, Noguchi, and Kimiaki, Tanaka. 1991. *The Ngor Mandalas of Tibet Listings of the Mandala Deities*. Tokyo: The Center for East Asian Cultural Studies.

114. Tachikawa, Musashi.2001.*Three Hundred Sixty Buddhist Deities*. Delhi: Adroit Publishers

115. Takaoka, Hidenobu (ed.). 1981. *A Microfilm Catalogue of the Buddhist Manuscripts in Nepal vol.1*. Fukuoka: Buddhist Library.

第 2 部

『大寒林陀羅尼』および

『成就法の花環』五護陀羅尼の成就法和訳

1. 『大寒林陀羅尼』和訳

ここでは『大寒林陀羅尼』（ŚV-A 本、ŚV-B 本）と、SMNo.194～201, 206 の和訳を取り上げる。以下、和訳に際して使用したテキストや参考文献、内容構成および和訳について述べよう。なお、各和訳の見出しと冒頭に示される内容構成表は、いずれも筆者が作成したものである。

1.1『大寒林陀羅尼』（ŚV-A 本）和訳

1.1.0 使用テキスト

［サンスクリット校訂本］

A)　*Mahāśītavatī*（サンスクリット校訂テキスト[Iwamoto1937b]）
この校訂本には、以下の写本が使用されている。

1. *Mahāśītavatī*（An der Universitäts-Bibliothek zu Kyoto.）
2. *Pañcarakṣā*（An der Universitäts-Bibliothek zu Kyoto.）
3. *Pañcarakṣā*（An der Universitäts-Bibliothek zu Kyoto.）
4. *Pañcarakṣā*（Gehörig zu Herrn J. Ischibama.）

［サンスクリット写本］

B)　*Pañca-rakṣā*（Buddhist Library 所蔵マイクロフィルム[Takaoka1981:GA3]）
C)　*Pañca-rakṣā*（Buddhist Library 所蔵マイクロフィルム[Takaoka1981: CH47]）
D)　*Pañca-rakṣā*（東京大学所蔵[Matsunami1965: No.220]）
E)　*Pañca-rakṣā*（東京大学所蔵[Matsunami1965: No.225]）

［チベット語訳］

འཕགས་པ་བེ་ཙོ་ན་ཆེན་པོ་ཞེས་བྱ་བའི་གཟུངས་

（*Ārya mahādaṇḍa nāma dhāraṇī,*『聖持大杖陀羅尼』）

TD) Toh. No.606

TP) Ota. No.308

［漢訳］

CH)　大正新脩大藏經 No.1392『大寒林聖難拏陀羅尼経』宋法天訳

1.1.1 ŚV-A 本和訳

[0] 帰依文
[1] ラーフラ尊者の苦悩
[1.1] 寒林における障り
[1.2] 世尊への謁見
[2] 世尊の問いかけ
[3] 寒林陀羅尼
[3.1] 目的
[3.2] 陀羅尼前半部
[3.3] 陀羅尼後半部
[3.4] 陀羅尼の保持と効能
[4] ラーフラ尊者たちの歓喜
[5] 奥付

『大寒林陀羅尼』（ŚV-A 本）内容構成

[0]帰依文

神聖な女神である大寒林明妃（大寒林陀羅尼）[1]に帰依します[2]。

[1]ラーフラ尊者の苦悩

[1.1] 寒林における障り

このように私は聞いた。一時、世尊はラージャグリハに住していた。寒林の大屍林であるインギカと呼ばれる場[3]において、その時、ラーフラ尊者はとても苦しんでいた。

デーヴァ[4]（天）という障り[5]によって、ナーガ（竜）という障りによって、ヤクシャという障りによって、ラークシャサ（羅刹）という障りによって、マルタ（風神）という障りによって、アスラという障りによって、キンナラという障りによって、ガルダという障りによって、ガンダルヴァ[6]という障りによって、マホーラガという障りによって、人という障りによって、人ではないものという障りによって、プレータ（餓鬼）という障りによって、ブータ（死霊）という障りによって、ピシャーチャ（吸血鬼）という障りによって、クンバーンダ（鳩槃荼）という障りによって[傷つけられていた]。[また、]トラによって、カラスによって、フクロウによって、昆虫によって、地を這う虫によって、その他によって、また、人および人ではない[7]衆生によって[傷つけられていた][8]。

---

[1] TD, TP འཕགས་པ་བེ་ཙོ་ན་ཆེན་པོ་ཞེས་བྱ་བའི་གཟུངས།「偉大な杖と呼ばれるマントラ」

[2] TD, TP ཐམས་རྒྱས་དང་བྱང་རྩུབ་སེམས་དཔའ་ཐམས་ཅད་ལ་ཕྱག་འཚལ་ལོ།།「一切の仏菩薩に敬礼します」; E「仏陀に帰依します」

[3] A iṅghikāyatanapratyuddeśe, D iṅghikāyatanapratyūddeśe, E iṅghikāyane pratyūddeśe, B iṅghikāyatane pratyūddeśo
大塚（2010, 160）によると、インギカ処は王舎城（ラージャグリハ）の外れにある場所という。

[4] デーヴァ、ナーガ、ヤクシャ、ガルダ、ガンダルヴァ、キンナラ、マホーラガの 7 尊は、仏教を守護するという八部（神）衆に属するものという（岩本 1975: 376）。しかしながら、ここではラーフラを悩ませる鬼神としてあらわされている。TD, TP には以上の 7 尊にアスラが加わり、八部衆全員が述べられている。

[5] graha ここでは、ヤクシャや羅刹に「とり憑かれること」と推測される。

[6] 漢訳にはない。

[7] 具体的に何を指しているかは不明である。

[8] ここで列挙されている鬼神や動物の種類や数、順番は、使用したテキスト間でそれぞれ相違があった。具体的には、校訂テキスト A と比較すると、D ではキンナラとアスラの順が前後しており、E ではアスラを欠いている。また、B および C ではデーヴァからラークシャサまでが共通、以降はキンナラ、マルタ、ガルダ、ガンダルヴァの順で表れ、次のマホーラガ以降はおおむね A と共通している。TD, TP では「デーヴァ、アスラ、ナーガ、ヤクシャ、ラーク

[1.2]世尊への訪問

そしてラーフラ尊者は、世尊が赴いている所、そのようなところに赴いた後に、世尊の御足に額づいて礼拝し、世尊を 3 度右繞した。その後、世尊の前で、[ラーフラ尊者は]泣き、涙をこぼした。

[2]世尊の問いかけ

そして世尊は、正に賢者ラーフラに仰った。

「ラーフラよ、何故あなたは私の前に立ち、涙を流しているのか？」

以上のように[世尊から]言われた時、ラーフラ尊者は世尊にこう答えた。

「世尊よ、今、私はラージャグリハの中の寒林の大屍林であるインギカ処という場所[9]において住しています。それで私は、その場所において苦しめられているのです、世尊よ。デーヴァという障りによって、ナーガという障りによって、ヤクシャという障りによって、ラークシャサという障りによって、マルタという障りによって、アスラという障りによって、キンナラという障りによって、ガルダという障りによって、ガンダルヴァという障りによって、マホーラガという障りによって、人という障りによって、人ではないものという障りによって、プレータという障りによって、ブータという障りによって、ピシャーチャという障りによって、クンバーンダという障りによって[傷つけられています]。 [また、]トラによって、カラスによって、フクロウによって、昆虫によって、地を這う虫によって、その他によって、また、人および人ではない衆生によって[傷つけられています] [10]。」

[3]寒林陀羅尼[11]

[3.1]陀羅尼の目的

シャサ、キンナラ、マホーラガ、ガンダルヴァ、人、風神、霊、ブータ、ピシャーチャ、クンバーンダ、フクロウ、カラス、ヒョウ、虫、サソリおよび蛇、人、人ではない者」、CH では「天（デーヴァ）、龍（ナーガ）、藥叉（ヤクシャ）、羅刹（ラークシャサ）、緊捺囉（キンナラ）、ガルダ、摩護囉誐（マホーラガ）、人、非人、餓鬼（プレータ）、部多（ブータ）、比舍佐（ピシャーチャ）、供畔拏（クンバーンダ）、烏（カラス）、鵲（カササギ）、獯狐（フクロウ）、豺、狼、蟲、蟻」と記されている。

[9] B iṅghikāyaśatanūpratyuddeśe「人気がなく、やせ細ったインギカという場所」

[10] [1.1]と同様に、鬼神等の種類や順番が前後している。校訂テキスト A と比較すると、TD ではヤクシャ、マルタ、アスラ、ラークシャサの順で述べられている。E ではピシャーチャ、ブータの順になっており、また、[1.1]ではアスラを欠いていたが、ここでは登場している。B ではナーガ、マルタ、ラークシャサの順で述べられており、アスラを欠いている。C ではナーガ、マルタ、アスラ、ヤクシャ、ラークシャサ、キンナラ、ガンダルヴァ、マホーラガの順で説かれており、マホーラガ以下は A とおおむね共通している。TP, TD では[1.1]とおおよそ同様であるが、ガンダルヴァ、マホーラガの順になっており、一部前後している。CH は[1.1]と同。

[11] 陀羅尼呪（[3.2]、[3.3]）に関しては、サンスクリット・テキスト、チベット語訳、および漢訳のいずれにおいても異同が多くみられるが、ここでは A を基本とする。

そこで、正に世尊はラーフラ尊者に仰った。

「ラーフラよ、あなたは[以下に述べる]これらの大寒林という明呪を覚えなさい。四[種]の聴聞者たちの、ラクシャー（守護呪）[12]による覆いで守護するために、また、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、そして一切衆生に[守護呪の効能で]長期にわたって財、利益、楽、繁栄をなし続けよ[13]。

[3.2]陀羅尼前半部

それは次のようである。

さて、アンガ国[14]、ヴァンガ国の者よ、カリンガ国の者よ、ヴァランガ国の者よ、サンサーラタランガよ、サーサダンガよ、施与者（バガ）、アスラよ、あるタランガよ、アスラの女勇者よ、タラ、女勇者よ、タラ、タラ、女勇者よ、作す、女勇者よ、作す、作す、女勇者よ、インドラ、インドラキサラよ、ハンサ、ハンサキサラよ、ピチマーラよ、マハーキッチャよ、傷つけるものよ、カールッチキー、アンゴーダラ、ジャヤーリカー、ヴェーラー、チンターリ、チリ、チリ、ヒリ、スマティ、ヴァスティ、チュル、ナッテー、チュル、チュル、ナッテー、チュル、チュル、チュル、ナッテー、チュル、ナーディ、ク、ナーディーよ、ハーリータキー[15]よ、ハーリータキーよ、ハーリータキーよ、ハーリータキーよ、ハーリータキーよ、ハーリータキーよ、ガヴリーよ、ガンダーラ族の女よ[16]、チャンダーラ族の女よ[17]、ヴェーターリーよ、マータンギー族の女よ[18]、ヴァルチャシーよ、ダラニーよ、ダーラニーよ、タラニーよ、ターラニーよ、ウストゥラマーリケー（水牛を殺す女）よ、カチャ、カーチケーよ、カチャ、カーチヴェー、チャウ、ナーティーケー、カーカリケー、ララマティ、ラクシャマティ、ヴァラーハクレー、マトパレー、睡蓮のような女（ウトゥパラー）よ、作す女勇者よ、作す、作す、女勇者よ、タラ、女よ、タラ、タラ、女よ、為せ、女よ、為せ、為せ、女よ、チュル、女よ、チュル、チュル、女よ、マハーヴィーラーよ、イラマティーよ、ヴィラマティーよ、守護を為す女（ラクシャマティー）よ、一切の利益の成就よ、最上の真実の成就よ、妨

---

12 ここでは大寒林陀羅尼のことと思われる。

13 A 他サンスクリット写本では sarvasatvānāṃ ca dīrgharātram arthāya hitāya sukhāya yogakṣemāya bhaviṣyati //とあるが、文脈から TP, TD の yun ring po’i don dang phan pa dang bde bra ’gyur ba ’di zung shig の訳を採用した。

14 『守護大千国土経』にも表れる。（岩本 1975: 338-339）

15 黄色いミロラバンの樹

16 『孔雀王呪経』、『パルナシャバリー陀羅尼』に表れる、インドの民族名。この民族が厄病をもたらすものと信じられ遠ざけるために使用されたのか、もしくはこの民族が特殊な力を持つと信じられ厄病をはらうことを祈念するために用いられたのか、その意図は明確ではないという（岩本 1975: 13）。また、この語は『法華経』「陀羅尼品」において、ヴィダールカ王が説いた説法者を守るための陀羅尼呪の中に表れる。

17 上記注参照。薬師如来の真言にもあらわれる。‘oṃ huru huru cāṇḍāli mātangi svāhā’（岩本 1975: 13）

18 上記注参照。

げない女　（アプラティハター）よ、インドラ王よ、ヤマ王よ、ヴァルナ王よ、クベーラ王よ、マナスヴィー竜王よ、ヴァースキ竜王よ、ダンダキー（光）王よ、ダンダアグニー王よ、持国天　（ドゥリタラーシュトラ王）[19]よ、増長天　（ヴィルーダカー王）よ、広目天（ヴィルーパクシャ王）よ、千人の梵天の主である王よ、仏世尊である法王の王よ。

世の中に慈悲を示す無上の存在は、私と、また、一切衆生の守護を為せ[20]。救い、保護し、守り、息災を[なし]、繁栄を[与え]、杖を取り除き、武器を取り除き、毒を取り除き、結界をはること、また、陀羅尼を[身体に]結びつけることを為せ。百年生き、百秋を見よ[21]。

[3.3]陀羅尼後半部

それは次のようである。

イラー、ミラー、睡蓮のような女よ、イラマティー、ヴィラマティーよ、ハラマティーよ、守護を為す女[22]よ、守護を為す女よ、為せ、為せ、マティ、フル、フル、プル、プル、チャラ、チャラ、カラ、カラ、クル（khuru）、クル、マティ、マティ、ブーミチャンダーよ、カーリカーよ、アビサンラーピターよ、サーマラターよ、フーラー、ストゥーラーよ、ストゥーラシカラーよ、ジャヤ、ストゥーラーよ、ジャヤヴァターよ、ヴァラ、ナッテー、チャラ、ナーディ、チュル、ナーディ、チュル、ナーディ、ヴァーグバンダニーよ、ヴィローハニーよ、サローヒターよ、アンダラーよ、パンダラーよ、カラーラーよ、キンナラ女よ、腕輪をつけた女（ケーユーラー）よ、ケートマティーよ、ブータンガマーよ、ブータマティーよ、裕福な女（ダニャー）よ、吉祥の女（マンガルヤー）よ、黄金の子宮[23]を持つ女（ヒラニヤガルバー）よ、大力（マハーバラ）の女よ、アヴァローキタムーラーよ、獰猛な不動の女（アチャラチャンダー）よ、ドゥランダラ

---

[19] 四天王の一人。東方は持国天 dhṛtarāṣṭra、南方は増長天 virūḍhaka、西方は広目天 virūpākṣa、北方は多聞天 vaiśravana が司る。今回使用したサンスクリット・テキストには多聞天は現れない。

[20] A mama sarvasatvānāṃ ca rakṣāṃ karotu/; E mama saparivārasya sarvvasatvānāṃ ca rakṣāṃ kūrvvantu guptiṃ 「私の、伴った従者の、そして一切衆生のラクシャー（陀羅尼）の守護を為せ」; B mama saparivārasya sarvvasatvānā ca rakṣā kūrvvantu jivantu guptiṃ; C mama sarvasarvasatvānāṃ ca rakṣāṃ kūrvvantu guptiṃ

[21] TD, TP では thugs brtse ba bla na med pas bdag la bsrud du gsol/ yongs su bsyab a dang / yongs su gzung ba dang / yongs su bskyab pa dang / zhi ba dang bde legs su ’gyur ba dang / chad pa spang ba dang / mtshon cha sbang pa dang / dug gsad pa dang / dug gzhil pa dang / mtshams gcad pa dang / sa bcing pa mdzad du gsol / tadyatha’…と続く。
また、「百年生き、百秋を見よ」という表現は、『孔雀王呪経』等にも見られる。[田久保 1972: 13, 15-17]の校訂テキストおよび[岩本 1975: 227, 230-33 等]の和訳にも頻出している。

[22] [岩本 1975]に lakṣamati とあるが、その注記に rakṣamati とある。

[23] 「黄金の胎」とは、紀元前 1500～1000 年に成立したといわれるもっとも古い賛歌の集成『リグ・ヴェーダ』に登場する。宇宙の創造を「造一切者」、「黄金の胎」などに求める創造賛歌である。（佐々木 1966: 8）

ー、ジャヤーリカー、ジャヤーゴーローヒニーよ、チュル、チュル、プル、プル、ルンダ、ルンダ、ダレー、ダレー、ヴィダレー、ヴィダレー、ヴィスカンバニーよ、ナーシャニー、ヴィナーシャニーよ、バンダニーよ、モークシャニー、ヴィモークシャニーよ、惑わせる女よ、ヴィモーチャニーよ、モーハニー、ヴィモーハニーよ、バーヴァニー、ヴィバーヴァニーよ、ショーダニー、ショーダニー、サムショーダニー、ヴィショーダニーよ、サムキラニー[24]よ、サムキラニー[25]よ、サムチンダニーよ、善きかな、ツラマーナーよ、ハラ、ハラ、バンドゥマティーよ、ヒリ、ヒリ、キリ、キリ、カラリ、フル、フル、クル、クル、ピンガラーよ、諸仏世尊に帰依します、スヴァーハー。

[3.4] 陀羅尼の保持と効能

これにおいて、実に、再度ラーフラは110[26]の偈からなる大寒林[陀羅尼]の経典に、結び目を結んだ後に、手で持ち、首にかけた場合[27]、周囲100由旬[28]の[範囲で]守護されることになるだろう。塗香、花、そして印契によって[供養を]為すべきである[29]。まさに、人や人ではないものは打ち勝たないだろう。

武器[の害]がなく、毒[の害]がなく、病気[の害]がなく、熱[の害]がなく、熱病[の害]がなく、呪い[の害]、ヴェーターラ（屍鬼）[30]がなく、疫病[の害]がなく、火[の害]がなく、毒水によって死ぬことはないだろう[31]。

明呪の実践において、一切を正しく実践をするが不完全な者たちに対しても成就を為す者（大寒林陀羅尼）である。一方で、完成した者たちに対してはよりいっそう高揚させる者である。

また、他の[陀羅尼と]結びついている者たちを[自身の大寒林陀羅尼と]結びつける者である。また、他の[陀羅尼と]結びついている者を解放する者である。

---

24 saṃkhiranṇi

25 saṃkiranṇi

26 A, B, C, D, TP, TD には「110」、CH には「108」とある。

27 陀羅尼を身体に結び付けるという呪術的行為（結呪作法）といわれる。（大塚 2010: 150）

28 A yojanaśatasya rakṣākṛtā, E, C　yojanaśatasahasraya rakṣākṛtā, TP, TD　dpag tshad bcu, B yojanaśataṃ sahasrāṣṭasya rakṣākṛtā となっている。

29 TP, TD では kun nas dpag tshad bcu khor yug tu be con rnams dang /me tog rnams dang / phyag rgya rnams kyis de bsrung ba byas par ‘gyur ro //「あまねく所から 10 ヨージャナの周囲に一切の杖、花、印契によって[供養し]、守護せよ」とある。
A と B では「塗香」「花」「印契」、E では「塗香」「花」「印契」「灯明」、TP ,TD では「杖」「花」「印契」とあり、相違が見られるものの、それらを用いた儀礼的行為が共通して述べられていると推測される。一方で D および CH ではこの行為を欠いているが、欠いた状態でも前後を通して意味は通じることから、この儀礼的な行為は後に付加された可能性も推測される。

30 岩本氏の校訂本では vetāḍa とあるが、vetāla（毘陀羅、起屍鬼）のことと思われる。死体に乗り移り、言葉を発するといった動作をさせるという。また、『守護大千国土経』にも表れる。（岩本 1975: 329, 387）

31 B na viṣaṃ na śastra na gara na roganaṃ jvala na vidyāmantra na vetāḍa na vyādhi nāgnī na viṣaṃ dake kālaṃ kaliṣyati// na vidyānāvidyāmantraprayoge śvasarveśāṃ viṣamantraprayogānāṃ ca siddhakāri sarvvaṣāsādhūpayūktānāṃ ca vaddhanī aiddhānāṃ siddha// karisiddhānānna //

一切の病気、炎、障害を取り除く破壊者である。死、争い、不浄[32]を鎮める者である[33]。

[憑りついている]障りが解けない場合は、[障り自体の]額がアルジャカの花房のように７つに裂けるだろう[34]。また、マハーヤクシャの将軍である金剛手は、一つの炎になった燃え盛る火焔の金剛によって、額が裂ける程度に攻撃するだろう。四大天王の鉄製の輪によって、額が裂けるだろう。鋭利な小刀で突き刺すことによって、破壊するだろう。またその結果、ヤクシャ界から離れるだろう。アダガヴァティー大王都城において住処を得られない[35]。

そこで正に、再度ラーフラは、大寒林明妃大明呪の[功徳で]ただちに解放された時に、王、賊、水、火、毒、武器、森、悪路の中に入った者[36]は一切の恐怖から解放されるだろう。

正に再度、この大寒林明妃の明呪は、91 のガンジス河の砂と等しい[数の]諸仏、世尊によって、[過去において]成就が説かれ、[未来において]最上の成就が説かれ、また、[現在において]成就の強い力を説くだろう。

一切のデーヴァ、ナーガ、ヤクシャ、ガンダルヴァ、アスラ、ガルダ、キンナラ、マホーラガ等によって、一切の勝者の眷属に囲まれた者（大寒林陀羅尼）が称賛された。

一切の恐怖や災害において、私と、そして、一切衆生の守護を為せ。

また、いつまでもあらゆる方法であらゆる方面からすべての立場の者たちにおいて、吉祥で、息災で、恐怖がなくなれ[37]」

[4]ラーフラ尊者たちの歓喜

このことを世尊は説かれた。ラーフラ尊者、およびその一切の者と、デーヴァ、人間、アスラ、ガンダルヴァ[38]を伴う世間は喜び、世尊によって説かれた無上正等覚[39]に、大いに歓喜した[40]。

---

32 B「一切の死、争い、不浄を」

33 D「一切の障りを解放する者である」と続く。

34 saptadhāsya sphuṭen mūrdhā arjakasyeva mañjarī /「頭がアルジャカの花房のように 7 つに開くだろう」（頭破作七分）　『孔雀王呪経』『大千国土経』以外にも、『中阿含經』、『妙法蓮華經』、『大方等大集經』、『金光明最勝王經』等にもこの句が表れる。また、宗教的権威を持つバラモンの言葉として用いられていたという。

35 アータナーティヤ経にも同じ表現がみられるという。（大塚 2010: 166）

36 SM No.206 にも同様の表現が表れる。（園田 2015 参照）
A madhyagata, D caṭūrgamadhyagata「四つの中央の道（四辻）」, E durgamadhyagata「通ることが困難な道」

37 E「一切の恐怖や災害に対して、私の、伴った従者の、そして一切衆生の、恐れがなく、また、永久にあらゆる方法であらゆる方面から、すべての立場の者たちに、吉祥で息災のラクシャー（陀羅尼の守護）を為せ」

38 E ではアスラの後にガルダが追加されている。

以上で聖大寒林明妃という名の明呪の女王を終結する。

[5] **奥付**[41]

インドの学者ジナミトラ、翻訳官イェーシェーデーによって成立した。

---

[39] サンスクリット・テキストには samyaksaṃbuddha（三藐三仏）とあるが、「三藐三菩提」、「無上正等覚」と同義と推測した。

[40] 『般若心経』の終結部分にほぼ同一の場面がある。

[41] チベット語訳にのみ存在する。

1.2『大寒林陀羅尼』（ŚV-B 本）和訳

1.2.0 使用テキスト

ŚV-B 本は現在サンスクリット・テキストや漢訳は見つかっておらず、チベット語訳のみ明らかになっている。注は Toh., Ota.の異同を示しており、文脈からテキストを適宜校訂した。

［チベット語訳］

bsil ba'i tshal chen po'i mdo（*Mahāśītavana sūtra,* 『大寒林経』）

TD) Toh. No.562

TP) Ota. No. 180

1.2.1 ŚV-B 本和訳

[0] 帰依文と陀羅尼の機能 [0.1] 帰依文 [0.1.1] 過去、未来、現在の仏 [0.1.2]仏弟子 [0.1.3]四天王など [0.2] 『大寒林陀羅尼』の功徳と陀羅尼呪 [1] 世尊と四天王の対話 [1.1] 四天王の謁見 [1.2] 四天王と世尊の問答 [1.3] 四天王と世尊の第 2 の問答 [1.4] 『大寒林陀羅尼』の功徳 [1.5] ヤクシャ、羅刹女たちの様相 [1.5.1] 多くのヤクシャ [1.5.2] 頭が切断されたヤクシャ [1.5.3] 馬車と呼ばれる羅刹女 [1.5.4] 長首と呼ばれる羅刹女 [1.5.5] 餓鬼、ヤクシャ、羅刹 [1.5.6] 様々な神々やガルダたち [1.5.7] 鬼子母神と呼ばれるヤクシャ女 [1.5.8] 8 尊の母神	[2] 四天王の『大寒林陀羅尼』 [2.1] 毘沙門天の陀羅尼呪 [2.2] 持国天の陀羅尼呪 [2.3] 増長天の陀羅尼呪 [2.4] 広目天の陀羅尼呪 [2.5] 四天王の誓願 [3] 世尊の『大寒林陀羅尼』 [3.1] ブータと羅刹を苦しめる陀羅尼呪 [3.2] 障りをなす者が十方に去る陀羅尼呪 [3.3] 世尊に陀羅尼呪を乞う四天王 [3.4] 一切のブータを防ぐ陀羅尼呪 [3.5] 陀羅尼による地や空の変化 [3.6] 毘沙門天が唱えるべき陀羅尼呪 [4] 貴い『大寒林陀羅尼』の保持、読誦 [4.1] 傷つける者からの防護 [4.2] ヤクシャの優婆塞の歓喜 [5] 行者の心構え [6] 世尊の言葉を信じない者 [7] 四天王の帰還 [8] これまでの概要説明と四衆の歓喜 [9] 儀軌 [10] 奥付

『大寒林陀羅尼』（ŚV-B 本）内容構成

[0] 帰依文と陀羅尼の機能

[0.1] 帰依文

[0.1.1] 過去、未来、現在の仏

インド語で、Mahāshātavanīsūtra、チベット語で bsil ba'i tshal chen po'i mdo。

三宝に敬礼する。

世間の優れた賢者である仏、その者によってはじめに諸々のマントラが、ジャーンブ州で説かれた。そのところの吉祥な仏に敬礼する。

現在と過去と、未来の仏たちにわかれた。そのすべての仏たちに、また、何時でも敬礼する。

彼ら一切（の仏）という庇護に赴く。

輪を回す無上の者、ディーパンカラに敬礼する。

輝く法の王、一切を押さえつける者に敬礼する。

有名である一切智者である、蓮華上仏に敬礼する。

眼を持ち守護を為す者、非常に粉々に壊す者に敬礼する。

無上の首長である徳上名称仏に敬礼する。

太陽と月のような光を放つ、その安楽に敬礼する。

法の鏡を示し、意味を教える者（アルタダルシン仏）にもまた敬礼する。

弟子の戒律に恐れがないというものに敬礼する。

最高の三十二相を持つ者、提舎仏 puṣya にもまた敬礼する。

輝かしい悟りを完成したものに対して、毘婆尸仏 vipaśyin に敬礼する。

光り輝く尸棄仏 śikhin に敬礼する。

崇拝され、有名な毘舎浮仏 viśvabhū に敬礼する。

拘留孫仏（カクサンダ）に敬礼する。

吉祥なバラモンである拘那含牟尼仏 kanakamuni に敬礼する。

一切衆生に対して愛する心を持つ、彼の迦葉仏 kāśyapa に敬礼する。

金色をした輝く釈迦獅子[42]に敬礼する。

寛大で慈しみの心をもつ、弥勒仏にも敬礼する。

一切の仏にも敬礼して、彼らという庇護所に赴こう。

法を説く者、その全ての仏に敬礼する。

仏陀が敬う、その法に対して私は敬礼する。

[0.1.2]仏弟子

重要で高い意義を持つ、僧にもまた敬礼する。

最高の知恵を持つ声聞である、シャーリプトラに敬礼する。

---

[42] （片山 2005: 481）

最高の神通力を持つ、モッガラーナに敬礼する。
説法に対して勇気を持つ、カーティヤーヤナ kātyāyana に敬礼する。
声聞の実践にたけている、カーシャパに敬礼する。
守護する力を持つ者である、カウンディニヤ[43]に敬礼する。
よく学んでマントラを得た者である、アーナンダに敬礼する。

[0.1.3]四天王など

毘沙門天と、持国天、広目天と増長天、四方を取り囲んでいるところの、一切の偉大な王に敬礼する。
28 の優れたヤクシャの首長に、敬礼する。
師の中の長である父母仏と、神々にもまた敬礼する。

[0.2]『大寒林陀羅尼』の功徳と陀羅尼呪

彼らにまさに敬礼して、この明呪がまさに完成せよ。利益のために行う、その目的は私のために成就せよ。

憎む心で傷つける、人ではない者たちが今、中央にいる。傷つけることを望み、危害を与えることを探す者たちは、仏陀の教えを聞く事によって、慈悲心で利益を望む。人ではない者たちはあつまって賛同する[44]。ローカパーラ（護世神）たちの言葉[と]教えに歓喜した。喜びの心によって、私[の言うこと]を聞け。この『大寒林陀羅尼』は四天王による偉大な守護である。四衆たちにとって、すべて完全なものである。

ヤクシャ、羅刹、ガンダルヴァ、ナーガ、ガルダ、グフヤカ[45]、ブータ、クンバーンダ、餓鬼、プータナ[46]、ピシャーチャ、アスラ、風神、スカンダ、災難の原因、ウンマーダ[47]、キンナラ、巡り、歩き回る者、快楽に忠実なもの、黒魔術、輝きを奪うもの、アパスマーラ、悪性伝染病、一日[間]の伝染病[48]、二日[間]の伝染病、三日[間の伝染病]、

---

43 kauṇḍinya
44 TD mthun（賛同する）; TP 'thun（集まる）
45 TD gsang ba pa（guhyaka ヒマラヤにいるヤクシャの一種）, TP gsad ba po（死）ここでは前後に悪鬼の類が述べられているため、TD を採用した。以下同。
46 TD srul po（プータナ）; TP bsrul po（腐敗）
47 smyo byed（unmāda 狂気）
48 TP rim（段階）とあるが、ここでは伝染性の病気と日数が説かれていると推察されるため、TD rims（伝染病）を採用した。具体的な症状についての記述はない。後に「三日」「四日」と続くが、前の文と同様に罹病期間と解釈した（以下同）。　また、同様の表現として以下のようなものが見られる。
「若熱病。若一日若二日若三日若四日乃至七日。若常熱病。」（『法華経』「陀羅尼品第二十六」大正 9, No. 262, p.59 中）
「若患瘧病。若一日一發。若二日一發。若三日一發。若四日一發。」（『陀羅尼集經』「觀世音檀陀印呪第九」大正 18, No. 901, p.818 中）
「又復瘧病一日二日三日四日。乃至七日半月一月。」（『佛母大孔雀明王經』大正 19, No. 982, p.416

四日[間の伝染病]、人や人ではない敵意の心を持つ者、欠点を探す者、利益を望まない者、危害をなす者、尊い世尊の教えを喜ばない者、危害を望む者、不利益を望む者、安楽[49]を望まない者、成就者、安楽を望まない者、四衆の者たちのとって喜ばしくない者、危害を望む者、利益を望まない者、安楽を望まない者、成就者、安楽を望まない者、この名を言うことを喜ばない者、危害のために望む者、利益を望まない者、安楽を望まない者、成就者、安楽を望まない者たちがいて、彼らは『大寒林陀羅尼』を聞いて去り、滅せよ。恐れろ。いつも恐れるようになれ。その時、とある表面は、邪悪な心と傷つける心の[50]頭はまさに 7 片に裂ける[51]。

ヤクシャ、羅刹、ガンダルヴァ、ナーガ、ガルダ、グフヤカ、ブータ、クンバーンダ、餓鬼、プータナ[52]、ピシャーチャ、アスラ、風神、スカンダ、災難の原因、ウンマーダ、キンナラ、巡り、歩き回る者、快楽に忠実なもの、黒魔術、輝きを奪う者、アパスマーラ、悪性伝染病、一日[間]の伝染病、二日[間]の伝染病、三日[間の伝染病]、四日[間の伝染病]、人や人ではない敵意の心を持つ者、欠点を探さないもの、利益を望む者、危害を為さないと望む者、尊い世尊の話に喜ぶ者、繁栄になることを望む者、利益を望む者、安楽を望む者、成就者や安楽を望む者、この名を言うことを喜ぶ者、利益になるために望む者、利益のために望む者、安楽のために望む者、成就者や安楽を望む者は、『大寒林陀羅尼』を聞いて、ここに集まれ。恐れるな。恐れることがなくなれ。常に恐れないようになれ。恐れず妨げるようになれ。このような名を言うことの恩恵[53]や、利益[54]や、安楽[55]や、安楽に住するために、これらの『大寒林陀羅尼』によって教えられて、言われるべきである。それから『大寒林陀羅尼』は私を正に守護して。それは次のようである[56]。

> そ[の陀羅尼]は以下のとおりである。一撃よ、一撃よ、カドゥヤシ、樹の先端よ、ローガバドラ[57]の群れよ、ヒリヒリ、ドゥマティー河よ、ギリッタティ、アジャティ、カタリ、大劫よ、一切による四方 100 ヨージャナの自身を守護せよ、法を犯さない、一切の傷つける者たちに、聖者に帰依します、仏陀のマントラの偈が成就せよ、真言を保持せよ、ブラフマナは、マナドゥ、スヴァーハー。[58]

中）

49 sukha

50 TD のみ

51 TD mgo po che lab bdun du 'gas ta re
TP では sing（不明）とあるが、TD では ta re（正に）とあり、後者を採用した。

52 TP bsrul po（腐敗）とあるが、ここでは TD srul po プータナを採用した。

53 don

54 phan

55 bde ba

56 syād yathedam

57 ヤクシャの一種

58 syād ya the dan/ kha ṭe kha ṭe/ kha dhya si/ pa la ka ba ṭe / ro ga bha dri ga ṇe/ hi li hi li/ du ma te/ gri tta ti/ a dza ṭi/ ka tha ri/ ma hā ka lpe/ sa ma nte na/ tsa tu rdi shi/ yo dza na sha ta/ ā tma ra ra kṣa/ a na

[1] 世尊と四天王の対話

[1.1] 四天王の謁見

このように私は聞いた。世尊がラージャグリハに、非常に恐ろしいという寒林の大屍林に、比丘衆 250 人の大サンガの集団と共に住しておられた。それから、聖なる四天王である、多聞天[59]、持国天[60]、広目天[61]、増長天[62]と共に、大臣と共に、従者と共に、召使いと共に、使者と共に、随行者と従者と共に、唱えながら聖者たち（四天王）が夜中に訪れ、全員で[63]、大屍林である寒林にやってきた。自身の[64]色と大いなる光によって顕現してから、世尊の前に進み出た後、世尊の二足において頭を[つけて]礼拝してから、3 回右繞し、合掌し、まさに世尊に敬礼して、一方に立ったのである。一方に立ってから、四天王は世尊に偈で礼賛した。

「世間の賢者で完全な仏陀よ、勇敢なあなたに敬礼します。ゴータマよ、あなたが知っていることは、神々は知らないのです」

それから、二度も三度も、四天王は世尊に偈で礼賛した。

「世間の賢者で完全な仏陀よ、勇敢なあなたに敬礼します。ゴータマよ、あなたが知っていることは、神々は知らないのです」

[1.2] 四天王と世尊の問答

それから世尊は、四天王はこう聞いた。

「世尊は対象と認識主体があるのでしょうか。守護をお持ちなのでしょうか。世尊の身体は安楽なのでしょうか。御病気をお持ちではないのでしょうか。不安はあるのでしょうか。世尊の身体を傷つける者はいないのでしょうか。

世尊に、ヤクシャ、羅刹、ガンダルヴァ、ナーガ、ガルダ、グフヤカ、ブータ、クンバーンダ、餓鬼、プータナ[65]、ピシャーチャ、アスラ、風神、スカンダ、災難の原因、ウンマダ、キンナラ、巡り、歩き回る者、快楽に忠実なもの、悪睡眠[66]、輝きを奪う者、アパスマーラ、悪性伝染病、一日[間]の伝染病、二日[間]の伝染病、三日[間の伝染病]、四日[間の伝染病]、人や人ではない[67]者に、憎む心を持つ者と、

---

ti kra ma ṇi/ sa rba bi he ṭha ke bhya/ na mo bha ga ba te/ bud dha sya/ sid dhya ntu ma ntrapa dā/ da ra du bi dyā/ bra hma ṇo/ ma na du swā hā/

[59] vaiśravaṇa 毘沙門天(北)（‘‘phags skyes po’‘lus dan’‘lcang lo can’ここではいずれも毘沙門天を指す）

[60] dhṛtarāṣṭra 持国天(東)

[61] virūpākṣa 広目天(西)

[62] virūdhaka 増長天(南)

[63] TD mthun, TP 'thun

[64] TD kyi, TP kyis

[65] TD srul po（プータナ）, TP bsrul po（腐敗）。ここでは TD を採用する。以下同。

[66] TP ngan pa gyid

[67] TD mi ma yin, TP には ma yin を欠いている。

欠点を探す者や、利益を欲さない者や、傷つける者たちから、傷つける心を見ることができないのでしょうか」

と（世尊に）尋ねて、世尊によって四天王にこれらの言葉を話した。

「ああ、大王たちよ。私には正に一切を所有していて。対象と認識主体、守護もまた持つ。世尊の身体も安楽である。病も持っていない。不安もないのである。ああ、大王たちよ、私の身体は正に傷つける者もいないのである。

ああ、大王よ、まさに私は世間の神を伴い、マーラを伴い、ブラフマンを伴い、沙門とバラモン教と共にいる衆生と、神と人を伴う中で、如来と阿羅漢と悟りを得た仏[68]を傷つけることを考える、そういう者たちに、完全に見られないのである。

ああ、大王よ、まさにそのような、あなたの諸々の眷属は、私の眷属に傷つけていることを考えているのである」

[と、]世尊は仰った。

[1.3] 四天王と世尊の第 2 の問答

世尊に四天王はこのように述べた。

「尊敬すべき世尊よ。私たちは尋ねられました。それはなぜでしょうか。世尊に拝観したり、敬礼したり、仕え敬ったり、正に世尊に尋ねるために、私たちは世尊の御前におります」

尊敬すべき世尊が[仰った]。

「それは何故かというならば、僧院や、これら僻地の屋敷において、すべてを妨害するヤクシャ、羅刹、ガンダルヴァ、ナーガ、ヴェーダンタ、ブータ、クンバーンダ、餓鬼、プータナ[69]、ピシャーチャ、アスラ、風神、スカンダ、諸々の障害、ウンマダ、キンナラ、巡り、歩き回る者、欲望、黒魔術、輝きを奪う者、アパスマーラ、悪性伝染病、一日[間]の伝染病、二日[間]の伝染病、三日[間の伝染病]、四日[間の伝染病]、人や人ではない者、欠点を探す者や、利益[70]を考えない者や。危害を為す者どもがいるのである。

尊敬すべき世尊によって、これらの聴聞者たちもまた、皆一様にその場に住していた。世尊の[71]聴聞者たちが、夕暮れや夜明けに眠らないように実践する（教えを聞く）ために努力して住していた。

尊敬すべき世尊は、ヤクシャたちや羅刹から危害を与えられる者たちで、世尊のこの教えを信じる心を持つ者たちは少しはいるようである[72]。

---

68 （山口 2005: 136, 256）
69 TD srul po（プータナ）, TP bsrul po（腐敗）
70 phan pa
71 TP kyis, TD kyi
72 TP babs so, TD bas so

世尊のこの教えを信じる心を持つ者たちはたくさんいて、まさにその彼らである尊敬すべき世尊の聴聞者たちが、夕暮れや、夜明けに眠らないように実践する（教えを聞く）ために努力して住していて、そういう者たちに危害を与える心を持つ者がいる。
彼らを阻止するためにだまし、無信心であるヤクシャたちを信仰させて、信仰する者たちはその後何度も信仰させて、また、四衆たちに安寧と無上の幸福をなして、例外なく一切を悟りの境地に置く。この『大寒林陀羅尼』が説かれることを望まれるのである。」

[1.4] 『大寒林陀羅尼』の功徳

憎む心を持つ人ではない者は、勝者の教えを信仰しない
彼らは私によって[73]退散せよ、一切の偉大な王（四天王）はまさに私[の言うことを]を聞け//1//
まさにこの偉大な経を聞くことによっても、[害する者たちは]まさに人々に傷つけない
一切のヤクシャ、羅刹、ナーガや、ガルダやグフヤカは、//2//
利益を受け取れず何も得られない、彼ら一切を追放せよ
デーヴァ、アスラ、風神や、女神の集まりによって完成されたような、//3//
それらは美しい天界であり、炎のように明るく照らして
太陽、月のように、宝石よりはるかに輝いている//4//
私によってなされたある福徳が、その完全な輝きが邪悪な者たちを拒絶する
ある者が人を傷つけている、ブータ、クンバーンダ、羅刹と、//5//
餓鬼、プータナが、彼らは奇跡を見ることがなくて
輝きを持つ神々の、町においても彼は行かない[74]//6//
マハーブータが集まった時に、さらに彼らを王（世尊）は散らす
座っても[75]、水も風も、食べることや飲むことも王である//7//
毘沙門天の城において、いつも彼らは変わらずうろついている
大王たちの話を聞かないあるブータがいる//8//
彼はその口から出た血を集めて、すぐに完全に[血が]流れる
分かれた右側のももの割れ目から、諸々の悪瘡が出てきて、//9//
彼らは病気によって死に、ヤクシャの姿もまさに見られるようになるだろう
世間の主（世尊）によって仰った、経典からもとることを行った者は、//10//
かの一切の恐ろしいものにやって来て、頭が 7 つの欠片に割れる

---

[73] TP gas, TD gis
[74] ŚV-A 本[3.4]、[田久保 1972]注 27、[岩本 1975: 30]の場面と類似している。
[75] TP bstan（説く）, TD stan（座）

一切の大王の言葉である、話を聞かないヤクシャがいる//11//
ブータ、羅刹、すべての者がいる、一連の邪悪な者や、残りの一連の邪悪な者たちは
鉄から作られた輪の、歯のような光の武器が、//12//
それらヤクシャを滅するだろう、栄光なる偉大な王は輝かしく
また、硬くて鋭くとがった武器をもって、各々の座にまさに坐す//13//
東には持国天が守護し、南には増長天
西には広目天、北には毘沙門天//14//
そこで座っている彼らの周りには、このヤクシャたちが座っている
ライオンの姿やトラの姿、諸々の忌まわしい者たちが行ったり来たりしている//15//
ゾウの姿やウマの姿、ある者は水牛の姿を持っていて
クマやウシの姿。ヒツジやオオカミと諸々の野猪、//16//
ぶらさがった耳や、大きな耳で、片耳が裂けている
大声で現れるバァイラヴァ（ヤマーンタカ）が大地を揺るがす//17//
ロバやラクダ、犬、その上、ほかの外見をした従者たちがいる
大王の陀羅尼を、行ったり来たりしている彼らに、//18//
神の乗り物を持つ者たちによって、虚空からまさに有情になす
ヤクシャの王たちも、また、人々に安楽をなす//19//」

そ[の陀羅尼]は以下のとおりである。バカフムレー、ハシナシャシン、バナムハレー、サムハレー、ウドゥハー、サマハーラ、プラシャマミー、羅刹、人ではない者、羅刹女、バーラーミ、プレータ、マディティ、ドゥマヌシャー、マサパタハダムルナン、スティシャティ。[76]

[1.5] ヤクシャ、羅刹女たちの様相

[1.5.1] 多くのヤクシャ

大王毘沙門天[77]、カギ爪を備えている毘沙門天[78]によって
この言葉からまさに旋風を起こす。そのように山も動き出す//1//
偉大な王毘沙門天の、宝珠の乗り物を持つ者たちが
神と人の声を聞くこと、偉大な王が亡くなる時、//2//
諸々の金銀財産も輝きだす。一切の望んだ変化の姿をとった羅刹は

[76] syād ya the dan/ ba ka hu mu le/ ha shi ṇa sha shiṇ/ ba na mu ha le sa mu hā le/ u du hā/ sa ma hā la/ pra sha ma mī/ rākṣas/ a ma mu ṣhyā/ ya kṣhya ni/ bā rā mi pre ta ma bhi thi/ du ma nu ṣhyā/ ma sa pa ta ha dha mur nan/ su ti ṣhya ti/
[77] TP rnam thos bu
[78] TP mi la zhon pa

その前で走りまわる。諸々の人ではない者の姿によって//3//
恐怖で恐ろしい外見を見せる。大きくて非常に怒っていて、
憤怒しているように見えて、醜くて、髪もまた長く、ツメは長く、//4//
手に剣とハンマーを持つ。銅の[79]歯を持ち、危険である
ラクダ、トラのように大きい鼻で、恐ろしくて、血で赤く染まった腕、//5//
真っ二つに分かれた身体で、目が黄色く、身体もまたとても黄色い
汚れていて弱々しい身体で、髪を逆立たせ[80]、鉄の口を持つ//6//
凶悪な武器で攻撃する耳は弓の形の耳、大きな腹
ヘビの姿、子ウシの姿、ブタの姿、太鼓腹を持つ//7//
頭は大きくて、手は長く、耳が垂れ下がり、胸が垂れ下がる
そのような多くのヤクシャたちの、家来と従者たちによって完全にとり囲まれた//8//
幾千万のヤクシャたちは、彼らはまさに恩知らずではない
それらの家来や従者とともに、私は（毘沙門天）敬礼するために来た
ゴータマよ、勇敢なあなたに。まさに教えに従って、適切であると考えてここに来ているのです//9//

[1.5.2] 頭が切断されたヤクシャ

獰猛なハゲタカがいて、荒々しく、そして、太鼓腹で編まれた髪
人々とシカと、鳥たちの輝きを奪う者//1//
火を食べる者と、多く食べる者がおり、目が一つの者と、黄色い目と
鼻と耳が切断された者や、多くの切る物で切断された//2//
頭を持たない者と頭を切断された者がいる。身体も折れ曲がって、顔はしわが寄る
目に火が燃え上がり、足のない者がいる。人々が恐れをなしていて//3//
増大する[81]ハゲワシにおびえる。そのようにうろついて行ったり来たりする
そのような多くのヤクシャたちの、家来と従者たちによって完全にとり囲まれた//4//
幾千万のヤクシャたちは、彼らはまさに盗人ではない
それらの家来や従者とともに、私は敬礼するために来た
ゴータマよ、勇敢なあなたに
まさに教えに従って、適切であると考えてここに来ているのです//5//

[1.5.3] 馬車と呼ばれる羅刹女

---

[79] TP bzangs, TD zangs
[80] TP rdzes（逆立つ）, TD brdzes（なびかせる）
[81] TD 'phel ka（増大）, TP phel ka（不明）

わたしたちの正に一切の住居に[いる]、馬車[82]と呼ばれる最高の羅刹女は
その時、息子の力を持つ。全部で1万の数で、彼らが私の家来である//1//
彼らは敬礼するために来た
ゴータマよ、勇敢なあなたに。
まさに教えに従って、適切であると考えてここに来ているのです//2//

[1.5.4] 長首と呼ばれる羅刹女

わたしたちの正に一切の住居に、長首[83]と呼ばれる羅刹女がいる
とても黒い羅刹女と、カーリー（黒）と知られる羅刹女//1//
羅刹女たちは非常に黒いのである。それらはゴータマに賛同する
地上のヤクシャは心が広い。それらは地上の表面に住んでいて//2//
彼らたち家来と従者、完全に囲まれてここに来たのである
彼らすべてとともに。私は敬礼するために来た
ゴータマよ、勇敢なあなたに
まさに教えに従って、適切であると考えてここに来ているのです//3//

[1.5.5] 餓鬼、ヤクシャ、羅刹

私の前で走る餓鬼、ヤクシャ、羅刹たちは
大きな身体で力もまた恐ろしい程で、歯も大きくて、太鼓腹//1//
耳は垂れ下がり恐ろしく大きく、耳にはカゴ[84]が垂れ下がっている
六肢は確固たるものであり、サフラン色のハンマーのような身体で//2//
歯はギザギザ[85]で尖っていて、短いヤリ、とがった棒で怖がらせる
ゾウの頭と水差しのような鼻で、顔はトラとライオンのようである//3//
鉄の歯と、鉄の髪をもつ、邪悪な者たちで恐れさせている
手に鉄のすりこぎを持ち、手に鉄のハンマーを持つ//4//
歯はぎらつき手は長く、恐ろしい姿をして、鉄の唇をもつ
頭は大きく髪が揺れる。黒く、また、目は黄色で鼻は低い//5//
水瓶のような首と、赤い目で、眼が一つで、大きな腹を持ち
長く垂れ下がった首で、手は一つで、一本足のものと、もしくは二本足の者[がいる]//6//
顔がない者と、二面の者で恐ろしく、人々を恐れさせた
手には銅のこん棒を持ち、三叉戟で恐れさせて威嚇する//7//

---

82 shing rta
83 TP 'grin rigs（戦車）だが、TD mgrin rigs（長首）を採用した。
84 TD カゴ slo ma, TP 弟子 slob ma ここでは TD を採用した。
85 TD ギザギザの stsub, TP bstsub ここでは TD を採用した。

恐れさせて威嚇して、邪悪な者たちは恐れさせている
恐れさせていて、話しをする。心もまた混乱させて//8//
気を狂わせんばかりに恐れさせる。彼らから輝きを奪う
彼らは世間を恐れて、大力を拠り所として苦しめさせる//9//
1064 人の者たちは、偉大な王の前で走り回る
そのような多くのヤクシャの、家来と従者たちによって完全にとり囲まれた//10//
彼らは敬礼するために来た
ゴータマよ、勇敢なあなたに。まさに教えに従って、適切であると考えてここに来ているのです//11//

[1.5.6] 様々な神々やガルダたち

サガの星宿の 5 番目の月（大夜叉将パンチカ）や、ライオンの群れや、乱暴な者とさらに恐ろしい力を与える者と、全体の者と富を持つ者//1//
栴檀や優れた願望や、チトラセーナ citrasena（ガンダルヴァ）やトルマ（食物）を持つ者
願いをかなえるスブーティや、蓮や、優れた王[86]//2//
全ての願望を手に入れる者と、勝者であり王である者で
ジャンバラの良い全員の子供た、蓮の中の最高の蓮に喜ぶ者//3//
針の時間が毛深い者、手に最高のブラフマンや
サトウキビの刃や長いヤリを持つ者や、力強い宝石を見る者や//4//
徳釈迦竜王、マハーカーラ、服を持つ者と、ラバの２つ[を持つ者]
竜王に守られる、大きな枝の偉大な神通力//5//
ガルダは大きな力を持つ。すべての鳥の最高の者である
鳥の姿によって動いていて、すべての海の中で戦う//6//
一切のデーヴァ､アスラ、ガンダルヴァたちは恐れて、
また、よく母と父と信じる者たち、一切の彼らはここに居る
ゴータマよ、勇敢なあなたに。まさに教えに従って、適切であると考えてここに来ているのです//7//

[1.5.7]鬼子母神とよばれるヤクシャ女

ハーリーティー（鬼子母神）とよばれるヤクシャ女は、恐れさせる大力がある
その子らは 500 人で、恐ろしいヤクシャで邪悪な呪文を保持する//1//
私自身の眷属がいて、彼らは礼拝するためにいるのである
ゴータマよ、勇敢なあなたに。まさに教えに従って、適切であると考えてここに来

---

[86] TD shin tu rgyel 優れた王, TP shin tu rgyes

ているのです//2//

[1.5.8] 8 尊の母神

マガダにおいて一切を見る母神、ベナレスでは蓮を保つ[87]母神
ヴァイシャーリーに勝者たる母神、マッラの国はシャカムニの妻（ヤショーダラ）たる母神が守り住む//2//
ラージャグリハに女財宝神、カピラヴァストゥにはバイラヴァ母神がいて
タマーラには富を持つ母神、ミティラー（インド、ネパールの地方）には一切勝者たる母神がいるが//3//
この 8 人の偉大な母神が、ヤクシャの優れた族長たちであり
偉大な奇跡の福徳である、彼ら一切の偉大な力を持つ者は//4//
信心のあつい心を持つ者である、完全な仏陀に庇護所を求め
彼らとともに集まって、大力をもつ大王によって//5//
正等覚者の教えに。人々に慈しむために
ヤクシャ、ブータ、餓鬼や、敵意を持ち傷つける者たちを追い払う
人ではない者たちを追い払い、この守護者はまさに訳に立つ//6//

[2] 四天王の『大寒林陀羅尼』

[2.1] 毘沙門天の陀羅尼呪

それから毘沙門天王は、手を合わせ座って言った
「怒り、また、恐れさせるすべての化身は。すべて解脱して煩悩を持たない//1//
ゴータマよ、勇敢なあなたに。まさに教えに従って、適切であると考えてここに来ているのです
あなたに神や成就者や、バラモンはすべて敬礼し//2//
幾千万億ものヤクシャも到達してから、
彼の周りを一周してから、合掌する//3//
私はまさに毘沙門天王である。北の方角を支配して
世間を守護して歩き回り、ヤクシャ、星宿、ウンマーダ//4//
アパスマーラやキンナラ。スカンダや悪性の伝染病や
そのような 4 日の[間苦しむ]感染症。彼らは私によって阻まれることになるでしょう//5//

そ[の陀羅尼]は以下のとおりである。ウハ、ハマ、ウハ、ハマ、マハーハマ、ウハ、マハーハマ、サラムジャム、イリーミリー、イリーミリ、キリー、メー、レー、チ

[87] padmaka

リティ、ウビ、ウティビ、ビティリヤー、マタ、マリ、マニンドゥイェー、スヴァーハー。[88]

毘沙門天が支配する土地の主である醜い姿の偉大な王毘沙門天の場所に行くようになれ。ヤクシャ、星宿、ウンマーダや、アパスマーラや、キンナラや、巡りや、歩き回る者や、欲望や、黒魔術や、輝きを奪う者たちは退けましょう。神々の中でも神々の王、ヴァーサヴァ vāsava 王とよばれています。彼に、私は敬礼します。さらに世尊御自身に敬礼して、正等覚者で、勇敢で、一切を知り全てを見通す、あなたに敬礼します。非常に勇敢な、あなたに敬礼します。まさに教えに従って、適切であると考えてここに来ているのです。」

[2.2] 持国天の陀羅尼呪

それから持国天王が、手を合わせ座って言った

「法王の光を放つ。仏陀よ、あなたに敬礼します//1//
ゴータマよ、勇敢なあなたに。まさに教えに従って、適切であると考えてここに来ているのです。
ゴータマよ、あなたが知っていることは、神々は知らないのです//2//
羅刹は見た時非常に恐れ、6 万と 4 回、
彼の周りを一周してから。合掌します//3//
私はまさに持国天王。東の方角を支配して、
世間を守護して歩き回り、羅刹やピシャーチャ、
ガンダルヴァや風神たち、彼らは私によって阻まれることになるでしょう//4//

そ[の陀羅尼]は以下のとおりである。イティ、ミティ、クラテー、プラテー、マティビ、ウマニ、アッケー、マッケー、ナッケー、アトゥミ、バトゥミ、マベー、イリティ、ピリティ、スヴァーハー。[89]

偉大な王持国天の場所に行くようになれ。羅刹や餓鬼や、ガンダルヴァや、風神や、キンナラや、輝きを奪う者たちは退けましょう。神々の中でも神々の王、ヴァーサヴァ vāsava 王とよばれています。彼に、私は敬礼します。さらに世尊御自身に敬礼して。正等覚者で、勇敢で、一切を知り全てを見通す、あなたに敬礼します。非常に勇敢な、あなたに敬礼します。まさに教えに従って、適切であると考えてここに来てい

---

[88] syad ya the dana/ u ha ha ma/ u ha ha ma/ ma hā ha ma/ u ha ma hā ha ma/ sa la mu jaṃ/ i lī mi lī ilī mi li// ki lī me le/ ci ri ṭi/ u bhi/ u ti bhi/ bi ti li yā/ ma ṭa ma li/ ma nin dye svā hā/

[89] syad ya the dan/ i ti mi ṭī/ khu ra ṭe/ phu ra ṭe/ ma ti bi/ u ma ṇi/ akke/ ma kke/ na kke/ aṭu mi/ ba ṭu mi/ ma bhe/ i ri ṭi/ pi ri ṭi sbā hā/

るのです。」

[2.3] 増長天の陀羅尼呪

それから増長天王が、手を合わせ座って言った

「世間を守護して歩き回り、一切の世間に利益をなす。//1//

ゴータマよ、勇敢なあなたに。まさに教えに従って、適切であると考えてここに来ているのです

クンバーンダ、餓鬼、プータナたちは、//2//

6 万と 4 回、彼の周りを一周してから。合掌します。

私はまさに増長天王。南の方角を支配して、//3//

世間を守護して歩き回り、ブータ、歩き回る者、輝きを奪う者、

クンバーンダ、餓鬼、プータナたち、彼らは私によって阻まれるでしょう。//4//

そ[の陀羅尼]は以下のとおりである。アレー。イレー、レー。カレー、キレー、レー。クパ、クパサ。シレー、シレー、レー。シレー、レー、レー。レー、レー、レー、レー、レー。ヒティ、シレー。マティ、スマティ。ス、スマティ。ス、ス、ス、ス。ス、スマティ。ヒリシャ、ヒリシャ。スヴァーハー。[90]

偉大な王増長天王の場所に行くようになれ。

クンバーンダや、餓鬼や、プータナや、ブータや、歩き回る者や、輝きを奪う者たちは退けましょう。神々の中でも神々の王、ヴァーサヴァ vāsava 王とよばれています。彼に私は敬礼します。さらに世尊御自身に敬礼します。正等覚者で、勇敢で、一切を知りすべてを見通す、あなたに敬礼します。非常に勇敢な、あなたに敬礼します。まさに教えに従って、適切であると考えてここに来ているのです。」

[2.4] 広目天の陀羅尼呪

それから広目天王が手を合わせ座って言った

「闇となった世間において、世尊は道などをお説きになった//1//

ゴータマよ、勇敢なあなたに。まさに教えに従って、適切であると考えてここに来ているのです

世間などにおいて太陽と月のような、強力な宝石の神髄[の世尊]に//2//

竜やガルダ、グフヤカは

6 万と 4 回、彼の周りを一周してから、合掌します//3//

---

[90] syād ya the dan/ a le/ i le le/ ka le ki le le/ ku pa ku pa sa/ si le si le le/ si le le le/ le le le le le/ hi ti si le/ ma ti su ma ti/ su su ma ti/ su su su su/ su su ma ti/ hi li ṣha hi li ṣha sbā hā/

私はまさに広目天王。西の方角を支配して
世間を守護して歩き回り、竜やガルダ、グフヤカ、
強力なアシュラ王。彼らは私によって阻まれることになるでしょう//4//

そ[の陀羅尼]は以下のとおりである。ダゲー、ダゲー、ウバティェー、パテー、アタ、カムッテー、ビマ、ビダマ、ビダダマ、ビダダマニ、アビナメー、グッタブテー、ダラピイェー、バラスルドレー、ティティレー、ティレー、レー、レー、レー、レー、レー、スヴァーハー。[91]

偉大な王広目天王の場所に行くようになれ。
ナーガやガルダや、アスラや、輝きを奪う者たちは退けましょう。神々の中でも神々の王、ヴァーサヴァ vāsava 王とよばれています。彼に、私は敬礼します。さらに世尊御自身に敬礼します。正等覚者で、勇敢で、一切を知りすべてを見通す、あなたに敬礼します。非常に勇敢な、あなたに敬礼します。まさに教えに従って、適切であると考えてここに来ているのです。」

[2.5] 四天王の誓願

それから四天王は上着の片方を肩にかけて、右側の膝で地面にひざまずき、合掌してから、まさに世尊に敬礼し、同時に声をそろえて次の言葉を申し上げた。

「尊敬すべき世尊よ、まさにこの『大寒林陀羅尼』は偉大な王の守護であり、一切の四衆のために確かにあまねく広がる。ヤクシャや羅刹から傷つけられている時、退け、四衆たちを見守り、防御し、[邪悪な者から]隠し、安寧になり、幸福に暮らすようにするのである。」

このように[世尊に]述べた。そして世尊は四天王にこのように答えた。

「ああ、偉大な王たちよ。[あなた方によって]保持されている明呪の偉大な王は理解した。私によって保持されている『大寒林陀羅尼』があると理解している。
ああ、偉大な王たちよ、さらにその上、私が『大寒林陀羅尼』で喜ばしい明呪の大王を唱えることによって、それを確かによく聞き、心に保ちなさい。と私は述べる。」

このように世尊は命じて、四天王は世尊によって言われたことを聞いた。

[3] 世尊の『大寒林陀羅尼』

[3.1] ブータと羅刹を苦しめる陀羅尼呪

それから世尊の宝のような右手によって法衣をひろげて、彼ら一切のブータに、仏陀

---

[91] syād ya the dan/ da ge da ge/ u ba ti ye/ pa ṭe/ a ṭa/ ka mṭṭe/ bi ma bi da ma/ bi da da ma/ bhi da da ma ni/ abhi na me/ gtsthsa bhu te/ da la phi ye/ ba ra su rdre tsi tsi le/ tsi le le le le le le sbā hā/

がこのように仰った。

「私はこれを教えなければならない。偉大な王毘沙門天に与えられるべきである。一切の者たちに理解させるべきである。」

それから正等覚者仏陀は、この明呪を仰った。

そ[の陀羅尼]は以下のとおりである。ヒリー、ヒリー、ビシニッケー、壊されるな、広がる、広がる、ティラッケー、バキータケー、ダリティナ、ディナダ、プティ、ププティ、ググティヤ、グティヒタ、カーンティ、私の望みよ、スヴァーハー。[92]

世尊はこの偉大な明呪の女王を仰った時に、この大地は揺れ、一切のブータは非常に震えて苦痛の叫びをあげ、大きな声で「苦しい」と叫んだ。羅刹たちもこのように言った。このように、まさに正等覚者仏陀は衆生たちを慈んで、一切のブータに苦痛を与える。このような明呪は[衆生たち]の守護をなす。

[3.2] 障りをなす者が十方に去る陀羅尼呪

それから一切を知る師は、衆生たちすべてに慈しんで、ヤクシャ、羅刹、ガンダルヴァや、ナーガ、ガルダ、グフヤカ。ブータ、歩き回る者、輝きを奪うもの。クンバーンダ、餓鬼、プータナや、アスラや、敵対する者、ヴェーターラや、アパスマーラやキンナラ、スカンダや悪性伝染病や。同様に、バラモン、羅刹や、ウンマーダ、3 日間苦しむ伝染病。同様に 4 日間[苦しむ伝染病]などは、怖れて非常に震えあがり、十方に走り去る様をご覧になって、まさにまた彼らに慈しみからこの明呪を仰った。

そ[の陀羅尼]は以下のとおりである。ヒリマカ、ティリ、カ、カ、カ、タマター、大いなる成就、ハドリ、ウタタニ、ダ、タ、ダ、タ、ダティリ、ダムッテー、ドゥドゥリ、ダダリ、ダラミラ、キリカーイェー、カタバレーニ、ススマーレー、スヴァーハー。[93]

[3.3] 世尊に陀羅尼呪を乞う四天王

偉大な秘密の真言であるこの偉大な明呪にもとることはしてはいけない。世尊の述べられた法にすべて完全に理解せよ。[さもなくば]あなたは一切の身体が滅して死んだ時、低い趣[94]に卑しい存在として転落し、地獄の衆生たちとして生まれ、輪廻する。

---

[92] syād ya the dan/ hi lī hi lī/ bhi si ni bkke/ a ha ra ye/ ta ma ti/ ta ma ti/ ti la bkke/ ba kī ta ke/ da ri ti na/ ddhi na da/ phu ṭyi phu phu ṭyi/ gu gu ṭya/ gu ṭyi hi tsa kā nti/ mā mā kān tī sbā hā/

[93] syād ya the dan/ hi ri ma kha/ ti ri kha kha ka ṭa ma ṭā/ si ddha mahā/ had ri/ u ṭa ta ni/ da ṭa da ṭa/ da ti li/ da mtte/ da mtte/ dhu dhu ri/ da da ri/ da ra mi ra/ ki ri kā ye/ ka ta ba re ṇi/ su su mā le sbā hā/

[94] 六道輪廻の行き先の下層である、地獄道、餓鬼道、畜生道と思われる。

それから四天王は、今までに聞いたことがない、この世尊の偉大な王の明呪を聞いて、驚いて畏れおののき、悲しくなり落ち込み、合掌して世尊に敬礼し、同時に声をそろえて次の言葉を申し上げた。

「敵意を持ったブータがいなくなる、この優れた明呪を仰ってください。世間に安楽をなす、明呪を私たちにどうかお説き下さい。」

「その場合、この明呪は以下のようである。世間主（四天王）は私の言うことを聞け。」

そ[の陀羅尼]は以下のとおりである。ウフハラ、クリジダーブヤ、マスラベーラ、アダドゥヤーバドゥヤー、アダドゥヤーバテー、ナッダダディェー、マルドゥヤ、バディマルンドゥヤパラ、スヴァーハー。[95]

[3.4] 一切のブータを防ぐ陀羅尼呪

世尊は一切のブータを退けるこ[の陀羅尼]を保持することを告げた。

そ[の陀羅尼]は以下のとおりである。イリ、イリ、ミリ、ミリ、キリ、キリ、バナラ、ニラパヤ、ブ、ブ、ブラ、ティルー、プ、プ、プラ、ガシャリー、ラウカダヤマラ、クリ、クリパヤ、スヴァーハー。[96]

[3.5] 陀羅尼による地や空の変化

まさにこの偉大な明呪の女王を一年の間、適宜分けて[97]、そしてすべてのブータを追い払い、一切の利益の成就があるのである。

それからヤクシャ、羅刹、ガンダルヴァたちから傷つけられた者たちが、以前聞いたこのような世尊の偉大な女王の明呪を聞いて、以前聞いたこのような四天王の守護もまた聞いて、恐れおののき、悲しんで、恐れてから地面に隠れ、あらゆるところに隠れる。完全に隠れるのであるのである。それから世尊によって大地を金剛に変化させて、それらが四方に完全に広がるのである。

それから四天王は、四方において火の塊に変わって、それから空に駆け上った。その後、世尊は空を金色に変化させた。

[3.6] 毘沙門天が唱えるべき陀羅尼呪

それからローカパーラ（護世神）である偉大な王毘沙門天は、神とガンダルヴァを目

---

[95] syād ya the dan/ u hu ha la/ ku li dzi ba a bhu ya/ ma su ra be la/ ada dyā ba dyā/ ada dyā ba te/ nad da bda dye/ ma ru dya/ ma ru dya/ ba di ma rung dya pha la sbā hā/

[96] syād ya the dan/ i li i li/ mi li mi li/ ki li ki li/ ba na ra/ ni la pa ya/ bhu bhu bhu ra/ thi rū phu phu phu ra/ ga sha lī/ rau kha da ya ma la/ khu li khu li pa ya sbā hā/

[97] TP では'tshams だが、TD mthams を採用した。

の前に招集して説いた。その後、虚空に上ってから、ヤクシャや羅刹から傷つけられ、苦しめられている者たちを引き離して、一切衆生に慈悲[を与え]、また、一切のブータを退散させ、四衆たちを見守り、防御し、[邪悪な者から]隠し、安寧になり、幸福に暮らすようにするため、この明呪をなすのである。

> そ[の陀羅尼]は以下のとおりである。ギミ、ギミ、ギミ、ギミ、ギナ、ギナ、ギナ、ギナ、ナキ、ミナキ、ニシャ、ニシャ、ニシャ、ウダー、ディシュヴァ、ディシュヴァ、ビディシャ、一切のビディシャ、アディパティ、ギリ、ビサ、ジャニブミパティ、アリリー、アリリー、キリリー、キリ、キリリー、キリ、キリリー、キリ、キリリー、キリ、キリリー、キリ、キリリ、キリ、リ、リ、リ、リ、リ、キリ、リ、リ、リ、リ、リ、リ、リ、アッディ、ナッディ、クナッディ、偉大なクナッディ、クラッディ、クラッディ、ク、クラッディ、偉大なクラッディ、フル、フル、ル、フル、ル、ル、フル、ル、ル、ル、フル、ル、ル、ル、ル、フル、ル、ル、ル、ル、ル、ル、ル、ル、ル、ハラ、ハラ、ヒリ、ヒリ、ラハ、ハル、フレー、フレー、ウルダドゥィ、フレー、ウハヒレー、ヒラヒレー、フルヒ、フル、フル、フル、フル、フレー、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、スヴァーハー。[98]

偉大な王毘沙門天は守護しろ。神々の中における神の王であるバーサヴァ vāsava と呼ばれるものがいて、その時私は敬礼するのである。

さらに、世尊自身に敬礼して、[以下のように申し上げた。]

「完全な悟りに対して勇気を持つ者で、全知全能のあなたに敬礼する。

完全な悟りの最高の御方、偉大な知恵に敬礼する。

ゴータマよ、あなたが知っていることは、神々は知らないのである。

清浄で勇敢なあなたに敬礼する。まさに教えに従って、適切であると考えてここに来ているのです。」

ヤクシャや、羅刹や、ガンダルヴァから傷つけられる者たちが、この名前自身にふさわしいほかの場所に行け。

もしこの名前自身に[ふさわしい]、他の場所にすぐに行かなければ、彼らには即座に大きな恐怖となり、伝染病に罹患した時、それによって頭や心臓が 100 に割れる。そしてその時、即座に多くの苦しみとなる。そして追い払われ、そして永遠に続くだろう。

---

[98] syād ya the dan/ gi mi gi mi gi mi gi mi/ gi na gi na gi na gi na/ na khi mi na khi/ ni ṣha ni ṣha ni ṣha/ u ba a/ di shwa di shwa/ bi di sha/ sarba di shwa/ a dhi pa ti/ gi li/ bi sa/ dza ni bhu mi pa ti/ a li lī/ a li lī/ ki li lī/ ki li ki li lī/ ki li ki li lī/ ki li ki li lī/ ki li ki li lī/ ki li ki li lī/ ki li ki li li/ ki li li li li li li/ ki li li li li li li li li/ ad dyi/ nad dyi/ ku nad dyi/ ma hā ku nad dyi/ ku lad dyi khu lad dyi/ khu khu lad dyi ma hā khu lad dyi/ hu lu hu lu/ lu/ hu lu lu lu/ hu lu lu lu lu/ hu lu lu lu lu/ lu/ hu lu lu lu lu lu lu lu lu lu / lu/ ha la ha la/ hi li hi li/ la ha ha lu/ hu le/ hu le/ u lda dyi/ hi le/ u ha hi le// hi la hi le/ hu lu hi/ hu lu hu lu hu lu/ hu lu hu le/ ha ha ha ha ha ha/ sbā hā/

腫瘍を生じさせる悪鬼がいて、夜明けの薄明かりの時に出てくる悪鬼、影の姿でいる悪鬼、彼らもこの『大寒林陀羅尼』を聞いて、この名前自身にふさわしい場所に行け。

もしこの名前自身に[ふさわしい]、他の場所にすぐに行かなければ、彼らには、直ちに大きな恐れや、伝染病に罹患した時、それによって頭や心臓が 100 に割れ、そしてその時、直ちに多くの苦しみとなって。そして追い払われ、そして、永遠に続くだろう。

まさに輝き[を失わせ]、血を食べる者。一日中うろつく者。彼らもまた、最高の教えや話されら経を聞いて消えて、ピシャーチャ、ヴィデーハ、スカンダや、恐ろしいブータ、プータナたち。彼らもまた、最高の教えや話されら経を聞いて、神やアスラ、風神や、まさにガンダルヴァなどの悪鬼、ブータやピシャーチャや、同様にまたヤクシャや羅刹たち、みな動揺し、みな恐れおののく。みな恐れて[大地が揺れて]地震となる。恐ろしい悪鬼で怖がらせる者たちは、落ちて完全に負ける。大地もまた揺れる。

名高いいくつかの呪文を唱えて、餓鬼とクンバーンダと、敵の悪鬼を負い散らすこれらの経を聞いて、恐ろしく獰猛な者たちは礼拝した。

仏、法、そして僧に、信心深いヤクシャがいる。彼らは喜び心地良くなり、非常に歓喜した。

[4] 貴い『大寒林陀羅尼』の保持、読誦

[4.1] 傷つける者からの防護

それから四天王が現われて、世尊がいらっしゃる場所に行って、近づいてから世尊の足に額づいて礼拝し、合掌してから世尊に敬礼し、一斉に声を合わせて世尊に次の言葉を話した。この『大寒林陀羅尼』[をお説きになった] 尊敬すべき世尊に、四天王はおみ足に礼拝した。

「四衆たちを見守り、また、完全に防護し、ヤクシャや羅刹たちから傷つけられることから確かに打ち勝つのである。

尊敬すべき世尊よ。比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、誰であっても守り、彼ら（四衆）もまた、この『大寒林陀羅尼』を保持する。憶持し、読誦して、完璧なものとする。

尊敬すべき世尊よ。比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、まさに誰であっても自身を守り、自身を[邪悪な者から]隠し、他者を守り、他者を隠すためにこの『大寒林陀羅尼』を保持し、説き、読誦し、完璧なものとし、そこにおいてヤクシャ、羅刹から傷つけられている者たちが周囲にまた存在していないならば、傷つけられる者がどうして見られると思うだろうか。

彼らは１つのしるしに存在し、その時さらに、ヤクシャ、羅刹から傷つけられている者たちが周囲にまた存在していないならば、彼らはいついかなる場所でも、そこに住して見たり話したりすることも、どうしてできようか。

尊敬すべき世尊よ。どこにおいても人ではない存在の攻撃をされている者たちの前に、この大寒林の経を読誦するならば、それはたちどころに幸福になり、不幸ではなくな

り、安楽を得て解放され、人ではない存在たちはそこにおいて退散せず、すぐに死ぬ[99]。

尊敬すべき世尊よ。まさにこの『大寒林陀羅尼』はそのために貴いのである。

尊敬すべき世尊よ。比丘あるいは比丘尼、あるいは優婆塞あるいは優婆夷は、誰であっても、この『大寒林陀羅尼』を保持し、身に付け、読誦し、完成させ、身につける。」

[4.2] ヤクシャの優婆塞の歓喜

まさにその時、信心の[心を持つ] 優婆塞としてのヤクシャたちは、四天王の場所に来てから名を言って[こう話した]。

「ああ、大王たちよ。比丘あるいは比丘尼、あるいは優婆塞、あるいは優婆夷のとある者は、自身を守り、自身を隠し、他者を守り、他者を隠すために、この『大寒林陀羅尼』を保持し、憶持し、読誦し、完成し、身につけるのである。」

このように確かに言ったのである。

「尊敬すべき世尊よ。信心の[心を持つ] 優婆塞としてのヤクシャたちは、毘沙門天大王の城を訪れ、偉大な王毘沙門天の前でヤクシャたちは集まり、一切のブータたちの中でまた声をあげて、その時彼らは確かに喜んだ。

尊敬すべき世尊よ。まさにこの『大寒林陀羅尼』はそのために貴いのである。

世尊よ。比丘あるいは比丘尼、あるいは優婆塞あるいは優婆夷は、誰であっても、自身を守り、自身を隠し、他者を守り、他者を隠すために、この『大寒林陀羅尼』を保持し、憶持し、読誦し、完璧なものとし、身につけ、彼を清浄なものにするだろう。

[5] 行者の心構え

アルコールを飲まず、心に保ち、注意深くあり、食物を次に述べる 5 種類にする[100]。未精製の砂糖（粗糖）と、ハチミツと、ゴマと、[動物の]肉と、魚の肉を完全に避けるべきである。

それはなぜかというと、尊敬すべき世尊よ。ヤクシャや、羅刹たちによって傷つけられる者たちは、この『大寒林陀羅尼』を保持し、憶持し、読誦し、完璧なものとし、身につける。その場合、まさに[傷つける者たちを]滅ぼし、永遠にその状態が続くマントラであり、彼らは打ち負かされたので、守護神を礼拝するのである。

尊敬すべき世尊よ。比丘あるいは比丘尼、あるいは優婆塞、あるいは優婆夷は誰であっても、この『大寒林陀羅尼』を保持し、憶持し、読誦し、完璧なものとし、身につける。そこにおいて、信心の[心を持つ] 優婆塞としてのヤクシャたちに、服や、食物や、

---

[99] TD では gud du（別の場所に）が挿入されているが、文脈からみて、挿入されていない TP を採用した。

[100] snying po lnga…「bu ram 砂糖, sbrang rtsi ハチミツ, til mar ゴマ, zhun mar バター, lan tshva ste lnga（lan tsha ba 塩）」「bu ram 砂糖, sbrang rtsi ハチミツ, til dmar ゴマ, tshwa 塩, shing tog 果物」

寝床や、座や、病気の薬や、諸々の日用品によって喜ばせる。

そのために、尊敬すべき世尊よ。まさにこの『大寒林陀羅尼』はそのために貴いのである。

[6] 世尊の言葉を信じない者

尊敬すべき世尊よ。世尊の言葉に不信心な仏教徒や、ひどく嫌がる者や、傷つける者や、功徳を欲さない者や、成就や安楽を欲さない者は、この『大寒林陀羅尼』を保持し、憶持し、読誦し、完成させ、結びつける故に、まさに功徳は成就をなさず、人ではない存在たちは、不慮の死をとげて、苦しみのあまり現れなくなり、滅び、ついには確かに去る。

それはなぜかというと、まさに彼ら傷つける者や、功徳を欲さない者や、成就や安楽を欲さない者のために、まさに彼ら誤った見方をする者たちを追い出すからである。

尊敬すべき世尊よ。世間において衆生たちを見守り、防御し、[邪悪な者から]隠すために、四天王が守護し、何であっても適した者は守護する。」

まさに彼らの内には、この素晴らしい第一の最高のもの（『大寒林陀羅尼』）がある。それから世尊に四天王は以下の偈を唱えた。

世尊はこれらの経典を説いた。完全に守護し
まさに安寧をなす時に、羅刹たちもまた[衆生を]傷つけない//1//
これらの経典はどの部分も、世尊によって説かれ
欠けることなく完全に全うして[読誦して]、完全に一切を憶持するならば//2//
ヤクシャや餓鬼、ブータ、クンバーンダ、羅刹や
ウンマーダ、歩き回る者、ナーガたちや、それらと等しい者たちは傷つけない//3//
その時、人ではない存在や邪悪な者は、直ちに散り散りに離れるだろう[101]
その時何によっても傷つけられない。その場合には死ぬことはない[102]//4//

[7] 四天王の帰還

四天王は「尊い者（仏陀）に敬礼します。」と言った。世尊の足に礼拝して、たちどころに消え去った。

[8] これまでの概要説明と四衆の歓喜

それから世尊はその夜をお過ごしになって、夜中に住していた比丘サンガ、優婆塞たちのために、夜明けからお話しになった。

「比丘たちよ。昨晩[103]、四天王と共に、大臣と共に、従者と共に、召使いと共に、使者

---

[101] TD mchi（離れる）, TP （死ぬ）'chi　ここでは TD を採用した。
[102] TD chi bar（死ぬ）, TP 'the bar（不明）ここでは TD を採用した。

と共に、随行者と従者と共に、唱える聖者たち（四天王）が夕暮れに訪れ、全員で[104]、大屍林である寒林にやってきた。

自身の光によって輝いて、毘沙門天と、持国天と、広目天と、増長天たちがそこに来て、私の足に額づいて敬礼して、一方に立ったのである。一方に立ってから、四天王はこの『大寒林陀羅尼』を私に向って読誦しながらやって来たのである。

「あなた方はそれをよく聞いて、心に憶持しなさい。」と私は言った。

「世尊よ。そのようにいたします。」と[四天王は]答えた。」

比丘たちは、世尊によって言われたことを聞いた。そして世尊は、比丘や、比丘尼や、優婆塞や、優婆夷たちにこの『大寒林陀羅尼』を広く説いた。世尊によって言われたことにより、比丘や、比丘尼や、優婆塞や、優婆夷たちは喜び、世尊によってそのように述べられた時、即座に喜ばれたのである。

[9] 儀軌

この儀軌は 3 つの白いもの（ミルク、ヨーグルト、バター）を食べ、よく浄化をして、断食[105]して、戒律を保つことと、大きな考えをもって、四天王の姿を黄土色、もしくは赤土によって書く場合には。あらゆる香りを持った四角いマンダラを完成させて、仏の目の前で 3 回[この陀羅尼を]唱えるべきである。『大寒林陀羅尼』を終わる。

[10] 奥付

シーレーンドラボーディ Śīlendrabodhi、ジュニャーナシッディ Jñānasiddhi、シャーキャプラバ Śākyaprabha、翻訳官イェーシェーデーYe shes sde が翻訳して、改定することによって完成した。後に、ショヌペル gZhon nu dpal[106]によって、大翻訳官の経典から編纂された。

---

[103] TD mdangs sum（昨晩）, TP mdangs gsum（三夜）ここでは TD を採用した。
[104] TD mthun 合わせて, TP 'thun 集まって
[105] TP snyung（病気）, TD smyung（断食）
[106] The Blue Annals I p.98, II p.499

2. 『成就法の花環』「五護陀羅尼成就法」和訳

ここでは、『成就法の花環』に説かれている五護陀羅尼明妃の成就法（SM No.194～201, 206）の和訳を取り上げる。以下、和訳に際して使用したテキストや参考文献、内容構成および和訳について述べよう。なお、各和訳の見出しと冒頭に示される内容構成表は、いずれも筆者が作成したものである。

2.0 使用テキスト

［サンスクリット・テキスト］

A) Bhattacharya,Benoytosh, ed., *Sādhanamālā vol II, G.O.S. No.41*, Baroda Oriental Institute, Baroda, 1968

［サンスクリット写本］

B) *Sādhanasamuccaya*（東京大学所蔵[Matsunami1965: No.451]）
C) *Sādhanasamuccaya*（東京大学所蔵[Matsunami1965: No.452]）
D) *Sādhanasamuccaya*（東京大学所蔵[Matsunami1965: No.453]）
E) National Archives, Kathmandu, No.3-387

［チベット語訳］

Ota. No.4074 སོ་སོར་འབྱང་མ་ཆེན་མོའི་སྒྲུབ་ཐབས་（SM No.194）
Ota. No.4406 སོ་སོར་འབྱང་མ་ཆེན་མོའི་ཟློག་ཐབས་（SM No.195）
Ota. No.4407 སོ་སོར་འབྱང་མའི་ཟློག་ཐབས་（SM No.196）
Ota. No.4075 རྒྱ་བྱ་ཆེན་མོའི་ཟློག་ཐབས་（SM No.197）
Ota. No.4076 ལྷོ་ང་ཆེན་མོ་རབ་ཏུ་འཇོམས་པའི་ཟློག་ཐབས་（SM No.198）
Ota. No.4077 གསང་སྔགས་ཀྱི་རྟེས་སུ་འཇུག་བ་ཆེན་མོའི་ཟློག་ཐབས་（SM No.199）
Ota. No.4078 བསེལ་བའི་ཚལ་ཆེན་མོའི་ ཟློག་ཐབས་ （SM No.200）
Ota. No.4079 དེ་ནས་གང་མས་ངག་གཞན་གྱི་ལྷ་ཕྱ་ལེགས་པར་བསྟན་པར་བྱ་བ（SM No.201）
Ota. No.4418 བསྡུང་བ་ལྷའི་ཚོ་ག（SM No.206）

2.1 No.194「大随求明妃成就法」

[0] 帰依文
[1] 核となる種字
[2] 大随求明妃の観想
[3] 3 つの文字の布置
[4] 真言

SM No.194
「大随求明妃成就法」内容構成

[0]　帰依文

大随求明妃に帰依する。

[1]　核となる種字

以前に話された方法によって、空性を観想した直後にア（a）字から生じた月［輪］において、黄色のプラム（praṃ）字から生じた、他人のために作られた色々な種類の光線を変化させて、大随求明妃を、直ちに自分自身として観想するべきである。

[2]　大随求明妃の観想

［その女神の体色は］黄色で、四面で、三眼で、八臂で、中央の顔に黄色、右［の顔］に白、後ろ［の顔］に青、左［の顔］に赤を、右の臂によって剣・輪・三叉戟（さんさげき）・矢を持ち、左の臂によって斧・弓・羂索・金剛を持ち、二重蓮華の［上の］月［輪］の［上の］座において遊戯坐で坐っていて、赤く輝いているマンダラ（日輪）のような、一切の装飾品で飾られた、きらびやかな衣服を身にまとい、白色の上着を着て、様々な宝石の王冠［をつけている］。

[3]　3 つの文字の布置

そのように考えて、その時、身口意の月輪において、オーム、アーハ、フームという、白と黄と青の３つの文字を観想すべきである。その時、乳房の間において月輪の上にあるプラム字を考えて、様々な種類の女神たちによって自分自身が供養されていると見てから、疲れが生じない程度に、その程度に観想すべきである。

[4]　真言

疲れた時には、自らの心臓の月［輪］において、最高の真珠の首飾りのような真言を見ながら読誦すべきである。「オーム、宝珠を持つ女神よ、金剛女よ、大随求明妃よ、フーム、フーム、パット、パット、スヴァーハー」
大随求明妃の成就法である。

2.2 No.195「大随求明妃成就法」

[0] 帰依文
[1] 観想の準備
　[1.1] 月輪の観想
　[1.2] プラム（praṃ）字の布置と供養
[2] 大随求明妃の観想と種字の布置
　[2.1] 四梵住の観想
　[2.2] 空性智金剛の真言
　[2.3] 大随求明妃の姿の観想
　[2.4] 種字の布置と大随求明妃との一体化
[3] 阿閦如来の観想
[4] 百字真言
　[4.1] 百字真言の準備
　[4.2] 精神的に疲れた時に唱える真言
　[4.3] 百字真言
[5] 成就法を行う時間帯について

SM No.195「大随求明妃成就法」内容構成

[0] 帰依文

大随求明妃に帰依する[107]。

[1] 観想の準備

[1.1] 月輪の観想

最初に、ヨーガ行者は精神を集中した状態となる。その後、心臓において、パム（paṃ）字が変化した二重蓮華を[観想し][108]、その上にア（a）字が変化した月輪を［観想する］。

[1.2] praṃ 字の布置と供養

その中に黄色プラム字[109]を布置し、そしてそこから出た光線によって、きらびやかな座に坐す、師である諸々の仏菩薩を引き寄せた後、目の前に招く。その後礼拝、供養、懺悔、福徳随喜、三宝帰依、発菩提心、福徳回向、許しを得る等[110]［の行為］を行うべきである。

[2] 大随求明妃の観想と種字の布置

[2.1] 四梵住の観想

そして、慈、悲、喜、捨（四梵住）の観想［を行うべきである］。

[2.2] 空性智金剛の真言

「オーム、私は空性智金剛を本性とする者である」[111]と唱えて、空を観想し、その後、自身の心において、直ちに月輪の［上の］黄色のプラム字を観想してから、そしてそれを変化させて、大随求明妃を［観想する］。

---

[107] チベット訳のみ、成就法の冒頭に大随求明妃に対する帰依文が述べられる。('phags ma so sor 'brang ma chen mo la phyag 'tshal lo)

[108] 二重蓮華 viśvapadmaṃ　直訳すると「あらゆる方向に花弁を有する蓮華」だが、図像としては上下に花弁を有する蓮華（二重蓮華）として表現される。[立川 1989: 231]

[109] 「黄色い」は大随求明妃の体色が黄色と後述されているため、また、「praṃ 字」は大随求明妃の頭文字に由来していると思われる。

[110] この No.195 中に七種無上供養の表記はないが、[清水 1977: 66-68]によると、これら「礼拝 vandanā」「供養 pūjanā」「懺悔 pāpadeśanā」「福徳随喜 puṇyānumodanā」「三宝帰依 triśaraṇagamana」「発菩提心 bodhicittotpāda」「福徳回向 puṇyapariṇāmanā」の七つは七種無上供養に該当する。しかしながら、そこには「許しを得る kṣamāpana」は含まれていない。

[111] この真言は無上ヨーガ系儀軌『チャクラサンヴァラ三三昧』（山口 2005: 186）や、SM No.97

[2.3] 大随求明妃の姿の観想

[彼女は]美しい黄色［の体色］で、宝冠をかぶって、黄色と白と青[112]と赤の四面で、三眼八臂で[ある]。右の臂によって剣、輪、三叉戟、矢を持ち、左の臂によって羂索・斧・弓・金剛杵を持っている。蓮華の［上にある］月輪［の上の］座に、遊戯坐で坐し[ている]。

[彼女は]様々な宝石でできた装飾品を身につけている[113]。

[2.4] 種字の布置と女神との一体化

彼女の頭とのどと心臓と心臓に準じる部分に、［各々］月輪［の上］にのる白のオーム（oṃ）[字]、赤のアーハ（āḥ）[字]、黄色のプラム[字]、黒のフーム（hūṃ）字を布置する。その後、この[種字の]真言を唱えながら発する言葉によって、自分自身に女神の姿を留まらせるべきである。

[3] 阿閦如来[114]の観想

それから、自身の心臓から生じた［複数の］光線によって、阿閦如来等を引き寄せて招く。その後[阿閦如来から]灌頂を受けた後、王冠に、族主である阿閦如来を考えるべきである。

[4] 百字真言

[4.1]百字真言の準備

その後、自身の心臓から供養の女神達を広げて、供養してから百字真言を唱え、そして疲れが生じない程度に観想すべきである。

[4.2]疲れた時に唱える真言

精神的に疲れた時、[以下の]真言を読誦すべきである。

「金剛ターラー成就法」(立川 1986: 69)、No.239 マハーマーヤーの成就法等にもあらわれる（森 2001: 28）（松長 1980: 256）。

112 バッタチャリヤの校訂本と東京大学所蔵梵文写本松波目録 No.451 Sādhanasamuccaya と No.453 Sādhanasamuccaya では「黄色（pīta）」とあるが、東京大学所蔵梵文写本松波目録 No.452 Sādhanasamuccaya と National Archives, kathmandu, No.3-387 では「青（nīla）」、及びチベット訳において「青（sngon pa）」と記されている。四面の色の内、黄色は重複するため、National Archives, kathmandu 及びチベット訳にある「青」を採用した。

113 チベット訳では「観想する（bsgom mo）」とある。

114 ここでは阿閦如来が族主として表れるが、*The Indian Buddhist Iconography*（pp.243-244）においては大随求明妃の族主は宝生如来とあり、SM No.201 では宝冠に化仏として表される。また一方で、図像的特徴は明らかに大日如来に従っている（立川 2004: 110）という説もあるが、孔雀明妃が不空成就如来の化身とされる以外は、大随求明妃を含めた五護陀羅尼の各明妃がどの仏の化身であるかは諸説があって一定しないともいわれている。（田中 1992: 148）

「オーム、宝珠を持つ［女神］よ、金剛女よ、大随求明妃よ、フーム、フーム、パット、パット、スヴァーハー」

[4.3]百字真言

「フーム、フーム、パット、パット[115]」と唱え、それからまた次の真言も［唱えるべきである］。

「オーム、金剛薩埵よ、三昧耶を守護せよ、金剛薩埵として近くに在れ、私のために堅固なものであれ、私のために喜ばしいものであれ、私のために栄えるものであれ、わたしに心をよせよ（愛着せよ）、私に一切の成就を（あなたは）施せ、そして一切の行為において、私の心をより良いものとせよ[116]、クル、フーム、ハ、ハ、ハ、ハ、ホーホ、世尊よ、一切如来金剛よ、私を見放すな、金剛を持つ者となれ、大三昧耶薩埵よ、アーハ[117]」

[以上が]百字真言[118]である。

[5]　成就法を行う時間帯について

起床の時刻に、供養等をしてから、［女神に帰って頂く］許しを得るべきである。

以上で大随求明妃の成就法が終了する。

---

115 チベット語訳では‘hūṃ hūṃ phaṭ phaṭ ces pa'i sngags bral yang ngo/’とある。

116 チベット語訳では「そして」（ca）、「私の」（me）を欠いている。また、A‘shreyaḥ’（より良いもの），チベット語訳では‘shriyaḥ’

117 和訳に際し『師曼荼羅供養儀軌』*Gurumaṇḍalārcanapustakam*（山口 2005: 144）を参照した。

118 [頼富 2003:150-151]に述べられている通称「金剛薩埵の百字真言」（『金剛頂経』に説かれる真言の内の一つ）の和訳と比較すると、一部（クル）が欠落している等といった違いはあるものの、同一の真言であると思われる。頼富氏によると、百字真言は日本の金剛界念誦次第における本尊加地の中で読誦されることから、重要な位置づけにあるということが言及されている。また、この真言が「百字真言」と呼ばれる理由については、その真言の字数が 100 字ある為という。[頼富 2003:151]なお、『理趣経』全体の内容を 100 字の偈としてまとめられた「百字の偈」（[網代 2011:100-101]和訳）と比較すると、内容があまり似通っていないことから、百字真言とは別のものと思われる。

2.3 No.196「随求明妃成就法」

[1] 観想の準備
[2] 大随求明妃の観想
[3] 3 つの文字の観想
[4] 真言

SM No.196
「随求明妃成就法」内容構成

[1] 観想の準備

生死病苦などに悩んでいる一切の人々に対して、慈、悲、喜、捨の意をなしてから、教えにより、世界は、幻想や夢と同様であり、完全に残りなく、分別によって空であり、真言行者は、目の前に、知識という 1 つの美しい姿を観想して、さらに、そこからそれによって［以下を観想する］。

[2] 大随求明妃の観想

プラム字から成る、黄色から成る、地面に下ろされ輝いているア字の月輪の形をなしている［ことを観想して］、［月輪の］自身の［複数の］光線によって、各々の方角に、一切の正しく望まれ、観想してから、［大随求明妃は］二重蓮華の［上の］中央にあるきらめく月［輪］の［上の］座に坐し、［中央が］黄色、［右面が］黄色（または青）、［背面が］白、［左面が］赤みがかった茶色の顔［の色］で、三眼に飾られる。王冠の宝石から作られた、きらびやかな衣服に、赤く輝いているマンダラのような（日輪）、美しく魅力的な一対の胸で収められている上着で、小枝のような臂によって、［右手に］剣、輪・矢・三叉戟、［左手に］斧・繁栄の羂索、金剛、弓を持ち、成就する者は、自らが大随求明妃となるべきである。

[3] 3 つの文字の観想

オーム・アーハ・フム、と唱え、そして、文字によって、賢い思考力を持つ者は、肉体によって、自身の心臓に山を見てから、月輪［の上に］ある白を、結合された方法に黄色を、さらに、自分自身に青を［観想し］、現存している月輪において、一対の乳首の中央に現れたプラム字から出現した光線によって、［観想の尊格の］完成によって満たされた、かの女神の集団によって、自分自身の姿を観想させるべきである。

[4] 真言

このように拡散、また、収縮する方法で、疲労のきざしが出て、真珠のひもが出現した時、その時、堅固な心を持つ者は光線を放ち輝く。心臓の［上の］月輪の上の比類なきマントラの王を観想し、このように唱えるべきで、心が浄化された者は、常に敬意を持って何度も［唱えるべきである］。その場合、マントラの王である。「オーム、宝珠を持つ女神よ、金剛女よ、大随求明妃よ、フム、フム、パット、パット、スヴァーハー」大随求明妃の儀軌である。

2.4 No.197「聖孔雀明妃成就法」[119]

[1]　孔雀明妃の観想 [2]　4つの文字の観想 [3]　真言

SM No.197
「聖孔雀明妃成就法」内容構成

[1] 孔雀明妃の観想

以前に話された方法によって、二重蓮華の[上の]月[輪]の[上]において、緑のマーム（māṃ）字より生じた孔雀明妃を[観想すべきである]。[その女神の体色は]緑の色で、三面で、六臂で、各々の顔は三眼で、黒（青）と白い左右の顔で、右の三つの手において、順番に、孔雀の尾羽・矢[を持ち]、与願印[を結び]、同様に左の三つの手において、宝石の山・弓・ひざにある水瓶[を持つ]。きらびやかな装飾品に[飾られ]、美しい味（情熱的な愛の心情[120]）で、新鮮な若さで、月輪の[上の]座において、月の輝きを持ち、半跏坐に坐す女神で、不空成就如来の王冠[をつけた女神]を、自分自身に観想すべきである。

[2] 4つの文字の観想

その時、これらの女神たちを、頭とのどと心臓と心臓に準じる部分において、月輪において、以下のような順番で、オーム、アーハ、マーム、フーム、という、四つが集まった文字を観想させ、拡散収縮をなすべきである。

[3] 真言

そこで真言を読誦するべきである。「オーム、孔雀明妃よ、知識の王妃よ、フーム、フーム、パット、パット、スヴァーハー」

以上が聖なる孔雀明妃の成就法である。

2.5 No.198「聖大千摧砕明妃成就法」[121]

[1] 大千摧砕明妃の観想

以前に話された方法によって、二重蓮華の[上の]月[輪]の[上]において、buM 字より生まれた大千摧砕明妃の自性を観想する。その後、白い一面で、六臂で、右の三臂によって剣・矢[を持ち]、与願印[を結び]、左の三臂によって弓・羂索・[鉄製の]斧[を持つ大千摧砕明妃を観想する]。きらびやかな装飾を持ち、美しい若さと愛を持ち、[122]そこに大日如来の王冠[を持ち]、蓮華の[上の]月[輪]の[上]に座り、[月のように]で輝く。

以上が聖なる大千摧砕明妃の成就法である。

---

119 [Bhattacharya1968b: 234]
120 [Bhattacharya1968b: 234] displays the sentiment of passionate love,
121 [Bhattacharya1968b: 217]
122 [Bhattacharya1968b: 217] displays the sentiment of amour.

2.6 No.199「聖密呪随持明妃成就法」[123]

[1] 密呪随持明妃の観想

密呪随持明妃は、一面四臂で、[女神の体色は]黒で[ある]。右の二臂において、金剛を持ち、与願印[を結び]、左の二臂において、斧と羂索を持つ。[彼女は]hūṃ 字の種字[から生じた女神]で、阿閦仏の王冠[をつけた女神]で、日輪の座で輝いている（太陽のような輝きの上に座る）、と[言う]。

以上が聖なる密呪随持明妃の成就法である。

2.7 No.200「聖大寒林明妃成就法」[124]

[1] 大寒林明妃の観想

大寒林明妃は、一面四臂で、[女神の体色は]赤で[ある]。右の二臂において、数珠を持ち、与願印[を結び]、左の二臂において、心臓の方向に向けた金剛鉤針と、書物を持つ。[彼女は]jIm 字[から生じた女神]で、阿弥陀仏の王冠[をつけた女神]で、半跏坐に坐し、様々な装飾を持ち[に飾られ]、日輪の座の輝きである[日輪に坐し、太陽のように輝いている]、と[言う]。

以上が聖なる大寒林明妃の成就法である。

2.8 No.201「偉大な五護陀羅尼儀軌」

[1] 五護陀羅尼の観想
[1.1] 大随求明妃の観想
[1.2] 孔雀明妃の観想
[1.3] 大千摧砕明妃の観想
[1.4] 密呪随持明妃の観想
[1.5] 大寒林陀羅尼の観想
[2] 真言

SM No.201
「偉大な五護陀羅尼儀軌」内容構成

[1] 五護陀羅尼の観想

[1.1] 大随求明妃の観想[125]

伝統的な方法で、五尊の偉大な女神たち[の観想]を述べよう。その場合、大随求明妃は、[体色が]黄色で、三面で、各々の顔は三眼で、十臂で、[中央の面は黄色で、]黒（青）と白は[それぞれの]左右の顔[の色]で、右の五臂において、以下のような順番で、剣・金剛・矢・与願[印を結び]、心臓の近くで傘を手に持ち、同様に左の五臂において、弓・旗・宝石の山・斧・法螺貝[を持つ]。宝生如来の王冠[をつけた女神]で、青黒い鎧兜と赤い上着（スカーフ）で、半跏遊戯坐に坐し、光り輝く装飾品や衣装に飾られた、と[言う]。

[1.2] 孔雀明妃の観想

孔雀明妃は、[体色が]緑で、一面二臂で、光り輝く孔雀の尾羽と与願印を右と左の腕

---

[123] [Bhattacharya1968b: 200]
[124] [Bhattacharya1968b: 153]
[125] [Bhattacharya1968b: 243-244]

に[持つ]、と言う。

[1.3]　大千摧砕明妃の観想

大千摧砕明妃は前述のような女神である。

[1.4]　密呪随持明妃の観想

密呪随持明妃は一面四臂で、[体色が]黒で、右の二臂において、剣[を持ち]与願印を[結び]、そして左の二臂において、斧と羂索を[持つ]、と[言う]。

[1.5]　大寒林明妃の観想

大寒林明妃は、一面四臂で、[体色が]赤で、右の二臂において剣と与願印を[持ち]、左の二臂において、斧と羂索を[持つ]、と[言う]。

[2]　真言

それらの真言は、自身の名前に結びつけられた、自身の種字の中央の、三つの文字の印である。

[以上が]偉大な五護陀羅尼の成就法である。

2.9 No.206「五護陀羅尼成就法」

[1] 五護陀羅尼マンダラの観想 [1.1] 観想の準備 [1.1.0] 中尊大随求明妃への帰依文 [1.1.1] 場の加持 [1.1.2] 供養と四梵住の観想 [1.1.3] 空性の観想 [1.2] マンダラの外郭および五尊の明妃の観想 [1.2.1] マンダラの外郭および大随求明妃の観想 [1.2.2] 大随求明妃の真言 [1.2.3] 大千摧砕明妃の観想 [1.2.4] 大千摧砕明妃の真言 [1.2.5] 孔雀明妃の観想 [1.2.6] 孔雀明妃の真言 [1.2.7] 密呪随持明妃の観想 [1.2.8] 密呪随持明妃の真言 [1.2.9] 大寒林明妃の観想 [1.2.10] 大寒林明妃の真言 [1.3] 三昧耶チャクラと智チャクラの観想と ２つのマンダラの合一 [1.4] 身体各部における観想と女神の布置 [1.5] 真言の読誦	[2] マンダラの制作 [2.1] 五護陀羅尼マンダラを描く目的 [2.2] マンダラ制作 [2.2.1] マンダラの作壇と土地神を鎮める儀式 [2.2.2] 四方四維にいるガンダルヴァ等の供養 [2.3] マンダラの供養 [2.3.1] 密教行者の心構え [2.3.2] 諸尊の観想 [2.3.3] 仏陀、諸尊等への帰依文 [2.3.4] 五護陀羅尼マンダラ諸尊の供養 [3] 五護陀羅尼の儀軌の効能

SM No.206「五護陀羅尼成就法」内容構成

[1] 五護陀羅尼マンダラの観想

[1.1] 観想の準備

[1.1.0] 中尊大随求明妃への帰依文

聖なる大随求明妃に帰依する。

[1.1.1] 場の加持

第一に、多くの真言行者は、口の浄化等をなしてから、心がふさわしい場所において安楽坐で坐してから、「オーム、アーハ、フム、守護せよ、守護せよ、フム、パット、スヴァーハー」と言って、[儀礼の]場と自身を結び告げることによって[126]、守護の加持を行うべきである。

[1.1.2] 供養と四梵住の観想

その後、自身の心臓においてア字より生じた月輪を[観想し]、その上にプラム字[127]か

[126] チベット語訳では、ཞེས་པས་རྣལ་འབྱོར་པའི་གནས་དང་བདག་ཉིད་བསྲུང་ཞིང་ལྷག་པར་གནས་པར་བྱའོ། (zhes pas rnal ’byor pa 'i gnas dang bdag gnyid bsrung zhing lhag par gnas bar bya’o) 「ヨーガの場所と自分自身を守って特別な場所にせよ」とある。

[127] A では「パム paṃ 字」だが、それ以外の B, C, D, E およびチベット語訳では「プラム praṃ 字」と記されているため、後者を採用した。

ら[放たれる]光線から出現させて、(中尊)大随求明妃を筆頭とする一族(五護陀羅尼に属する明妃)や眷属たちを伴った諸々の仏菩薩を眼前に見て供養するべきである。花、線香、灯明、塗香、バリ供物、食物等を奉献してから、罪を懺悔すべきである。三宝の庇護所に赴き、菩提心を生じさせるべきである。善根を回向した後に許しを乞うべきであり、その後四梵住を観想するべきである。

[その後、]その苦を除くことが悲であり楽を与えることが慈であり、堅固な幸福の本質によって喜があり、真如の姿の本質は捨である。

[1.1.3] 空性の観想

それから、一切法を心によって無分別であると考えた後に、「オーム、私は空性智金剛というものを本性とする者である」[128][と唱えるべきである]。

[1.2] マンダラの外郭および五尊の明妃の観想

[1.2.1] マンダラの外郭および大随求明妃の観想

その後フム（huṃ）字によって二重金剛でできた大地を加持すべきである。その金剛によって金剛籠、金剛境界、そして金剛天蓋を考えてから、その中央においてスム（suṃ）字が変化した須弥山を、様々な花に覆われた大解脱の都[129]の住処を[観想する]。その上にフム字を二重金剛に、プム（puṃ）字[を]雄しべと雌しべをそなえた二重蓮華に変化させ、その上の月輪の中央においてプラム字[130]の光線を拡散させるべきである。それら[の光線]によって五智の本質を引きつけてから、一切の如来達によって一つに集まり溶けた(一つになった)種字の変化させ、これから言われる色をした、大随求明妃[を観想すべきである]。

[大随求明妃の体色]は白色[131]で、16 才の姿で、頭頂は仏塔で飾られ[ている]。月輪の上にある日輪の上に乗り、金剛結跏趺坐に坐す。三眼、八臂で、ゆれる耳飾りが輝き、首飾りと足首の飾りに飾られ、金の臂釧を身に付け、[また、]腰飾り、一切の装飾品を

---

128 この真言は五護陀羅尼の成就法の一つである SM No.195「大随求明妃成就法」(園田 2014: 105,112）にもみられる。また、チベット語訳は'ham が欠けている。

129 No.97,110 に大日如来の住処とある

130 A, B, D は paṃ 字、C, E は praṃ 字とある。この種字が後に大随求明妃（mahāpratisarā）に変化することから、（mahā）pratisarā の頭文字により近いである後者を採用した。

131 体色について、大随求明妃は gaura(白)、密呪随持明妃の体色は śkula(白)とある。他の明妃の体色との重複を避ける為にも gaura を黄や淡い赤と訳することが可能だが、黄は孔雀明妃の体色と重複する。それ故に gaura の訳として淡い赤が適すると思われた。しかしながらチベットテキストにおいて、大随求明妃と密呪随持明妃の体色についてどちらも dkar po(白)と記されている為、今回 gaura を白と訳した。なお、大随求明妃が単独で説かれている成就法である SM No.194-196、および五護陀羅尼各明妃が一括して述べられている SM No.201、NPY No.18「五護陀羅尼マンダラの章」において、大随求明妃の体色は黄であり、SM 206 と異なる。バッタチャリヤによると、大随求明妃は宝生如来の化仏であり、体色は黄であるという。[Bhattacharya1968b: 237, 244]

身に付けている。その女神の中央の顔は白、右は青黒色、後部は黄色、左は赤色である。

右の第一の臂において輪、第二臂において金剛、第三臂において矢、第四臂において剣を[持ち]、左の第一臂において金剛と羂索、第二臂において三叉戟、第三臂において弓、第四臂において斧を[持つ]。

菩提樹[132]によって飾られ、[また、]様々な花[133]や果実などで飾られた[女神である]。梵天、ヴィシュヌ、大自在、歓喜自在等によって崇拝され、天、竜、夜叉、乾闥婆によって右側において崇拝されるべき[女神]で、帝釈、閻魔、ヴァルナ神、毘沙門天、阿修羅、迦桜羅、緊那羅、摩睺羅伽等の神々によって崇拝される。[また、]貪・瞋・癡(三毒)の習慣がついたところを羂索で真二つに切る女神である。

敵のマントラや印、毒薬を使用し、敵意と調伏の呪文、そして、邪悪な心を持つ者共を粉々に砕く女神である。

最上の供養に満足する一切の仏菩薩の聖なる一団を守護する女神で、大乗仏教の教理を書いたり読んだり読誦したり、自習、聴聞、憶持に集中した者たちを守護する女尊である。

[1.2.2] 大随求明妃の真言

このような存在である女尊を拡散収縮のヨーガ、すなわち尊敬を伴った絶え間ない実践によって[女神に]頼って、その女尊(大随求明妃)の読誦のマントラ[を唱えるべきである]。「オーム、宝珠を持つ女神よ、金剛女よ、大随求明妃よ、フム、フム、パット、パット、スヴァーハー」

[1.2.3] 大千摧砕明妃の観想

その大随求明妃の東の方角において、同様に、前のヨーガを行ってから、二重蓮華の中心において、フーム（hūṃ）字の印がある金剛が変化した大千摧砕明妃を[観想すべきである]。

[大千摧砕明妃の体色は]青黒色[134]で、黄褐色の髪を逆立てた女神で、人間の頭蓋骨で飾られ、眉を寄せて牙をむいている顔で、輝く日輪の座[の上]で遊戯坐に坐し、マハーブータとマハー夜叉を踏みつけている。金の腕輪に飾られ、首飾りと足首の飾りを身に着けている。

その右の第一臂によって与願印と金剛を、第二[臂]によって鉤針を、第三[臂]によっ

---

132 bodhivṛkṣo

133 チベット語訳では རིན་པོ་ཆེའི་མེ་ཏོག་ rin po che 'i me tog「様々な宝石でできた花」

134 大千摧砕明妃が単独で説かれている成就法である SM No.198、および五護陀羅尼マンダラについて説かれている NPY No.18 において、大千摧砕明妃の体色は「白」であり、SM 206 と異なる(なお、SM No.201 においては大千摧砕明妃の体色については「前述の通り」とあり、SM No.198 のことを指すと推測される)。バッタチャリヤによると、大千摧砕明妃は大日如来の化仏であり、体色は「白」であるという。 [Bhattacharya1968b: 206, 217]

て矢を、第四[臂]によって剣を[持ち]、左の第一臂によってタルジャニー印と羂索を、第二[臂]によって斧を、第三[臂]によって弓を、第四[臂]によって蓮華の上の16の宝石[を持っている]。

その中央の顔が青黒、右が白、後部が黄色、左が緑[の顔の色]で、すべて[の顔]に三眼を[備えている]。

様々な宝石などの装飾された身体で、大きな力を持ち、[また、]エネルギーを持ち、獰猛な外観である。[また、]ヴァタ[135]の樹に飾られている。

七母神[136]などの女神たちを威嚇し、レーヴァティーなどの星宿や惑星を恐れさせ、ヴァースキ蛇王等の八大竜王[137]の恐ろしさを成す女神で、ヴァータ、ピッタ、シュレーシュマ(カパ)[138]を浄化する女神で、獰猛な闇である(闇の)雲を引き裂く女神で、一切の突然死を防ぐ女神である。

[1.2.4] 大千摧砕明妃の真言

その女尊[大千摧砕明妃]の読誦のマントラは[以下のようである]。「オーム、最上の甘露の女神よ、最も良い最上の清浄な女神よ、フム、フム、パット、パット、スヴァーハー」

[1.2.5] 孔雀明妃の観想

その後、大随求明妃の南方に存在する、二重蓮華の上で、月輪の中心において、マーム（māṃ）字の種字から変化した、孔雀明妃を直ちに[観想すべきである]。[孔雀明妃の体色は]黄色[139]で、日輪[の上]に乗って結跏趺坐で、三面三眼で、八臂で、宝石の宝冠をもつ女神で、一切の装飾品に飾られている。

---

135 vaṭa 学名:Nicus religiosa, Linn.科名:Moraceae.クワ科　和名:バンヤンジュ、インドボダイジュ。中高木もしくは高木。実は食用。インドの聖木の一つ。ヒマラヤの森林地帯等に自生するという。なお、日本のボダイジュ(学名 Tilia migueliana, Maxim. 科名 Tiliaceae シナノキ科）とは異なるという。（和久 2013: 81,95-06）

136 七母神（サプタ・マートリカ）に属する女神は、ブラフマーニー、ルドラーニー、カウマーリー、ヴァイシュナヴィー、ヴァーラーヒー、インドラーニー、チャームンダーである。以上にあげた七母神にマハーラクシュミーが加えられると八母神（アシュタ・マートリカ）と呼ばれるという。（立川 1990: 60-61）

137 仏教を守る竜王。組み合わせとしては、法華経序品等にあらわれるナンダ（Ananda 難陀）、ウパナンダ（跋難陀 upananda）、サーガラ（sāgara 娑伽羅)、ヴァースキ（vāsuki 和修吉）、タクシャカ（taksaka 徳叉迦）、アナヴァタプタ（anavatapta 阿那婆達多）、マナスヴィン（manasvin 摩那斯）、ウッパラカ（utpalaka 優鉢羅）が多いという。（古田、金岡、鎌田、藤井 1988:794）

138 アーユルヴェーダのトリドーシャ(３つの要素)。この均衡が崩れると病気になる。

139 孔雀明妃が単独で説かれている成就法である SM No.197、および五護陀羅尼マンダラについて説かれている SM No.201、NPY No.18 において、孔雀明妃の体色は「緑」であり、SM 206 と異なる。バッタチャリヤによると、孔雀明妃は不空成就如来の化仏であり、体色は「緑」であるという。（Bhattacharya1968b: 206, 217）

その右の第一の臂によって与願印、第二によって宝石の水差し、第三によって輪を、第四によって剣を[持ち]、左の第一の臂によって乞食の鉢、第二によって孔雀の尾羽を、第三によって水差し上の二重金剛を、第四によって宝石の旗を[持つ]。

そして、中央の顔に黄色、右において青黒色、左において赤色[をしている]。

アショーカ（aśoka）の樹[140]によって飾られ、その傍らにある七毒[141]によって覆う女尊で、その恐ろしい黄褐色(の髪)等や、女羅刹の邪悪な心を粉々に砕く女神である。

結合した蛇等の生贄に坐す女神で、天・竜・夜叉・乾闥婆たちによって、礼拝されるべき女神である。その 27 星宿や九曜[142]等によって称賛されるべきもので、かの一切の無生物・生物の毒を食らうべき女神で、かの神と悪魔とアシュラを魅了する女神である。

[1.2.6] 孔雀明妃の真言

その女神によって読誦のマントラ[を読むべきである]

「オーム、甘露のごとき女神よ、胎を保護する女神よ、引き付ける女神よ、フム、フム、パット、パット、スヴァーハー」

[1.2.7] 密呪随持明妃の観想

その大随求明妃の西の方角において、二重蓮華の上の月輪の中央においてマム（maṃ）字の種字の変化から生じた密呪随持明妃を観想するべきである。

[密呪随持明妃の体色は]白色[143]で、十二臂で、三眼で、輝く日輪[の上で]展右の姿勢で[坐す]、宝冠を被り、一切の装飾品で輝き、新鮮な若さをもち、首飾りとくるぶしの飾りとイヤリングに飾られたシリーシュ（sirīṣ）の樹[144]で飾られている。

その第一の両臂によって転法輪印、第二の両臂によって禅定印、第三[の右の臂]によって与願印を、第四によって施無畏印を、第五によって金剛を、第六によって矢を、第三[の左の臂]によってタルジャニー印と羂索を、第四によって弓を、第五によって宝石

---

140 学名:Saraca indica, Linn. 科名:Leguminosae マメ科 和名:ムユウジュ。小木で花弁はなく、蕚(うてな）が花弁状で橙色、花糸は赤色をしているという。[和久 2013: 1]

141 saptaviṣa 詳細については不明。

142 [立川 2004: 134-139]によると、ネパールにおける九曜は日曜、月曜、火曜、水曜、木曜、金曜、土曜、ラーフ(日月食の神、または月が満ちることの神格化)、ケートゥ(隕石の神、または月が欠けることの神格化）によって構成され、天体グループの中で重要視されているという。

143 密呪随持明妃の体色は「白 Śkura」とあらわされており、大随求明妃の体色と同じである。また、密呪随持明妃が単独で説かれている成就法である SM No.199、および五護陀羅尼マンダラについて説かれている SM No.201、NPY No.18 において、密呪随持明妃の体色は「青黒」であり、SM 206 と異なる。バッタチャリヤによると、大千摧砕明妃は阿閦如来の化仏であり、体色は「青」であるという。（Bhattacharya1968b: 189, 200）

144 sirīṣ シリーシャ sirīṣa と推測される。学名:Albizzia lebbek, Benth. 科名:Leguminosae マメ科 和名:ビルマネムノキ。花は緑色。（和久 2013: 66）

のついた傘[145]を、第六によって蓮華のマークの水差し[146]を[持つ]。

中央の顔を白、右を青黒、左を赤[とする]。

様々な花等で満たされ、その 8 名の護世神をはじめとする神々によって崇拝されるべきであり、伴っている四天王によって称賛され、華菩薩[147]や持明者の列に礼拝されている。

[1.2.8] 密呪随持明妃の真言

その読誦のマントラ[を読むべきである]。

「オーム、けがれのない女神よ、偉大な女神よ、甘露のごとき女神よ、金剛女よ、フム、フム、パット、パット、スヴァーハー」

[1.2.9] 大寒林明妃の観想

そこで、大随求明妃の北の方角において、二重蓮華の上で、月輪の中央において、トラーム（trāṃ）字の変化より生じた大寒林明妃がいる。[大寒林明妃の体色]は緑色[148]で、日輪[の上で]展右の姿勢で乗り、三面三眼で、六臂で、如来の化仏をつけた宝冠を被り、一切の装飾品に飾られ、神々しい服を身につけている。

その第一の臂によって施無畏印を、第二[の臂]によって金剛杵を、第三[の臂]によって矢を[持ち]、左の第一の臂によってタルジャニー印と羂索を、第二[の臂]によって弓を、第三[の臂]によって宝石の旗を[持つ]。

中央の顔は緑色で、右は白色、左は赤色である。

チャンパカの樹[149]で飾られ、伴っているカーマ神をはじめとする神々に崇拝される。

ハーリーティー等の夜叉、女夜叉を破壊する女神で、カラスやふくろう、ハゲワシ、タカ、鳩等を追い払う女神で、かのブータ、プレータ(餓鬼)、ピシャーチャ(毘舎闍)ヴェーターラ、羅刹等を魅了する女神で[ある]。

[1.2.10] 大寒林明妃の真言

この読誦のマントラ[は以下のようである] 。

---

145 A に‘ratnacchaṭā(宝石の塊)’とあるが、注では‘-chatrā(傘)’とある。(Bhattacharya1968a : 408)

146 A に「karaśa(水瓶)」とあるが、注において kamalaḥ が誤字であることが述べられている。水瓶は一般的に十二臂の密呪随持明妃の持物の一つであるという。(Bhattacharya1968a: 408)

147 Toh. No. 3596 མེ་ཏོག་མ「華菩薩」を採用。(チベット語訳では མ་ཏོག་མ) なお、サンスクリットテキストでは欠いている。

148 大寒林明妃が単独で説かれている成就法である SM No.200、および五護陀羅尼マンダラについて説かれている SM No.201、NPY No.18 において、大寒林明妃の体色は「赤」であり、SM 206 と異なる。バッタチャリヤによると、大寒林明妃は阿弥陀如来の化仏であり、体色は「赤」であるという。(Bhattacharya1968b: 145,153)

149 campaka 学名：Michelia champaca, Linn. 科名：Magnoliaceae モクレン科、和名：キンコウボク。花は橙黄色という。(和久 2013: 70)

「オーム、支えよ、支えよ、集めよ、集めよ、感官の力を浄化する者よ、フム、フム、パット、パット、スヴァーハー」

[1.3] 三昧耶チャクラと智チャクラの観想と２つのマンダラの合一

以上のように示されたマンダラを観想して、その光線の集まりが遍満している[五尊の]各々の文字から[さらに]光線を放出し、その後それらの光線があまねく三界に広がり、そこにある文字に入り込む[を観想すべきである]。

再び、虚空の空間に拡散してから、智チャクラを引き寄せて称賛し、[智チャクラを]引き寄せて、自身の三昧那チャクラに引き入れるべきである。その後２つ[のマンダラ]が１つにまとまったのを観想してから、そこから(複数の)光線によって、一切の如来を引き寄せて、崇拝してから、灌頂を請うべきである。自分自身が灌頂を受けているところを観想すべきである。

[1.4] 身体各部における観想と女神の布置

供養、称賛、甘露の献供を先に行ってから、[悟りで]目が見える者(行者)は観想するべきである。両目において癡金剛女である大随求明妃、両耳において瞋金剛女である大千摧砕明妃、鼻において嫉妬金剛女である孔雀明妃、口において貪金剛女である密呪随持明妃、感触において嫉金剛女である大寒林明妃[を観想せよ]。このように、色、受、想、行、識の[五]蘊、界、処の本質である浄化された女神たちが、特に知られるべきである。

[1.5] 真言の読誦

そこにおいて、まさに三昧耶[チャクラ]となった後、この儀軌に従ってマントラを唱えるべきである。真言の文句を諸尊のヨーガ(観想)によって、尊格の名前とともに、静まった心で途切れなく読誦すべきである。

熱、洪水、病気、戦闘の時、全く同様に、
ダーキニー女神、死霊、川の氾濫、敵に苦しめられた時、
稲妻が光る雲の山や、森の中の二股の道で[迷った]時、
それ故に、一切の恐れを破壊するマントラを常に思い起こすべきである。

[2] マンダラの制作

[2.1] 五護陀羅尼マンダラを描く目的

そこにおいて、次第は以下の通りである。

一切衆生の利益を目的とし、一切の衆生の利益を生む、
いかなる方法であっても長寿、繁栄の原因となるものであるゆえに、
私によって、吉祥なる五護陀羅尼の儀軌が記される。

そして衆生等の利益のためにマンダラが描かれる。

[2.2] マンダラ制作の準備

[2.2.1] マンダラの作壇と土地神を鎮める儀式

牛糞が塗られ、供物が用意され、吉祥なる、清浄な、
様々な衣服が吊り下げられた清浄なる土地において、
特に[儀礼の場]全体に塗られた栴檀の塗香によって、
160 アングラの長さを取って、マンダラを描くべきである。
それから白と赤の粉によって、土地神を鎮める儀式を行う。
雄しべと雌しべを備えた八弁の蓮華を描くべきである。

[2.2.2] 四方四維にいるガンダルヴァ等の供養

花輪と衣服で飾られ、傘と旗と花で覆われた
五つの瓶を安置して、
[そこに] 花、線香、塗香、バリ供物、食物をともなった
上に布を被せた法界[に関する]経典と、
特にドゥルヴァ草とジャスミンの一種が入った白い花を[供えて]、
四方四維において、儀軌にしたがって神々を供養すべきである。
特に粗糖、食物、白い花、ミルク粥[を供え]、
ガンダルヴァにバリ供物を与えてから東の場所に[バリ供物を]置くべきである。
一方、目前に存在において留まらせるべきである。
黒胡麻と黒い酒に満たされ、魚と肉とたまねぎが入れられたバリ供物を、
クンバーンダ鬼たちに与え、南の場所に[バリ供物を]置くべきである。
特にミルク粥、ヨーグルト、牛乳を西の方角に供えて、
大きなバリ供物を蛇達に[供えよ]。
大豆、いんげん豆、クラッター豆、ジャーンブ、シードゥ酒を北の方角に供え、
夜叉たちにバリ供物を供えるべきである。
北東の方角から始めて、あるいは通りの場所で
白、赤、そして緑[150]の花輪が下がっており、
特に中央は種々の花でできた白色の花輪を
牛乳と血と矢、ダルジャラ樹と塗香とに、
各々の供物に適切に供え水(閼伽水)を供えて、

---

[150] A の注によると‘pīta haritaśca’が追加され、「白、赤、黄、緑」となる（p.411）。また、チベット語訳では །ནག་པོ་དམར་པོ་སེར་པོ་དང་། ལྗང་ཀུ「黒、赤、黄、緑」とある。

得られるだけの果物と、ラッドゥー菓子とモーダカ菓子とシャシュクリ団子、
また言われるように、すり胡麻、特に小さく砕かれた固形の糖蜜と、
南に８つの印で飾られたバリ供物を置いて[供養すべきである]。

[2.3] マンダラの供養

[2.3.1] 密教行者の心構え

そしてまた、

法を宣言する阿闍梨は業金剛(金剛のように堅固な業をなす者)であり、
沐浴を為してから清浄な衣服を身につけ、座そして清浄な信心を持ち、
東に顔を向けて坐し、[経典を]読誦すべきである。宝冠を[被り]、
托鉢で生活している比丘達の清浄な戒律を受け入れるべきである。
完全に浄化された師の指のごとき[真言を]唱えるべきである。
1 回から 21 回、行うべきである。
儀礼の次第が不足であったり余計であったりした場合、正しい成就は得られない。
堅固な勇気によって完成した、悲と衆生の利益が生じるからである。
それ(堅固な勇気)によって以前仏陀によって話された祝福をなすべきである。
白い容器(頭蓋骨の容器)の食物や肉を避けるべきである。
一切の肉を断ち、一切の経典を同等のものと考えるべきである。

[2.3.2] 諸尊の観想

師(阿闍梨)は北に顔を向けて、そこにおいて行を始めるべきである。
熱心に[諸尊を]賞賛し、供養を行い、鈴を鳴らす者は、
以前言われた一連の諸尊について[思い起こして]、観想を行うべきである。

[2.3.3] 仏陀、諸尊等への帰依文

真理を照らし出す、無限の境界にある牟尼、仏陀に敬礼する。
解脱せる者に、衆生たちを真理に導くために、一切の望みが
実りあるものとなるように。
勇気ある方に敬礼する。そして如来たちに敬礼する。
一切の諸尊に敬礼する。法界よ、汝に敬礼する。

[2.3.4] 五護陀羅尼マンダラ諸尊の供養

ドゥルヴァ草とクンダ(ジャスミン)をあわせて観想されるべき者(尊格)たちの名

前を唱えながら、諸仏の額に飾るべきである[151]。一度真言を唱え、一度ヨーガ[を行うこと]によって、[諸尊を]供養するべきである。

[3] 五護陀羅尼の儀軌の効能

[以上の]一万回の行為によって、一切智者よ、寿命が延びる。
また同様に懇請されるべきマンダラに、どのような方法であれ専心する者は、
王権、王国、そして村落、家畜小屋、庭を[手に入れ]、
悪鬼、化身、穀物[の不足による]飢饉を打ち砕く。
その行為によって、干ばつの恐怖からも守られる。
不可思議な行為による苦しみ[から身を守る]ことを望む者は、
五護陀羅尼の規則によって必ず守られる。
ヴァータ(風)の性質から生じた病気、ピッタ(熱)の性質から生じた病気、
カパ(＝シュレーシュマ、水)の性質から生じた病気、[諸要素が]組み合わさって
生じた病気、起こったすべての病気は、いかなる時も治癒する。
教えとともに[この五護陀羅尼の儀軌を]読め。そうすれば必ず障害は無くなる。

以上が五護陀羅尼の儀軌である。

---

[151] །དུར་བ་ཀུན་དཀ་ཡང་དག་སྒྱར། ། བསྒྲུབ་བྱའི་མིང་ནི་སྔགས་ཀྱིས་སྤེལ། ། ཡུ་རན་ལས་ཀུན་ནི་མཆོད་བྱ་ཞིང་། ། ཆོས་ཀྱི་དཔྱིངས་ཀྱི་རང་བཞིན་དུ། d’ur b’a kun da yang dag sgyar/ bsgrub bya 'i ming ni sngags kyis spel/ lha rgams kun nim chod bya zhing/ chos kyi dbyings kyi rang bzhin du/「ドゥルヴァ草とクンダを合わせ、仏の名前はマントラによって増える。法界の本質において一切の仏たちは供養される」

第 3 部

サンスクリット校訂テキスト、

チベット語訳および漢訳テキスト

1.　『大寒林陀羅尼』テキスト

ここでは『大寒林陀羅尼』（ŚV-A 本、ŚV-B 本）のサンスクリット校訂、チベット語訳、漢訳（ŚV-A 本のみ）を取り上げる。各和訳の見出し番号はいずれも筆者が作成したものであり、第１部の内容構成、第２部の和訳の見出し番号とそれぞれ対応している。

1.1　『大寒林陀羅尼』（ŚV-A 本）

1.1.0　使用テキスト

［サンスクリット校訂本］

A) *Mahāśītavatī*（サンスクリット校訂テキスト[Iwamoto1937b]）

この校訂本には、以下の写本が使用されている。

1. *Mahāśītavatī*（An der Universitäts-Bibliothek zu Kyoto.）
2. *Pañcarakṣā*（An der Universitäts-Bibliothek zu Kyoto.）
3. *Pañcarakṣā*（An der Universitäts-Bibliothek zu Kyoto.）
4. *Pañcarakṣā*（Gehörig zu Herrn J. Ischibama.）

［サンスクリット写本］

B) *Pañca-rakṣā*（Buddhist Library 所蔵マイクロフィルム[Takaoka1981:GA3]）

C) *Pañca-rakṣā*（Buddhist Library 所蔵マイクロフィルム[Takaoka1981: CH47]）

D) *Pañca-rakṣā*（東京大学所蔵[Matsunami1965: No.220]）

E) *Pañca-rakṣā*（東京大学所蔵[Matsunami1965: No.225]）

［チベット語訳］

འཕགས་པ་བེ་ཙོ་ན་ཆེན་པོ་ཞེས་བྱ་བའི་གཟུངས་

（*Ārya mahādaṇḍa nāma dhāraṇī*,『聖持大杖陀羅尼』）

TD) Toh. No.606

TP) Ota. No.308

［漢訳］

CH) 大正新脩大藏經 No.1392『大寒林聖難拏陀羅尼経』宋法天訳

1.1.1　ŚV-A 本サンスクリット校訂テキスト

[0]　namo[1] bhagavatyai āryamahāśītavatyai/[2]

[1.1]　evaṃ mayā śrutam ekasmin samaye[3] bhagavān rājagṛhe viharati sma[4]/ śītavane mahāśmaśāne iṅghikāyatanapratyuddeśe[5] tatrāyuṣmān[6] rāhulo[7] 'tīva[8] viheṭhyate[9]/ devagrahair[10] nāgagrahair[11] yakṣagrahai[12] rākṣasagrahair[13] (14-marutagrahair asuragrahaiḥ[15] kinnaragrahair garuḍagrahair gandharvagrahair-14) mahoragagrahair[16] manuṣyagrahair[17] amanuṣyagrahaiḥ pretagrahair[18] bhūtagrahaiḥ[19] piśācagrahaiḥ[20] kumbhāṇḍagrahair[21] dvīpibhiḥ[22] kākair[23] ulūkaiḥ[24] kīṭaiḥ[25] sarīsṛpair[26] anyaiś[27] (28-ca manuṣyāmanuṣyaiḥ [29]satvaiḥ[30]/

[1.2]　athāyuṣmān-28) rāhulo yena bhagavāṃs[31] tenopasaṃkrānta[32] upasaṃkramya[33]

---

1 B, D oṃ
2 B -śītavato/, E -śītavatyai/ namo vuddhāya/
3 B samaya
4 B smah
5 B iṅghikāyatane praty-; D iṅghikāyane-
6 B -āyuṣmā; D -āyuṣman; E -āyuṣmān/
7 B, D, E rāhūlo
8 B tīḥva
9 B viheṭhyante
10 B -grahai
11 B -grahai; C asuragrahair
12 D -grahair
13 B, D -grahai
14 B kinnaragrahaiḥ marutagrahai garuḍagrahai gandharvagrahai ra; D marutagrahai kinnaragrahair asuragrahair garuḍa-
15 E omit.
16 B -grahai
17 B -grahai
18 B omit., D -grahaiḥ
19 B -grahai
20 B -grahai
21 B -gahaiḥ
22 B dvipibhipihiḥ
23 B kākail
24 B, D ūlūkaiḥ
25 B kiṭiḥ; D kīṭai
26 D sarīsṛpaiḥ
27 B anpaiś; D etauśya
28 B ca mahānuṣyai manuṣyair amanuṣyaiḥ sarvvasatvai yuṣmāna; D manūśyāmanūṣyaiśya satvauḥ/ atha khalāyuṣmānn
29 C -āmanuṣyaiś
30 C sarrvasatvaiḥ; E sarvasattvaiḥ
31 B bhagavās
32 B -kānta; D -krāntaḥ

bhagavataḥ pādau śirasā vanditvā bhagavantaṃ tripradakṣiṇīkṛtya[34] bhagavataḥ purato rudann[35] aśrūṇi pravartayati[36] sma//

[2] atha[37] bhagavān jānann eva rāhulam[38] āmantrayate sma/ kiṃ[39] tvaṃ[40] rāhula[41] mama purataḥ[42] sthitvā aśrūṇi pravartayasi/ evam[43] ukte[44] āyuṣmān[45] rāhulo[46] bhagavantam etad avocat[47]/ ihāhaṃ[48] bhagavan rājagṛhe[49] viharāmi[50] śītavane mahāśmaśāne iṅghikāyatanapratyuddeśe[51] so ’haṃ[52] bhagavaṃs[53] tatra viheṭhye[54]/ devagrahair[55] nāgagrahair[56] yakṣagrahai[57] (58-rākṣasagrahair[59] marutagrahair[60] asuragrahaiḥ[61] -58) kinnaragrahair[62] garuḍagrahair[63] gandharvagrahair[64] mahoragagrahair[65] manuṣyagrahair[66] amanuṣyagrahaiḥ[67] pretagrahair[68] bhūtagrahaiḥ[69] piśācagrahaiḥ[70]

---

33 B upaṃsaṃkramya
34 B -kṛtyū
35 B runn; D dan
36 B pravatayati; D pravarttayati
37 B atha kalū
38 B rāhuram, D rāhūlam
39 B ki
40 B tva
41 B rāhura
42 B pūrataḥ
43 B evaṃ
44 B mūkta
45 B Ayuṣmāna; D Ayūṣmāṃn
46 D rāhūlo
47 B avocata
48 B ihāha
49 B rāhuragṛhe
50 D viharāmi/
51 B iṅghikāyaśatanū-「さびれて人気がない」; D pratyūddeśe; E iṅghikāyatane-
52 B, D haṃ
53 B bhagantatravaṃs
54 B vihethānte; D viheṭhyate
55 B -grahai
56 B -grahai
57 B marūtagrahai
58 D marutagrahai asuragrahaiḥ rākṣasagrahaiḥ
59 B -grahai
60 B omit.
61 B omit.
62 B -grahai
63 B garūḍagrahai; D garūḍagrahaiḥ
64 B gandharvvagrahar; D gandharvagrahaiḥ
65 B mahoragra- D -grahaiḥ
66 B amanuṣyagrahaiḥ; D manūṣya-
67 D amanūṣya-
68 B -grahair/; D -grahaiḥ

kumbhāṇḍagrahair[71] dvīpibhiḥ[72] kākair ulūkaiḥ[73] kīṭaiḥ sarīsṛpair[74] anyaiś[75] ca manuṣyāmanuṣyaiḥ[76] satvaiḥ//[77]

[3.1] atha khalu[78] bhagavān[79] āyuṣmantaṃ[80] rāhulam[81] āmantrayate[82] sma/ udgṛhna tvaṃ[83] rāhula[84] imāṃ mahāśītavatī nāma dhāraṇīṃ vidyāṃ[85]/ catasṛṇāṃ[86] pariṣadāṃ[87] rakṣāvaraṇaguptaye[88] bhikṣuṇāṃ[89] bhikṣuṇīnām[90] upāsakānām[91] upāsikānāṃ[92] ca[93] sarvasatvānāṃ[94] ca[95] dīrgharātram arthāya hitāya sukhāya[96] yogakṣemāya[97] bhaviṣyati//

[3.2] tad yathā/ aṅgā[98] vaṅgā[99]/ kaliṅgā[100]/ varaṅgā[101] saṃsāratarаṅgā[102] sāsadaṅgā/ bhagā[103] asurā[104]/ ekatarаṅgā[105] asuravīrā[106]/ (107-tara vīrā/-107)

---

69 B omit.
70 B -grahai
71 B -grahaiṛ; D kumbhāṇugrahair
72 D dvīpibhiḥ
73 B ūlūkeḥ; D ūlūkaiḥ
74 B śerīsṛpair
75 B anya
76 B manūṣyair amanuṣyai; D manūṣyāmanūṣyaiḥ
77 B sarvvasatvair iti; D satvair iti//
78 B, D khalū
79 D bhagavāṃ
80 B Ayūṣmanta; D Ayūṣmantaṃ
81 B rāhuram; D rāhulam
82 B Amantayeti
83 B tvaṃ ānakṣa「盲目」
84 B rāhura
85 B mahāvidyārājñi
86 B catasṛṇā
87 B pariṣadā; D parṣadāṃ
88 B -graptayo; D -graptaya
89 D bhikṣūṇāṃ
90 B bhiṇīnām; D bhikṣūṇīnāṃm
91 D upāśakānāṃ
92 D ūpāśikānāṃ
93 B omit.
94 B -satvānā
95 B omit.
96 B, D sūkhāya
97 B yogasambhākṣemāya「輝きを守る」; D yogakṣamāya
98 B agā
99 B vagā
100 B kaligā bhagā
101 B varagā; D vaṅgār varaṅgā
102 B saṃsāṃratagā; D -gā/
103 B, D bhaṃgā
104 B yesurā; D asūrā
105 B ekatarāgā; D -talaṅgā

(108-tara[109] (110-tara-108)) vīrā-110))/ (111-kara vīrā/ (112-kara kara-112)) vīrā-111))/ indrā[113] indrakisarā[114]/ haṃsā[115] haṃsakisarā[116]/ picimālā[117]/ mahākiccā[118]/ viheṭhikā kālucchikī[119]/ aṅgodara[120] jayālikā[121]/ velā[122] cintāli[123]/ (124-cili cili hili-124)) sumati[125] vasumati[126]/ culu[127] naṭṭe/ (128-culu culu naṭṭe-128))/ (129-culu culu culu naṭṭe/-129)) culu nāḍi [130]/ (131-ku nāḍi-131))/ (132-hārīṭaki hārīṭaki kārīṭaki kārīṭaki kārīṭaki kārīṭaki/-132)) gauri gandhāri[133]/ caṅḍāli[134] vetāli[135]/ mātaṅgi[136]/ varcasi[137] dharaṇi[138] dhāraṇi[139]/ taraṇi[140] tāraṇi/ uṣṭramālike[141]/ kaca kācike[142]/ (143-kaca kācive/-143)) cala nāṭike[144]/ kākalike/ lalamati[145]/ lakṣamati/

---

106 B suratīvīrā; D asūravīrā
107 D omits.
108 D tara 2
109 B kara
110 B viro2
111 B omits.
112 D kara 2
113 D indra
114 B -kiselā
115 B hasā
116 B haṃsaṃkirāsarā; D haṃsā-
117 B pilimālā; D picerāme
118 B -kicā
119 B kālūcchikā; D tālūcchikā
120 B agādarā; D aṅgādarā
121 B jayājayālikā; D jayajayālikā
122 B velā elā; D velā elāntā
123 B citrāri; D omit.
124 B cili 2 hili 2 mili 2; D cili 2 hili 2
125 D sūmati
126 D visūmati
127 B cūlū; D cūlūḥ
128 B cūlū 2 nade; D cūlū 2 naṭṭe
129 B omits; D culu naṭṭe/
130 B nāḍiḥ
131 B kū nādi
132 B hārīṭaki karītaki kāriṭaki/; D hāriṭaki 2 kāliṭeki 2 kariṭaki 2/
133 D gandhārī
134 D caṇudī
135 B vatāli; D vetārīvarvasi
136 B mātagi
137 B vaccasi; D omit.
138 D dharaṇī
139 B dhāraṇi praklāmālike; D dharaṇī
140 B taraṇī
141 B draṣṭamālike; D usūmālile
142 D kāciva
143 B omits.; D kaṃca kacive/
144 B nādike

varāhakule[146]/ (147-matpale utpale/-147) kara vīre/ (148-kara kara vīre/-148) (149-tara vīre/-149) (150-tara tara vīre/-150) kuru[151] vīre/ (152-kuru kuru vīre/-152) curu[153] vīre/ (154-curu curu vīre/-154) mahāvīre[155]/ iramati[156]/ varamati[157]/ rakṣamati/ sarvārthasādhani[158]/ paramārthasādhani[159]/ apratihate/ indro rājā/ yamo rājā/ varuṇo[160] rājā/ kubero[161] rājā/[162] manasvī[163] rājā/ vāsukī[164] rājā[165]/ (166-daṇḍakī rājā/-166) daṇḍāgnī[167] rājā/ dhṛtarāṣṭro[168] rājā/ virūḍhako rājā/ virūpākṣo rājā[169]/ brahmā sahasrādhipatī[170] rājā/ buddho[171] bhagavān[172] dharmasvāmī[173] rājā/ anuttaro[174] lokānukaṃpakaḥ[175]/ mama[176] sarvasatvānāṃ[177] ca rakṣāṃ[178] karotu[179]/ paritrāṇaṃ[180] parigrahaṃ

---

145 D la2mati
146 D -kūle
147 B matpate utpate dharākuripālikūli/; D matpate utpate/; E matpale/ utpale/ dhārā kūli pārā hūli/
148 B, D kara 2 vire/
149 B omits.; D tara vīre/ tara vīre/ tara vīre/
150 B omits.; D, E tara2 vīre/
151 B, D kūrū
152 B, D kūrū 2 vire/
153 B, D cūrū
154 B, D cūrū 2 vīre/
155 B omit.
156 B ilamati
157 D viramati
158 B sarvātha-
159 B omit.
160 B, D varūṇo
161 B kuvya
162 B -raja / kūbhaṇḍo raja; C -raja / kubhāṇdo rājā; E -raja / kubhāṇḍo rājā
163 B manasvi; D manāsvi
164 D vāsūki
165 C -raja / yamadagni rājā
166 D omits.
167 B daṇḍāki; D daṇḍāgni
168 B dhṛtarāṣṭo
169 B rājāḥ
170 B sahāpati; D sahādhipati
171 B būddvo
172 B bhagavā
173 B, D dharmmasvāmi
174 B, D anūttaro
175 B lokonūkaṃpaka; D -ānū-
176 B, E mama saparivārasya
177 B sarvasatvānā
178 B rakṣā
179 B kurvvantu/ jivantu gupti; C kurvvantu guptiṃ; D, E kūrvantu guptiṃ
180 B paritrāna

paripālanaṃ[181] śāntiṃ[182] svastyayanaṃ[183] daṇḍaparihāraṃ[184] śastraparihāraṃ[185] viṣanāśanaṃ[186] śīmābandhaṃ[187] dharaṇībandhaṃ[188] ca kurvantu[189] jīvantu[190] varṣaśataṃ paśyantu śaradāṃ[191] śatam//

[3.3] tad yathā/ ilā milā utpalā[192]/ iramati viramati[193]/ halamati[194]/ lakṣamati[195]/ rakṣamati[196]/ (197-kuru kuru mati/-197) (198-huru huru phuru phuru cara cara khara khara khuru khuṛu mati mati bhūmicaṇḍe/-198) kālike/ abhisaṃlāpite[199]/ sāmalate[200]/ hūle sthūle[201]/ sthūlaśikhare[202]/ jaya sthūle[203]/ jayavate[204]/ (205-vala naṭṭe/-205) (206-cara nāḍi culu nāḍi culu nāḍi vāgbandhani/ virohaṇi/-206) sālohite[207]/ aṇḍare[208] paṇḍare/[209] karāle[210]/ kinnare[211]/ keyūre[212] ketumati/ bhūtaṃgame[213] bhūtamati[214]/ dhanye[215] maṅgalye[216]/ hiraṇyagarbhe[217]/

---

181 B paripārana; D paripāranaṃ
182 B,D sānti
183 B svassyayanaṃ
184 D daṇḍaparihāraṃ
185 B -parīhāraṃ viṣaikha; C -hāraṃ viṣadūṣaṇaṃ; D -hāraṃ viṣadūśaṇam
186 B -āśana; D -āśaṇaṃ
187 B śīmāvadha; D -vaṃdhaṃ
188 B dharaṇīvadha; D -vandhaṃ
189 B kurvvantu
190 D jīvatu
191 B, D śaradā
192 B utparā
193 B vilamati; E -mati/ rakṣamati/
194 B valamati; E -mati/ talamati/
195 B kūrūmati haramati taramati rakṣa-
196 B rakṣamati 2
197 B kūrū 2 mati 2/; E kūrū 2 mati/ hūru/ mati/
198 B hūrū 2 mati 2 hūlū mati 2 hūluma carū 2 khara 2 khūrū mati bhūmicaṇḍi/
199 B abhisarāpite
200 B somarateḥ
201 B sthūre
202 B sthūlaśikhara
203 B sthūre
204 B jayavati
205 B cūlū naṭṭe cūlū nādiḥ/
206 B vāgbaninivīrohiti/
207 B sārohite//
208 B aṇḍale//
209 B paṇḍare//
210 B karāre
211 B kinare
212 B keyūle
213 B bhūtagame
214 B bhūtapatiḥ
215 B dhanya 2
216 B magale niraṇya

(218-mahābale/ avalokitamūle/-218) acalacaṇḍe[219]/ dhurandhare[220] jayālike[221] jayāgorohiṇi[222]/ (223-curu curu phuru phuru rundha rundha dhare dhare vidhare vidhare viskambhani/-223) nāśani vināśani[224]/ bandhani[225]/ mokṣaṇi vimokṣaṇi/ mocani vimocani/ mohani vimohani/(226-bhāvani vibhāvani/-226) (227-śodhani śodhani saṃśodhani viśodhani/ saṃkhiraṇi/ saṃkiraṇi/ saṃcchindani/ sādhu turamāṇe/-227) (228-hara hara bandhumati/-228) (229-hiri hiri khiri khiri kharali/-229) (230-huru huru khuru khuru-230) piṅgale[231] namo[232] 'stu buddhānāṃ[233] bhagavatāṃ[234] svāhā//

[3.4] asyāṃ[235] khalu[236] punā[237] rāhula[238] mahāśītavatīvidyāyāṃ[239] daśottarapadaśatāyāṃ[240] sūtre[241] granthiṃ[242] baddhvā[243] hastena dhāryamānāyāṃ[244] kaṇṭhena[245] dhāryamānāyāṃ[246] samantād yojanaśatasya[247] rakṣākṛtā bhaviṣyati (248-gandhair vā puṣpair va mudrābhir

---

217 B -garvbhe
218 B mahābale mavalāvalokitemūle
219 B acalecaṇḍe
220 B dhūradhareḥ
221 B jayalike
222 B gotrohiṇi
223 B cūrū 2 phūlū 2 hara 2 khalū 2 mati svāhā// dhare 2 vidhūre 2 vimati vimkaśbhani; E cūrū 2 phūlū 2 rundha 2/ khūrū 2 hūrū 2 khūramati vandhamati svāhā// dhūrandhare/ dhare 2 vidhare vimati viskambhini/ bhāvani vibhāvani/
224 B vināśasani
225 B vadhani
226 E omits.
227 B śodhani viśodhani nisakani sandrindani sādhu taramāne
228 B māne 2 vadhūmati
229 B hiri 2 giri 2 kharari
230 B hūrū 2
231 B pigale
232 B nama
233 B vūddhāya
234 B bhagavate
235 B asyā
236 B, D khalū
237 B pūnā; D pūnāh
238 B,D rāhūla
239 B mahāśītavatividyayāṃ, D mahāśitavati-
240 B -padaśatāṃyā
241 B sūtraṃ; D sutre
242 B granthitaṃ; D granchitiṃ
243 B vadhvā; D vaddhā
244 B dhāryyamānāyā; D dhāryatamānā-
245 B omit.
246 B omit.
247 B yojanaśataṃ sahasrāṣṭasya; C, E yojanaśatasahasrasya

vā naiva manuṣyo vāmanuṣyo vābhibhaviṣyati/[-248)] [(249-]na śastraṃ na viṣaṃ na rogo na jvaro na prajvaro na vidyāmantro na vetāḍaḥ/[-249)] na vyādhinā[250] nāgninā[251] na viṣodakena[252] kālaṃ kariṣyati/[253] vidyāmantraprayogānāṃ[254] sarveśāṃ[255] sādhuprayuktānāṃ[256] cāsiddhānāṃ[257] siddhakarī[258]/ siddhānāṃ ca saṃkṣobhaṇī[259]/ paraprayuktānāṃ[260] ca bandhanī[261]/ parabandhanānāṃ[262] ca pramocanī/ sarvarogaśokavighnavināyakānāṃ[263] vināśanakarī/ kalikalahakaluṣapraśamanakarī[264]/ yo graho[265] na muñcet[266] saptadhāsya sphuṭen[267] mūrdhā[268] arjakasyeva[269] mañjarī[270]/ vajrapāṇiś[271] cāsya mahāyakṣasenapatir[272] vajreṇādīptena[273] prajvālitena[274] ekajvālībhūtena[275] tāvad[276] vyāyacched[277] yāvan[278] mūrdhānaṃ sphoṭayet[279]/ [(280-]catvāraś ca[-280)]

---

248 B gandhaiḥ puṣpai mudrābhi vā manūṣyā manūṣyo vārbhibhaviṣyati//; D omits.; E gandhair vvā puṣpair vva dhūpair vva mūdrābhir vvā // naiva-

249 B na viṣaṃ na śastra na gara na roga naṃ jvala na vidyāmantra na vetāḍa; C na viṣaṃ na śastraṃ nama roga rogo na jvaro na prajvaro/ na vidyā na mantro na vetā/ anadyādhau nāśvau; D na viṣaṃ na śastraṃ-; E na viṣaṃ na śastraṃ na garaṃ na rogo-

250 B vyādhi

251 B nāgnī

252 B viṣamdake

253 B kaliṣyati/

254 B na vidyānāvidyāmantraprayoge; D na vidyā-

255 B svasarveśāṃ viṣamantraprayogānāṃ ca; D sarveṣāṃ

256 B omit.; D sādhūprayūktānāṃ

257 B omit.

258 B -kari sarvvaṣāsādhūpayūktānā ca vaddhanī asiddhānāṃ siddha// karisiddhānānna//

259 B sakṣobhaṇī; D saṃkṣobhaṇi

260 B paraprayogānā; D -prayūktā-

261 B vadhani

262 B paravadhanā; D paravaṃdha-

263 B -vināyakānā ca

264 B sarvakarīkalahakarūṣa-; D, E -lūṣapraśamanakarī/ sarvagrahavimocanakarī「一切の障りを開放する女」

265 B gaho

266 B muacet; D mūñcet

267 B sphuṭe; D sphūṭet

268 B mūddhā

269 B ajakasyava; D ajakasyeva

270 B majariḥ

271 B vajapāṇiḥ

272 B ṣasyanāpatir; D ṣasenāpati

273 B vajeṇā-

274 B jvālitena sajvalitena; D jvālitena

275 B -bhūtenā vandhāyate//; D ekajvalibhūtena

276 B omit.

277 B omit.; D vyāye

278 B yāvat

279 B sphoṭayeta; D sphoṭayat

mahārājāno[281] ’yomayena[282] cakreṇa mūrdhānaṃ[283] sphoṭayeyuḥ[284]/ kṣuradhārāprahāreṇa[285] vināśayeyus[286] tasmāc[287] ca[288] yakṣalokācyavanaṃ[289] bhaveyuḥ[290]/ aḍakavatyāṃ[291] rājadhānyāṃ[292] na labhate[293] vāsam[294]//

atha[295] khalu[296] punā[297] rāhula[298] mahāśītavatīmahāvidyāyāṃ[299] sakṛtparivartitāyāṃ[300] rājacaurodāgniviṣaśastrāṭavīkāntāramadhyagataḥ[301] sarvabhayebhyaḥ[302] parimucyate[303]/ iyaṃ khalu[304] punar[305] mahāśītavatī[306] vidyā[307] ekanavatyāṃ[308] gaṅgānadīvālukāsamair[309] buddhair[310] bhagavadbhir[311] bhāṣitā bhāṣiṣyate[312] bhāṣyate[313] ca[314] siddhā

---

280 B catvārarācāsya
281 D mahārājāna
282 D ’yomayana
283 B mūrdhāna
284 B sphoṭayeyaḥ; D sphoṭayeyūḥ
285 D -ārena ca
286 B, D vināśayayūḥ
287 B tasmā
288 D omit.
289 B lokāṇāvara, D yalokāccyavanaṃ
290 B bhaveduḥ; D bhavet
291 B akavatyā; D -vasyāṃ
292 B rājadhānyām
293 B//; D labhateyaṃ//
294 B vāsayaṃ yasyā; D omit.
295 B omit.; D asyām
296 B, D khalū
297 B pūna; D pūnā
298 B, D rāhūla
299 B mahāśītavatimahāvidyāyā; D śītavatī-; E mahāśītavatīnāsadhāraṇīvidyāyāṃ
300 B -varttittāyāṃ; D -varstitāyā; E satkṛsyaparivartutāyā
301 B -odakāgni-, -śastrā'ṭavīkāntāra'r□(不明)oṣumadhāgakasya; D -odakāntiviṣa-, -kāntācaṭūrgamadhya-; E -odakāgni-, -āntāradurgamadhya-
302 B sarvabhayasyaḥ; D sava-
303 B, D parimūcyate//; E pratimucyate
304 B, D, E khalū
305 B pūnam; D pūna; E pūnar
306 B mahāśītavatināma; D mahāśītavatī nāma mahā
307 E vidyai
308 B -navatyā; D -vatyā
309 B gagānadīvālūkāsamai; D -vālikā-
310 B būddhai; D būddhair
311 B bhagavadbhi
312 B bhāṣyante
313 B bhāṣinte; D omit.
314 B omit.

paramasiddhā[315] siddhaparākramā[316]/
sarvadevanāgayakṣagandharvāsuragaruḍakinnara-
mahoragādibhir[317] vanditā[318] sarvajinagaṇaparivṛtā[319]/
sarvabhayopadraveṣu[320] mama[321] sarvasatvānāṃ[322] (323-ca rakṣāṃ[324]
(325-kuru/ śivam ārogyam-325) -323) adhayaṃ[326] ca (327-sarvadā sarvathā
sarvataḥ-327) sarvāvasthāsu[328] bhavantu[329]//

[4] idam avocat bhagavān āttamanā[330] āyuṣmān[331] rāhulaḥ[332] sā ca
sarvāvatī[333] parṣat sadevamānuṣāsuragandharvaś[334] ca loko[335] bhagavataḥ[336]
samyaksaṃbuddhabhāṣitam[337] abhyanandhann[338] iti//
āryamahāśītavatī nāma vidyārājñī[339] samāptā[340]/

---

315 B sarvasiddhi
316 B parākramā
317 B, D -ādibhi; B -āsūra-, -kinara-; D -yakṣarājasagandharvāsūragarūḍa-,
318 B vanditāḥ; D vandetā
319 B sarvva-
320 B -opadaveṣū; D -opadarveṣū
321 E saparivāsasya「従者の」
322 B -satvānā
323 D omits.
324 B rakṣā
325 B bhadayārogyam
326 D adhaya
327 B sarvadāsū; D sarvathā sarvatra
328 D -sthāsū; E sarvāvaschāsū
329 D śivamārośyarakṣābhavatu; E śivamārogya rakṣā bhavantu
330 B omit.
331 B āyuṣmānā; D āyūṣmān
332 D rāhūlaḥ
333 B sarvāvati
334 B -mānūṣā-, -gandharvvaś; D -mānusāsūragarudagandharvaś;
E -mānuṣāsūragarūḍagandharvvaś
335 D lokoṃ
336 B, D bhagavato
337 B buddhabhāṣitam; D bhāṣitam
338 B -nandan
339 E mahāvidyārājñī
340 D samāptā iti//; C mahānusaṃ sārakṣā sūtraṃ samāptaṃ//; E mahāyānusaṃ sārarakṣāṃ sūtraṃ samāptaṃ//

1.1.2 ŚV-A 本チベット語訳テキスト

རྒྱ་གར་སྐད་དུ་ཨཏྲ་མ་དཱ་ད་ཥ་ཎ་མ་ཐ་ཡ་ཏེ། བོད་སྐད་དུ། འཕགས་པ་བེ་ཙོན་ཆེན་པོ་ཞེས་བྱ་བའི་གཟུངས།

[0] སངས་རྒྱས་དང་བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔའ་ཐམས་ཅད་ལ་ཕྱག་འཚལ་ལོ། །

[1.1] འདི་སྐད་བདག་གིས་ཐོས་པ་དུས་གཅིག་ན། བཅོམ་ལྡན་འདས་རྒྱལ་པོའི་ཁབ་ན། བྱ་རྩོད་ཀྱི་ཕུང་པོའི་རི་ལ་དགེ་སློང་སྟོང་ཞེས་བརྒྱ་ལྔ་བཅུའི་དགེ་སློང་གི་འདུན་ཆེན་པོ་དང་ཐབས་གཅིག་ཏུ་བཞུགས་ཏེ། དེའི་ཚེ་ན་ཚེ་དང་ལྡན་པ་སྒྲ་གཅན་ཟིན་རྒྱལ་པོའི་ཁབ་ཀྱི་ཏུར་ཁྲོད་ཆེན་པོ་བསིལ་བའི་གནས་ན་ཞིང་ཆེན་པོ་ལྷ་བྱའི་ཕྱོགས་ན་འདུག་གོ། དེར་འདི་ལྟ་སྟེ། ལྷའི་གདོན་རྣམས་དང་། ལྷ་མ་ཡིན་གྱི་གདོན་རྣམས་དང་། ཀླུའི་གདོན་རྣམས་དང་། གནོད་སྦྱིན་གྱི་གདོན་རྣམས་དང་། སྲིན་པོའི་གདོན་རྣམས་དང་། མི་འམ་ཅིའི་གདོན་རྣམས་དང་། ཁྱོ་འཕྲེ་ཆེན་པོའི་གདོན་རྣམས་དང་། དྲི་ཟའི་གདོན་རྣམས་དང་། མིའི་གདོན་རྣམས་དང་། ཆུང་ལྷའི་གདོན་རྣམས་དང་། ཡི་དགས་ཀྱི་གདོན་རྣམས་དང་། འཇུང་པོའི་གདོན་རྣམས་དང་། ཤ་ཟའི་གདོན་རྣམས་དང་། གླུ་ལ་བྱམ་གྱི་གདོན་རྣམས་དང་། གཟིག་རྣམས་དང་། ཐ་རོག་རྣམས་དང་། ཉུག་པ་རྣམས་དང་། གློག་སཏྭར་དང་[341]། ཕྲིག་ཕྲུལ་རྣམས་དང་། གཞན་ཡང་མི་དང་། མི་མ་ཡིན་པའི་སེམས་ཅན་རྣམས་ཀྱི་ཚེ་དང་ལྡན་པ་སྒྲ་གཅན་ཟིན་ལ་ཞིན་ཏু་གཙོས་སོ། །

[1.2] དེ་ནས་ཚེ་དང་ལྡན་པ་སྒྲ་གཅན་ཟིན་བྱ་རྩོད་ཕུང་པོའི་རི་གা་ལ་བ་དང་། བཅོམ་ལྡན་འདས་གা་ལ་བ་དེར་སོར་སྟེ་ཕྱིན་ནས་བཅོམ་ལྡན་འདས་ཀྱི་ཞབས་ལ་མགོ་བོས་ཕྱག་འཚལ་ཏེ། བཅོམལྡན་འདས་ལ་ལན་གསུམ་བསྐོར་བ་བྱས་ནས་བཅོམ་ལྡན་འདས་ཀྱི་སྒྲུན་ཐར་ངུས་དེ་མཆི་མ་བླགས་སོ། །

[2] དེ་ནས་བཅོམ་ལྡན་འདས་ཀྱིས་ཚེ་དང་ལྡན་པ་སྒྲ་གཅན་ཟིན་ལ་བཀའ་སྩལ་པ། སྒྲ་

[341] TD གློག་ལཏྭར་དང་（虫）, TP གློག་ལྟར་དང་

གཙན་ཟིན་ཁྱོད་ཅིའི་ཕྱིར་དའི་མདུན་ན་འདུག་ནས་མཆི་མ་བླག[342]། དེ་སྐད་ཅེས་བ་ཀ་འགྱུར་བ་དང་། བཅོམ་ལྡན་འདས་ལ་ཚེ་དང་ལྡན་པ་སྒྲ་གཙན་ཟིན་ཀྱིས་འདི་སྐད་ཅེས་གསོལ་ཏེ། །བཅོམ་ལྡན་འདས་བདག་རྒྱལ་པོའི་ཁབ་ཀྱི་དུར་ཁྲོད་ཆེན་པོ་བསིལ་བའི་གནས་ན་བུད་ཤིང་ཆེན་པོ་ལྷ་བུའི་ཕྱོགས་ན་མཆིས་མཆིས་ན། དེར་ལྷའི་གདོན་རྣམས་དང་། ལྷ་མ་ཡིན་གྱི་གདོན་རྣམས་དང་། ཀླུའི་གདོན་རྣམས་དང་། གནོད་སྦྱིན་གྱི་གདོན་རྣམས་དང་། སྲིན་པོའི་གདོན་རྣམས་དང་། མི་འམ་ ཅིའི་གདོན་རྣམས་དང་། དྲི་ཟའི་གདོན་རྣམས་དང་། ལྷོ་འཕྲེ་ཆེན་པོའི་གདོན་རྣམས་དང་། མིའི་གདོན་རྣམས་དང་། རྒྱང་ལྷའི་གདོན་རྣམས་དང་། ཡེ་དགས་ཀྱི་གདོན་རྣམས་དང་། འགྲུང་པོའི་གདོན་རྣམས་དང་། ཤ་ཟའི་གདོན་ རྣམས་ དང་། གྲུལ་བུམ་གྱི་གདོན་རྣམས་དང་། གཟིག་རྣམས་དང་། ཕྱ་རོག་རྣམས་དང་། ཉུ་གག་པ་ རྣམས་དང་། གོག་སྦྲུར་རྣམས་དང་། ཕྲིག་སྦྲུལ་རྣམས་དང་། གཞན་ཡང་མི་དང་། མི་ལག་ཁའི་སེམས་ཅན་རྣམས་ཀྱིས་བདག་ལ་ཞིན་དུ་གཙོས་ལགས་མོད།

[3.1] དེ་ནས་བཅོམ་ལྡན་འདས་ཀྱིས་ཚེ་དང་ལྡན་པ་སྒྲ་གཙན་ཟིན་ལ་བཀའ་སྩལ་པ། སྒྲ་གཙན་ཟིན་ཁྱོད་ཀྱིས་བེ་ཅོན་ཆེན་པོའི་གཟུངས་ཀྱི་རིག་སྔགས་འཚོར་བ་ཞེ་པོ་དགེ་སློང་རྣམས་དང་། དགེ་སློང་མ་རྣམས་དང་། དགེ་བསྙེན་རྣམས་དང་། དགེ་བསྙེན་མ་རྣམས་བསྲུང་བ་དང་། བསྐྱབ་པ་དང་། ཐུ་བ་དང་། ཡུན་རིང་པོའི་དོན་དང་ཕན་པ་དང་བདེ་བར་འགྱུར་བ་འདི་ཟུང་ཤིག།

[3.2] ཏ་ཏ་ཎ། ཨ་ང་ཎ། བ་ང་ཎ། ཏ་ང་ཎ། ཏ་ར་ང་ཎ། ས་ཏ་ས་ཏ། ཏ་རང་ཎ་ས། ས་དང་ས། ཊ་ཏ་ར། ཨ་ཀ་ཀ་རེ། ཨ་ཏ་ཎ་ཏ། ཏ་ར་ཎ་ཏ། ཀ་ར་ཎ་ཏ། ཀ་ཤ་ར་ཎ་ཏ། ཙུ་ཏ་ཎ་ཏ། ཙུ་ཏ་ཎ་ཏ། ཎ་ཨི་ནྡ། ཨི་ནྡ་ཀི། ས་ར་ཏ་ན་ས། ཏ་ན་ས་ཀི་ས་ར། མཆི་རེ་ལ། མ་ཏྲ་མི་ད་ཙ། མ་ཏྲ་མི་ད་ཙ་བ་ཏི་ཏ্ར་ཀ་ལི་ད་ཙ་ཀ་ཨ་ང་ཀ་ཊ་ཡེ། ཇོ་ཡི་ལི་ཀ། ཨེ་ལ། ཅོ་ན་ཏ། ལི་ལི། ཏི་ལ་ཏིལ། ས་མ་ཏི། ཐ་ས་མ་ཏི། ཙུ་ལ་ནད་ཏེ། ཙུ་ལ་ན་ཏ། ཀུ་ན་ཏེ། ཏ་ཌི་ཏ་ཀི། ན་ཌི་ཏ་

[342] TP མཆི་མ་བླག（泣く）, TD མཆི་མ་ཐོག

ཀེ་ཏ་ཥཱི་ར། གན་ཏ་རི་ཏ་ར་ཏི། ཏ་ར་ཏི། ཕྱག་ལྷ། བེ་ཥ་ལེ་ཀ། ཕྱག་ལྷ། བེ་ཥ་ལེ་ཀེ། ཀ་ར་ཀ་ཛི་ཀེ། ཀ་ཀེ་ལེ། ཙ་ལ་ནད་ཏེ། ཀ་ཁེ་མ་ལེ། ལ་མ་ཏི་ར་ཟླ་མ་ཏི། བ་ལ་ཀུ་ལེ། བ་ད་ས་ལེ། ཕུ་ན་མེ་ལེ། ཏ་ར་ཥེ་རེ། ཏ་ར་ཏ་ར་ཥེ་རེ། ཐུ་ཏ་ཥེ་རེ། ཐུ་ཏ་ཐུ་ཏ་ཥེ་རེ། ཙུ་ཏ་ཙུ་ཏ། ཙུ་ཏ་ཙུ་ཏ་ཥེ་རེ། མ་ཧ་ཥེ་རེ། ཨི་ར་མ་ཏི། བ་ར་མ་ཏི། ར་ཟླ་མ་ཏི། ས་ཁ་ཨ་ཐ་ས་ཟླ་ནི། ཡ་ར་མ་ས་ར་ས་ཟླ་ནི། ཨ་ཐ་ཏི་ཏ་ཏི། རྒྱལ་པོ་དང་། རྒྱལ་པོ་བློ་བ་དང་། རྒྱལ་པོ་གཞིན་རྗེ་དང་། རྒྱལ་པོ་ཆུང་ལྷ་དང་། རྒྱལ་པོ་གཟི་ཅན་དང་། རྒྱལ་པོ་ནོར་རྒྱས་ཀྱི་བུ་དང་། རྒྱལ་པོ་བེ་ཙོན་དང་། རྒྱལ་པོ་བེ་ཙོན་མད་དང་། རྒྱལ་ཙངས་པ་སྟོང་ལྡན་དང་། ས་ངས་རྒྱས་བཅོམ་ལྡན་འདས་ཚོས་ཀྱི་རྗེ། ཚོས་ཀྱི་རྒྱལ་པོ། འཇིག་རྟེན་ཐམས་ཅད་ལ་ཐུགས་བརྩེ་བ་བླ་ན་མེད་པས་བདག་ལ་བསྲུང་དུ་གསོལ། ཡོངས་སུ་བསྐྱབ་པ་དང་། ཡོངས་སུ་གཟུང་བ་དང་། ཡོངས་སུ་བསྐྱབ་པ་དང་། ཞི་བ་དང་བདེ་ལེགས་སུ་འགྱུར་བ་དང་། ཚད་པ་སྦང་བ་དང་། མཚོན་ཆ་སྦང་པ་དང་། ཏུག་གས་དང་པ་དང་། ཏུག་གཞིལ་པ་དང་། མཚམས་གཅད་པ་དང་། ས་བཅིང་པ་མཇོད་ཏུ་གསོལ།།

[3.3] ཏ་ཏ་ཎ། ཨི་ལ་མེ་ལེ་ཏ་ས་ལ། ཨི་ར་མ་ཏི། བེ་ར་མ་ཏི། ཙ་ར་མ་ཏི། ཕུ་ཏ་མ་ཏི། ཕུ་ཏ་ཕུ་ཏ། ཕུ་ཏ་ཕུ་ཏ། པ[343]ར་ཁུ་ཏ་ཏ། ཁུ་ཏ་མ་ཏི། ཐ་ཨ་ཨ་ཏ་ཏེ། ཀ་ལི་ཀེ། ཙ་ཏ་ཏ་ལི། ཨ་ཀེ་ས་ཐ་ལེ། ཨི་ལ་ས། ས་ལ་མ་ཏ་ཏུ་ས་ལ། ཤ་ལ་ཌ་ཡ་ས་ལ། ཙ་ལ་ནཱ་ཏེ། ཙ་ལ་ནཱ་ཏེ། ནཱ་ག་ན་ནཱ་ར་ཏ། ཁོ་ར་ཏི་ནི། ཁོ་ལེ། ཏ་ཏ། ཨ་ཏ་ཏ་རེ། པ་ཏ་ད་རེ། ཀེ་ཡུ་རེ། ཀེ་ཏུ་མ་ཏི། ཐ་ཏ་ཏི་ཀ་མ། ཐ་ཏ་ཏ། ཐ་ཏ་ཨ་ཧ་ལ་ཡེ། ཨ་ཙུ་ན་ད། ཨ་ཙུ་ཏ་ན་ད། ཐ་ར་ན་ཐ་ར། ཌ་ཡ་ལ་ཀ། ཌ་ལེ་ཁོ་ར་ཏ་ནཱ་ཙ་ར་ཏུ་ཏ་ཏུ། ཏན་ཐུ་ཏན་ཐུ། ཏུ་ཏ་ཐུ་མ་ཏི། ཐ་ར་ན་ཐ་རེ་ཐ་རེ། བེ་ཤ་མ་ཏི། ན་ཤ་ན། མ་ཏ་ཐ་ནི། མོ་ཙ་ནི། བེ་མོ་ཙ་ནི། ས་ཐ་ནི། ཤོ་ཐ་ནི། བེ་ཤོ་ཐ་ནི། ས་ཁི་ན་ནི། ན་ཤ་ར་ནི། ཨ་ད་ཙོ་ད་ད་ནི། ས་ཐ་ཏ་ར་ཆ་ནི། ཏ་ར་ཏ་ར། ཏི་རེ་ཏི་རེ། ཁི་རེ་ལེ། ཏུ་ཏ་ཏུ་ཏ། བེ་ད་ཁ་ལེ་ས་ཏ།།

343 TD ང་

[3.4] སངས་རྒྱས་བཅོམ་ལྡན་འདས་རྣམས་ལ་ཕྱག་འཚལ་ལོ། །སྒྲ་གཅན་ཟིན་པ་ཅོན་ཆེན་པོའི་གཟུང་གྱི་རིག་སྔགས་བརྒྱ་རྩ་བཅུ་པ་འདི། རྒྱུད་པ་ལ་མདུད་དེ། ལག་པ་ལ་པཏྲགས་ས་མ། མགྱལ་དུ་པཏྲགས་ན། ཀུན་ནས་དཔང་ཚད་བཅུ་ཁོར་ཡུག་ཏུ་པེ་ཅོན་རྣམས་དང། མེ་ཏོག་རྣམས་དང། ཕྱག་རྒྱ་རྣམས་གྱིས་དེ་བསྡུང་བ་བྱས་པར་འགྱུར་རོ། །དེ་ལ་མི་དང་མི་མ་ཡིན་པ་རྣམས་གྱིས་མི་ཚུགས་པར་འགྱུར་རོ། །མཚོན་དང། དུག་དང། ནད་དང། རིམས་ནད་དང། རིམས་དབྱ་པོ་དང། རིག་སྔགས་དང། རོ་ལངས་དང། ཁྲོ་གཏུག་དང། མེ་དང་ཆུས་འཆི་བའི་དུས་བྱེད་པར་མི་འགྱུར་རོ། །རིག་སྔགས་དང་གསང་སྔགས་སྨོར་བ་རྣམས་ལེགས་པར་སྨོར་བ་ཐམས་ཅད་ཀྱིས་མ་གྲུབ་པ་རྣམས་ཀྱང་གྲུབ་པར་བྱེད་པའོ། །གྲུབ་པ་རྣམས་ཆུད་མི་ཟ་བར་བྱེད་པའོ། །ཕ་རོལ་གྱི་སྨོར་བ་འཆིང་བའོ། །ཕ་རོལ་གྱིས་བཅིངས་པ་ལས་གྲོལ་བར་བྱེད་པའོ། །ནད་ དང། ཆུ་ངན་དང། བགེགས་རྣམ་པར་འཇིག་པར་བྱེད་པའོ། །འཐབ་པའི་རྩོད་པ་རྣམ་པར་བྱེད་པའོ། །གདོན་ཐམས་ཅད་ཟློག་པར་བྱེད་པའོ། །གདོན་གང་གིས་མི་གཏོང་བ་དེའི་མགོ་ཅ་རྩ་ཀའི་དོག་པ་བཞིན་མགོ་ཚལ་པ་བདུན་དུ་འགེམས་སོ། །གནོད་སྦྱིན་གྱི་ཕྲེ་དགོན་ཆེན་པོ་ལག་ན་རྡོ་རྗེ་ཡང་རྡོ་རྗེ་འབར་བ། ཀུན་དུ་འབར་བ། ཀུན་དུ་རབ་དུ་འབར་བ། མེ་ལྷེ་གཅིག་དུ་གྱུར་པས་དེའི་མགོ་ཅ་རྩ་ཀའི་དོག་པ་བཞིན་དུ་ཚལ་པ་བདུན་དུ་འགེམས་སོ། །རྒྱལ་པོ་ཆེན་པོ་བཞི་ཡང་ལྷག་ཀྱི་འཁོར་ལོ་སྦྱི་སོ་ལྷ་བཅའི་མཚོ་ན་གྱིས་ཕུང་བར་བྱེད་དོ། །གནོད་སྦྱིན་གྱི་འཇིག་རྟེན་དེ་ནས་ཤི་འཕྱས་ནས་ལྷང་ལོ་ཅན་གྱི་ཕོ་ཐང་འཁོར་དུ་གནས་པ་མི་འཐོབ་བོ། །སྒྲ་གཅན་ཟིན་རྒྱལ་པོ་དང་མི་ཁོད་དང། མེ་དང། ཆུ་དང། མཚོན་དང། འཐོག་དང། དགོན་པ་དང། རི་དང་མྱ་ངན་དུ་སོང་བ་གང་གིས་བེ་ཅོན་ཆེན་པོའི་གཟུངས་ཀྱི་རིག་སྔགས་འདི་ལན་གཅིག་བརྗོད་ན། ཕྲིག་པ་ཐམས་ཅད་ལས་རབ་དུ་ཐར་བར་འགྱུར་རོ། །སྒྲ་གཅན་ཟིན་པེ་ཅོན་ཆེན་པོའི་གཟུངས་སྔགས་འདི་སངས་རྒྱས་བཅོམ་ལྡན་འདས་གང་གིས་ཐུགས་རྗེ་ལྡན་པ་ཁ་ཅིག་ཀྱང་བཅུ་རྩ་གཅིག་གི་བྱེ་མཁྱེད་

ཀྱིས་གསུངས་པ། གསུང་གི་གསུང་བར་[344]འགྱུར་བ་མཆོག་ཏུ་གྱུར་པ། གཞན་གྱིས་མི་ཐུབ་པ། ལྷ་དང་། ཀླུ་དང་། དྲི་ཟ་ལ་སོགས་པས་བསྟོད་པ། འཕྲིན་པོ་ཐམས་ཅད་ཀྱིས་ཡོངས་སུ་གཟུང་བ་སྟེ། བདག་དང་སེམས་ཅན་ཐམས་ཅད་གཙོ་བ་ཐམས་ཅད་ལས་བཏེ་བར་གྱུར་ཅིག་ནད་མེད་པ་དང་འཇིགས་པ་མེད་པར་གྱུར་ཅིག།

[4] བཅོམ་ལྡན་འདས་ཀྱིས་དེ་སྐད་ཅེས་བཀའ་སྩལ་ནས། ཚེ་དང་ལྡན་པ་སྒྲ་གཅན་ཟིན་ཡིད་རངས་ཏེ། བཅོམ་ལྡན་འདས་ཀྱིས་གསུངས་པ་ལ་མངན་པར་བསྟོད་དོ། །འཕགས་པ་བེ་ཙོན་ཆེན་པོ་ཞེས་བྱ་བ་ཐེག་པ་ཆེན་པོའི་མདོ། རྫོགས་སོ། །

[5] །།རྒྱ་གར་གྱི་མཁན་པོ་ཌཱ་ན་མི་ཏ་དང་། དྲ་ན་ཤྲཱི་ལ་དང་། ཞུ་ཆེན་གྱི་ལོ་ཙྪ་བ་བན་དེ་ཡེ་ཤེས་སྡེས་བསྒྱུར་ཅིང་ཞུས་ཏེ་སྐད་གསར་ཚད་ཀྱིས་ཀྱང་བཅོས་ནས་གཏན་ལ་ཕབ་པ། །

344 གསུང་གི་གསང་བ the secret of speech

1.1.3　ŚV-A 本漢訳テキスト

大寒林聖難拏陀羅尼經[345]　西天中印度摩伽陀國那爛陀寺
三藏傳教大師賜紫沙門臣　法天奉　詔譯

[1.1]　如是我聞。一時薄伽梵。在王舍城中。是時尊者羅睺羅。遊於孕欺迦耶怛曩地寒林之中。於大塚間。彼時有諸天魅龍魅藥叉羅刹緊捺囉𡢁嚕荼摩護囉誐。及餘一切人非人。餓鬼部多比舍佐供畔拏等之所來魅。亦有多種異類烏鵲。獯狐豺狼蟲蟻等。極多擾惱

[1.2]　于時尊者羅睺羅往詣佛所。到已頭面著地。禮世尊足圍遶三匝。涕淚悲泣立世尊前

[2]　爾時世尊告羅睺羅言。汝今云何涕淚悲泣住立我前。羅睺羅言如是世尊。我先住於王舍城孕欺迦耶怛曩地寒林之中。於大塚間。彼時有諸天魅龍魅藥叉羅刹緊捺囉𡢁嚕荼摩護囉誐。及餘一切人非人。餓鬼部多比舍佐供畔拏等。皆來魅我。亦有多種異類烏鵲獯狐豺狼諸蟲蟻等。極擾惱我

[3.1]　爾時世尊告尊者羅睺羅。言羅睺羅汝今諦聽此有大明祕密難拏陀羅尼。爲擁護聽衆。若苾芻苾芻尼鄔播索俱鄔播斯迦。長夜利益得安樂故。

[3.2]　說此陀羅尼曰

怛上儞也二合[346]他去引一阿於肯反去誐罔武肯反誐婆蒲肯反去誐二嚩嘮轉舌誐三僧去娑引去囉哆嗡轉舌誐上四娑去引麼嚩娜娑去引五婆蒲肯反去誐囉仁際反上素囉六翳迦哆囉上引阿囉尾囉七哆囉尾囉八引哆囉哆囉尾囉上引九迦囉尾囉引迦囉迦囉尾囉引十印娜印娜罽居翳反娑去引羅引十一悍娑去引悍娑罽准上切娑去引囉引十二嗶唧麼攞去引十三麼賀引枳佐去引尾呬去恥迦去引十四迦去引攞砌迦去引阿於肯反虞去引娜囉引十五惹引野引惹引耶梨迦去引十六際攞去引翳攞去引十七尾跢去引梨唧唧醯梨醯梨十八三去麼底嚩素麼底十九祖魯曩恥上祖魯祖魯曩恥上二十祖攞曩引嬭上矩曩引嬭上二十二賀引栗吒枳二十二迦去引栗去吒枳迦去引栗吒枳二十三矯魚夭反哩巘馱去引哩二十四賛拏上里麼引登去儗二十五達囉抳陀去引囉抳二十六塢瑟怛囉三合播上栗計二十七迦左迦引哩計嚩羅曩引嬭二十八迦去引羯栗計二十九攞攞麼底三十囉乞叉二合麼底三十一嚩囉引矩禮三十二麼儞也二合帝三十三塢怛跛二合禮迦囉尾嚩三十四多囉尾嚩三十五哆囉哆囉尾嚩矩嚕尾嚩矩嚕矩嚕尾嚩三十六祖嚕祖嚕尾嚩三十七麼賀引尾嚩誐囉麼底三十八拶囉麼底三十九囉乞叉二合麼底四十薩轉舌嚩引囉他二合娑上馱顎上四十一跛囉麼引轉舌呼囉他二合娑引去馱顎上四十二阿鉢囉二合底賀帝四十三印捺嚕二合囉引惹引四十四素引謨去引囉引惹引四十五嚩嚕吽拏矩反囉引惹引四十六矩吠無閉反嚕引囉引

---

[345] 経典中の 5 種類の文字（𡢁嚩吽嚧嘗）については、[大塚 2011: 161, 163-164]より引用した。

[346] [児玉 1991: 63]によれば、陀羅尼中に見られる「合」とはサンスクリットの合成語をあらわす。例えば、「二合」「三合」は、それぞれ「2 字」「3 字」のサンスクリットの合成語である。そのほか、「引」は長音を表すという。

惹引四十七麼曩引悉尾二合上囉引惹引四十八嚩去引素罰囉引惹引四十九難去拏上引仡顎二合囉引惹引五十沒度去引娑賀娑囉二合引地跛底丁曳反囉引惹引五十二沒度去引婆去誐挽無泮反達轉舌麼娑嚩二合引弭囉引惹引五十三阿弩哆上嚕去引路去引迦去引努劍跛迦五十三囉乞叉二合囉乞叉二合翰去引阿呬崩去引五十四薩轉舌嚩薩怛嚩二合引難去引左五十五囉乞産二合引迦嚕去引都五十六跛哩怛囉二合喃上五十七跛哩嬖囉二合憾五十八跛哩播攞能去五十九扇引底孕二合娑嚩二合悉底也三合野能去六十難上拏跛哩賀引覽六十一設娑怛囉三合跛哩賀引覽六十二尾灑努灑喃上六十三尾灑曩引舍喃上六十四枲上麼引滿去重呼鄧上陀去引囉抳上六十五滿鄧上左矩囉挽二合無溪反覩六十六爾上仁際反嚩都挽無鉢反哩灑二合舍蹬六十七跛舍野二合都設囉那上引設蹬六十八

[3.3] 怛儞也二合他上引六十九嚩攞嚩底七十拶囉麼底七十一哆攞麼底七十二洛乞叉二合麼底七十三囉乞叉二合麼底七十四護嚕麼底七十五護上嚕護上嚕七十六普嚕普嚕七十七拶囉拶囉七十八設覩嚨二合詎其據反嚕詎嚕七十九麼底麼底八十普弭賛抳上八十一迦去引里計置八十二阿枳娑攞引比上禰八十三娑引麼曩帝八十四護上禮窣兎二合禮娑他二合攞始伽嚩八十五惹引野窣兎二合引禮八十六惹攞曩引嬭上八十七祖魯曩引嬭上八十八嚩引仡挽二合無溪反馱儞八十九尾嚕去引賀抳素引魯呬上帝九十阿拏上嚩上半拏上嚩上九十一迦囉引禮九十二緊曩嚩上九十三計庾嚩上九十四計都麼底九十五普蹬誐謎九十六普哆麼底歎儞曳上二合合曹上誐禮曳九十七二合麼賀引嚩攞九十八魯引呬多母上禮九十九阿拶魯抳上一百馱囉馱囉引一百一惹野引里計一百二惹野嬌魚夭反嚩去引賀抳一百三祖嚕祖嚕一百四嗡盧恩反轉舌馱嗡淮上馱一百五普嚕普嚕一百六麌嚕麌嚕一百七詎淮前嚕詎嚕一百八麼底麼底一百九滿重呼兎麼底一百十度上嗡淮上切馱嚕馱喇一百十一馱上嚩上馱上嚩上一百二尾達嚩尾麼底尾瑟劍二合婆去禰一百十三曩引舍禰尾曩引舍禰一百十四滿去重呼馱禰謨去引乞叉二合抳一百十五尾謨去引拶禰一百十六謨去引賀禰婆去引嚩禰一百十七戍引馱去禰僧去戍馱禰去一百十八尾戍引馱去禰一百十九僧去契上囉抳一百二十僧去髻囉禰一百二十一僧去瑳引娜禰一百二十二僧砌上那禰一百二十三娑引去度跢上嚕一百二十四麼引儞上麼引儞上賀囉賀囉一百二十五滿度麼底一百二十六呬哩呬哩一百二十七企哩企哩伽囉禮一百二十八護嚕護嚕一百二十九氷去誐禮一百三十曩謨引窣覩二合沒馱去引喃去婆誐嚩蹬引娑嚩二合引賀引一百三十一

[3.4] 復次羅睺羅。此大明陀羅尼念誦之人。能以香花而作供養。及結印契志心念誦一百八遍結諸線索繫於手上及安頸上。即得周遍百踰繕那能爲擁護。人非人等悉皆遠離。亦迺不被水火之所焚漂刀杖毒藥瘧病沴疾。不能侵害亦不中夭尾怛拏病及明呪術。誦此眞言皆得安樂。若他繫縛即得解脫一切災惱。言誦鬪諍亦悉除滅

若有鬼魅來作嬈亂不退散者。但專志心誦此眞言。彼等鬼神見持誦人。如執金剛大藥叉主純一金剛。威猛熾盛炎烈火焰。四大天王各執鐵輪。鋒利刀劍逐令馳散。頭破七分身體劈裂

若彼鬼魅還本住處。彼諸同類不容入衆。亦不令住阿吒迦嚩底大王都城。復次羅睺羅此難拏大明陀羅尼志心誦持。即得遠離王賊水火毒氣刀杖。曠野山林險難惡道。往來之者一切無畏

[4]　　復次羅睺羅。此難拏大明陀羅尼。九十一殑伽沙數諸佛。已説今説當説。具足神通。大神通者諸天龍藥叉犍闥婆阿素洛孽魯荼摩護囉誐。一切群生圍遶禮拜。彼諸衆生離一切怖皆得安樂

時尊者羅睺羅及諸大衆聞世尊説一心信受禮佛而退

大寒林聖難拏陀羅尼經

1.2『大寒林陀羅尼』（ŚV-B 本）

1.2.0　使用テキスト

ŚV-B 本は現在サンスクリット・テキストや漢訳は見つかっておらず、チベット語訳のみ明らかになっている。注は Toh., Ota.の異同を示しており、文脈からテキストを適宜校訂した。

［チベット語訳］

བསིལ་བའི་ཚལ་ཆེན་པོའི་མདོ་ （*Mahāśītavana sūtra*　『大寒林経』）

TD) Toh. No. 562

TP) Ota. No. 180

1.2.1　ŚV-B 本チベット語訳テキスト

རྒྱ་གར་སྐད་དུ། མཧཱ་ཤཱི་ཏ་བནཱ་ས་ཏྲ། པོད་སྐད་དུ། བསིལ་བའི་ཚལ་ཆེན་པོའི་མདོ། དཀོན་མཆོག་གསུམ་ལ་ཕྱག་འཚལ་ལོ།

[0.1.1]　།འཇིག་རྟེན་མཁས་པ་ཇོག་སར་བདས་རྒྱས། །གང་གིས་ཐོག་མར་རིག་སྔགས་རྣམས། །འཇམ་བྱའི་གླང་དུ་གསུངས་པ་ཡི། །སངས་རྒྱས་དབལ་ལ་ཕྱག་འཚལ་ལོ། །ཀ་ལྷར་བྱང་དང་འདས་པ་དང། །མ་བྱོན་སངས་རྒྱས་གང་ལགས་པ། །ཐམས་ཅད་ལ་ཡང་བདག་ཕྱག་འཚལ། དེ་དག་ཀུན་ལ་སྒྲུབས་སུ་མཆི། །ལས་པོ་ལོ་བསྐོར་བ་བླ་མེད་པ། །མར་མེ་མཛད་ལ་ཕྱག་འཚལ་ལོ། །ཚས་ཀྱི་རྒྱལ་པོ་འོད་མཛད་པ། །ཐམས་ཅད་གནོན་ལ་ཕྱག་འཚལ་ལོ། །ཐམས་ཅད་མཁྱེན་པ་གྲགས་ལྡན་པ། པཎ་ཌི་ཏ་ལ་ཕྱག་འཚལ་ལོ། །སྒྲོན་དང་ལྡན་པ་སྐྱོབ་མཛད་པ། །རབ་འཕོར་གཤེགས་ལ་ཕྱག་འཚལ་ལོ། །དེད་དཔོན་བླན་མེད་བ་པོ། །གྲགས་པའི་བླ་ལ་ཕྱག་འཚལ་ལོ། །ཉི་ཟླ་ལྟ་བུར་འོད་མཛད་པ། །བདེ་མཛད་དེ་ལ་ཕྱག་འཚལ་ལོ། ཆོས་ཀྱི་མེ་ལོང་སྟོན་པ་པོ། །དོན་གཟིགས་ལ་ཡང་ཕྱག་འཚལ་ལོ། །དུལ་བའི་ཚུལ་ཁྲིམས་འཇིགས་མེད་པ། །རྒྱལ་ཞེས་བྱ་ལ་ཕྱག་འཚལ་ལོ། །མཚན་མཆོག་སུམ་ཅུ་རྩ་གཉིས་ལྡན། །སྐར་རྒྱལ་ལ་ཡང་ཕྱག་འཚལ་ལོ། །རྗོགས་པའི་སངས་རྒྱས་དབལ་ལྡན་པ། །རྣམ་པར་གཟིགས་ལ་ཕྱག་འཚལ་ལོ། །འོད་ཅན་གཟི་བརྗིད་ལྡན་པ་པོ། །གཞན་ཏོར་ཅན་ལ་ཕྱག

འཚལ་ལོ། །ལེགས་པར་མཆོད་པ་གྱིས་ལྷན་པ། །ཐམས་ཅད་སྟོན་པ་ལ་ཕྱག་འཚལ་ལོ། །བདུད་
དཔུང་རབ་ཏུ་འཇོམས་པ་པོ། །ལོག་ངན[347]སེལ་ལ་ཕྱག་འཚལ་ལོ། །ཐུགས་རྗེ་དཔལ་དང་ལྷན་
པ་པོ། །གསེར་ཕྲུག་དེ་ལ་ཕྱག་འཚལ་ལོ། །སེམས་ཅན་ཀུན་ལ་ཕྲིན་བཅོ་བ། །འོད་སྲུང་དེལ་
ཕྱག་འཚལ་ལོ། །ཤྲ་ཀྱ་སེང་གེ་འོད་མཛད་པ། །གསེར་མདོག་ཅན་ལ་ཕྱག་འཚལ་ལོ། །སེར་སྣ་
མེད་པ་ཕྲིན་ཆེ་ཅན། །ཐུགས་པ་ལ་ཡང་ཕྱག་འཚལ་ལོ། ས་ངས་རྒྱས་ཀུན་ལ་འང[348]ཕྱག་
འཚལ་ཏེ། །དེ་དག་ལ་ནི་བདག་སྐྱབས་མཆི། །གང་དག་གིས་ནི་ཆོས་བསྟན་པ། །ས་ངས་རྒྱས་
ཀུན་ལ་ཕྱག་འཚལ་ལོ། །གང་ལ་ས་ངས་རྒྱས་གྱས་མཛད་པའི། །ཆོས་ལ་བདག་ནི་ཕྱག་འཚལ་
ལོ། །གང་ལ་ཕྱལ་ན་དོན་ཆེ་བའི།

[0.1.2] །དགེ་འདུན་ལ་ཡང་ཕྱག་འཚལ་ལོ། །ཉན་ཐོས་ཤེས་རབ་མཆོག་གྱུར་པ། །ཤྲ་རི་པུ་ཏ་ལ་
ཕྱག་འཚལ་ལོ། །ཟླ་བཕལ་ཅན་གྱི་མཆོག་གྱུར་པ། །མོ་ད་ག་ལ་ཏ[349]ལ་ཕྱག་འཚལ་ལོ། །ཆོས་ཀྱི་
གཏམ་ལ་འཇིག་མེད་པ། །ཀུ་ན্ད་པ་ཏ་ལ་ཕྱག་འཚལ་ལོ། །ཉན་ཐོས་སྦྱངས་པའི་མཆོག་གྱུར་
པ། །འོད་སྲུང་ལ་ཡང་ཕྱག་འཚལ་ལོ། སྟོབ་པ་ཡི་ནི་དབང་གྱུར་པ། །ཀཱ་ཏྱ་ཡ་ན་ལ་ཕྱག་འཚལ་
ལོ། །མང་དུ་ཐོས་པ་རིག་ཕྲག་འཆང། །ཀུན་དགའ་པོ་ལ་ཕྱག་འཚལ་ལོ།

[0.1.3] །ལྷས་ངན་དང་ནི་ཡུལ་འཁོར་སྲུང། །མིག་མི་བཟང་དང་འཕགས་སྐྱེས་པོ། །ཕྱོགས་བཞི་
ཁོར་ཁོར་ཡུག་གི། །རྒྱལ་ཆེན་རྣམས་ལ་ཕྱག་འཚལ་ལོ། །གནོད་སྦྱིན་རྣམས་ཀྱི་སྡེ་དཔོན་
མཆོག། ཉི་ཤུ་བརྒྱད་ལ་ཕྱག་འཚལ་ལོ། །ཕ་མ་མཁན་པོ་སློབ་དཔོན་དང།

[0.2] །ལྷ་རྣམས་ལ་ནི་ཕྱག་འཚལ་ལོ། །དེ་དག་ལ་ནི་ཕྱག་འཚལ་ནས། །རིག་ཕྲག་འདི་ནི་གྱུར
གྱུར་ཅིག། །གང་གི་དོན་དུ་ཐུ་བ་ཡི། །དོན་དེ་བདག་ལ་གྱུར་གྱུར་ཅིག། ཕྱང་བར་སེམས་ཤིང
གནོད་བྱེད་པའི། །མི་མ་ཡིན་རྣམས་གང་དུ་དེད། །གནོད་པར་འདོད་པ་གླགས་བལྟ
རྣམས། །ལྟོན་པའི་བསྟན་པ་མཉན་པར་གྱིས། །ཐུགས་པར་སེམས་ཤིང་ཕན་འདོད་པའི། ། མི་

347 TD omit.
348 TP omit.
349 TP མ་ཌ་ད་ཀལ་ཏ་

མ་ཡིན་པ་གང་ཡིན་རྣམས། །ཐམས་ཅད་འདུས་ཤིང་མཐུན[350]གྱུར་ནས། །འཇིག་རྟེན་སྐྱོང་
བ་རྣམས་ཀྱི་ཚོགས།སྨོན་པས་རྗེས་སུ་ཡི་རང་བ། །དགའ་བའི་སེམས་ཀྱིས་བདག་ལ་
ཞོན། །བསོལ་བའི་ཚལ་གྱི་མདོ་ཆེན་པོ་འདི་ནི་རྒྱལ་པོ་ཆེན་པོ་བཞིའི་བསྡུང་བ་ཆེན་པོ
སྟེ།འཕོལ་བཞི་པོ་རྣམས་ལ་ཡོངས་སུ་ཁྱབ་པའོ།། གནོད་ སྦྱིན་དང་། སྲིན་པོ་དང་། ཏྲི་ཀ
དང་། ཀླུ་དང་། ནམ་མཁའ་ལྷིང་དང་། གསང་བ་གོ[351]དང་།འཚུང་པོ་དང་། གླུ་ལྟུམ་དང་
ཡི་དགས་དང་། སྲུལ་པོ[352] དང་། ཤ་ཟ་དང་། ལྷ་མ་ཡིན་ དང་། ཆུང་ལྷ་དང་། ཁྲེམ་བྱེད
དང་། འཚེ་རྒྱུ་དང་། སྨྱོ་བྱེད་དང་། མི་འམ་ཅི་དང་།གྲེན་དུ་རྒྱུ་དང་། རྒྱ་བ་དང་། འདུན་པ
དང་། ངན་བྱེད་དང་། གཟེ་བྱིན་འཕྲོག་པ་དང་། བཟློད་བྱེད་དང་། རིམས་དྲག་པོ་དང་
རིམས་ཞག་གཅིག་པ་དང་། རིམས་ཞག་གཉིས་པ་དང་། ཞག་གསུམ་པ་དང་། ཞག་བཞི་པ
དང་། མི་དང་མི་མ་ཡིན་པ། སྟང་བར་སེམས་པ་དང་།གླགས་ལྟ་བ་དང། མི་ཕན་པར་འདོད
པ་དང་། གནོད་པར་བྱེད་པ། ས་ངམ་རྒྱས་བཅོམ་ལྡན་འདས་ཀྱི་བསྟན་པ་ལ་མི་དགའ་བ
དང་། གནོད་པར་འདོད་པ་དང་། ཕན་པར་མི་འདོད་པ་དང་། བདེ་བར་མི་འདོད་པ་དང་
གྱུབ་པ་དང་།བདེ་བར་མི་འདོད་པ་དང་། འཕོར་བཞི་པོ་རྣམས་ལ།མི་དགའ་བ་དང་
གནོད་པར་འདོད་པ་དང་། ཕན་པར་མི་འདོད་པ་དང་། བདེ་བར་མི་འདོད་པ་དང་། གྱུབ
པ་དང་། བདེ་བར་མི་འདོད་པ་དང་། མིང་འདི་ཞེས་བྱ་བ་ལ་མི་དགའ་བ་དང་། གནོད་པར
འདོད་པ་དང་། ཕན་པར་མི་འདོད་པ་དང་། བདེ་བར་མི་འདོད་པ་དང་། གྱུབ་པ་དང་
བདེ་བར་མི་འདོད་པ་གང་ཡིན་པ་དེ་དག་ནི་བསོལ་བའི་ཚལ་གྱི་མདོ་ཆེན་པོ་འདི་ཐོས་ནས
དེངས་ཤིག། །སྒྲོག་པར་གྱུར་ཅིག། ངངས་པར་གྱུར་ཅིག། ཀུན་ཏུ་ངངས་པར་གྱུར་ཅིག།
འདི་ནམ་འཕོད་ཅིག། ངན་སེམས་དང་གནོད་སེམས་ཀྱི་མགོ་པོ་ཚལ་པ་བདུན་དུ་འགས་

350 TP འཐུན་

351 TD པ

352 TP བསྲུལ་པོ་

ཏེར[353]། །གནོད་སྦྱིན་དང་། སྲིན་པོ་དང་། དྲི་ཟ་དང་། ཀླུ་དང་། ནམ་མཁའ་ལྷིང་དང་། གསང་བ་པ[354]དང་། འཕྲུང་པོ་དང་། གྲུལ་བྱམ་དང་། ཡི་དགས་དང་། སྲུལ་པོ[355]དང་། ཤ་ཟ་དང་། ལྷ་མ་ཡིན་དང་། ཆུང་ལྷ་དང་། རྒྱམ་བྱེད་དང་། འཚེ་རྒྱུ་དང་། སྨྱོ་བྱེད་དང་། མི་འམ་ཅི་དང་། གྲེན་དུ་རྒྱུ་དང་། རྒྱ་བ་དང་། འདུན་པ་དང་། ངན་བྱེད་དང་། གཟེ་བྱིན་འཕྲོག་པ་དང་། བཙུན་བྱེད་དང་། རིམས་དྲག་པོ་དང་། རིམས་ཞག་གཅིག་པ་དང་། ཞག་ཁྲིས་པ་དང་། ཞག་གསུམ་པ་དང་། ཞག་བཞི་པ་དང་།མི་དང་མི་མ་ཡིན་པ་ལྟང་བར་སེམས་པ་མ་ཡིན་པ་རྣམས་དང་། གླགས་མི་ལྟ་བ་དང་། ཕན་པར་འདོད་པ་དང་། གནོད་པར་མི་འདོད་བ་དང་ [356] ། ས་ངམ་རྒྱས་བཅོམ་ལྡན་འདས་ཀྱི་བསྟན་པ་ལ་དགའ་བ་དང་། དོན་དུ་འགྱུར་བར་འདོད་པ་དང་། ཕན་པར་འདོད་པ་དང་། བདེ་བར་འདོད་པ་དང་། གྲུབ་པ་དང་། བདེ་བར་འདོད་པ་དང་། མིང་འདི་ཞེས་བྱ་བ་ལ་དགའ་བ་དང་། དོན་དུ་འགྱུར་བར་འདོད་པ་དང་། ཕན་པར་འདོད་པ་དང་། བདེ་བར་འདོད་པ་དང་། གྲུབ་པ་དང་། བདེ་བར་འདོད་པ་གང་ཡིན་པ་དེ་དག་ནི་བསོལ་བའི་ཚལ་གྱི་མདོ་ཆེན་པོ་འདི་ཐོས་ནས་འདིར་འཚོད་ཅིག། མ་སྒྲག་ཅིག། མི་དངང་བར[357]གྱུར་ཅིག། ཀུན་དུ་དངངས་པར་མ་གྱུར་ཅིག། མི་འཇིགས་པ་ཁོ་ནར་གྱུར་ཅིག། མིང་འདི་ཞེས་བྱ་པའི་དོན་དང། ཕན་པ་དང། བདེ་བ་དང། བདེ་བར་གནས་པར་བྱ་བའི་ཕྱིར། བསོལ་བའི་ཚལ་གྱི་མདོ་ཆེན་པོ་འདི་བདག་གིས་བསྟན་ཅིང་བཤད་པར་བྱའོ།དེལ་བསོལ་བའི་ཚལ་གྱི་མདོ་ཆེན་པོ་བདག་ལ་བསྲུང་བ་ནི་འདི་ཡིན་ཏེ།

ཐུང་ཡ་ཐེ་དན། ཁ་ཏེ་ཁ་ཏེ། ཁ་ཐུ་ས། པ་ལ་ཀ་བ་ཏེ། ར་ཀ་ཐ་དེ་ཀ་ཏེ། ཏེ་ལི་ཏེ་ལི། ཏུ་མ་ཏེ། ཀྱི་ཐ་ཏེ། ཙ་ཙ་རི། མ་ས་ར་ཀ་ཕེ། ས་མ་ཆེ་ན། ཙ་ཏུ་ཏི་ཤི། ཡོ་ཙ་ན་ཤ་

353 TP ས་ཏེ་

354 TD གསང་བ་པ་ guhyaka; TP གསང་བ་པོ་

355 TP བསྲུལ་པོ་

356 TD དགའ་

357 TD དངངས་པར་

ཏ། ཨ་ཐ་ར་ཝཱ་ན་ཏི་ཀ་མ་ཏི། ས་ཏ་པི་ཏེ་ཐ་ཀེ་ཐཱུ་ལ་མ་ཏ་ཀ་བ་ཏེ། བདུ་ཏ་ཁ། ཕིང་ཏ་ཏ་ཨ་ཏ་པ་བ། ད་ར་ཏ་པི་ཐ། ཐ་ཐ་ཏེ། མ་ན་ཏ་ས། ཏ།

[1.1] འདི་སྐད་བདག་གིས་ཐོས་པ་ཏུས་གཅིག་ན། བཅོམ་ལྡན་འདས་རྒྱལ་པོའི་ཁབ་ན། ཏུར་ཁྲོད་ཆེན་པོ་བསིལ་བའི་ཚལ་འཇིགས་སུ་རུང་བ་སྐྱེ་བུང་ཞེས་བྱེད་པ་ན། དགེ་སློང་སྟོང་ཉིས་བརྒྱ་ཕྲ་བཅུའི་དགེ་སློང་གི་དགེ་འདུན་ཆེན་པོ་དེང་ཐབས་ཅིག་ཏུ་བཞུགས་སོ། །དེ་ནས་རྒྱལ་པོ་ཆེན་པོ་བཞི་ལྷས་ངན་དང། ཡུལ་འཁོར་སྲུང་དང། མིག་མི་བཟང་དང། འཕགས་སྐྱེས་པོ་བྱ་དང་བཅས། ཐོན་པོ་དང་བཅས། འཁོར་དང་བཅས། མངག་གཞུག་པ་དང་བཅས། ཕོ་ཉ་དང་བཅས། གཡོག་འཁོར་དང་བཅས་པ་ཁ་དོག་འཕགས་པ་དག་ནམ་མཁའ་ན་ལྷགས་ནས་གྲོས་མཐུན[358]པར་ཏུར་ཁྲོད་ཆེན་པོ་བསིལ་བའི་ཚལ་དུ་དོང་སྟེ། རང་བཞིན་གྱི་ཁ་དོག་དང་མཐུས་འོད་ཆེན་པོས་སན་བར་བྱུས་ནས། བཅོམ་ལྡན་འདས་གཙ་བ་དེར་སོང་སྟེ་ཕྱིན་ནས། བཅོམ་ལྡན་འདས་ཀྱི་ཞབས་གཉིས་ལ་མགོ་བོས་ཕག་འཚལ་ནས་ལན་གསུམ་བློར་བ་བྱས་ནས་ཐལ་མོ་སྦྱར་ཏེ། བཅོམ་ལྡན་འདས་འབའ་ཞིག་ལ་ཕྱག་འཚལ་ཞིང་ཕྱོགས་གཅིག་ཏུ་ལོངས་བོ། །ཕྱོགས་གཅིག་ཏུ་ལོངས་ནས་རྒྱལ་པོ་ཆེན་པོ་བཞིས་བཅོམ་ལྡན་འདས་ལ་ཚིགས་སུ་བཅད་པས་བསྟོད་པ། འཇིག་རྟེན་མཁས་པ་རྫོགས་སངས་རྒྱས། །དཔའ་ཆེན་ཁྱོད་ལ་ཕྱག་འཚལ་ལོ། །གོཿ་ཏ་མ་ཁྱོད་ཀྱིས་གང་མཁྱེན་པ། །དེ་ནི་ཕ་རོལ་མ་འཚལ་ཏོ། །ལན་གཉིས་ལན་གསུམ་དུ་ཡང་རྒྱལ་པོ་ཆེན་པོ་བཞིས་བཅོམ་ལྡན་འདས་ལ་ཚིགས་སུ་བཅད་ནས་བསྟོད་པ། འཇིག་རྟེན་མཁས་པ་རྫོགས་སངས་རྒྱས། །དཔའ་ཆེན་ཁྱོད་ལ་ཕྱག་འཚལ་ལོ། །གོཿ་ཏ་མ་ཁྱོད་ཀྱིས་གང་མཁྱེན་པ། །དེ་ནི་ཕ་རོལ་མ་འཚལ་ཏོ།

[1.2] དེ་ནས་བཅོམ་ལྡན་འདས་ལ་རྒྱལ་པོ་ཆེན་པོ་བཞིས་འདི་སྐད་ཅེས་གསོལ་ཏོ།། །བཙུན་པ་བཅོམ་ལྡན་འདས་ཡུལ་དང་འཕྲོད་ལགས་སམ། འཚོ་བ་དང་ལྡན་ལགས་སམ། བཙུན་པ་བཅོམ་ལྡན་འདས་སྐུ་བདེ་ ལགས་སམ། ཐུན་མི་མངའ་ལགས་སམ། ཉམ་ང་བ་མ་མཆིས་སམ།

[358] TP འཐུན་, TD མཐུན་

བཅོམ་ལྡན་འདས་ཀྱི་སྐུ་ལ་གནོད་པ་མི་མངའ་ལགས་སམ། བཅོམ་ལྡན་འདས་ལ་གནོད་སྦྱིན་
དང། ཐིན་པོ་དང། ཏྲི་ཟ་དང། ཟླ་དང། ནམ་མཁའ་ཕྱིང་དང། གསང་བ་པ[359]དང།
འཕྱང་པོ་དང། གླུལ་བྱེམ་དང། ཡི་དགས་དང། སྲུལ་པོ[360]དང། ཤ་ཟ་དང། ལྷ་མ་ཡིན་
དང། ཀླུང་ལྷ་དང། སྐེམ་བྱེད་དང། འཚོ་རྒྱ་དང། སྨྱོ་བྱེད་ དང། མི་འམ་ཅི་དང། གྲེན་ཏུ
རྒྱ་དང། རྒྱ་བ་དང། འདུན་པ་དང། ངན་བགྲེད་དང། གཟི་ཕྱིན་འཕྲོག་པ་དང། བརྟེད
བྱེད་དང། རིམས་དྲག་པོ་དང། རིམས་ཞག་གཅིག་པ་དང། ཞག་གཉིས་པ་དང། ཞག
གསུམ་པ་དང། ཞག་བཞི་པ་དང། མི་དང། མི་མ་ཡིན་པ་སྟང་བར་སེམས་པ་དང། གླགས
ལྟ་བ་དང། ཕན་པར་མི་འདོད་པ་དང། གནོད་པར་བགྲེད་པ་དགེ་ལས་གནོད་པར་བགྲེད
པར་སེམས་པ་ལྟ་མ་མཆིས་ལགས་སམ། དེ་སྐད་ཅེས་གསོལ་པ་དང། བཅོམ་ལྡན་འདས་ཀྱིས
རྒྱལ་པོ་ཆེན་པོ་བཞི་ལ་འདི་སྐད་ཅེས་བཀའ་སྩལ་ཏོ། །ཀྱེ་རྒྱལ་པོ་ཆེན་པོ་དག་ང་ལ་ཐམས
ཅད་ཡོད་དེ། ཡུལ་དང་ཡང་འཕྲོད། འཚོ་བ་དང་ཡང་ལྡན། ལུས་ཀྱང་བདེ། ནད་ཀྱང་མེད
ཉམ་ང་བ་ཡང་མེད་དོ། །ཀྱེ་རྒྱལ་པོ་ཆེན་པོ་དག་ངའི་ལུས་ལ་ནི་གནོད་པ་ཡང་མེད་དོ། །ཀྱེ
རྒྱལ་པོ་ཆེན་པོ་དག་ངས་ནི་འཇིག་རྟེན་ལྟ་དང་བཅས་པ། བདུད་དང་བཅས་པ། ཚངས་པ
དང་བཅས་པ། དགེ་སྦྱོང་དང། བྲམ་ཟེར་བཅས་པའི་སྐྱེ་དགུ་དང། ལྷ་དང་མིར་བཅས་པའི
ནང་ན་གང་དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་དགྲ་བཅོམ་པ་ཡང་དག་པར་རྫོགས་པའི་སངས་རྒྱས་ལ
གནོད་པ་བྱེད་པར་སེམས་པ་ཡང་དག་པར་མ་མཐོང་ངོ། །ཀྱེ་རྒྱལ་པོ་ཆེན་པོ་དག་དེ་ལྟ་མོད
ཀྱི། ཁོད་ཀྱི་འཁོར་རྣམས་ངའི་འཁོར་ལ་གནོད་པ་བྱེད་པར་སེམས་སོ། །དེ་སྐད་ཅེས་བཀའ
སྩལ་པ་དང།

[1.3] བཅོམ་ལྡན་འདས་ལ་རྒྱལ་པོ་ཆེན་པོ་བཞིས་འདི་སྐད་ཅེས་གསོལ་ཏོ། །བཙུན་པ་བཅོམ
ལྡན་འདས་བདག་ཅག་གསོལ་པ་མཆིས་ཏེ། དེའི་སྨད་དུ་བཅོམ་ལྡན་འདས་ལ་བལྟ་བ་དང

[359] guhyaka ; TP གསང་བ་པོ

[360] TP བསྲུལ་པོ

ཕྱག་བཀྲི་བ་དང་། བསྟེ་ན་བཀུར་བཀྲི་བ་དང་། བཅོམ་ལྡན་འདས་ཉིད་ལ་ཞུ་བའི་སྨོན་དུ་
བདག་ཅག་བཅོམ་ལྡན་འདས་ཀྱི་སྦྱིན་ཐང་མཆིས་ལགས་སོ། །དེ་ཅིའི་སྨོན་དུ་ཞེན། བཙུན་པ་
བཅོམ་ལྡན་འདས་དགོན་པ་དང་། བས་མཐའི་གནས་མལ་འདི་དག་ན་ཤིན་ཏུ་སྡང་བའི་
གནོད་སྦྱིན་དང། སྲིན་པོ་དང་། ཏྲི་ཟ་དང་། ཀླུ་དང་། ནམ་མཁའ་ལྷིང་དང་། གསང་བ་པ་
[361]དང་། འཛུང་པོ་དང་། གྲུལ་བུམ་དང་། ཡེ་དགས་དང་། སྲུལ་པོ་[362]དང་། ཤ་ཟ་དང་། ལྷ་
མ་ཡིན་དང་། ཆུང་ལྷ་དང་། རྒྱུན་ཆད་ དང་། ཚུ་ཆད་ དང་། མི་འམ་ཅི་དང་།
གྱེན་དུ་རྒྱུ་དང་། རྒྱུ་བ་དང་། འདུན་པ་དང་། ངན་བཀྲིད་དང་། གཟེ་ཕྱིན་འཕྲོག་པ་དང་།
བཟློད་ཆེད་དང་། རིམས་དྲག་པོ་དང་། རིམས་ཞག་གཅིག་པ་དང་། ཞག་གཉིས་པ་དང་།
ཞག་གསུམ་པ་དང་། ཞག་བཞི་པ་དང་། མི་དང་། མི་མ་ཡིན་པ་སྡང་བར་སེམས་པ་དང་།
གླགས་ལྟ་བ་དང། ཕན་པར་མི་སེམས་པ་དང་། གནོད་པར་བཀྲིད་པ་དག་མཆིས་སོ། །བཙུན་
པ་བཅོམ་ལྡན་འདས་ཀྱི་ཉན་ཐོས་དེ་དག་ཀྱང་དེ་ན་གནས་ཏེ། བཅོམ་ལྡན་འདས་ཀྱི་ཉན་
ཐོས་དེ་དག་ནི་སྒོད་དང་ཐོ་རངས་མི་ཉལ་བར་སྦྱོར་བ་ལ་བརྩོན་པར་གནས་ལགས་
སོ། །བཙུན་པ་བཅོམ་ལྡན་འདས་གནོད་སྦྱིན་ནམ་སྲིན་པོ་ནས་གནོད་པར་བཀྲིད་པའི་བར་
དག་བཅོམ་ལྡན་འདས་ཀྱི་བསྟན་པ་འདི་ལ་དང་པའི་སེམས་དང་ལྡན་པ་ནི་ཁྱང་ཟད་ཅིག་
མཆིས་པར་བས་སོ། །གང་དག་བཅོམ་ལྡན་འདས་ཀྱི་བསྟན་པ་འདི་ལ་དང་པའི་སེམས་དང་
ལན་པ་ནི་ཆེས་མང་ལགས་ཏེ། དེ་དག་ནི་བཙུན་པ་བཅོམ་ལྡན་འདས་ཀྱི་ཉན་ཐོས་སྒོད་དང་
ཐོ་རངས་ལ་མི་ཉལ་ཞིང་སྦྱོར་བལ་བརྩོན་པར་གནས་པ་རྣམས་ལ་གནོད་པར་བཀྲིད་པར་
སེམས་ལགས་ཏེ། དེ་དག་དགག་པའི་སྨོན་དུ་གནོད་སྦྱིན་མ་རུངས་པ་མ་དད་པ་རྣམས་དང་
པར་བཀྲི་བ་དང་། དད་པ་རྣམས་སྨར་ཞིང་དད་པར་བཀྲི་བ་དང་། འཕོར་བཞི་པོ་རྣམས་
བདེ་ལེགས་དང་། བདེ་བར། གནས་པར་བཀྲི་བ་དང་། མ་ལུས་པར་ཤིན་ཏུ་མཉམ་པར་

361 guhyaka ; TP གསང་བ་པོ་

362 TP བསྲུལ་པོ་

གཞོག་པར་འགྱུར་བའི་སྒྲུབ་དུ། བསེལ་བའི་ཚལ་གྱི་མདོ་ཆེན་པོ་འདི་བཤད་བར་འཚལ་ལོ།

[1.4] | མི་མ་ཡིན་པ་སྟང་སེམས་ཅན། རྒྱལ་བའི་བསྟན་ལ་མ་དད་པ། ཁེ་དག་བདག་གིས་ བཟློག་པར་བྱ། ཁྱོད་ཆེན་རྣམས་ནི་བདག་ལ་ཉོན། །མདོ་ཆེན་འདི་ནི་ཐོས་ནས་ཀྱང། །མི་ རྣམས་ལ་ནི་གནོད་མ་བྱེད། །གནོད་སྦྱིན་སྲིན་པོ་གླུ་རྣམས་དང་། །ནམ་མཁའ་ལྷིང་དང་ གསང་བ་པ། །པན་པར་མི་འདོད་གང་ཡང་རུང། །ཁེ་དག་ཐམས་ཅད་བཟློག་པར་བྱ། །ལྷ་དང་ ལྷ་མིན་ཟུང་ལྷ་དང་། །ལྷ་མོའི་ཚོགས་ཀྱིས་གང་བ་ཡི། །གཞལ་མེད་ཁང་མཇོས་དེ་དག་ནི། །མེ་ དང་འདྲ་བར་འོད་གསལ་ཞིང་། །ཉིམ་བྲའི་ཚུལ་འདྲ་བ། །རིན་ཆེན་ལས་བྱས་ཤིན་ཏུ་ ལྷང་། །བསོད་ནམས་བྱས་པ་དག་གིས་གང་། །རབ་ལྷང་གདོན་རྣམས་རྣམ་པར་སྤངས། །མི་ལ་ གནོད་བྱེད་གང་ཡིན་པའི། །འཕྱང་པོ་གྲུལ་བུམ་སྲིན་པོ་དང་། །ཡི་དགས་སྦྱལ་པོ་དེ་དག་ གིས། །རྨད་བྱུང་དེ་དག་མི་མཐོང་སྟེ། །གཟི་བྱིན་ལྡན་པའི་ལྷ་རྣམས་ཀྱི། །གོང་ཁྱེར་དུ་ཡང་དེ་ མི་འགྲོ། །འཕྱང་པོ་ཆེན་པོ་འདུ་བ་ན། །དེ་ཡང་དེ་དག་འདུར་མི་དབང་། །སྟན་ནམ་ཡང་ན་ ཆུ་ཡང་རུང། །ཟས་དང་སྐོམ་ཡང་མི་དབང་བོ། །ལུས་ངན་ཀྱི་ནི་ཕོ་ཐང་དུ། །ནམ་ཡང་དེ་དག་ འགྲོ་མི་འགྱུར། །རྒྱལ་པོ་ཆེན་པོ་རྣམས་ཀྱི་ཆོག། འཕྱང་པོ་གང་ཞིག་མི་ཉན་པ། །དེ་ཡི་ཁ་ནས་ ཁྲག་དོན་དག། སྐྱར་དུ་རབ་དུ་འཕབ་པར་འགྱུར། །དེ་ཡི་བརྒྱ་ཡི་གཡས་རོལ་ནས། །ཕོལ་མེག་ དག་ཀྱང་འཕྱང་འགྱུར་ཏེ། །དེ་ནི་ནད་ཀྱིས་འཆི་འགྱུར་ཞིང། །གནོད་སྦྱིན་གཟུགས་ཀྱང་སྟོན་ པར་འགྱུར། འཇིག་རྟེན་སྐྱོང་གིས་བཤད་པ་ཡི། །མདོ་ལས་གང་ཞིག་འགལ་བྱེད་པ། །འཇིགས་ པ་ཐམས་ཅད་དེ་ལའོང་། །མགོ་བོ་ཚལ་པ་བདུན་དུ་འགས། །རྒྱལ་པོ་ཆེན་པོ་རྣམས་ཀྱི་ ཆོག། །གནོད་སྦྱིན་གང་དག་མི་ཉན་པ། །འཕྱང་པོ་སྲིན་པོ་གང་ཡོད་པ། །ངན་ལྷོང་ལྷག་པའི་ ངན་ལྷོང་རྣམས། །ལྷུགས་ལས་བྱས་པའི་འགོར་ལོ་ཡི། །མཆོད་ཆ་སྦ་གྲིའི་སོ་འདྲ་བས་གནོད་ སྦྱིན་དེ་དག་བཟློག་པར་བྱ། །རྒྱལ་པོ་ཆེན་པོ་དཔལ་ལ་དང་ལྡན། | གོ་ཆས་ཞིང་མཆོད་རྟེ་ ལ། །སྟན་རྣམས་ལ་ནི་འཁོད་པ་དག། ཤར་ཕྱོགས་ན་ནི་ཡུལ་འཁོར་སྐྱང་། །ཧྲཱི་ཕྱོགས་ན་ནི་ འཕགས་སྐྱེས་པོ། །ནུབ་ཕྱོགས་ན་ནི་མིག་མི་བཟང། །བྱང་ཕྱོགས་ན་ནི་ལུས་ངན་པོ། །དེ་དག་དེ་

ན་འགོད་པ་ཡི། ཉེ་འགོར་གཙོད་སྦྱིན་འདི་རྣམས་གནས། །ས་ཁེའི་གཟུགས་དང་སྦྱ་གི་
གཟུགས། །མི་ལྷ་པ་དག་འགྲོ་ཞིང་རྒྱ། །ལྷང་ཆེན་གཟུགས་དང་རྟ་ཡི་གཟུགས། །ཁ་ཅིག་མ་
ཉེའི་གཟུགས་ཅན་ལ། །དེད་མོ་དང་ནི་ལྷ་ཡི་གཟུགས། །ལུག་དང་སྦུང་ཀི་ཕག་ཚོད་རྣམས། །རྣ་
བ་འཕྱང་དང་རྣ་བོ་ཆེ། །རྣ་བ་གཅིག་པ་ཐ་དད་པ། །སྒྲ་ཆེར་འབྱིན་ཅིང་འཇིགས་བྱེད་པ། །ས་
གཞི་རབ་ཏུ་གཡོ་བར་བྱེད། །བོང་བུ་དང་ནི་ཏ་མོ་ཁྱི། །ཆ་ལུགས་གཞན་ཡང་ཉེ་འགོར་
འགོད། །རྒྱལ་པོ་ཆེན་པོ་སྟོབས་པོ་ཆེ། ངེ་དག་ཕན་ཚུན་འདུ་བ་ན། །ལྟ་ཡི་ཤིང་རྟ་བཅས་པ་
ཡིས། །ནམ་མཁའ་ལས་ནི་འགྲོ་བར་བྱེད། །གཙོད་སྦྱིན་དག་གི་བདག་པོ་ཡང་། །མི་རྣམས་ལ་
ནི་བདེ་ལེགས་བྱེད།

| ཐྲྀད་ཡ་ཐེ་དན། བ་ཀ་ཏུ་ཐུ་ལེ། ཏ་ཤི་ཥ་ཤ་ཤི། བ་ན་ཐུ་ཏ་ལེ་ས་ཐུ་ལེ། ཞུ་ཏ་ཏ
ལ། ས་མ་ཏ་ལ། ཐ་ཤ་མ་ཐ། རྡ་ཀ། ཙ་མ་ནི་ཐ། ཡ་ཀ། བ་ཏ་མི་ཐེ་ཏ་མ་ཏ། ཏ་མ
ནु་ཐ། མ་ས་པ་ཏ་ཏ་ཏ། ཐུ་ཏ་ཐ། |

[1.5.1] | རྒྱལ་པོ་ཆེན་པོ་རྣམ་ཐོས་བྱ། །མི་ལ་ཞོན་པ་ཐ་ཡོར་བཅས་པས། །འདི་སྐད་ནས་ནི་ཚུབ
མ་ལང་ས། །དེ་བཞིན་རི་ཡང་གཡོས་པར་ཐྱུར། །རྒྱལ་པོ་ཆེན་པོ་རྣམ་ཐོས་བྱའི། །རིན་ཆེན་ཤིང
ཏ་བཅས་པ་ན། །ལྟ་དང་མི་ཡི་ཐ་ཚད་གྱི། ། རྒྱལ་པོ་ཆེན་པོ་འཆི་བ་ན། །ངངོས་པོ་རྣམས་ཀྱང
འབར་བར་འགྱུར། །ཁྲིན་པོ་འདོད་དགུར་བསྡུར་བའི་གཟུགས། །དེ་ཡི་མདུན་ན་རྒྱུ་བར
བགྱིད། །མི་མ་ཡིན་པའི་གཟུགས་རྣམས་ཀྱས། །འཇིགས་ཤིང་སྒྲ་བ་བསྐྱེད་པར་བགྱིད། །ཆེ
ཞིང་གཏུམ་ལ་མི་བཟད་པ། །དེ་ནི་ཅིང[363] མཐོད་ན་མི་ལྷ་ལ། །ཐུ་ཡང་རིང་ཞིང་ས་ཆེ
རིང། །ལག་ན་རལ་གྲི་ཐོ་བཐོགས། །ས་ནི་ཟངས་ཅན་འཇིགས་པར་བགྱིད། །ལྷ་ཆེ་ཏ་མོ་ལྷ
གི་འདྲ། ངན་ཅིང་ལག་པ་ཁྲག་དམར་པ། །ཡན་ལག་མ་ཚང་ཕྱེད་ཚལ་ལུས། །མིག་ས་ལུས
ཀྱང་ཤིན་ཏུ་ས། །ཏྲི་མ་ཅན་ལ་ལུས་ཀྱེམ་པ། །སྐྲ་བརྩེས་ལྷགས་ཀྱི་མཆུ་ཅན་ལ། །མཆོན་ཆ
ཚལས་ཆེར་འདེབས་པར་བགྱིད། །རྣ་བ་གཞུ་རྣ་གསུས་པོ་ཆེ། །སྒྲུལ་གྱི་ གཟུགས་ཅན་བེ་ཌ

363 TP ཤིང་

གཟུགས། །ཕན་གི་གཟུགས་ཅན་སྟོ་བོ་ཆེ། །མགོ་བོ་ཆེ་ལ་ལག་རིང་བ། །རྒྱ་འཕྱང་བ་ལ་ནུམ་འཕྱང། །དེ་འདྲའི་གནོད་སྦྱིན་མང་པོ་ཡི། །གཡོག་འཁོར་དག་གིས་ཡོངས་སུ་བསྐོར། །གནོད་སྦྱིན་ཕྲེ་བ་ཕྱག་སྟོང་རྣམས། །དེ་དག་མ་ནི་ལིམ་ལོག་ཅན། །གཡོག་འཁོར་དེ་དག་ལྷན་ཅིག་ཏུ། །བདག་ནི་ཕྱག་འཚལ་སྨད་དུ་མཆི། །གོ་ཏ་མ་དཔའ་བོ་ཁྱོད་ལ་ནི། །ཆོས་བཞིན་མཐུན་པར་བལྟ་ཞིང་མཆིས།

[1.5.2] । དགེ་ཅིང་ཆོད་ལ་གཏུམ་པ་དང་། །མགོ་བོ་ཆེ་ལ་སྐ་རིང་བ། །མི་རྣམས་དང་ནི་རི་དགས་དང་། །ཐུ་རྣམས་གཟི་བྱིན་འཕྲོག་པར་བགྱིད། །མེ་འབར་ཟ་དང་མད་དུ་ཟ། །མིག་གཅིག་པ་དང་མིག་སེར་དང་། །སྣ་དང་རྒྱ་བ་བཅད[364]པ་དང་། །ཚད་པ་མང་པོས་བཅད[365] པ་དང་། །མགོ་མ་མཆིས་དང་མགོ་བཅད[366] དང་། །ལུས་ཀྱང་སྐྱེར་ལ་གཉེར་མ་གདོང་། །མིག་ལ་མི་འབར་ཤང་མེད་པ། །མི་རྣམས་འཇིགས་པར་བགྱིད་པ་སྟེ། །འཕེལ[367]ཀ་ཆེ་ལ་ཆོད་བཀ་ཀན། །དེ་བཞིན་འགྲོ་ཞིང་རྒྱུ་བར་བགྱིད། ། དེ་འདྲའི་གནོད་སྦྱིན་མང་པོ་ཡི། ། གཡོག་འཁོར་དག་གིས་ཡོངས་སུ་བསྐོར། ।གནོད་སྦྱིན་ཕྲེ་བ་ཕྱག་སྟོང་རྣམས། ।དེ་དག་མ་ནི་ཀུན་མ་ལག། ।གཡོག་འཁོར་དེ་དག་ལྷན་ཅིག་ཏུ། ।བདག་ནི་ཕྱག་འཚལ་སྨད་དུ་མཆི། ।གོ་ཏ་མ་དཔའ་བོ་ཁྱོད་ལ་ནི། ।ཆོས་བཞིན་མཐུན་པར་བལྟ་ཞིང་མཆིས།

[1.5.3] ।བདག་ཅག་གི་ནི་གནས་རྣམས་ན། ।ཤིང་རྟ་ཞེས་བགྱི་སྒྲིན་མོ་མཆིས། ।དེ་ལ་ཐུ་ཕོ་སྟོབས་ལྡན་པ། ।སྟོང་ཕྱག་བཅུ་ཡི་གྲངས་སྟེད་མཆིས། ।དེ་དག་བདག་གི་གཡོག་ལག་ཏེ། ।དེ་དག་ཕྱག་འཚལ་སྨད་དུ་མཆིས། ।གོ་ཏ་མ་དཔའ་བོ་ཁྱོད་ལ་ནི། ।ཆོས་བཞིན་མཐུན་པར་བལྟ་ཞིང་མཆིས།

[1.5.4] ।བདག་ཅག་གི་ནི་གནས་རྣམས་ན། ।མཐྲིན་རིངས་ཞེས་བགྱི་སྒྲིན་མོ་མཆིས། ।སྒྲིན་མོ་

364 TP གཅོད་
365 TP གཅོད་
366 TP གཅོད་
367 TP ཕེལ་

ཤེན་ཏུ་གནས་པ་དང་། །སྲིན་མོ་ནག་མོ་ཞེན་བཀྲི་དང་། །སྲིན་མོ་རབ་གནས་རྣམས་མཆིས་ཏེ། ངེ་དག་གོ་ཏ་མ་མཐུན་པར་བརྟ། །ས་ཡི་གནོད་སྦྱིན་བདང་ཉིད་ཆེ། །ངེ་དག་ས་སྟེངས་གནས་པ་སྟེ། །གཡོག་འགོར་ངེ་དག་རྣམས་ཀྱིས་ནི། །ཡོངས་སུ་བསྐོར་ཏེ་འདིར་མཆིས་ལགས། །ངེ་དག་ཀུན་དང་ལྡན་ཅིག་དུ། །བདག་ནི་ཕྱག་འཚལ་སྨད་དུ་མཆི། །གོ་ཏ་མ་དཔའ་བོ་ཁྱོད་ལ་ནི། །ཆོས་བཞིན་མཐུན་པར་བལྟ་ཞིང་མཆིས།

[1.5.5] །བདག་གི་མདུན་ན་རྒྱུག་པ་ཡི། །ཡི་དགས་གནོད་སྦྱིན་སྲིན་པོ་རྣམས། །ལུས་ཆེན་ཤུགས་ཀྱང་དྲག་པོ་སྟེ། །སོ་ཡང་ཆེ་ལ་ལྟོ་བོ་ཆེ། །རྒྱ་འཕྱང་འཇིགས་པ་ཆེན་པོ་སྟེ། །སྨོ་མ་རྒྱ་ལ་རབ་ཏུ་འཕྱང། །ཡན་ལག་དྲུག་པ་ས་སོ་བརྟན་པ། །གུར་གུམ་མདོག་ཅན་ཐོག་འདུ། །སོ་ཡང་རྒྱུ་[368]ཅིང་རྐོ་བ་དང་། །མདུང་ཐུང་གསལ་ཞིང་འཇིགས་པར་བཀྲིད[369]། །ཟླང་ཆེན་མགོ་དང་བུམ་སྣ་ཅན། །མགོ་བོ་སྣག་དང་སེང་གེ་འདུ། །ལྟགས་ཀྱི་སོ་ཅན་ལྟགས་ཀྱི་སྒྲ། །གདོན་རྣམས་རྣམ་པར་སྒྲག་བཀྲིད་པ། །ལག་ན་ལྟགས་ཀྱི་གཏུན་བུ་ཐོགས། །ལག་ན་ལྟགས་ཀྱི་ཐོ་བ་ཐོགས། །སོ་རྐོན་ལག་པ་རིང་བ་སྟེ། །འཇིགས་པའི་གཟུགས་ཅན་ལྟགས་ཀྱི་མཆུ། །མགོ་བོ་ཆེ་ལ་སྒྲ་གཡེངས་པ[370]། །གནས་ཅིང་མིག་སེར་སྣ་ཞོམ་པ། །བུམ་པའི་མཁྲིན་དང་མིག་དམར་དང་། །མིག་གཅིག་པ་དང་སྟོ་བོ་ཆེ། །མཆུ་འཕྱངས་པ་དང་ལག་གཅིག་པ། །ཀུང་གཅིག་པ་དང་ཀུང་གཉིས་པ། །ཁ་མེད་ཁ་གཉིས་དྲག་པོ་སྟེ། །མི་རྣམས་རབ་ཏུ་འཇིགས་པར་བཀྲིད། །ལག་ན་ཁར་བ[371]དབྱུག་པ་ཐོགས། །མདུང་རྩེ་གསུམ་པ་སྒྲག་ཅིང་འཇིགས། །སྒྲག་ཅིང་འཇིགས་པར་བྱེད་པ་སྟེ། །གདོན་རྣམས་རྣམ་པར་སྒྲག་བཀྲིད་པ། །སྒྲག་པར་བཀྲིད་ཅིང་སྐྱོང་བར་བཀྲིད། །སེམས་ཀྱང་འཁྲུལ་པར་བཀྲིད་པ་སྟེ། །སྐྱོ་བར་བཀྲིད་ཅིང་ཚོར་བར་བཀྲིད། །ངེ་ནས་གཟེ་བྱིན་འཕོག་པར་བཀྲིད། །ངེ་དག་འཇིག་རྟེན་འཇིགས་པ་ཏེ། །ཁྲོལས་པོ་ཆེ་ལ་བསྟེན་པར་དཀའ། །ཁྲོང་

368 TP བརྒྱ་བ་
369 TP བྱེད
370 TP སྒྲག་ཡེངས་པད
371 TP ཁ་རབ

ཕྱག་དྲྭ་རྩ་རྒྱས་པོ། །རྒྱལ་པོ་ཆེན་པོའི་མདུན་ནས་རྒྱུ། ད་འདའི་[372]གནོད་སྦྱིན་མང་པོ་ཡི། གཡོག་འཁོར་དག་གིས་ཡོངས་སུ་བསྐོར། །གནོད་སྦྱིན་བྱེ་བ་ཕྱག་སྟོང་རྣམས། །དེ་དག་ཕྱག་འཚལ་སྨད་དུ་མཆིས། །གོ་ཏ་མ་དཔའ་པོ་ཁྱོད་ལ་ནི། །ཆོས་བཞིན་མཐུན་པར་བསྟན་ཞིང་མཆིས།

[1.5.6] । [373]ས་གཡས་བརྩེན[-373]བྱ་བ་དང་། །སེང་གེ་ལྟེ་དང་རབ་གནོད་དང་། །མལ་སྦྱིན་བརྩོན་དྲག་པོ་དང་། །གང་པོ་དང་ནི་ནོར་འཛིན་དང་། །ཙ་ཏྲན་དང་ནི་འདོད་མཆོག་དང་། །སྟ་ཚོགས་ལྟེ་དང་གཉོར་མ་ལན། །ཡིད་བཞིན་རབ་འཕྱོར་བཞིན་བཟང་དང་། །འདམ་བུ་ཅན་དང་ཤིན་ཏु་རྒྱལ། །འདོད་པ་ཐམས་ཅད་འཕྱོར་པ་དང་། །དཔང་པོ་རྒྱལ་བ་ལྷུ་མཆོག་དང་། །ནོར་བུ་བཟང་སྒྲས་རྫོགས་བཟང་དང་། །འདམ་བུ་ས་མཆོག་འདམ་བུ་དགའ། །ཁབ་ཀྱི་སྒྲ་ཅན་རིང་བཟང་དང་། །ལག་མཆོག་སྐྱེ་དགུའི་བདག་པོ་དང་། །འདམ་བུའི་རྒྱུད་དང་མདུང་རིང་དང་། །རིག་པ་སྟོབས་ཅན་ནོར་བུ་དང་། །འཛིག་པོ་ནག་པོ་ཆེན་པོ་དང་། །ལབ་ཅན་དང་དེ་ཉ་དང་གཉིས། །བློ་ཡི་རྒྱལ་པོ་ས་སྦྱང་བུ། །ཡན་ལག་ཆེན་པོ་ཕྲ་འཕྲལ་ཆེ། །ནམ་མཁའ་ཕྲིང་གི་ཤུགས་ཆེན་ལྡན། །འདབ་ཆགས་ཀུན་གྱི་མཆོག་ཐྱར་པ། །བྱ་ཡི་གཟུགས་ཀྱིས་མཆི་བཀྱིད་ཅིང་། །རྒྱ་མཚོ་ཀུན་ཏु་འཁྲུག་པར་བཀྱིད། །ལྟ་དང་ལྟ་མེན་དེ་ཟ་རྣམས། །འཛིགས་པར་བཀྱིད་དང་དགེ་བའང་རྩད། །མ་དང་པ་དང་དད་པ་རྣམས། ||དེ་དག་ཐམས་ཅད་འདིར་མཆིས་ཏེ། །གོ་ཏམ་དཔའ་པོ་ཁྱོད་ལ་ནི། །ཆོས་བཞིན་མཐུན་པར་བསྟན་ཞིང་མཆིས།

[1.5.7] །འཕྲོག་མ་ཞེས་བཀྱི་གནོད་སྦྱིན་མོ། །འཛིགས་པར་བཀྱིད་པ་སྟོབས་ཆེན་མོ། །དེ་ཡི་བུ་ནི་ལྷ་བརྒྱ་རྣམས། །འཛིགས་བཀྱིད་གནོད་སྦྱིན་མཐུ་རྩལ་ཅན། །བདག་ཉིད་ཀྱི་ནི་གཡོག་ལགས་ཏེ། །དེ་དག་ཕྱག་འཚལ་སྨད་དུ་མཆིས། །གོ་ཏམ་དཔའ་པོ་ཁྱོད་ལ་ནི། །ཆོས་བཞིན་མཐུན་པར་བསྟན་ཞིང་མཆིས།

372 TD འདའི་

373 TD ས་གཡས་རྩེན་; TP ས་གཡས་བརྩེན་; ラサ Lha sa 版 No.519 ས་གཡས་རྩེན་

[1.5.8] །མ་གཱ་དྷ་ན་ཐམས་ཅད་མཐོང་།།ཀཱ་ཏི་ཀ་ན་པཎ་ཌཉ་ཚང་། །ཡང་པ་ཅན་ན་རྒྱལ་མཆོག་གནས། །ཁྱད་ཡུལ་ན་ནི་གླགས་འཛིན་གནས། །རྒྱལ་པོའི་ཁབ་ན་ཀུ་པེ་ར། །ས་རྒྱའི་གནས་ན་དགེ་པོ་སྟེ། །ཏ་མ་ལ་ན་འཇོར་པ་གནས། །མི་ཏི་ལ་ན་ཀུན་ཏུ་རྒྱལ། །མ་མོ་ཆེན་མོ་འདི་བཀྲད་ནི། །གནོད་སྦྱིན་རྣམས་ཀྱི་སྡེ་དཔོན་མཆོག །ཇུ་འཕྲལ་ཆེན་པོ་སྐལ་བ་ཆེ། །ཤྲོ་བས་ཆེན་དེ་དག་ཐམས་ཅད་ནི། །ཡིད་དགེ་དང་པའི་སེམས་དང་ལྡན། །ཇོ་གས་སངས་རྒྱས་ལ་སྐྱབས་མཆིས་པས། །དེ་དག་དང་ནི་འདུས་ནས་ཀྱང་། །རྒྱལ་པོ་ཆེན་པོ་ཤྲོ་བས་ཆེན་གྱིས། །ཡང་དག་ཇོ་གས་སངས་རྒྱས་བསྟན་ལ། །མི་རྣམས་ལ་ནི་སྙིང་བརྩེའི་སྙད། །གནོད་སྦྱིན་འཕྲུང་པོ་ཡི་དགས་དང་། །ལྷང་བའི་གདོན་རྣམས་བཟློག་པ་དང་། །མི་མ་ཡིན་རྣམས་བཟློག་པ་ཡི། །བསྲུང་བ་འདི་ནི་ལེགས་པར་བཀྲིས།

[2.1] །དེ་ནས་རྒྱལ་པོ་རྣམ་ཐོས་བྱ། །ཐལ་སྦྱར་འདུག་སྟེ་སྨྲས་པ་ནི། །ཁོན་དང་འཇིགས་པ་ཀུན་འདས་པ། །རྣམ་གྲོལ་ཟག་པ་མི་མངའ་བ། །གོ་ཏམ་དཔའ་བོ་ཁྱོད་ལ་ནི། །ཚོས་བཞིན་མཐུན་པར་བསྟན་ཞིང་མཆིས།།ཁྱེད་ལ་སྟོ་དང་གྱུབ་པ་དང་། །བྲམ་ཟེ་ཐམས་ཅད་ཕྱག་འཚལ་ཏེ། །གནོད་སྦྱིན་ཆེ་བ་དྲུག་ཁྲི་དང་། །བཞི་སྟོང་དག་ཀྱང་ལྟགས་ནས་ནི། །ཁོ་ར་ཁོར་ཡུག་ཡོངས་བསྐོར་ནས། །ཐལ་མོ་སྦྱར་ཏེ་འཁོད་གྱུར་ལགས། །བདག་ནི་རྒྱལ་པོ་རྣམ་ཐོས་བྱ། །བྱང་ཕྱོགས་སྐྱོང་བར་བཀྲིད་པ་སྟེ། །འཇིག་རྟེན་མགོན་པོའི་ཞེ་འཁོར་དུ། །གནོད་སྦྱིན་རྒྱ་རྐང་སྐྱེ་བྱེད་དང་། ། །བརྟེད་བྱེད་དང་ནི་མེའམ་ཅི། །རྐེམ་བྱེད་དང་ནི་རིམས་དྲག་དང་། །དེ་བཞིན་རིམས་ནད་ཞག་བཞི་པ། །དེ་དག་བདག་གིས་བཟློག་པར་བཀྲི།

།སྙུང་ཡ་ཐེ་དན། ཨུ་ཏ་ཏཾ། ཨུ་ཏ་ཏཾ། མ་ཏྲ་ཏཾ། ཨུ་ཏ་མ་ཏྲ་ཏཾ། ས་ལ་མུ་ཏཱ། ཨེ་ལྷི་མི་ལི། ཨེ་ལྷི་མི་ལི། ཀི་ལྷི་མི་ལ། ཙོ་རི་ཏེ། ཨུ་ཏྲི་ཨུ་ཏུ་ཏྲི། པི་ཏི་ལི་ཡ། མ་ཏ་མ་ལ། མ་ནན্ལ་ཡ་ས্ལ།

རྒྱལ་པོ་ཆེན་པོ་རྣམ་ཐོས་ཀྱི་བྱ་ལུས་ངན་ལྟང་ལོ་ཅན་གྱི་བདག་པོ་ཕྱོགས་སྐྱོང་བར་གྱུར་ཅིག །གནོད་སྦྱིན་དང་། རྒྱ་རྐང་དང་། སྐྱེ་བྱེད་དང་། བརྟེད་བྱེད་དང་། མེའམ་ཅི་དང་། ཀྱེན་

དུ་རྒྱུ་དང་། རྒྱུ་བ་དང་། འདུན་པ་དང་། ངན་ཕྱིད་དང་། གཟི་ཕྱིན་འཕྲོག་པ་རྣམས་བཟློག་པར་གྱུར་ཅིག །ལྷའི་ནང་ན་ལྷའི་རྒྱལ་པོ་ནོར་ལྷའི་བུ་ཞེས་བགྱི་བ་མཆིས་ཏེ། དེ་ལ་བདག་ཕྱག་འཚལ་ལོ། །དེ་ཡང་བཅོམ་ལྡན་འདས་ཉིད་ལ་ཕྱག་འཚལ་ཏེ། ཇོག་པའི་སངས་རྒྱས་དཔའ་བོ་སྟེ། །ཀུན་མཁྱེན་ཀུན་གཟིགས་ཁྱོད་ལ་འདུད། །ཡང་དག་དཔའ་བོ་ཁྱོད་ལ་འདུད། །ཆོས་བཞིན་མཐུན་པར་བལྟ་ཞིང་མཆིས།

[2.2] །དེ་ནས་རྒྱལ་པོ་ཡུལ་འཁོར་སྲུང་། །ཐལ་སྦྱར་འདུག་སྟེ་སྨོས་པ་ནི། །ཆོས་ཀྱི་རྒྱལ་པོ་འོད་མཛད་པ། །སངས་རྒྱས་དཔལ་ལ་ཕྱག་བདག་འཚལ་ལོ། །གོང་ཉ་ཏམ་དཔའ་བོ་ཁྱོད་ལ་ནི། །ཆོས་བཞིན་མཐུན་པར་བལྟ་ཞིང་མཆིས། །གོང་ཉ་ཏམ་ཁྱོད་ཀྱིས་གང་མཁྱེན་པ། །དེ་ནི་ལྟ་རྣམས་མ་འཚལ་ཏེ། །སྲིན་པོ་མཐོ་ན་རབ་འཇིགས་པ། །སྟོང་ཕྲག་དྲུག་ཅུ་རྩ་བཞི་རྣམས། །ཁོ་ར་ཁོར་ཡུག་ཡོངས་བསྐོར་ནས། །ཐལ་མོ་སྦྱར་ཏེ་འཁོད་འགྱུར་ལགས། །བདག་ནི་རྒྱལ་པོ་ཡུལ་འཁོར་སྲུང་། །ཤར་ཕྱོགས་སྐྱོང་བར་བགྱིད་པ་སྟེ། །འཇིག་རྟེན་མཁོན་པོའི་ཉེ་འཁོར་དུ། །སྲིན་པོ་རྣམས་དང་ཤ་ཟ་དང་། །དྲི་ཟ་དང་ནི་ཆུང་ལྟ་རྣམས། །དེ་དག་བདག་གིས་བཟློག་པར་བགྱི།

།ཐྲུ་ཡ་ཐེ་དན། ཨི་ཏི་མི་ཏྲི། ཁུ་ར་ཏེ། ཕུ་ར་ཏེ། མ་ཏི་བི་མ་ཏི། ཚུ་མ་ཏི། ཚཀྱེ། མཀྱེ། ནཀྱེ། ཚ་ཏུ་མི། བ་ཏུ་མི། མ་ཏྲེ། ཨི་རི་ཏེ། པི་རི་ཏེ་ས্ব্ཱཧ།

རྒྱལ་པོ་ཆེན་པོ་ཡུལ་འཁོར་སྲུང་ཕྱོགས་སྐྱོང་བར་གྱུར་ཅིག །སྲིན་པོ་དང་། ཡི་དགས་དང་། ཟ་ཟ་དང་། ཆུང་ལྟ་དང་། མིའམ་ཅི་དང་། གཟི་ཕྱིན་འཕྲོག་པ་རྣམས་བཟློག་པར་གྱུར་ཅིག །ལྷའི་ནང་ན་ལྷའི་རྒྱལ་པོ་ནོར་ལྷའི་བུ་ཞེས་བགྱི་བ་མཆིས་ཏེ། དེ་ལ་བདག་ཕྱག་འཚལ་ལོ། །དེ་ཡང་བཅོམ་ལྡན་འདས་ཉིད་ལ་ཕྱག་འཚལ་ཏེ། ཇོག་པའི་སངས་རྒྱས་དཔའ་བོ་སྟེ། །ཀུན་མཁྱེན་ཀུན་གཟིགས་ཁྱོད་ལ་འདུད། །ཡང་དག་དཔའ་བོ་ཁྱོད་ལ་འདུད། །ཆོས་བཞིན་མཐུན་པར་བལྟ་ཞིང་མཆིས།

[2.3] །དེ་ནས་རྒྱལ་པོ་འཕགས་སྐྱེས་པོ། །ཐལ་སྦྱར་འདུག་སྟེ་སྨོས་པ་ནི། །འཇིག་རྟེན་མཁོན་པོ་སྐྱབས་མཛད་པ། །འཇིག་རྟེན་ཀུན་ལ་ཕན་པ་མཛད། །ཁོ་ཏམ་དཔའ་བོ་ཁྱོད་ལ་ནི། །ཆོས་

བཞིན་མཐུན་པར་ལྟ་ཞིང་མཆིས། །གྲུལ་བུམ་ཡི་དགས་སྲུལ་པོ་རྣམས། །སྟོང་ཕྲག་དྲུག་ཅུ་རྩ་
བཞི་རྣམས། །ཁོ་ར་ཁོར་ཡུག་ཡོངས་བསྐོར་ནས། །ཐལ་མོ་སྦྱར་ཏེ་འཚོད་གྱུར་ལགས། །བདག་
ནི་རྒྱལ་པོ་འཕགས་སྐྱེས་པོ། །ལྷོ་ཕྱོགས་སྐྱོང་བར་བགྱིད་པ་སྟེ། །འཇིག་རྟེན་མགོན་པོའི་ཞེ་
འཚོར་དུ། །འཕྲུང་པོ་རྒྱ་བ་གཟི་བྱིན་འཕྱོག །གྲུལ་བུམ་ཡི་དགས་སྲུལ་པོ་རྣམས། །དེ་དག་
བདག་གིས་བཟློག་པར་བགྱི།

།སྡུད་ཡ་ཐེ་དན། ཨ་ལེ། ཨེ་ལེ་ལེ། ཀེ་ལེ་ཀེ་ལེ་ལེ། ཀུ་པ་ཀུ་པ་ས། ཥེ་ལེ་ཥེ་ལེ་ལེ། ཥེ་ལི་
ལི་ལི། །ལི་ལི་ལི་ལི་ལི། ཏེ་ཏི་ཥེ་ལེ། མ་ཏི་ཐུ་མ་ཏི། ཐུ་ཐུ་མ་ཏི། ཐུ་ཐུ་ཐུ་ཐུ། ཐུ་ཐུ་མ་
ཏི།ཏི་ལི་ཏ-ཏི་ལི་ཏ-ས་ཧཱ།

རྒྱལ་པོ་ཆེན་པོ་འཕགས་སྐྱེས་པོ་ཕྱོགས་སྐྱོང་བར་གྱུར་ཅིག །གྲུལ་བུམ་དང་། ཡི་དགས་དང་།
སྲུལ་པོ་དང་། འཕྲུང་པོ་དང་། རྒྱ་བ་དང་། གཟི་བྱིན་འཕྱོག་པ་རྣམས་བཟློག་པར་གྱུར་
ཅིག །ལྟའི་ནང་ན་ལྟའི་རྒྱལ་པོ་ནོར་ལྟའི་བུ་ཞེས་བགྱི་བ་མཆིས་ཏེ། དེ་ལ་བདག་ཕྱག་འཚལ་
ལོ། ། །དེ་ཡང་བཅོམ་ལྡན་འདས་ཉིད་ལ་ཕྱག་འཚལ་ཏེ།རྟོགས་པའི་ས་ཐམས་རྒྱས་དཔའ་བོ་
སྟེ། །ཀུན་མཁྱེན་ཀུན་གཟིགས་ཁྱོད་ལ་འདུད། །ཡང་དག་དཔའ་བོ་ཁྱོད་ལ་འདུད། །ཆོས་
བཞིན་མཐུན་པར་ལྟ་ཞིང་མཆིས།

[2.4] །དེ་ནས་རྒྱལ་པོ་མིག་མི་བཟང་། །ཐལ་སྦྱར་འདུག་སྟེ་སྨོས་པ་ནི། །མྱུན་པར་གྱུར་པའི་
འཇིག་རྟེན་ལ། །བཅོམ་ལྡན་ལམ་རྣམས་སྟོན་མཛད་པ། །ཕྱོ་ཏམ་དཔའ་བོ་ཁྱོད་ལ་ནི། །ཆོས་
བཞིན་མཐུན་པར་བལྟ་ཞིང་མཆིས། །འཇིག་རྟེན་དག་ན་ཞེ་ཟླ་འདུ། །རིན་ཆེན་སྟེང་པོ་
སྟོབས་པོ་ཆེ། །གླུ་དང་མཁའ་ལྡིང་གསང་བ་པ། །སྟོང་ཕྲག་དྲུག་ཅུ་རྩ་བཞི་རྣམས།།ཁོ་ར་ཁོར་
ཡུག་ཡོངས་བསྐོར་ནས། །ཐལ་མོ་སྦྱར་ཏེ་འཚོད་གྱུར་ལགས། །བདག་ནི་རྒྱལ་པོ་མིག་མི་
བཟང་། །ནུབ་ཕྱོགས་སྐྱོང་བར་བགྱིད་པ་སྟེ། །འཇིག་རྟེན་མགོན་པོའི་ཞེ་འཚོར་དུ། །གླུ་དང་
མཁའ་ལྡིང་གསང་བ་པ། །ལྟ་མིན་དབང་པོ་སྟོབས་པོ་ཆེ། །དེ་དག་བདག་གིས་བཟློག་པར་
བགྱི།

|སྡུད་ཡ་ཐེ་དན། ད་གེ་ད་ཀེ |ས་བ་ཏི་ཡེ|པ་ཏེ| ཨ་ཏ| ཀ་མཏ|ཏེ|མ་གེ་ད་མ| ཏེ་ད་ད་
མ| ཐ|ད་ད་མ་ནི| ཨ་ཐ|ན་མེ| གཙ|ཙ|ཐ|ཏ| ད་ལ་ཐེ་ཡེ| བ་ར་སུ་ཏ་ཙོ་ཙོ་ལེ| ཙོ་ལེ་ལེ་
ལེ་ལེ་ལེ་ལེ་སྲ|ཏ|

རྒྱལ་པོ་ཆེན་པོ་མེག་མེ་བཟང་ཕྱོགས་རྒྱོང་བར་གྱུར་ཅིག |ཟླ་དང་| ནམ་མཁའ་ཁྱོང་དང་|
གསང་བ་པ་དང་| ལྷ་མ་ཡིན་དང་| གཟི་བྱིན་འཕྲོག་པ་རྣམས་བཚོག་པར་གྱུར་ཅིག |ལྷའི་
ནང་ན་ལྷའི་རྒྱལ་པོ་ནོར་ལྷའི་བུ་ཞེས་བགྱི་བ་མཆིས་ཏེ| དེ་ལ་བདག་ཕྱག་འཚལ་ལོ| |དེ་ཡང་
བཅོམ་ལྡན་འདས་ཉིད་ལ་ཕྱག་འཚལ་ཏེ| རྟོགས་པའི་ས་ངམས་རྒྱས་དཔའ་བོ་སྟེ| |ཀུན་མཁྱེན་
ཀུན་གཟིགས་ཁྱོད་ལ་འདུད| |ཡང་དག་དཔའ་བོ་ཁྱོད་ལ་འདུད| |ཆོས་བཞིན་མཐུན་པར་
བལྟ་ཞིང་མཆིས|

[2.5] |དེ་ནས་རྒྱལ་པོ་ཆེན་པོ་བཞི་བློ་གོས་ཕྱག་པ་གཅིག་ཏུ་གཟར་ནས་ཕུས་མོ་གཡས་པའི་ལྟ་
ང་ས་ལ་བཙུགས་ཏེ་ཐལ་མོ་སྦྱར་ནས| བཅོམ་ལྡན་འདས་འབའ་ཞིག་ལ་ཕྱག་འཚལ་ཞིང་
གོས་མཐུན་པ་དང་| ཆོག་མཐུན་པ་དང་| སྐད་མཐུན་པར་བཅོམ་ལྡན་འདས་ལ་འདི་སྐད
ཅེས་གསོལ་ཏེ| |བཙུན་པ་བཅོམ་ལྡན་འདས| བསེལ་བའི་ཚལ་གྱི་མདོ་ཆེན་པོ་འདི་ནི་རྒྱལ
པོ་ཆེན་པོ་བཞིའི་སྲུང་བ་སྟེ| འཕོར་བཞི་པོ་རྣམས་ལ་ཡོངས་སུ་ཁྱབ་པ་ལགས་སོ| |གནོད
སྦྱིན་དང་| སྲིན་པོ་ནས་གནོད་པ་བགྱིད་པའི་བར་དུ་བཚོག་པར་བགྱི་བ་དང་| འཕོར་བཞི
པོ་རྣམས་ལ་སྲུང་བ་དང་| སྐྱོབ་པ་དང་| སྲོད་པ་དང་| བདེ་ལེགས་སུ་འགྱུར་བ་དང་| བདེ
བར་གནས་པར་བགྱིད་པ་ལགས་སོ| |དེ་སྐད་ཅེས་གསོལ་པ་དང་| བཅོམ་ལྡན་འདས་ཀྱིས
རྒྱལ་པོ་ཆེན་པོ་བཞི་ལ་འདི་སྐད་ཅེས་བཀའ་སྩལ་ཏོ| |ཀྱེ་རྒྱལ་པོ་ཆེན་པོ་དག |རིག་སྔགས་ཀྱི
རྒྱལ་པོ་ཆེན་པོ་བཟུང་ཟིན་ནོ| |བསེལ་བའི་ཚལ་གྱི་མདོ་ཆེན་པོ་ངས་ཡོངས་སུ་བཟུང་ཟིན
ནོ| |ཀྱེ་རྒྱལ་པོ་ཆེན་པོ་དག་གཞན་ཡང་ངས་བསེལ་བའི་ཚལ་གྱི་མདོ་ཆེན་པོ་ལ་རྟོས་སུ་ཡི
རང་བའི་རིག་སྔགས་ཀྱི་རྒྱལ་མོ་ཆེན་མོ་བརྗོད་ཀྱིས| དེ་ལེགས་པར་རབ་ཏུ་ཞོན་ལ་ཡིད་ལ
ཟུང་ཤིག་དང་ངས་བཤད་དོ| |བཅོམ་ལྡན་འདས་དེ་ལྟར་འཚལ་ལོ| |ཞེས་རྒྱལ་པོ་ཆེན་པོ

བཞིས་བཅོམ་ལྡན་འདས་ཀྱིས་བཀའ་སྩལ་པ་མཉན་ཏེ།

[3.1] །དེ་ནས་བཅོམ་ལྡན་འདས་ཀྱིས་ཕྱག་རིན་པོ་ཆེ་གཡས་པས་ན་བཟའ་ཚོས་གོས་ཕྱེ་ནས་འཕྲུང་པོའི་ཚོགས་དེ་དག་ལ་འདི་སྐད་ཅེས་བཀའ་སྩལ་ཏེ། །ངས་འདི་བསྟན་པར་བྱའོ། །རྒྱལ་པོ་ཆེན་པོ་རྣམ་ཐོས་ཀྱི་བུ་ལ་དབྱེ་བར་བྱའོ། །ཐམས་ཅད་ལ་གོ་བར་བྱའོ། །དེ་ནས་བཅོམ་ལྡན་འདས་ཡང་དག་པར་རྫོགས་པའི་སངས་རྒྱས་ཀྱི་ས་རིག་སྔགས་འདི་བཀའ་སྩལ་ཏེ།

།ཐྲྀ་ཡ་ཐེ་དན། ཏེ་ལྷེ་ཏེ་ལྷེ། ཏྲེ་ས་ནི་བཀྲེ།ཙ་ཏ་ར་ཡེ། ཏ་མ་ཏི། ཏ་མ་ཏི། ཏེ་ལ་བཀྲེ། བ་ལྷེ་ཏ་ཀེ། ད་རི་ཏི་ན། དཏྲེ་ན་ད། ཕུ་ཏྲེ་ཕུ་ཕུ་ཏྲེ། གུ་གུ་ཏྲ། གུ་ཏྲེ་ཏེ་ཙ་ཀ་ཏྲེ། ཆ་ཆ་ཀན་ཏྲི་ས་ཏ།

བཅོམ་ལྡན་འདས་ཀྱིས་རིག་སྔགས་ཀྱི་རྒྱལ་མོ་ཆེན་མོ་འདི་བཀའ་སྩལ་པ་ན་ས་འདི་ཀུན་ཏུ་གཡོས། འཕྲུང་པོ་ཐམས་ཅད་རབ་ཏུ་འདར་ནས་ཀྱེ་མ་ཀྱི་ཏུད་ཀྱེ་མ་སྨྲ་བསྐལ་ལོ། །ཞེས་སྨྲ་ཆེན་པོ་བྱང་ངོ། །སྲིན་པོ་རྣམས་ཀྱིས་ཀྱང་འདི་སྐད་ཅེས་སྨྲས་ཏེ། འདི་ལྟར་ཡང་དག་རྫོགས་སངས་རྒྱས། །སེམས་ཅན་ཀུན་ལ་ཕྱུགས་བརྩེ་ནས། །འཕྲུང་པོ་ཀུན་འཇིགས་ཉེན་པ་ཡི། །རིག་སྔགས་འདི་འདྲ་སྨྲང་བར་མཛོད།

[3.2] །དེ་ནས་ཀུན་མཁྱེན་སྟོན་པ་པོ། །སེམས་ཅན་ཀུན་ལ་ཕྱུགས་བརྩེ་བས། །གནོད་སྦྱིན་སྲིན་པོ་དྲྭ་བ་དང་། །ཟླུ་དང་མཁའ་ལྡིང་གསང་བ་པ། །འཕྲུང་པོ་རྒྱ་བ་གཟི་བྱིན་འཕྲོག །གྲུལ་བུམ་ཡི་དགས་སྲུལ་པོ་དང་། །ལྷ་མིན་གཤེད་བྱེད་ཅོ་ལངས་དང་། །བརྡེད་བྱེད་དང་ནི་མི་འམ་ཅི། །ཆེམ་བྱེད་དང་ནི་རིམས་དྲག་དང་། །དེ་བཞིན་བྱམ་ཟེ་སྲིན་པོ་དང་། །སྨྱོ་བྱེད་རིམས་ནང་ཞག་གསུམ་པ། །དེ་བཞིན་ཞག་ནི་བཞི་པ་རྣམས། །སྐྲག་ཅིང་རབ་ཏུ་འདར་འགྱུར་ཏེ། །ཕྱོགས་བཅུར་རྒྱག་པ་གཟིགས་ནས་ཀྱང་། །དེ་དག་ལ་ནི་ཕྱུགས་བརྩེའི་ཕྱིར། །རིག་སྔགས་འདི་ནི་བརྗོད་པར་མཛོད།

།ཐྲྀ་ཡ་ཐེ་དན། ཏེ་རི་མ་ཁ། ཏེ་རི་ཁ་ཁ། ཀ་ཏ་མ་ཏྲ། ས་ཏ་ཧ་མ་ཏྲ། ཅཏ་རི། ཕུ་ཏ་ཏ

ནི། ད་ཏ་ད་ཏ། ད་ཧི་ལི། ད་མནྟེ། ད་མནྟེ། ཧུ་ཧུ་རི། ད་ད་རི། ད་ར་མི་ར། ཀི་རི་ཀཱ་ཡེ།
ཀ་ཏ་བ་རེ་ཊི། སུ་སུ་སྣ་ལེ་སྭཱ་ཧཱ།

[3.3] གསང་སྔགས་ཆེན་པོ་རིག་སྔགས་ཆེན་པོ་འདི་ལས་འགལ་བར་མ་བྱེད་ཅིག །བཅོམ་ལྡན་འདས་ཀྱི་གསུང་གི་ཚིག་ལ་ཡང་དག་པར་སོ་སོར་རྟོགས་ཤིག །ཁྱེད་ཀུན་ལུས་ཞིག་སྟེ་ཤི་བའི་འོག་ཏུ་ངན་སོང་ངན་འགྲོ་ལོག་པར་ལྟུང་བ་སེམས་ཅན་དམྱལ་བ་རྣམས་སུ་སྐྱེ་ཞིང་འཁོར་བར་འགྲོ་བ་རེ། དེ་ནས་རྒྱལ་པོ་ཆེན་པོ་བཞིས་བཅོམ་ལྡན་འདས་ཀྱི་རིག་སྔགས་ཀྱི་རྒྱལ་མོ་ཆེན་མོ་སྔོན་མ་ཐོས་པ་འདི་ཐོས་ནས་སྐྲག་ཅིང་དངངས་ཏེ་མི་དགའ་ལ་སྐྱི་བུང་ཞེས་བྱེད་ནས་ཐལ་མོ་སྦྱར་ཏེ། བཅོམ་ལྡན་འདས་ལ་ཕྱག་འཚལ་ཞིང་གྲོས་མཐུན་པ་དང་། ཚིག་མཐུན་པ་དང་། སྐད་མཐུན་པར་བཅོམ་ལྡན་འདས་ལ་འདི་སྐད་ཅེས་གསོལ་ཏོ། །སྲུང་བའི་འབྱུང་པོ་ཟད་བགྱིད་པ། །རིག་སྔགས་འདི་ནི་ལེགས་པར་གསུངས། །མི་ཡི་འཇིག་རྟེན་བདེ་བགྱི་བའི། །རིག་སྔགས་བདག་ཅག་བཟོད་པར་འཚལ། །དེ་ལ་རིག་སྔགས་འདི་ལགས་ཏེ། །འཇིག་རྟེན་མགོན་པོ་བདག་ལ་གསོན།

།སྟྭད་ཡ་ཐེ་དན། ཤུ་ཏུ་ཏ་ལ། ཀུ་ལི་ཇི་བ་ཤ་ཧུ་ཡ། མ་སུ་ར་བེ་ལ། ཤད་ཏྭ་བ་ཏྭ། ཤད་ཏྭ་བ་ཏེ། ནད་ད་བད་ཏེ། མ་ཙུ་ཧྶ། མ་ཙུ་ཧྶ། བ་དི་མ་ཙུང་ཏྲ་ཕ་ལ་སྭཱ་ཧཱ།

[3.4] བཅོམ་ལྡན་འདས་འབྱུང་པོ་ཐམས་ཅད་བཟློག་པ་འདི་གཟུང་བར་གསོལ།

སྟྭད་ཡ་ཐེ་དན། ཨི་ལི་ཨི་ལི། མི་ལི་མི་ལི། ཀི་ལི་ཀི་ལི། བ་ན་ར་ཞི་ལ་པ་ཡ། ཧུ་ཧུ་ཧུ་ར། ཐེ་ནུ་ཕུ་ཕུ་ཕུ་ར། ག་ཤ་ལྀ། ཪྻ་ཁ་ད་ཡ་མ་ལ། ཁུ་ལི་ཁུ་ལི་པ་ཡ་སྭཱ་ཧཱ།

[3.5] རིག་སྔགས་ཀྱི་རྒྱལ་མོ་འདི་ནི་ལོ་གཅིག་གི་བར་དུ་མཚམས་གཅོད་པ་དང་། འབྱུང་པོ་ཐམས་ཅད་བཟློག་པ་དང་། དོན་ཐམས་ཅད་གྲུབ་པ་ལགས་སོ། །དེ་ནས་གནོད་སྦྱིན་དང་། སྲིན་པོ་དང་། དྲི་ཟ་ནས་གནོད་པར་བགྱིད་པའི་བར་རྣམས་ཀྱིས། བཅོམ་ལྡན་འདས་ཀྱི་རིག་སྔགས་ཀྱི་རྒྱལ་མོ་ཆེན་མོ་སྔོན་མ་ཐོས་པ་འདི་ཡང་ཐོས། རྒྱལ་པོ་ཆེན་པོ་བཞིའི་བསྲུང་བ་སྔོན་མ་ཐོས་པ་འདི་ཡང་ཐོས་ནས་སྐྲག་ཅིང་དངས་ལ་མི་དགའ་སྟེ། སྐྱི་བུང་ཞེས་བྱེད་ནས་

ས་ལ་འཇུག་ཀུན་ཏུ་འཇུག། ཀུན་ཏུ་རབ་ཏུ་འཇུག་བར་བྱེད་དོ། །དེ་ནས་བཅོམ་ལྡན་འདས་ཀྱིས་ས་གཞི་ཇོ་ཇེར་སྣུལ་ནས་དེ་དག་ཕྱོགས་བཞིར་རྒྱུ་གོ། །དེ་ནས་རྒྱལ་པོ་ཆེན་པོ་བཞིས་ཕྱོགས་བཞིར་མེའི་ཕུང་པོ་ཆེན་པོ་སྣུལ་ཏོ། དེ་ནས་ནམ་མཁའ་ལ་རྒྱུ་གོ། དེ་ནས་བཅོམ་ལྡན་འདས་ཀྱིས་ནམ་མཁའ་གསེར་དུ་སྣུལ་ཏོ།

[3.6] །དེ་ནས་འཇིག་རྟེན་སྐྱོང་བ་རྒྱལ་པོ་ཆེན་པོ་རྣམ་ཐོས་ཀྱི་བུ་ལྷ་དང་དྲྭ་ཟས་བསྐོར་ཅིང་མདུན་དུ་བདར་ཏེ། སྟེང་གི་བར་སྟང་ལ་འཕགས་ནས་གནོད་སྦྱིན་དང་གྲིན་པོ་ནས་གནོད་པར་བྱེད་པའི་བར་རྣམས་གཞོམ་པ་དང་། ས་ཕམས་ཅན་ཐམས་ཅད་ལ་སྟོང་བརྩེ་བ་དང་། འཕྲུང་པོ་ཐམས་ཅད་བརློག་པ་དང་། འགོར་བཞི་པོ་རྣམས་བསྡུང་བ་དང་། བསྐྱབ་པ་དང་། སྦ་བ་དང་། བདེ་ལེགས་སུ་འགྲུར་བ་དང་། བདེ་བར་གནས་པར་བྱ་བའི་ཕྱིར་རིག་སྔགས་འདི་བརྗོད་དོ།

།ཐུ་ཡ་ཐེ་དན། གི་མི་གི་མི་གི་མི་གི་མི། གི་ནི་གི་ནི་གི་ནི་གི་ནི། ན་ཁི་མི་ན་ཁི། ནི་ཁ་ནི་ཁ་ནི་ཁ། ཙུ་བ་ཙཱ། དི་ཤ་དི་ཤ། ཝི་དི་ཤ། ས་ཏ་དི་ཤ། ཙ་ཏི̀་པ་ཏི̀། གི་ར། ཝི་ས། ཎ་ནི་ཐུ̀་མི་པ་ཏི̀། ཨི་ལི་ལི̀། ཨི་ལི་ལི̀། ཀི་ལི་ལི̀། ཀི་ལི་ཀི་ལི་ལི̀། ཀི་ལི་ཀི་ལི་ལི̀། ཀི་ལི་ཀི་ལི་ལི̀། ཀི་ལི་ཀི་ལི་ལི̀། ཀི་ལི་ཀི་ལི་ལི̀། ཀི་ལི་ལི་ལི་ལི་ལི̀། ཀི་ལི་ལི̀་ལི̀་ལི̀་ལི̀་ལི̀། ཙང་ཏི̀། ནད་ཏི̀། ཀུ་ནད་ཏི̀། མདུ་ཀུ་ནད་ཏི̀། ཀུ་ལད་ཏི̀་ཞུ་ལད་ཏི̀། ཞུ་ཞུ་ལད་ཏི̀་མ་དུ་ཞུ་ལད་ཏི̀། ཏ̀ु་ལ̀ु་ཏ̀ु་ལ̀ु། ལ̀ु། ཏ̀ु་ལ̀ु་ལ̀ु་ལ̀ु། ཏ̀ु་ལ̀ु་ལ̀ु་ལ̀ु་ལ̀ु། ལ̀ु། ཏ̀ु་ལ̀ु་ལ̀ु་ལ̀ु་ལ̀ु ལ̀ु་ལ̀ु་ལ̀ु་ལ̀ु། ལ̀ु། ཏ̀ु་ལ̀ས་ཏ̀ु་ལ̀ས། ཏི̀་ལི̀་ཏི̀་ལི̀། ལ̀ས་ཏ̀ु་ལ̀ु། ཏ̀ु་ལེ̀། ཨི̀་ཏི̀། ཏ̀ु་ལེ̀་ཏ̀ु་ལེ̀། ཞ̀ु ལ̀ད་ཏི̀། ཏི̀་ལེ̀། ཞ̀ु་ཏི̀་ཏི̀་ལེ̀།ཏི̀་ལ̀ས་ཏི̀་ལེ̀། ཏ̀ु་ལ̀ु་ཏི̀། ཏ̀ु་ལ̀ु་ཏ̀ु་ལ̀ु་ཏ̀ु་ལ̀ु། ཏ̀ु་ལ̀ु་ཏ̀ु་ལེ̀། ཏ̀ས་ཏ̀ས་ཏ̀ས་ཏ̀ས། ས̀ྭ̀ཧཱ̀།

རྒྱལ་པོ་ཆེན་པོ་རྣམ་ཐོས་ཀྱི་བུ་ཕྱོགས་སྐྱོང་བར་གྱུར་ཅིག །ལྷ་རྣམས་ཀྱི་ནང་ན་ལྷའི་རྒྱལ་པོ་ནོར་ལྷའི་བུ་ཞེས་བཀྲི་བ་མཆིས་ཏེ། དེ་ལ་བདག་ཕྱག་འཚལ་ལོ། །ཀླུ་ཡང་བཅོམ་ལྡན་འདས་ཉིད་ལ་ཕྱག་འཚལ་ཏེ། ཇོ་གས་བའི་ས་ངས་རྒྱས་དཔའ་བོ་སྟེ། །ཀུན་མཁྱེན་ཀུན་གཟིགས་ཁྱོད་

ལ་འདུད། །རྗོགས་པའི་སངས་རྒྱས་ཆུང་གཉིས་མཆོག། །ཤེས་རབ་ཆེན་པོ་ཁྱོད་ལ་འདུད། །གོ་ཏམ་ཁྱོད་ཀྱིས་གང་མཁྱེན་པ། །དེ་ནི་ལྷ་རྣམས་མ་འཚལ་ཏེ། །ཡང་དག་དཔའ་བོ་ཁྱོད་ལ་འདུད། །ཚོས་བཞིན་མཐུན་པར་བལྟ་ཞིང་མཆིས། །གནོད་སྦྱིན་དང་། སྲིན་པོ་དང་། དྲི་ཟ་ནས་གནོད་པར་དགྱེ་དཔའི་བར་རྣམས་མིང་འདི་ཞེས་བྱ་བའི་ཡུས་ལ་བབས་པ་ལས་གྱུད་དུ་དེང་ཤིག །གལ་ཏེ་མིང་འདི་ཞེས་བྱ་བའི་ཡུས་ལས་མྱུར་དུ་གྱུད་དུ་མ་དོང་ན། དེ་དག་ལ་མྱུར་དུ་འཇིགས་པ་ཆེན་པོ་དང་། ནད་དྲག་པོས་འདེབས་པར་འགྱུར་ལ། དེའི་རྒྱུན་གྱིས་མགོ་བོ་དང་། སྙིང་ཚལ་པ་བརྒྱར་འགས་པར་འགྱུར་ཏེ། དེའི་མོད་ལ་ཐུག་བསྡལ་དུ་མ་འབྱུང་བ་དང་། བརླག་པ་དང་མཐའ་མེད་པར་འགྱུར་རོ། །འབྲུམ་བུའི་གདོན་གང་ཡིན་པ་དང་། ཐུ་རེངས་འཆར་ཀའི་གདོན་གང་ཡིན་པ་དང་། གྲོབ་གནོན་གྱི་གདོན་གང་ཡིན་པ་དེ་དག་ཀྱང་བསེལ་བའི་ཚལ་གྱི་མདོ་ཆེན་པོ་འདི་ཐོས་ནས་མིང་འདི་ཞེས་བྱ་བའི་ཡུས་ལས་མྱུར་དུ་གྱུད་དུ་དེང་ཤིག །གལ་ཏེ་མྱུར་དུ་གྱུད་དུ་མ་དོང་ན་དེ་དག་ལ་མྱུར་དུ་འཇིགས་པ་ཆེན་པོ་དང་། ནད་དྲག་པོས་འདེབས་པར་འགྱུར་ལ། དེའི་རྒྱུན་གྱིས་མགོ་བོ་དང་། སྙིང་ཚལ་པ་བརྒྱར་འགས་པར་འགྱུར་ཏེ། དེའི་མོད་ལ་ཐུག་བསྡལ་དུ་མ་འབྱུང་བ་དང་། བརླག་པ་དང་མཐའ་མེད་པར་འགྱུར་རོ། །གཟི་བྱིན་དང་ནི་ཁྲག་ཟ་བ། །ཉིན་མཚན་རྒྱུ་བ་གང་ཡིན་པ། །དེ་དག་གིས་ཀྱང་ལེགས་གསུངས་པའི། །མདོ་བཤད་ཐོས་ནས་གཏང་བར་གྱིས། །ཤ་ཟ་ཡུས་འཕགས་སྐེམ་བྱེད་དང་། །འབྱུང་པོ་འཇིགས་བྱེད་སྲུལ་པོ་རྣམས། །དེ་དག་གིས་ཀྱང་ལེགས་གསུངས་པའི། །མདོ་འདི་བཤད་པ་ཐོས་ནས་ཐོང་། །ལྷ་དང་ལྷ་མིན་ཆུང་ལྷ་དང་། ། དྲི་ཟ་དང་ནི་གདོན་གྱི་ཆ། ། འབྱུང་པོ་དང་ནི་ཤ་ཟ་དང་། ། དེ་བཞིན་གནོད་སྦྱིན་སྲིན་པོ་རྣམས། ། ཀུན་ཏུ་འཁྱུགས་ཤིང་ཀུན་ཏུ་གཡོས། ། སྐྱག་ཅིག་ཀུན་ཏུ་རབ་ཏུ་འགྱེལ། ། གདོན་ལྡང་གནོད་པ་བྱེད་པ་རྣམས། ། ཁྱུང་ཞིང་རབ་ཏུ་ཕམ་པར་འགྱུར། ། ས་གཞི་དག་ཀྱང་རབ་ཏུ་གཡོས། ། སྐྱ་པོ་ཆེ་དག་སྒོགས་པར་བྱེད། ། ཡི་དགས་དང་ནི་གྲུལ་བུམ་རྣམས། ། ལྡང་བའི་གདོན་ནི་ཟློག་བྱེད་པའི། ། མདོ་འདི་དག་ནི་ཐོས་ཀྱིས་ནས། ། འཇིགས་པ་དྲག་པོས་འདེབས་པར་འགྱུར། ། ས་ངམ་

རྒྱས་ཆོས་དང་དགེ་འདུན་ལ། །དད་པའི་གནོད་སྦྱིན་གང་ཡིན་པ། །དེ་དག་མགུ་ཞིང་ཡིད་
དགའ་ནས། །ལེགས་པར་རྫོས་སུ་ཡི་རང་ངོ་།

[4.1] །དེ་ནས་རྒྱལ་པོ་ཆེན་པོ་བཞི་པར་སྣང་ལས་བབས་ནས་བཅོམ་ལྡན་འདས་གཱ་ལ་བ་དེར་
སོང་སྟེ་ལྷགས་ནས། བཅོམ་ལྡན་འདས་ཀྱི་ཞབས་ལ་མཚོ་བོས་ཕྱག་འཚལ་ཏེ་ཐལ་མོ་སྦྱར་
ནས་བཅོམ་ལྡན་འདས་ལ་ཕྱག་འཚལ་ཞིང་། གོས་མཐུན་པ་དང་། ཆོག་མཐུན་པར་བཅོམ་
ལྡན་འདས་ལ་འདི་སྐད་ཅེས་གསོལ་ཏོ། །བཙུན་པ་བཅོམ་ལྡན་འདས་བསེལ་བའི་ཚལ་གྱི་
མདོ་ཆེན་པོ་འདི་རྒྱལ་པོ་ཆེན་པོ་བཞིས་ཞེས་ལ་ཕྱག་བཀྲིས་པ་དང་། འཕོར་བཞི་པོ་
རྣམས་སྲུང་བ་དང་། ཡོངས་སུ་སྐྱོབ་པ་དང་། གནོད་སྦྱིན་དང་། སྲིན་པོ་ནས་གནོད་པར་
བགྱིད་པའི་བར་རྣམས་འཇོམས་པ་ལགས་སོ། །བཙུན་པ་བཅོམ་ལྡན་འདས། དགེ་སློང་
དང་། དགེ་སློང་མ་དང་། དགེ་བསྙེན་དང་། དགེ་བསྙེན་མ་གང་ལ་བསྲུང་བ་དང་། དེ་དག་
གིས་ཀྱང་བསེལ་བའི་ཚལ་གྱི་མདོ་ཆེན་པོ་འདི་གཟུང་བར་བགྱི། བཙང་བར་བགྱི།བརྗོད་
པར་བགྱི། ཀུན་ཚུབ་པར་བགྱིའོ། །བཙུན་པ་བཅོམ་ལྡན་འདས་དགེ་སློང་ངམ། དགེ་སློང་
མའམ། དགེ་བསྙེན་ནམ། དགེ་བསྙེན་མ་གང་ལ་ལ་བདག་བསྲུང་བ་དང་། བདག་སྦ་ལ
དང་། གཞན་བསྲུང་བ་དང་། གཞན་སྦ་བའི་སྨད་དུ་བསེལ་བའི་ཚལ་གྱི་མདོ་ཆེན་པོ་འདི
འཛིན་པ་དང་། འཆང་བ་དང་། བརྗོད་པ་དང་། ཀུན་ཚུབ་པར་བགྱིད་པ་དེ་ལ་ནི། གནོད
སྦྱིན་དང་། སྲིན་པོ་ནས་གནོད་པར་བགྱིད་པའི་བར་རྣམས་ཉེ་འཕོར་དུ་ཡང་གནས་པར་མི
འགྱུར་ན། གནོད་པར་བགྱིད་པ་ལྷ་གཡ་ལ་སེམས་ལགས། དེ་གང་དུ་མཚན་གཅིག་ཙམ
གནས་པ་དེར་ཡང་གནོད་སྦྱིན་དང་། སྲིན་པོ་ནས་གནོད་པ་བགྱིད་པའི་བར་རྣམས་ཉེ
འཕོར་དུ་ཡང་གནས་པར་མི་འགྱུར་ན། དེ་གང་དུ་རྟག་ཏུ་གནས་པ་དེར་ལྷ་སྨོས་ཀྱང་ཅི
འཚལ་ལགས། བཙུན་པ་བཅོམ་ལྡན་འདས་གང་ལ་མི་མ་ལགས་པའི་གནོད་པས་ཕེབས་པ
དེའི་མདུན་དུ་བསེལ་བའི་ཚལ་གྱི་མདོ་ཆེན་པོ་འདི་བརྗོད་ན། དེ་སྐྱར་བ་ཁོ་ནར་བདེ
ལེགས་དང་། ནད་མ་མཆིས་པ་དང་། བདེ་བར་འགྱུར་ཞིང་ཕར་པར་འགྱུར་ལ་མི་མ་ལགས་

པ་རྣམས་དེ་ལ་ལོག་པ་མི་བགྱིད་ཅིང་མྱུར་དུ་གྱུད་དུ་མཆི་བར་འགྱུར་ལགས་ཏེ། བཅོམ་པ་
བཅོམ་ལྡན་འདས་བཞིལ་བའི་ཚལ་གྱི་མདོ་ཆེན་པོ་འདི་དེ་ལྟར་དོན་ཆེ་བ་ལགས་
སོ། །བཅོམ་པ་བཅོམ་ལྡན་འདས་དགེ་སློང་ངམ། དགེ་སློང་མའམ། དགེ་བསྙེན་རྣམ། དགེ་
བསྙེན་མ་གང་ལ་ལ་བཞིལ་བའི་ཚལ་གྱི་མདོ་ཆེན་པོ་འདི་འཛིན་པ་དང་། འཆང་བ་དང་།
བཀླུག་པ་དང་། ཀུན་ཆུབ་པར་བགྱིད་པ་དང་། སྨྲོར་བར་བགྱིད་པ་

[4.2] དེ་ལ་ནི་དད་པ་ཅན་གྱི་གནོད་སྦྱིན་དགེ་བསྙེན་རྣམས་རྒྱལ་པོ་ཆེན་པོ་བཞིའི་གནས་སུ་
མཆིས་ནས་མིང་སྨོས་པར་བགྱིད་དེ། ཀྱེ་རྒྱལ་པོ་ཆེན་པོ་དག་དགེ་སློང་ངམ་དགེ་སློང་
མའམ། །དགེ་བསྙེན་རྣམ།དགེ་བསྙེན་མ་ཆེ་གེ་མོ་ཞིག་བདག་བསྲུང་བ་དང་། བདག་སྲ་བ་
དང་། གཞན་བསྲུང་བ་དང་། གཞན་སྲ་བའི་ཕྱིར་བཞིལ་བའི་ཚལ་གྱི་མདོ་ཆེན་པོ་འདི་
འཛིན་པར་བྱེད། འཆང་བར་བྱེད། བཀླུག་པར་བྱེད། ཀུན་ཆུབ་པར་བྱེད། སྨྲོར་བར་བྱེད་
དོ། །ཞེས་སྨོས་པར་བགྱིད་ལགས་སོ། །བཅོམ་པ་བཅོམ་ལྡན་འདས་དང་པ་ཅན་གྱི་གནོད་
སྦྱིན་དགེ་བསྙེན་རྣམས་རྒྱལ་པོའི་ཕོ་བྲང་ལྷང་ལོ་ཅན་དུ་མཆིས་ནས་རྒྱལ་པོ་ཆེན་པོ་རྣམ་
ཐོས་ཀྱི་བྱའི་མདུན་དུ་གནོད་སྦྱིན་རྣམས་འདུས་ཤིང་འཚུང་པོ་ཐམས་ཅད་ཚོགས་པའི་ནང་
དུ་ཡང་བསྒྲགས་ནས། དེར་དེ་དག་མངོན་པར་དགའ་བར་འགྱུར་ཏེ། བཅོམ་པ་བཅོམ་ལྡན་
འདས་བཞིལ་བའི་ཚལ་གྱི་མདོ་ཆེན་པོ་འདི་ནི་དེ་ལྟར་དོན་ཆེ་བ་ལགས་སོ། །བཅོམ་པ་བཅོམ་
ལྡན་འདས་དགེ་སློང་ངམ། དགེ་སློང་མའམ། དགེ་བསྙེན་རྣམ། དགེ་བསྙེན་མ་གང་ལ་ལ་
བདག་བསྲུང་བ་དང་། བདག་སྲ་བ་དང་། གཞན་བསྲུང་བ་དང་། གཞན་སྲ་བའི་སྨད་དུ་
བཞིལ་བའི་ཚལ་གྱི་མདོ་ཆེན་པོ་འདི་འཛིན་པ་དང་། འཆང་བ་དང་། བཀླུག་པ་དང་ཀུན་
ཆུབ་པར་བགྱིད་པ་དང་། སྨྲོར་བར་བགྱིད་པ་དེ་ནི་ཚངས་པར་སྤྱད་པར་བགྱི་འོ།

[5] །ཚང་མི་བཏང་བ་དང་། ཏན་པ་དང་། ཤེས་བཞིན་ཅན་དུ་མཆིས་པ་དང་། ཟས་རྣམ་
པ་ལྔ་ལ་འདི་ལྟ་སྟེ། བུ་རམ་དང་། སྦྲང་རྩི་དང་། ཏིལ་དང་། ཤ་དང་། ཉ་ཤ་རྣམས་ཡོངས་སུ་
སྤང་བར་བགྱི་འོ། །དེ་ཅིའི་སྨད་དུ་ཞེ་ན། བཅོམ་པ་བཅོམ་ལྡན་འདས། གནོད་སྦྱིན་དང་།

སྲིན་པོ་ནས་གནོད་པར་བགྱིད་པའི་བར་རྣམས་བསེལ་བའི་ཚལ་གྱི་མདོ་ཆེན་པོ་འདི་འཛིན་
པ་དང་། འཆང་བ་དང་། བཟློད་པ་དང་། ཀུན་ཚུབ་པར་བགྱིད་པ་དང་། སྨྱོར་བ་དེ་ལ་དེའི་
རྒྱས་ཁོ་ནར་བརྟག་པ་དང་། མཐའ་མ་མཆིས་བར་བགྱིད་པ་དག་མཆིས་ཏ། དེ་དག་གཞོན་
པའི་སྣང་དུ་ཡི་དམ་བགྱི་འཚལ་ལགས་ལོ། །བཙུན་པ་བཅོམ་ལྡན་འདས་དགེ་སློང་ངམ། དགེ་
སློང་མའམ། དགེ་བསྙེན་ནམ། དགེ་བསྙེན་མ་གང་ལ་ལ་བསེལ་བའི་ཚལ་གྱི་མདོ་ཆེན་པོ་འདི་
འཛིན་པ་དང་། འཆང་བ་དང་། བཟློད་པ་དང་། ཀུན་ཚུབ་པར་བགྱིད་པ་དང་། སྨྱོར་བ་
བགྱིད་པ་དེ་ལ་ནི། དད་པ་ཅན་གྱི་གནོད་སྦྱིན་དགེ་བསྙེན་རྣམས་གོས་དང་། ཟས་དང་།
མལ་ཆ་དང་། སྨན་དང་། ཐོ་གོས་སྨན་དང་། ཡོ་བྱད་རྣམས་ཀྱིས་སྦྱོ་བ་བསྐྱེད་པར་བགྱིད་
དེ། བཙུན་པ་བཅོམ་ལྡན་འདས་བསེལ་བའི་ཚལ་གྱི་མདོ་ཆེན་པོ་འདི་ནི་དེ་ལྟར་དོན་ཆེ་བ་
ལགས་སོ།

[6] །བཙུན་པ་བཅོམ་ལྡན་འདས་གཞན་མུ་སྟེགས་ཅན་བཅོམ་ལྡན་འདས་ཀྱི་གསུང་རབ་
ལ་མ་དད་པ་དང་། མངོན་པར་མི་དགའ་བ་དང་། གནོད་པར་འཚལ་བ་དང་། སྨན་པར་མི་
འཚལ་བ་དང་། གྲྭ་པ་དང་། བདེ་བར་མི་འཚལ་བ་གང་ལ་ལ་བསེལ་བའི་ཚལ་གྱི་མདོ་ཆེན་
པོ་འདི་འཛིན་པ་དང་། འཆང་བ་དང་། བཟློད་པ་དང་། ཀུན་ཚུབ་པར་བགྱིད་པ་དང་།
སྨྱོར་བར་བགྱིད་པ་དེ་ལ་ནི་དོན་དེ་འགྲྭ་བར་མི་བགྱིད་དེ། མི་མ་ལགས་པ་རྣམས་ཀྱིས་བར་
མ་དོར་འགྱུར་ལ་ཐ་ཆུང་ངུ་ཙམ་ཡང་ཐ་ཆུང་ངུ་ཙམ། ཐུག་བསྡལ་ཏུ་མ་ཕྱུང་བ་དང་། བརྟག་པ་དང་། མཐའ་མ་མཆིས་
པར་བགྱིད་ལགས་སོ། །དེ་ཅིའི་སྣང་དུ་ཞེ་ན། དེ་ནི་དེ་དག་ལ་གནོད་པར་འཚལ་བ་དང་།
སྨན་པར་མི་འཚལ་བ་དང་། གྲྭ་པ་དང་། བདེ་བར་མི་འཚལ་བ་ལགས་པའི་སྣང་དུ་སྟེ། དེ་
དག་ལ་ནི་ལོག་པར་ཕྱ་བ་གང་ལགས་པ་དེ་བརྟག་པར་བགྱིད་ལགས་སོ། །བཙུན་པ་བཅོམ་
ལྡན་འདས་འཛིག་རྟེན་ན་སེམས་ཅན་རྣམས་བསྡུང་བ་དང་། བསྐྱབ་པ་དང་། ཐུ་བའི་སྣང
ང་རྒྱལ་པོ་ཆེན་པོ་བཞིས་སྡུང་བ་བགྱིས་པ་གང་ཅི་ཡང་རུང་བའི་སྡུང་བ་དེ་དག་གི་ནང་ན
ནི་འདི་མཆོག་དང་། གཙོ་བོ་དང་། རབ་མཆོག་ལགས་སོ། །དེ་ནས་བཅོམ་ལྡན་འདས་ལ

རྒྱལ་པོ་ཆེན་པོ་བཞིས་ཚོགས་སུ་བཙུད་པ་འདི་དག་གསོལ་ཏེ། །མི་མཚོག་གང་ཞིག་མདོ་འདི་
དག། །ཡོངས་སུ་རྫོགས་པར་བསྟུང་བ་དང་། །བདེ་ལེགས་བགྱིད་པ་དེ་ལ་ནི། །སྲིན་པོ་རྣམས་
ཀྱང་འཚེ་མི་བགྱིད། ། །སུ་ཡང་རྒྱང་སྟེ་མདོ་འདི་དག། ། མི་མཚོག་གིས་ནི་གསུངས་པ་
བཞིན། །ཡོངས་སུ་རྫོགས་ཤིང་མ་ཚད་པར། ། ཤིན་ཏུ་ཚང་བར་འཚད་བགྱིད་ན། ། དེ་ལ་
གནོད་སྦྱིན་ཡི་དགས་དང་། ། འཇུང་པོ་གྲྭལ་བུམ་སྲིན་པོ་དང་། ། སྨྱོ་བྱེད་རྒྱ་བ་ཟླ་རྣམས་
དང་། ། དེ་ལྟ་བུ་དག་འཚེ་མི་བགྱིད། ། དེ་ལ་མི་མ་ལག་དང་གདོན། ། ཐུར་དུ་གྱད་དུ་མཆི་
བར་འགྱུར། ། དེ་ལ་ཅིས་ཀྱང་མི་ཚུགས་ཏེ། ། དེ་ལ་འཚེ་བར་ཡོང་མི་ནུས།

[7] ། རྒྱལ་པོ་ཆེན་པོ་བཞི་པོ་ཡིས། ། བཅོམ་ལྡན་ཕྱག་འཚལ་ཞེས་བརྗོད་དེ། ། ས་ངས་རྒྱས་
ཞབས་ལ་ཕྱག་འཚལ་ནས། ། དེ་ཉིད་དུ་ནི་མི་སྣང་གྱུར།

[8] ། དེ་ནས་བཅོམ་ལྡན་འདས་ཀྱིས་དེའི་མཚན་མོ་འདས་ཏེ་ནམ་ལངས་ནས་དགེ་སློང་གི་
དགེ་འདུན་གྱི་གྲང་ལ་བཞུགས་ཏེ། དགེ་སློང་རྣམས་ལ་བཀའ་སྩལ་པ། ། དགེ་སློང་དག་མདང་
ས་གསུམ་ [374] རྒྱལ་པོ་ཆེན་པོ་བཞི་བྱ་དང་བཙས། ། བློན་པོ་དང་བཙས། ། འགོར་དང་བཙས། །
མངག་གཞུག་པ་དང་བཙས། ། ཕོ་ཉ་དང་བཙས། ། གཡོག་འགོར་དང་བཙས་པ། ། ཁ་དོག་དང་
འཕགས་པ་དག་ནམ་སྒོས་ནས་ལྷགས་ནས་གློས་མཐུན་ [375] པར་དུར་ཁྲོད་ཆེན་པོ་བསིལ་བའི་
ཚལ་དུ་འོངས་ཏེ། ། རང་གི་འོད་ཀྱིས་སྣང་བར་བྱས་ནས་ཡུས་ངན་དང་། ། ཡུལ་འགོར་སྲུང་
དང་། ། མིག་མི་བཟང་དང་། ། འཕགས་སྐྱེས་པོ་རྣམས་ང་ཁ་ལ་བ་དེར་འོངས་ཏེ་ལྷགས་ནས།
ངའི་ཤུང་པ་གཉིས་ལ་མགོ་བོས་ཕྱག་འཚལ་ཏེ་ཕྱོགས་གཅིག་ཏུ་འགོད་དོ། ། ཕྱོགས་གཅིག་ཏུ་
འགོད་ནས། ། རྒྱལ་པོ་ཆེན་པོ་བཞིས་ངའི་ཐད་དུ་བསིལ་བའི་ཚལ་གྱི་མདོ་ཆེན་པོ་འདི་བརྗོད་
ནས་དོང་ངོ། ། ཁྱོད་ཀྱིས་དེ་ལེགས་པར་རབ་ཏུ་ཉོན་ལ་ཡིད་ལ་ཟུང་ཤིག་དང་ངས་བཤད་
དོ། ། བཙུན་པ་དེ་ལྟར་འཚལ་ལོ་ཞེས་གསོལ་ཏེ། ། དགེ་སློང་རྣམས་ཀྱིས་བཅོམ་ལྡན་འདས་ཀྱིས་

374 TD མདང་ས་སུམ་（昨晩）, TP མདང་ས་གསུམ་（三夜）

375 TP འཐུན་, TD མཐུན་

བཀའ་སྩལ་པ་མཉན་ནས། བཅོམ་ལྡན་འདས་ཀྱིས་དགེ་སློང་དང། དགེ་སློང་མ་དང། དགེ་བསྙེན་དང། དགེ་བསྙེན་མ་རྣམས་ལ་བསེལ་བའི་ཚལ་གྱི་མདོ་ཆེན་པོ་འདི་རྒྱས་པར་བཤད་དོ། །བཅོམ་ལྡན་འདས་ཀྱིས་དེ་སྐད་ཅེས་བཀའ་སྩལ་ནས། དགེ་སློང་དང། དགེ་སློང་མ་དང། དགེ་བསྙེན་དང།དགེ་བསྙེན་མ་དེ་དག་ཡི་རང་དགར། བཅོམ་ལྡན་འདས་ཀྱིས་གསུངས་པ་ལ་མངོན་པར་བསྟོད་དོ།།

[9] །།འདིའི་ཚོ་ག་ནི། ཟས་དཀར་གསུམ་ཟ་བ་དང། ལེགས་པར་ཕྲུས་བྱས་པ་དང། སྣུང་བ་བྱས་པ་དང། ཚུལ་ཁྲིམས་དང་ལྡན་པ་དང། བསམ་པ་རྒྱ་ཆེན་པོ་དང་ལྡན་པས་རྒྱལ་པོ་ཆེན་པོ་བཞིའི་གཟུགས་ལྟོང་རོས་སམ། བཙན་གཡོས་གྱིས་ལ། སྨོས་ཐམས་ཅད་དང་ལྡན་པའི་དཀྱིལ་འཁོར་གྱ་བཞི་པ་བྱས་ནས་ཤངས་རྒྱས་ཀྱི་སྒྲན་ཐར་དུས་གསུམ་དུ་བརྟོད་པར་བྱ་འོ། །བསེལ་བའི་ཚལ་གྱི་མདོ་ཆེན་པོ་རྫོགས་སོ[376]།།

[10] །། བཅྱིད་ཀྱི་ལེ་ཐུ་བོ་ཏྲི་དང། ཏྲ་ན་ས་ཏྲ་དང། ཤ་ཀྱ་ཐ་ཏ་དང། ལོ་ཙ་བ་བཅུ་ཡི་ཤེས་ལྷས་བསྒྲུར་ཅིང་ཞུས་ཏེ་སྐད་གསར་ཆད་ཀྱིས་ཀྱང་བཅོས་ཏེ་གཏན་ལ་ཕབ་པ།། །། ཕྱིས་འགོས་གཞོན་ནུ་དཔལ་གྱིས་ཆགས་ལོ་ཙྪའི་ཕྱག་དཔེ་ལས་ཞུས་སོ།།

[376] TP ཀཱཥ

2. 『成就法の花環』「五護陀羅尼成就法」テキスト

ここでは『成就法の花環』に説かれている五護陀羅尼明妃の成就法（SM No.194～201, 206）のサンスクリット校訂、チベット語訳を取り上げる。各和訳の見出し番号はいずれも筆者が作成したものであり、第 1 部の内容構成、第 2 部の和訳の見出し番号とそれぞれ対応している。

2.0　使用テキスト

［サンスクリット・テキスト］

A）Bhattacharya,Benoytosh, ed., *Sādhanamālā vol II, G.O.S. No.41*, Baroda Oriental Institute, Baroda, 1968

［サンスクリット写本］

B) *Sādhanasamuccaya*（東京大学所蔵[Matsunami1965: No.451]）

C) *Sādhanasamuccaya*（東京大学所蔵[Matsunami1965: No.452]）

D) *Sādhanasamuccaya*（東京大学所蔵[Matsunami1965: No.453]）

E) National Archives, Kathmandu, No.3-387

［チベット語訳］

Ota. No.4074 སོ་སོར་འབྱང་མ་ཆེན་མོའི་སྒྲུབ་ཐབས་（SM No.194）

Ota. No.4406 སོ་སོར་འབྱང་མ་ཆེན་མོའི་སྒྲུབ་ཐབས་（SM No.195）

Ota. No.4407 སོ་སོར་འབྱང་མའི་སྒྲུབ་ཐབས་（SM No.196）

Ota. No.4075 རྡ་བྱ་ཆེན་མོའི་སྒྲུབ་ཐབས་（SM No.197）

Ota. No.4076 ལྷོ་ང་ཆེན་མོ་རབ་ཏུ་འཇོམས་པའི་སྒྲུབ་ཐབས་（SM No.198）

Ota. No.4077 གསང་སྔགས་ཀྱི་རྟེས་སུ་འཛིན་པ་ཆེན་མོའི་སྒྲུབ་ཐབས་（SM No.199）

Ota. No.4078 བསིལ་བའི་ཚལ་ཆེན་མོའི་ སྒྲུབ་ཐབས་ （SM No.200）

Ota. No.4079 དེ་ནས་གང་མས་ངག་གཞན་གྱི་ལྷ་ལྟ་ལེགས་པར་བསྟན་པར་བྱ་བ་（SM No.201）

Ota. No.4418 བསྡུང་བ་ལྟའི་ཚོ་ག་（SM No.206）

2.1『成就法の花環』サンスクリット校訂テキスト

2.1.1　No.194「大随求明妃成就法」

[0]　namo mahāpratisarāyai/

[1]　pūrvvoktavidhānena śūnyatābhāvanānantaramakārajendumaṇḍale[377] pītapraṃkārajaṃ[378] kṛtavividharaśmiparārthaṃ[379] pariṇamya bhagavatīm mahāpratisarāṃ[380] jhaṭityātmānaṃ niṣpādayet[381],

[2]　pītāṃ caturmmukhāṃ trinetrāṃ aṣṭabhujāṃ prathamamukhaṃ pītaṃ dakṣiṇaṃ[382] sitaṃ paścimaṃ nīlaṃ vāmaṃ raktaṃ dakṣiṇabhujaiḥ khaḍgacakra triśūlaśaradharāṃ[383] vāmabhujaiḥ paraśucāpapāśavajradhrāṃ viśvapadmacandrāsane[384] lalitākṣepasaṃsthitāṃ raktaprabhāmaṇḍalāṃ sarvvābharaṇabhūṣitāṃ[385] vicitravastravasanāṃ paṭṭāṃśukottarīyāṃ nānāratnamukuṭīm[386]/

[3]　evaṃ vicintya tataḥ kāyavākcittacandreṣu oṃ āḥ hūṃ sitapītanīla[387] tryakṣarāṇi cintayet/ tataḥ stanāntare[388] candrastha[389]praṃkāraṃ vicintya[390] nānāvidhadevatībhir[391]ātmānaṃ pūjitaṃ dṛṣṭvā tāvad bhāvayet yāvat[392] khedo na jāyate[393]/

[4]　khede sati svahṛc[394]candre muktāhāropamaṃ mantraṃ paśyat[395] japet---- oṃ maṇidhari vajriṇi mahāpratisare[396] hūṃ hūṃ phaṭ phaṭ svāhā/
// mahāpratisarā sādhanam//

---

377 E -kārajyaṃ-
378 B, D -kāraṃ; C, E -kāra
379 B -dividha-; D -vidha-
380 E mahāpratirāṃ
381 E niṣpādayataḥ
382 B dakṣiṇa
383 E khaḍgatriśūra-
384 D viśve-
385 E sarvvābharana-
386 E -mukutā
387 E -nīlaṃ
388 B stanantare; E stānantare
389 B, D, E candrasthaṃ
390 E vicinte
391 E -devati-
392 D yāva
393 E jāyetya
394 E svahṛ
395 C paśyan; D pabhaśyat
396 E mahāpratisahare

2.1.2　No.195「大随求明妃成就法」

[1]　prathamaṃ yogī[397] samāhitacitto bhūtvā hṛdi paṃ[398]kārapariṇaṃ viśvapadmaṃ[399] tatropari[400] akārapariṇataṃ candramaṇḍalaṃ tatra pītaṃ praṃkāraṃ vinyasya[401] tadvinirgataraśmibhīḥ[402] gurubuddhabodhisattvān sañcodyānīyāgrato[403] vicitrāsanopaviṣṭān[404] vandanāpūjanāpāpadeśanāpuṇyā-numodanātriśaraṇagamanabodhicittotpādapuṇyapariṇāmanākṣamāpanāḥ[405] kuryyāt/ tato maitrīkaruṇāmuditopekṣābhāvanā[406]/

[2]　oṃ śūnyatājñānavajrasvabhāvātmako[407] 'ham ity uccāryya śūnyaṃ[408] vibhāvya[409] tataḥ svacitte[410] jhaṭiti[411] candraṃ[412] pītapraṃkāraṃ[413] [ca][414] vibhāvya tatpariṇāmena[415] pratisarāṃ supītāṃ ratnamukuṭinīṃ[416] pītaśuklapītaraktacaturmmukhīṃ[417] trinetrāmaṣṭabhujāṃ dakṣiṇabhujaiḥ khaḍgacakratriśūlaśaradhāriṇīṃ vāmabhujaiḥ pāśaparaśucāpavajradhāriṇīṃ[418] padmacandrāsane lalitākṣepasthitāṃ[419]nānāratnābharaṇavibhūṣitāṃ[420] vibhāvya[421] tasyāḥ śiraḥkaṇṭhahṛdayopahṛdayeṣu candrasthaśuklaraktapīta-kṛṣṇān[422] oṃ āḥ pram huṃkārān vinyasya etanmantroccāreṇātmānaṃ[423] devīrūpam adhitiṣṭhet/

---

397 E yogi
398 B, E -pariṇataṃ; E paḍkārapariṇataṃ
399 E -maṃḥ
400 E tatopari
401 E vinesya
402 B tatavinirgata-; C, E -raśmibhi
403 E sañcodyāniya-
404 E -opaviṣṭānaḥ
405 E -pūjranāpāpadesanāpunyā-; E -gamaṇabodhicittottpādapuṇyeparināmanākṣamāpanā
406 E maitri- ; B, C, D muditā upekṣā; E muditā upekṣāḥ
407 D śūnyatāṃ vajra-; E śūnyetājānavajra-
408 E śūnetāṃ
409 E vibhavyaḥ
410 B, C, D, E svacitaṃ
411 E jhatiṭi
412 C candrastaṃ, E candrataṃ
413 E pita-
414 B, C, D ca omits.
415 B -parīṇāmena
416 E -makṭiniṃ
417 C, E pītaśuklanīla-; B, D -mukhāṃ
418 E -dhārinīṃḥ
419 C saṃsthitāṃ
420 B, C, D, E -ābharaṇabhūṣitāṃ
421 E vibhāvyaḥ/
422 E -pita-
423 D, E etat-; C, E -mantroccāraṇai(au?)nātmānaṃ

[3] tataḥ svahṛdayānnir gataraśmibhir akṣobhyādīn[424] sañcodyānīya abhiṣekaṃ[425] gṛhītvā mukuṭe adhipatim akṣobhyaṃ cintayet/

[4] tataḥ svahṛdayāt pūjādevīḥ[426] samsphāryya pūjayitvā[427] śatākṣara-mantram[428] āvarttya[429] ca tāvad bhāvayet[430] yāvat khedo[431] na jāyate[432]/ khinne citte sati mantraṃ japet[433] ---- oṃ maṇidhari vajriṇimahāpratisare[434] hūṃ[435] hūṃ[436] phaṭ phaṭ(437-svāhā/ tato'pi-437) mantraḥ ---- oṃ vajrasattva samayamanupālaya[438] vajrasattvatvenopatiṣṭha[439] dṛḍho me bhava sutoṣyo me (440-bhava supoṣyo[441] me-440) bhava anurakto me bhava sarvvasiddhiṃ me prayaccha sarvvakarmmasu ca me[442] cittaṃ[443] śreyaḥ[444] kuru huṃ[445] hahahahahoḥ[446] bhagavan sarvvatathāgatavajra[447] mā me muñca[448] vajrībhava mahāsamayasattva āḥ ---- śatākṣaramantraḥ[449]/ utthānakālasamaye[450] pūjādikaṃ kṛtvā (451-kṣamāpayet/
// iti-451) mahāpratisarāyāḥ[452] sādhanaṃ samāptam//

---

424 E akṣayobhyādīn
425 D -nīyābhiṣekaṃ; E sañcodeyānīyabhiṣekaṃ
426 E pūjārdevīḥ
427 C, E pūrayitvāsttutimkṛtvā
428 E satākṣira
429 E -āvarte
430 C bhāvayed
431 E khedā
432 E jrāyate
433 E jrapat
434 E mahāpratisahare
435 A huṃ
436 A huṃ
437 B, D rahito'pi; C svāhā hūṃ hūṃ phaṭ rahito'pi; E svāhā hūṃ2 phaṭ rahito'pi
438 E -pālaye
439 E -pratiṣṭha; C, D -patiṣṭhasu
440 B bhava supoṣyo me omits.
441 D stoṣyo
442 A ma; C omits.; D me
443 A, C, E cittaṃme
444 B Crīyaḥ
445 E hūm
446 E -ho
447 E -tathāgaṭa-; D -vajra omits.
448 C 不明
449 B śata-
450 E utḍānakarasamaya
451 B ptamāpayet/; C kṣamāpayetiti/; E kṣamāpayedaiti/
452 E mahāpratisarāyā

2.1.3　No.196「随求明妃成就法」

[1] maitrīṃ[453] sarvvajane 'pi janmamaraṇavyādhivyathā[454] vihvale
kāruṇyaṃ[455] muditām upekṣaṇamatiṃ[456] kṛtvopadeśādataḥ[457]/
māyāsvapnasamaṃ samagram akhilaiḥ śūnyaṃ vikalpair jagat[458]
vijñānaikavapur[459] vibhāvya[460] purato mantrī[461] tatastena[462] ca//

[2] śubhrākāraśaśāṅkabimbaluṭhitāṃ[463] pītākṛtiṃ praṃkṛtim
kurvvāṇaṃ[464] nijaraśmibhiḥ[465] pratidiśaṃ[466] viśvasya sadvānchitam[467]/
dhyātvā viśvasarojagarbhavilasaccandrāsanasthāyinī[468]
pītāpītāsitāsitaruṇamukhaṃ[469] netratrayālaṇkṛtam[470]//
maulīratnamayaṃ[471] vicitravasanaṃ raktoprabhāmaṇḍalaṃ[472]
līlākṣiptapa[473] yodharayugāsaktottarīyāṃśukam/
khaḍgaṃ cakraśaratriśūlaparaśuśrīpāśavajraṃ[474] dhanur
bibhrāṇā bhujapallavaiḥ pratisarā bhūyāt svayaṃ sādhakaḥ//

[3] oṃ āḥ huṃ iti cākṣaraiḥ paṭumatir dehe girisvāntake[475]
dṛṣṭvā candragataṃ sitaṃ vidhiyutaṃ pītaṃ ca nīlātmakam/
saccandre kucayugmamadhyamilitapraṃkārajanmārcciṣā[476]
niṣpannaiḥ paripūritaṃ nijavapur[477] dhyāyāt sa[478] devīgaṇaiḥ//

---

453 E maitrri
454 B 'pī jatmamala-; E -ādhivethā
455 E kāruṇeṃ
456 C, B -matiḥ
457 B kṛtopadeśā-
458 B, C jagad
459 E -vapūr-
460 E vibhāve
461 E mantri
462 C tatostena
463 E -ākāraśas-; C -śaśāṅkabinbuluṭhitāṃ
464 C kurvvāṇā
465 E nijra-
466 E patiṭiśaṃ
467 C sarvvāṃcchitam; E sarvāddita
468 E viśvasarojra-, sthāyani
469 B pītāṃpītasitāsītārumukhaṃ; C pītāpītāsitāsitā-; E pitāpitāsitāsitā-
470 B netratraysaṇskṛtam
471 C, E mauli-
472 B, C, E rakta-
473 C, E līlākṣiptapadaṃpa
474 E cakraśatriśūla-; C -vajran
475 B girīsvāntake; E girisvānteke
476 E kutayugma; C, E madhyamilitaṃ
477 E nijra-
478 C, E sva

[4] evaṃ ca sphuraṇe'pi[479] saṃhṛtividhau sañjātakhedo
yadāmuktādāmanibhaṃ tadā sthiramatiḥ[480] raśmipratāno[481]jjvalam//
hṛccandropari mantrarājam asamaṃ dhyāyan japedīdṛśaṃ[482]nityaṃ[483]
sādaramañjasā bahutaraṃ kālaṃ viśuddhāśayaḥ//
tatrāyaṃ[484] mantrarājaḥ ——
oṃ maṇidhari vajriṇi mahāpratisare[485] (486-huṃ huṃ-486) phat phat svāhā/
//pratisarāsādhanam[487]//

2.1.4 No.197「聖孔雀明妃成就法」

[1] pūrvvoktavidhānena[488] viśvapadmacandre[489] haritamāṃ[490]kārajāṃ
mahāmāyūrīṃ[491] haritavarṇāṃ trimukhāṃ ṣaḍbhujāṃ[492] pratimukhaṃ
trinetriṃ[493] kṛṣṇaśukladakṣiṇetaravadanāṃ[494] dakṣiṇatrihasteṣu yathākramaṃ
mayūrapicchabāṇavaradamudrāḥ tathā vāmatrihasteṣu[495] ratnacchaṭācāpo-
tsaṅgasthakalaśā[496] vicitrābharaṇāṃ śṛṅgārarasāṃ navayauvanāṃ[497]
candrāsane[498] candraprabhāvatīṃ[499] arddhaparyyaṅkinīm[500]
amoghasiddhimakuṭāṃ[501] bhāvayed ātmānam/

[2] tato'syāḥ śiraḥkaṇṭahṛdayanābhisthacandreṣu[502] yathākramaṃ[503] oṃ āḥ

---

479 E sphuraṇepa
480 B -mathī; C, E sthitamaramatti
481 E -pratānorjjvalam
482 E jrape-
483 B nityau, E niteṃ
484 B tavāyaṃ
485 E sahare
486 B hūṃ hūṃ
487 E pratisaharā
488 B -vidhāneṇa
489 E vipaśva
490 E haritamā
491 E māhā-
492 E khaḍbhujāṃ
493 B, C, D, E trinetrām
494 B -dakṣinā-; C -dakṣina-
495 C vāme-
496 B, C, D -kalaśāḥ; E -kalasāḥ
497 E 不明
498 C, D, E candrāsana
499 E -prabhāvatim
500 B -paryyaṅkiṇīm
501 B, C, D -mukuṭāṃ
502 E -śiraḥṭhā/

māṃ hūṃ ityakṣaracatuṣṭayaṃ[504] vibhāvya sphuraṇasaṃharaṇa kurvvīta[505]/

[3] tato mantraṃ japet ----- oṃ mahāmāyūrī[506] vidyārājñī hūṃ hūṃ phat phat[507] svāhā/

// ityāryyamahāmāyūrīsādhanam[508]//

2.1.5 No.198「聖大千摧砕明妃成就法」

[1] pūrvvoktavidhānena[509] viśvapadmacandre buṃkārodbhavāṃ[510] mahāsāhasrapramarddanīm ātmānaṃ[511] dhyāyāt[512] śuklāmekamukhīṃ[513] ṣaḍbhujām[514] dakṣiṇatribhujeṣu[515] khaḍgabāṇavaradamudrāḥ,[516] vāmatribhujeṣu[517] dhanuḥpāśaparaśavaḥ,[518] vicitrālaṇkāradharāṃ[519] rūpayauvanaśṛṅgāravatīṃ[520] vairocanakirīṭayaktāṃ[521] padmacandrāsanaprabhām[522]/

// ityāryyamahāsāhasrapramarddanīsādhanam[523]//

---

503 E 不明
504 E ite-
505 C kurvvītat; E kurvvītaḥ
506 E -māyuri
507 C phat omits.
508 E -māyuri
509 E purvvo-
510 B vūkāro-; C, D vūṃ-; E -vuṃkāroḍbhavāṃ
511 B -pramarddanīmātmāna; C -pramardanīṃmātmānaṃ; D -pramarddanīmātmāna; E -pramardinīṃmātmānaṃ
512 B, C, D/; E dhyāyāṭḥ
513 B -mūkhī; C -mūkhīṃ; E śukrāmekamukhiṃ
514 B, C, D ṣaḍ-; E khaḍbhūjām
515 B, D -bhujeṣū/; C -bhujeṣū; E -bhūjeṣu
516 B, C, D -vānavaradamūdrāḥ/; E -vānavaradamūdrāḥ
517 B, D -bhujeṣū/; C vāmabhujeṣū; E vāmabhujeṣu
518 B dhanūḥpāśaparaśuśavaḥ/ ; C dhanūḥsapāśaparaśavaḥ/, D dhanūḥpāśaparaśavaḥ/; E dhanupāśaparaśava
519 C dharāṃ/; E -dharāṃḥ/
520 B, C śṛṅgāravatī; E śṛṅgāravati
521 B, D -kirīṭimūktāṃ/ ; C, -kirīṭiyūktāṃ/ ; E vailocanakiritiyuktāṃḥ/
522 B -prabhām//; C -prabhāmḥ/; D -prabhām//; E -canḍrā-, -prabhāṃḥ
523 B, E -namḥ//

2.1.6　No.199「聖密呪随持明妃成就法」

[1]　mahāmantrānusāriṇī[524] caturbhujaikamukhī[525] kṛṣṇā[526] dakṣiṇabhuja-dvaye[527] vajravaradavatī[528] vāmabhujadvaye[529] paraśupāśavatī[530] hūṃkāra-bījā[531] akṣobhyakirīṭinī[532] sūryyāsanaprabhā ceti[533]/

// ityāryyamahāmantrānusāriṇīsādhanam[534]//

2.1.7　No.200「聖大寒林明妃成就法」

[1]　mahāsītavatī[535] caturbhujaikamukhī[536] raktā dakṣiṇabhujadvaye[537] (538-akṣasūtravaradavatī vāmabhujadvaye-538) vajrāṅkuśahṛtpradeśasthapustaka-vatī[539] jīṃbījā[540] amitābhamukuṭī[541] arddhaparyyaṅkasthitā[542] nānālaṅkāra-vatī[543] sūryyāsanaprabhā[544] ceti[545]/

// ityāryyamahāsītavatīsādhanam[546]//

---

524 B catubhuja; B, C, D mahāmantrānūsāriṇī; E mahāmantrānusārani
525 B, C -mūkhī; D -mūkhīṃ; E -mukhi
526 B, D kṛṣṇa
527 E -bhujadoya
528 B, C, D vajavaradavatī; E -varahadatiḥ
529 E -bhujadvaya
530 D -vatīḥ, E -vatiṃ
531 B, C, D -vījā; E -bījāḥ
532 D akṣobhaki/ rīṭinī; E akṣobhekiritinī
533 E cetīḥ
534 B, C, D -mahāmantrānūsāriṇī-; B -sādhana samāptam/; C, D, E -sādhanaṃ; D ityāryyamahāmahāmantrānusāriṇisādhana samāptam/
535 B, D mahāsītavatī; C mahāśītavatī; E mahāsitavati
536 B catubhujaikamūkhi; C, D -mūkhī; E caturbhūjaika-
537 B, D -dvaye/; E -bhūja-
538 B akṣasūtravaradavatī/ [vāmabhujadvaya/ akṣasūtravaradavatī/] vāmabhujadvayaṃ（[ ]内写本、傍点付き）; C, D -vatī/ vāma-; E -akṣasutravaradavatī/ vāmabhūjadoye
539 B vajāṅkuśa; C vajāṅkūśa; D vajāṅkuśa; B, D -hṛnpra; B, C -pūstakavatī/; E -vatīḥ/
540 B -bījā/
541 B -makūṭā; C, D -mūkūṭī/; E -makuṭā
542 B, D -paryaṅka; B, D -sthitā/
543 B, C, D -vatī/; E -vatīḥ/
544 D sūryā-
545 E cetiḥ
546 B, D ityārya-; B, C, D, E -mahāsītavatīsādhanaṃ

2.1.8　No.201「偉大な五護陀羅尼儀軌」

[1.1]　athāmnāyāntareṇa[547] pañcamahādevatyo[548] nirddiśyant[549]/ tatra mahāpratisarā pītā[550] trimukhī[551] pratimukhaṃ trinayanā daśa bhujā[552] kṛṣṇasitadakṣiṇetaravadanā dakṣiṇapañcabhujeṣu yathā kramaṃ khaḍgavajra-bāṇavaradahṛdayaśāyihastasthacchatrāṇi[553] tathā vāmapañcabhujeṣu cāpa-dhvajaratnacchaṭāparaśuśaṅkhāḥ[554] ratnasambhavamukuṭī[555] kṛṣṇakañcuka-raktottarīyā arddhaparyyaṅkalalitākṣepā[556] divyābharaṇavastrabhūṣitā ceti/

[1.2]　mahāmāyūrī haritā dvibhujaikamukhī divyā mayūrapicchavaradadakṣiṇa-vāmabhujā ceti/

[1.3]　mahāsāhasrapramarddanī pūrvvavadeva[557]/

[1.4]　mahāmantrānusāriṇī caturbhujaikamukhī[558] kṛṣṇā dakṣiṇa[559]bhujayor asi-varadau[560] vāmabhujayoḥ paraśupāśau[561] ceti[562]/

[1.5]　(563-mahāsītavatī caturbhujaikamukhī raktā dakṣiṇabhujayorasivaradau vāmabhujayoḥ paraśupāśāviti/-563)

[2]　tryakṣarāṅkitāḥ[564] svabījamadhyāḥ svanāmasahitā[565] amūṣāṃ mantrāḥ/ // mahāpañcarakṣāsādhanam//

---

547 E athāmā-
548 B, C, D, E mahā omits.
549 B, C, D nirddiśyante, E nirddiśyanteḥ
550 E pitā
551 B, C, D, E -mukhā
552 E bhūjā
553 C -bāna; E -hṛdayasā-
554 E -ratnacchatā-
555 B, C, D, E -makuṭā
556 B -lalitākṣepa, E -lalitākśapa
557 C pūrvvavat; E -vadeva omit.
558 B, D -bhuje-
559 D dakṣi
560 C, E asivarado
561 E -pāśā
562 E ceti omits.
563 バッタチャリヤ校訂では mahāsitavatī と記述されているが、本論文では mahāsītavatī に統一する。
E omits.
564 B, C try omits., E vitakṣarā-
565 B svarāmasadilāḥ; C svanāmasahitāḥ; D -sadisiḥ

2.1.9　No.206「五護陀羅尼成就法」

[1.1.0]　namaḥ[566] āryyapratisarāyai[567]/

[1.1.1]　prathamaṃ tāvanmantrī[568] mukhaśaucādikaṃ[569] kṛtvā mano 'nukūle[570] sthāne sukhāsane[571] upaviśya[572] oṃ āḥ huṃ[573] rakṣa rakṣa[574] huṃ[575] phaṭ svāheti sthānātmayogena[576] rakṣām adhitiṣṭhet[577]/

[1.1.2]　tataḥ svahṛdi[578] akārajaṃ[579] candramaṇḍalaṃ[580] tasyopari praṃkāra-raśminirgatān[581] gurubuddhabodhisattvānavabhāsya[582] purato dṛṣṭvā mahāpratisarāpramukhān[583] sagaṇaparivārān[584] pūjayet[585]/ puṣpadhūpadīpagandhabalinaivedyādīni[586] ḍhaukayitvā[587] pāpaṃ[588] pratideśayet[589], triratnaśaraṇaṃ[590] gacchet[591], bodhicittamutpādayet[592], kuśalamūlaṃ[593] pariṇāmya[594] kṣamāpayet, tataścaturbrahmavihārān[595] bhāvayet----

---

566 B, C, D namaḥ
567 B -pratiśarāyai; E -pratisarāyaiḥ
568 C, E tāvat-
569 B, C, E mukhasaucādikaṃ; D mukhasaucādika
570 B, C, D, E nukule
571 B, D sukhāsane/; E sukhāsano
572 B, C upaviśya/
573 B, C, D, E huṃ omits.
574 B, C, D, E rakṣa2
575 B, C, D, E hūṃ
576 C, D, -yoga; E sthānātsayoga
577 A yogarakṣāma-
578 C svahṛdaya; E svahṛdayaḥ
579 B, D akāraṃjaṃ
580 B, C, D, E/
581 A paṃkāra-; B praṃkāraraśminirggatān/; C praṃkāraraśmivitiggatān; D/; E praṃkāraraśmivinirgat/; チベット語訳 ཟློ་ཡིད-
582 B guruburddhabodhisatvānavabhāsya/; C, D-satvānavabhāsya/; E satvānavabhāpte
583 B, D/; C -mukhāt/
584 B sagaṇaparivārān/; D sagaṇapanivārān/
585 E pūjrayet
586 B -gandhavali-; C -naivedyādīn; E puṣpadhūpadipagandhabalinevedyādin
587 B Dhokayitvā; D, E dokayitvā
588 B pāpam
589 E pratidesayat
590 B triratnaṃśara; D triratnaṃśaraṃ
591 E gacchat
592 D -mutpādayot
593 E kuśanamūlaṃ
594 B, D pariṇamya; C, E parimya
595 B -caturvahma-; D -caturvrahmavihārāna; E tataḥścatur-

tadduḥkhoddharaṇā[596] karuṇā[597] mukhapratiṣṭhāpanā[598] maitrī[599] sthirasukhatvena muditā[600] tathatārūpatvopekṣā[601]/

[1.1.3] tataḥ sarvvadharmmān[602] manasā 'valambya[603] nirvvikalpakaṃ[604] vicintya[605] oṃ śūnyatājñānavajrasvabhāvātmako[606] 'ham[607]/

[1.2.1] tato huṃkāreṇa[608] viśvavajramayīṃ[609] bhūmiṃ[610] adhitiṣṭhet[611]/ tenaiva ca vajreṇa vajrapañcaraṃ vajraprākāraṃ vajravitānaṃ ca vicintya tanmadhye suṃkārapariṇataṃ sumeruparvvataṃ mahāmokṣapurabhavanaṃ nānākusumābhikīrṇam, tasyopari huṃkāreṇa viśvavajraṃ puṃkārapariṇataṃ viśvapadmaṃ karṇikākeśarājvitam, tasyopari candramaṇḍalamadhye paṃkāraraśmiṃ[612] saṃsphāryya[613] taiḥ pañcajñānātmakaṃ ākṛṣya sarvvatasthāgataiḥ sahaikīkṛtya dravībhūtabījapariṇāmena vakṣyamāṇavarṇakṛtiḥ mahāpratisarā gauravarṇā dviraṣṭavarṣakṛtiḥ caityālaṅkṛitamūrddha candrāsanasthā sūryyamaṇḍalālīḍhā vajraparyyaṅkinī trinetrā aṣṭabhujā calatkuṇḍalaśobhitā hāranūpurabhūṣitā kanakakeyūramaṇḍitamekhalā sarvvalaṅkāradhāriṇī, tasyā bhagavatyāḥ[614] prathamamukhaṃ gauravarṇaṃ[615] dakṣiṇa kṛṣṇaṃ[616] pṛṣṭhe pītaṃ[617] vāme[618] raktam, dakṣiṇaprathamabhuje cakraṃ[619] dvitīye vajraṃ[620] tṛtīye

---

596 E tadduḥkhodharaṇā
597 C/; E karuṇāḥ
598 C sukhapratiṣṭhāpayanā; E mukhapraviṣṭhāpayanā
599 C, D/; E maitrīḥ
600 D/; E muditāḥ/
601 B, D -rūpatvenopekṣā; E -rūpatvopekṣā
602 E sarvadhamān
603 B, C, D, valambya; E valamve
604 B nirvvikalpaka; E nivilpaṃ
605 B vicinty//; C, D/; E vicinte/
606 C, E śūnyatāṃjñā-
607 B, D ham
608 B huṃkāre
609 B viśvavajramayiṃ; C viśvavajramayī; E viśvavajramayi
610 B bhūmim
611 A adhitiṣthate; E adhitiṣtheṭh
612 C, E praṃ-
613 A sthāryya
614 B bhagavatsāḥ
615 B gauravarṇa/
616 B/
617 B/
618 vāmeṃ
619 B/
620 B/

śaraṃ[621] caturthe khaḍgaṃ[622], vāmaprathamabhuje vajrapāśaṃ[623] dvitīye triśūlaṃ[624] tṛtīye dhanuḥ caturthe paraśuṃ[625]/ bodhivṛkṣopaśobhitā[626] nānāpuṣpaphalādyalaṅkṛtā[627] brahmāviṣṇumaheśvaranandikeśvarādibhiḥ saṃstutā[628], devanāgayakṣagandharvvair[629] dakṣiṇapārśve satkaraṇīyā[630], indrayamavaruṇavaiśravaṇāsuragaruḍa[631] kinnaramahoragādibhih devaiḥ stutā[632], rāgadveṣamohavāsanānusandhipāśacchedanakarī[633], paramantramudrāviṣakākhorddacūrṇaprayoga[634] viddheṣaṇābhicārakāṇāṃ[635] ca duṣṭacittānāṃ[636] vidhvaṃsanakarī, sarvvabuddhabodhisattvāryyagaṇavarapūjābhiratānāṃ paripālanakarī, mahāyānodgrahaṇalikhanapaṭhanavācanasvādhyayanaśravaṇadhāraṇābhiyuktānāṃ[637] parirakṣaṇakarī/

[1.2.2] evaṃbhūtāṃ bhagavatīṃ sphuraṇasaṃharaṇayogena sādaranirantarābhyāsenāvalambya tasyā jāpamantraḥ -----
oṃ maṇidhari vajriṇi mahāpratisare huṃ huṃ phat phat svāhā/

[1.2.3] tasyā mahāpratisarāyāḥ pūrvvasyāṃ diśi tathaiva pūrvvayogamadhikṛtya viśvapadmamadhye huṃkāreṇa vajracihnapariṇāmena[638] mahāsāhasrapramarddanī kṛṣṇavarṇā piṅgalorddhvakeśā narakapālālaṅkṛtā bhrūbhṛkuṭidaṃṣṭrākarālāvadanā sphuratsūryyamaṇḍalāsanā lalitākṣepeṇa mahābhūtamahāyakṣānākramamāṇā kaṭakakeyūramaṇḍitā hāranūpurabhūṣitā, tasyā dakṣiṇaprathamabhuje varadavajraṃ dvitīye aṅkuśaṃ tṛtīye śaraṃ caturthe khaḍgaṃ vāmaprathamabhuje tarjjanīpāśaṃ dvitīye paraśuṃ tṛtīye dhanuḥ caturthe

---

621 B śaraḥ/
622 B khaḍgaṃ
623 B vajrapāśaḥ
624 B/
625 B parśuḥ
626 B/
627 B//
628 B//; E saṃtustutā
629 B -gandharvvai; E gandharvva
630 E satkaranīyā
631 B indrar-, -garūḍa
632 B//; E stutāḥ
633 E -ānusandhibā-
634 B -carṇaprayoga; E kādevorda; チベット語訳「敵のマントラや印の毒を粉々にして」
635 A -cāra-; B -ābhicārūkāṇācaṃ
636 B duṣṭu-
637 A svādhyayana omits.
638 A bījacihna-

padmopari ṣoḍasaratnam, tasyā mūlamukhaṃ kṛṣṇaṃ dakṣiṇe śvetaṃ pṛṣṭhe pītaṃ vāme haritaṃ sarvvaṃ trinetram, nānāratnādyalaṅkṛtaśarīrā[639] mahābalaya[640] rākramā raudraveśā vaṭavṛkṣopaśobhitā saptamātrādidevatāsantrāsanakarī revatyādigrahāṇāṃ santrāsitamanāḥ vāsukyādyaṣṭanāgasantrāsanakarī vātapittaśleṣmādisaṃṣodhanakarī raudratamo 'ndhakārameghasphuṭanakarī sarvvāpamṛtyunivāraṇakarī/

[1.2.4] tasyā jāpamantraḥ -----

oṃ amṛtavare varapravaraviśuddhe huṃ huṃ phat phat[641] svāhā/

[1.2.5] tato mahāpratisarāyā dakṣiṇadigbhavane viśvapadmopari candramaṇḍlamadhye māṃkārabījapariṇāmena jhaṭiti mahāmāyūrī pītavarṇa sūryyamaṇḍalālīḍhā sattvaparyyaṅkinī trimukhā trinetrā aṣṭabhujā ratnamukuṭinī sarvvābharaṇabhūṣitā tasyā dakṣiṇaprathamabhuje varadaṃ dvitīye ratnaghṭadharā tṛtīye cakraṃ caturthe khaḍgaṃ vāmaprathamabhuje pātropari bhikṣāṃ (kṣuḥ) dvitīye mayūrapicchaṃ tṛtīye ghaṇṭopari[642] viśvavajraṃ caturthe ratnadhvajam, tato mūlamukhaṃ pītaṃ dakṣiṇe kṛṣṇaṃ vāme raktam, aśokavṛ kṣopaśobhitā tatpārśvasthitā[643], sasaptaviṣasacchādanakarī[644], saraudrakapilādirākṣasīvidhvaṃsanakarī samastanāgādīnāṃ santrāsanakarī devanāgayakṣagandharvvair namaskaraṇīyā sasaptaviṃśanakṣatrādinavagrahādibhiḥ[645] sevanīyā sasthāvarajaṅgamaviṣavibhojanīyā sadevadaityāsurasammohanakarī[646]/

[1.2.6] tasyā bhagavatyā jāpamantraḥ ---

oṃ amṛtavilokini garbhasaṃrakṣaṇi ākarṣaṇi[647] huṃ huṃ phat phat svāhā/

[1.2.7] tasyāḥ pratisarāyāḥ paścimadiśi viśvapadmopari candramaṇḍalamadhye maṃkārabījapariṇāmajāṃ[648] mahāmantranusāriṇī bhāvayet śuklavarṇāṃ dvādaśabhujāṃ trinetrāṃ sphuratsūryyamaṇḍalālīḍhāṃ ratnamukuṭinīṃ sarvvālaṅkāraśobhitāṃ navayauvanopetāṃ hāranūpurakuṇḍalālaṅkārāṃ śirīṣvṛkṣopaśobhitām, tasyāḥ prathamabhujābhyāṃ dharmmacakramudrā

---

639 B, C, D alaṅkṛtaṃ
640 A 不明; B, C, D mahābalaya
641 A omits.
642 ghaṭa-（Lokesh Chandra2003: 1973）
643 A tatpārśvasthitasaptasthitā/
644 B, E: -viṣaiḥ
645 A -kṣatragrahā-
646 A viṣa- omit
647 A -ṇiye
648 A 不明; B, E pariṇāma

dvitīyabhujābhyāṃ samādhimudrā tṛtīye[649] varadaḥ caturthe abhayaḥ pañcame vajraṃ ṣaṣṭhe śaraḥ tṛtīye tarjjanīpāśaḥ caturthe dhanuḥ pañcame ratnacchaṭā[650] ṣaṣṭhe padmāṅkatakalaśaḥ[651], mūlamukhaṃ śuklaṃ dakṣiṇe kṛṣṇaṃ vāme raktam, nānākusumābhikīrṇā sāṣṭalokapālādidevaiḥ saṃpūjanīyā sacaturmahārājikadevasaṅghaiḥ saṃstutā samālāvidyādharairarccitā/

[1.2.8] tasyā jāpamantraḥ -----

oṃ vimale vipule jayavare amṛte viraje huṃ huṃ phat phat svāhā/

[1.2.9] tato mahāpratisarāyā uttarasyāṃ[652] diśi visvapadmopai candramaṇḍalamadhye trāṃbījapariṇāmajā[653] mahāsītavatī[654] haritavarṇa sūryyamaṇḍalālīḍhā trimukhā[655] trinetrā ṣaḍbhujā tathāgatamukuṭinī sarvvābharaṇālaṅkṛtā divyavasatropacchādanī[656], tasyāḥ prathamabhuje abhayaṃ[657] dvitīye vajraṃ tṛtīye śaraṃ[658] vāmaprathamabhuje tarjjanīpāśaṃ[659] dvitīye dhanuḥ tṛtīye ratnadhvajam, mūlamukhaṃ haritaṃ dakṣine śuklaṃ vāme raktam, campakavṛkṣopaśobhitā[660] sakāmadevādipramukaiḥ sampūjya stutāsahārītyādiyakṣayakṣinīvidhvaṃsanakarī[661] kākolūkagṛdhraśyenakapotādividrāvaṇakarī[662] sabhūtapretapiśācavetālarākṣasādisaṃmohanakarī[663]/

[1.2.10] asyā jāpamantraḥ -----

oṃ bhara bhara sambhara sambhara indriyabalaviśodhani huṃ huṃ phaṭ phaṭ svāhā/

---

649 A paraśuḥ tṛtīye/
650 A -cchatrā
651 A kamalaḥ は誤字である。この karaśa（水瓶）は一般的に密呪随持明妃の十二臂のうちの一つの臂に持つ持物である。（A p.408）
652 D uttarasyān
653 A, E およびチベット語訳 trāṃ
654 バッタチャリヤ校訂では mahāsitavatī と記述されているが、本論文では mahāsītavatī に統一する。
A -śīta
655 A omits.
656 D divyavaṣtro-
657 D abhayaḥ
658 D śaraḥ
659 D pāśaḥ
660 D campako-; -śobhitāṃ
661 A stutāmahā-,
662 A -viprā-
663 D -vetāda-

[1.3] evaṃ yathānirddiṣṭaṃ maṇḍalaṃ vibhāvya tasyā raśmisamūhavyāptāt svasvabījāt raśmīn niścāryya tāśca raśmayaḥ samastatraidhātukamabhivyāpya tatraivākṣare praveśayet/ punargaganakuhare sphārayitvā jñānacakramākṛṣya saṃstutya sañcāryya svasamayacakre praveśayet/ tato dvayamekalolībhūtaṃ[664] vibhāvya tasmāt raśmibhiḥ sarvvatathāgatānākṛṣya sampūjya prārthayedabhiṣekam, sicyamānamātmānaṃ[665] paśyet/

[1.4] pūjāstutyamṛtāsvādapūrvvakaṃ bhāvayet vicakṣaṇaḥ ----- cakṣuṣor mohavajrī mahāpratisarā, śrotrayor dveṣavajrī mahāsāhasrapramarddanī, ghrāṇe mātsaryyavajrī mahāmāyūrī, vaktre[666] rāgavajrī mahāmantranusāriṇī, sparśe īrṣyāvajrī mahāsītavatī[667]/ evaṃ rūpavedanāsaṃjñāsaṃskāravijñānaskandhadhātvāyatanasvabhāvā evaṃ devatāviśuddhito jñātavyā viśeṣataḥ/

[1.5] tatraiva samayī bhūtvā mantraṃ japedanena vidhinā/ yānyeva mantrākṣaraṇyuccāryyante tāni devatāyogena sādhyanāmavidarbhitena śāntamānasena avicchinnaṃ japet/

jvare gare[668] tathā roge saṃgrāme ca tathaiva ca/
ekinī [sa] bhūtocchuṣmanadīśatruprapīḍite//
aśānividyunmeghānāṃ parvvate vanamārgayoḥ/
tasmānmantraṃ smarennityaṃ sarvvaśaṅkanisūdanam//

[2.1] tatraiva kramaḥ -----

sarvvasattvahitārthaya sarvvasattvahitodayam/
yena kenacidadhyeṣyamāyuṣo vṛddhihetutaḥ//
pañcarakṣāvidhānaṃ ca likhyate svastyayanaṃ[669] mayā/
sattvānāṃ ca hitārthaya varttayan maṇḍalaṃ śubham//

[2.2.1] śucibhūmyāṃ śubhe ramye gomayenopalepite[670]/
vitānavitate caiva nānāvastrapralambite//
samantālliptagandhena candanena viśeṣataḥ/
viṃśāṣṭa (ka) maṅguliṃ kṛtvā maṇḍalaṃ varttayet tataḥ//

---

[664] A dvayameva/
[665] A -ātmānaṃ ca
[666] A ca rakte
[667] バッタチャリヤ校訂では mahāsitavatī と記述されているが、本論文では mahāsītavatī に統一する。
[668] A śare
[669] A tasyāyanammayā
[670] A -lepayet

śvetena raktacūrṇena[671] śāntikarmma praśasyate/
padmasyāṣṭadalaṃ kuryyāt karṇikākeśarānvitam//
[2.2.2] kalaśān pañca saṃsthāpya sragdāmavastraśobhitam/
chatrapatākāsaṃyuktapallavena tu chāditam/
pustakaṃ dharmmadhātuṃ ca paṭaṃ cāgrāvalambitam/
puṣpaṃ dhūpaṃ ca gandhaṃ ca balinaivedyaḍhaukitam//
dūrvvākundasamāyuktaṃ śuklapuṣpaṃ viśeṣataḥ/
digvidikṣu ca devānāṃ pūjayecca yathāvidhi//
guḍabhaktaṃ śuklapuṣpaṃ pāyasaṃ ca viśeṣataḥ/
gandharvvāṇāṃ baliṃ dattvā pūrvvasthāne tu sthāpayet//
tilakṛṣṇasurāpūrṇaṃ matsyamāṃsapalāṇḍakaiḥ/
kumbhāṇḍānāṃ baliṃ dadyāt dakṣiṇe diśi sthāpayet//
pāyasaṃ dadhi kṣīraṃ ca sarjjanāṃ ca viśeṣataḥ/
paścimāyāṃ diśi sthāpya nāgānāṃ ca mahābalim//
māṣamudgakulatsthānāṃ[672] jāmbuḍīsīdhumeva ca/
uttarasyāṃ diśi sthāpya yakṣāṇāṃ tu baliṃ dadet//
riśānīṃ diśamārabhya yāvad vā pathagocare/
(673-śuklaraktaṃ ca haritaṃ-673) sragdāma ca pralambitam[674]//
madhyaśvetaṃ sragdāma nānāpuṣpaviśeṣataḥ/
kṣīrarudhiraśarāvāṇaṃ sarjjaragandhameva[675] ca//
tatradvastu śeṣāṇāṃ[676] arghaṃ dattvā yathārthataḥ//
phalāphalaṃ[677] yathāprāptaṃ laḍḍumodakaśaṣkuli//
piṣṭakādi yathoktaṃ ca khaṇḍakṣīraviśeṣataḥ/
dakṣiṇe baliṃ saṃsthāpya aṣṭacihnena śobhitam//
[2.3.1] tathā ca -----
dharmmabhāṇaka ācāryyaḥ karmmavajrī tathaiva ca/
snānaṃ kṛtvā śucirvastraṃ āsanaṃ ca śucirmatam//
pūrvvābhimukhaṃ tiṣṭhayet pāṭhayet maulinaṃ sadā/
piṇḍapātikabhikṣūṇāṃ śuci śīlaṃ praśasyate//
ācāryyāṅgulimā kaścit pāṭhayet pariśuddhitaḥ/

671 A raña-
672 A -kulayonāṃ
673 A -ca pītaharitañca; Ota. No. 4418 | ནག་པོ་དམར་པོ་ཁེར་པོ་དང་། |ལྷང་ཀྱའི་མེ་ཏོག་ཁྱེང་བ་སྣྱུ།
674 A -gdāmala-
675 A sajjira-
676 A viśeṣāṇāṃ
677 A halāhali

ekavārādikārabhyaikaviṃśādi pravarttayet//
nyūnādhikavidau pāṭhe samyaksiddhirna jāyate/
dhairyyavīryyeṇa sampannaḥ karuṇāsattvārthamudyamāt//
tena svastyayanaṃ kuryyāt pūrvvabuddhena bhāṣitam/
śuklabhājanabhaktānāṃ āmiṣaṃ ca vivarjjayet//

[2.3.2] sarvvaṃ nirāmiṣaṃ kṛtvā sarvvaśāstre tu sammatam/
uttarābhimukhācāryyaḥ tatra karmma samārabhet//
bhāvayet pūrvvamuddiṣṭaṃ devatālambanaṃ prati/
stutipūjāsamāyukto ghaṇṭāvādanatatparaḥ//

[2.3.3] namo 'stu buddhaya anantagocare
namo 'stu te satyaprakāśake mune/
satye pratiṣṭhāya prajāya mocake
sarvve ca kāmāḥ saphalā bhavantu//
namaste puruṣavīra namaste tu tathāgatāḥ/
namaste devatā sarvvā dharmmadhāto namo 'stu te//

[2.3.4] dūrvvākundasamāyukta[678] sādhyanāmavidarbhitam/ arccayed devatāmūrdhni dharmmadhātuṃ tathaiva ca//sakṛduccāryya mantreṇa sakṛd yogena[679] arccayet/

[3] ayutena tu karmmaṇa āyurvarddhati[680] sarvvavit/
yena[681] kenacidadhyeṣyaṃ[682] tasyā[683] maṇḍalaṃ[684] ca[685] pravarttayet[686]
rājyaṃ[687] rāṣṭraṃ[688] tathā grāmaṃ[689] goṣṭhamudyānameva[690] ca//
amanuṣyāvatārarogamaḍakadurbhikṣaṃ[691] naśyati[692]/
tena[693] karmmeṇa[694] rakṣante śuṣkadārūṇyapi[695] svayam//

---

678 A -yuktaṃmantraṃ
679 A yogrena
680 E āyuvarddhati
681 E yata
682 E kenacidadheṣyaṃ
683 A, E
684 E maṇḍala
685 E omit.
686 E pravarttayat
687 A bāhyarājeṃ; E rājeṃ
688 E rāṣṭra
689 A 不明; B gromaṃ; E grāmaṃ
690 B goṣṭhodyāna-; E goṣṭhedyāna-
691 B rogamotmarakadurbhikṣa; E -bhikṣan
692 E naseti
693 E tana

acintyakarmmaduḥkhāni[696] yadarthaṃ[697] karttumicchati[698]/
tato rakṣāvidhānena rakṣā bhavati niścitam//
vātajāḥ[699] pittajā[700] rogāḥ[701] śleṣmajāḥ[702] sannipātajāḥ[703]/
nihatāḥ sarvvarogāśca svasti bhavati sarvvadā[704]/
pāṭhasvādhyāyayogena nirvvighno[705] bhavati niścitam//
// pañcarakṣāvidhānam//

694 B kammeṇa
695 E -ārūṇepi
696 B -duḥkhānir
697 B, E yadartha
698 B katumicchati
699 B vātajā
700 B pitajā
701 E rogā
702 E śleṣmajā
703 E omit.
704 A marvvadā, B,D sarvvadā
705 B nivvighno

3.1『成就法の花環』チベット語訳テキスト

3.1.1　No.194「大随求明妃成就法」

རྒྱ་གར་སྐད་དུ། མ་ཧཱ་ཝ་ཏི་ས྄ཏ་ས྄ཏ་ཏ་ཀཾ། བོད་སྐད་དུ། ས་སོར་འབྱང་མ་ཆེན་མོའི་སྒྲུབ་ཐབས།

[0]　ས་སོར་འབྱང་མ་ཆེན་མོ་ལ་ཕྱག་འཚལ་ལོ། །

[1]　ལྷར་བཤད་པའི་བྱ་བའི་རིམ་པས་སྟོང་པ་ཉིད་སྙིམས་པའི་མཐུག་ཐུགས་སུ་ཡི་ཁེ་ཙ་ལས་བྱུར་བའི་རླུ་བའི་དཀྱིལ་འཁོར་ལ་ཡི་ཁེ་གཎྜ་ཁེར་པོའི་འོད་ཟེར་རྣམ་པ་སྣ་ཚོགས་པས་གཞན་གྱི་ངོན་བྱས་ནས་ཡོངས་ས་གྱར[706]་པ་ལས་བཅོམ་ལྡན་འདས་མ་ས་སོར་འབྱང་མ་ཆེན་མོར་སྐད་ཅིག་གིས་བདག་ཉིད་ཡོངས་སུ་རྫོགས་པར་བྱ་སྟེ།

[2]　སྐུ་མདོག་སེར་མོ་ཞལ་བཞི་མ་སྤྱན་གསུམ་མ་ཕྱག་བཀྲད་མ། ཞལ་དང་པོ་ནི་སེར་བའོ། །གཡས་པ་ནིད་ཀར་བའོ། །རྒྱབ་ཀྱི་ནི་མཐིང་ནག་གོ། །གཡོན་གྱི་ནི་དམར་བའོ། །གཡས་པའི་ཕྱག་རྣམས་ཀྱིས་ནི་རལ་གྲི་དང་འཁོར་ལོ་དང་མདུང་ཐུང་རྩེག་སུམ་པ་དང་མདའ་བསྟམས་པའོ། །གཡོན་པའི་ཕྱག་རྣམས་ཀྱིས་ན་མདུང་དང་། གཞུ་དང་། ཞགས་པ་དང་རྡོ་རྗེའོ། །སྟོ་ཚོགས་པ་ཐུ་དང་བླ་བའི་གངས་ལ་རོལ་ཅིང་བསྐོད་པས་ལགས་པར། བཞུགས་པ། འོད་ཟེར་དམར་པོའི་ཁོར་ཡུག་གིས་བསྐོར་བ། རྒྱན་རྣམས་བྱམས་ཅད་ཀྱིས་བཀྲན་པ། ན་བཟའ་རྣམ་པ་སྣ་ཚོགས་ཀྱི་སྟོད་གཡིག་དང་སྨད་གཡོགས་དང་འོད་ཀྱི་སྟོད་བ་ཤགས་བསྟམས་པ། རིན་པོ་ཆེ་སྣ་ཚོགས་པའི་སདད་བུ་རྒྱན་དང་ལྷན་པ་དེ་ལྟ་བུ་རྣམ་པར་བསམ་སར།

[3]　དེ་ནས་སྐུ་དང་གསུང་དང་ཐུགས་ཀྱི་ཐུ་བ་ལ་ཨོ་དང་ཨཱཿདང་། ཧཱུ་གི་ཡི་གེག་སུམ་དཀར་པོ་དང་སེར་པོ་དང་མཐིང་ནག་ཏུབས་མ་པར་བྱ་བའོ། །དེ་ནས་ནུམ་གཉིས་ཀྱིས་བར་ཐ་ལ་གནས་པའི་ཡི་གེ་ཧཱུ་རྣམ་པར་བསམ་པར་བྱ་ཞེང་ལྟ་རྣམ་པ་སྣ་ཚོགས་པ་རྣམས་ཀྱི་བདག་ཉིར་མཆོད་པར་ཡང་བལྟས་ལ། ཇི་སྲིད་ཏུ་སྲོས་བར་མ་གྱུར་པ་དེ་སྲིད་དུ་བསྐོམ་པར་

706 不明

བྱའོ།།

[4] སྐྱོ་བར་གྱུར་ན་ནི་རང་གི་སྙིང་གའི་རྒྱ་ལ་ལྷོང་བ་དམར་པོ་ལྟ་བུར་ཐུགས་བ་ལྟ་ནིང་ བཟློས་པར་བྱ་སྟེ། ཨོཾ་མ་ནི་རྡ་རི་བ་ཎ་ཏི་མ་ཏྲ་ཡ་ཏི་ས་ཏེ་ཏཾ་ཏཾ་ཧ་ཏ་ཧ་ཏ་ས་ཏྲ། སོ་སོར་ འབྱང་མ་ཆེན་མོའི་སྒྲུབ་ཐབས་སོ། །བཏེཏ་ཙ་ཐ་ལས་དགེ་སློང་ཚུལ་ཁྲིམས་རྒྱལ་མཚན་ ཀྱིས་བསྒྲུར་བའོ།།

3.1.2 No.195「大随求明妃成就法」

རྒྱ་གར་སྐད་དུ། མ་ཏྲ་ཡ་ཏི་ས་རེ་ས་ཏ་ནཾ། བོད་སྐད་དུ། སོ་སོར་འབྱང་མ་ཆེན་མོའི་སྒྲུབ་ ཐབས།

[0] འཕགས་སོ་སོར་འབྱང་མ་ཆེན་མོ་ལ་ཕྱག་འཚལ་ལོ།།

[1] དང་པོར་རྣལ་འབྱོར་པས་སེམས་མཉམ་པར་བཞག་པར་གྱུར་པས་སྙིང་གར་ ཕྱི་ཡིག་ ཡོངས་སུ་གྱུར་པ་ལས་སྣ་ཚོགས་པརྒྱ། དེ་འི་སྟེང་དུ་ཨ་ཡིག་ཡོངས་སུ་གྱུར་པ་ལས་བླ་བའི་ ངགྱེལ་འཕོར།

[2] དེ་ལ་ཕྱི་ཡིག་སེར་པོ་རྣམ་པར་བཀོད་ལ། དེ་ལས་བྱུང་བའི་འོད་ཟེར་གྱིས་བླ་མ་དང་ ས་ངས་རྒྱས་དང་བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔའ་རྣམས་ཡང་དག་པར་བསྐུལ་ཞིང་གདན་དྲངས། ནས་མཏྱན་དུ་སྦྱན་སྣ་ཚོགས་པལ་ཉེ་བར་བཞུགས་ཏེ། ཕྱག་འཚལ་བ་དང་། མཆོད་པ་དང་། སྟོག་པ་བཤགས་པ་དང་། བསོད་ནམས་ལ་རྗེས་སུ་ཡི་དང་བ་དང་། གསུམ་ལ་སྐྱབས་སུ་འགྲོ་ བ་དང་། བྱང་ཆུབ་ཏུ་སེམས་བསྐྱེད་པ་དང་། བསོད་ནམས་ཡོངས་སུ་བསྔོ་བ་དང་། བཟོད་བར་ གསོལ་བནམས་བྱའོ།།

[2.1] དེ་ནས་བྱམས་པ་དང་། སྙིང་རྗེ་དང་། དགའ་བ་དང་། བཏང་སྙོམས་རྣམས་བསྒོམ་བར་ བྱ་སྟེ།

[2.2] ཨོཾ་ཨུ་ཏ་ཏ་ཝཱ་ན་བཏ་ས་ཏ་ལ་ཐ་ཀོ་ཊི་ཞེས་བརྗོད་ནས་སྟོད་པ་ཉིད་དུ་རྣམ་པར་བསྒོམ་མོ། །དེ་ནས་རྐང་ཅིག་གིས་རང་གི་སེམས་ཟླ་བ་ལ་གནས་པའི་ཕྱོགས་སོར་བོ་རྣམ་པར་བསྒོམས་ལ། དེ་ཡོངས་སུ་གྱུར་བ་ལས་སོ་སོར་འབྱང་མ་སྐུ་མདོག་ཤིན་དུ་སེར་བ་རིན་པོ་ཆེའི་ཚོད་པན་ཙན།

[2.3] སེར་བོ་དང་། དཀར་བོ་དང་། ཐོན་པོ་དང་། དམར་པོའི་ཞལ་བཞིད་དང་ལྷན་པ། ཐུན་པ། ཕྱག་བརྒྱད་པ། ཕྱག་གཡས་པ་རྣམས་ཀྱིས་རལ་གྲི་དང་། འཕོར་ཁོ་དང་། རྡོག་ཐུམ་པ་དང་། མདའ་བསྐྱམས་པ། ཕྱག་གཡོན་པ་རྣམས་ཀྱིས་ཞགས་པ་དང་། དགྲ་ཐུ་དང་། གཞ་དང་། རོ་རྗེ་རྣམས་བསྟམས་པའོ། པདྨ་དང་བཅས་པའི་ཐུན་ལ་རོལ་བའི་ཐུབས་ཀྱིས་བཞུགས་པ། རིན་པོ་ཆེའི་རྒྱན་ཐུ་ཆོགས་པས་བརྒྱན་པ་རྣམ་པར་བསྒོམ་མོ། །དེ་ཕྱི་བོ་དང་། མཁྲིན་པ་དང། ལྷོད་གཅ་དང་།

[2.4] ཉེ་བའི་ལྷོང་གཅ་རྣམས་ལུ་བ་ལ་གནས་བའི་དཀར་བོ་དང་དམར་བོ་དང་སེར་བོ་དང་ནག་པོ་རྣམས་ཏེ། ཨོཾ་ཨཱཿདཱཾ་ཌཱི་ཞེས་པའི་ཡི་གེ་རྣམས་རྣམ་པར་བཀོད་ལ་ཐུགས་འདི་བརྗོད་ནས་བདག་ཉིད་ལྷ་མོའི་སྐུར་བྱིན་གྱིས་བརླབས་པར་བྱ་འོ། །

[3] དེ་ནས་རང་གི་ལྷོང་གའི་འོད་ཟེར་རྣམས་ཀྱིས་མི་བསྐྱོད་པ་ལ་སོགས་པ་རྣམས་ཡང་དག་པར་བསྐུལ་ནས་གང་དུང་དཔང་བསྐུར་བ་བླང་ནས་ཆོད་པན་གྱི་བདག་པོ་མི་བསྐྱོད་བ་བསམ་པར་བྱའོ། །

[4.1] དེ་ནས་རང་གི་ལྷོང་གཡས་མཆོད་པའི་ལྷ་མོ་རྣམས་ཡང་དག་པར་སྟོས་ནས་མཆོད་པ་དང་། བསྟོད་བ་རྣམས་བྱས་ནས་ཡི་གེ་བརྒྱ་པའི་ཐུགས་བཟློས་པར་བྱའོ། །ཇི་སྲིད་ངལ་བལམ་གྱུར་པ་དེ་སྲིད་དུ་བསྐོམས་པར་བྱའོ། །

[4.2] སེམས་ངལ་བར་གྱུར་ན་ཐུགས་བཟློས་པར་བྱའོ། །ཨཱཿམ་ཏེ་ཏ་ཏ་ཏ་ཏ་ཏ་ཏ་ཏ་ཏ་ཏ་ཏ་ཏ་ཏ་ཏ[707]

[707] Ota. No.4074(SM No.194)[4]の真言と類似している。

[4.3] ཞེས་སོ། ཧཱུྃ་ཧཱུྃ་ཕ་ཊ་ཕ་ཊ་ཅེས་པའི་ཐུགས་བྲལ་བར་ཡང་ངོ་། །ཨོཾ་བ་ཛྲ་སཏྭ་ས་མ་ཡཱ་མ་ནུ་པཱ་ལ་ཡ་བ་ཛྲ་སཏྭ་ཏྭེ་ནོ་པ་ཏི་•[708]ཥྛ་དྲྀ་ཌྷོ་མེ་བྷ་ཝ་སུ་ཏོ་ཥྱོ་མེ་བྷ་ཝ། སུ་པོ་ཥྱོ་མེ་བྷ་ཝ། ཨ་ནུ་ར་ཀྟོ་མེ་བྷ་ཝ། ས་རྦ་སི་དྡྷིཾ་མེ་པྲ་ཡ་ཙྪ་ས་རྦ་ཀ་རྨ་སུ་ཙ་མེ་ཙིཏྟཾ་ཤྲི་ཡཿ་ཀུ་རུ་ཧཱུྃ་ཧ་ཧ་ཧ་ཧ་ཧོཿབྷ་ག་ཝཱ་ན་ས་ཏ་ད་ཐཱ་ག་ཏ་བ་ཛྲ་མཱ་མེ་མུ་ཉྩ་བ་ཛྲཱི་བྷ་ཝ་མ་ཧཱ་ས་མ་ཡ་ས་ཏྭ་ཨཱཿ་ཡི་གེ་བརྒྱ་པའོ། །

[5] ལངས་པའི་དུས་སུ་དམ་ཚིག་ལ་མཆོད་པ་ལ་སོགས་པ་བྱས་ནས་བཟོད་པར་གསོལ་བར་བྱའོ། །སོ་སོར་འབྲང་མ་ཆེན་མོའི་སྒྲུབ་ཐབས་རྫོགས་སོ། །

3.1.3 No.196「随求明妃成就法」

རྒྱ་གར་སྐད་དུ། པྲ་ཏི་སཱ་རེ་སཱ་དྷ་ནཾ། བོད་སྐད་དུ། སོ་སོ་འབྲང་མའི་སྒྲུབ་ཐབས།

[0] འཕགས་མ་སོ་སོར་འབྲང་མ་ལ་ཕྱག་འཚལ་ལོ། །

[1] སྐྱེ་བོ་ཐམས་ཅད་ལ་ཡང་བྱམས་པ་སྟེ་སྐྱེ་བ་དང་རྒ་བ་དང་། ནབ་དང་འཆི་བའི་ཟུག་རྔུས་མནར་ཞིང་སྐྱོས་པ་རྣམས་ལ་སྙིང་རྗེ་དང་དགའ་བ་དང་བཏང་སྙོམས་ཀྱི་བློར་བྱས་ནས་མན་ངག་འདི་ལས་སྒྱུ་མ་དང་རྨི་ལམ་དང་མཚུངས་པས་ཤིན་ཏུ་མཆོག་ཏུ་མ་ལུས་པ་རྣམས་སྟོང་པ་ཉིད་དུ་རྣམ་པར་བལྟས་ནས་འགྲོ་བ་རྣམས་ཀྱིས་རྣམ་པར་ཤེས་པ་དང་ལུས་གཅིག་ཏུ་ཐུགས་པས་མདུན་དུ་རྣམ་པར་བསྒོམས་ཏེ། དེ་ནས་དེ་རྣམས་ཀྱི་ཡང་ཨ་ཡིག་དཀར་པོ་ལ་རེ་བོང་འཛིན་པའི་གཟུགས་སུ་གྱུར་ནས།

[2] སེར་པོའི་རྣམ་པའི་པྲཾ་ཡིག་ཏུ་བྱས་ཏེ། རང་གི་ས་བོན་གྱི་འོད་ཟེར་གྱི་ཕྱོགས་སོ་སོ་ནས་ཁམས་གསུམ་ཡང་སྣང་བར་མཛད་པར་བསམས་ནས་ལྷ་ཚོགས་ཆུ་སྐྱེས་ཀྱི་ཟེ[709]འུ་འབྲུལ་རྣམ་པར་དངས་པའི་ཟླ་བའི་གདན་ལ་བཞུགས་པ། ཀུན་ནས་སེར་ཞིང་སེར་བ་དང་། ཀུན་ནས་དཀར་ཞིང་དཀར་བ་དང་། དམར་བའི་ཞལ་གསུམ་ལ་སྤྱན་གསུམ་གསུམ་གྱིས་སྤྲས་པ། རིན་པོ་

[708] 不明
[709] Ota.No. 4407 ཟེ་; Toh. No. 3596 ཟེའུ་

ཆེའི་རང་བཞིན་གྱི་ཚོད་པན་ཅན། ན་བཟའ་སྣ་ཚོགས་པ་མན་བས་པ། འོད་ཀྱི་དཀྱིལ་འཁོར་
དམར་པོ་ཅན་ཞབས་རོལ་པའི་སྣབས་ཀྱིས་བཞུགས་པ། དཀར་འཛིན་ཟུང་ལྡན་པ་ལ་གོས་ཀྱིས་
སྟོང་གཡོགས་སུ་བྱས་པ། རལ་གྲི་དང་། འཁོར་ལོ་དང་། མདའ་དང་། རྡེ་གསུམ་པ་དང་། དགྲ་
སྟ་དང་། དཔལ་གྱི་ཞགས་པ་དང་། རྡོ་རྗེ་དང་། གཞུ་རྣམས་ཕྱག་གི་འདབ་མ་རྣམས་ཀྱིས་
བསྟམས་པའི་སོ་སོར་འབྱང་མར་སྒྲུབ་པོ་རང་ཉིད་དུ་གྱུར་ནས་

[3] ཨོཾ་ཞུཿཏྲཾ་ཞེས་པའི་ཡི་གེ་རྣམས་གསལ་ཞིང་བློ་དང་ལྡན་པ་ལུས་ཀྱི་རི་བོ[710]དང་རང་གི་
མཐར་བལྟས་ཏེ་ཟླ་བ་ལ་སོན་པ་དཀར་པོ་དང་། ས་རོ་པོ་དང་། ཐོན་པོའི་བདག་ཉིད་རྣམས་
སོ། །ཟླ་བ་ལ་མཇོས་པའི་ནུ་མ་ཟུང་གི་དབུས་སུ་གཅིག་ཏུ་གྱུར་པའི་ཕྱི་ཡིག་ལས་སྐྱེས་པའི་འོད་
ཟེར་རྩོལ་གས་པས་རང་གི་ལུས་ཡོངས་སུ་གང་བར་བསམས་ནས་རང་གི་ལྟ་མོའི་ཚོགས་

[4] དེ་བཞིན་དུ་ཡང་ཐུགས་པ་དང་བསྡུ་བའི་ཚོགས་ཡང་དག་པར་བསྐྱེད་ནས། གང་གི་ཚེ་ངལ་
ན་དེའི་ཚེ་མུ་ཏིག་གི་ཕྲེང་བ་བཞིན་དུ་བརྟན་ཞིང་འོད་ཟེར་ཤིན་ཏུ་རྒྱ་ཆེན་པོ་རབ་ཏུ་འབར་
བས་རང་གི་སྙིང་གར་ཟླ་བའི་སྟེང་དུ་མཚུངས་པ་མེད་པར་བསམས་ནས་བཟླས་པར་
བྱའོ། །འདི་བཞིན་དུ་རྟག་ཏུ་གུས་པ་དང་བཅས་ཤིང་འཇམ་པ་དུས་མང་པོ་དང་བཅས་པ་མ་
ཡིན་པར་བསམ་པ་རྣམ་པར་དག་པས་སོ། །དེ་ལ་ཐུགས་ཀྱི་རྒྱལ་པོ་འདིའོ། །ཨོཾ་མ་ཎི་པདྨ་རི་བཏྲ
ཎི་མ་ཏཱ་ཡ་ཏཾ་ཏཾ་ཕཏ་ཕཏ་སྭཱ་ཧཱ། སོ་སོ་འབྱང་མའི་སྒྲུབ་ཐབས་རྫོགས་སོ། །

710 Toh. No. 3596 བོད

3.1.4　No.197「聖孔雀明妃成就法」

རྒྱ་གར་སྐད་དུ། མ་དཱ་སྲ་ཡཱ་ཏྲི་སྲ་ཏ་ཀཾ། བོད་སྐད་དུ། རྒྱ་བྱ་ཆེན་མོའི་སྒྲུབ་ཐབས།

[1]　　ཐུར་བཤད་པའི་ཚོགས་སྒོ་ཚོགས་པང་དང་བླ་བ་ལ་ཡི་གེ་མཁོ་ཕྲང་གྱ་ལས་བྱུང་བའི་རྒྱ་ཆེན་མོ་སྟེ། སྐུ་མདོག་ཕྲང་གྱ་ཞལ་གསུམ་ཕྱག་དྲུག་མ་ཞལ་ར་རི་ཞིང་སྦྱན་གསུམ་མ། གཡས་པ་དང་ཅི་གེ་ཨོས་ཀྱི་ཞལ་ནི་ནག་མོ་དང་དཀར་མོའི། །གཡས་པའི་ཕྱག་གསུ་མ་ན་ནི་རིམ་པ་བཞིན་དུ་རྒྱ་བྱའི་མཆུག་སྦྲོ་དང་མདའ་དང་མཚོག་སྦྱིན་པའི་ཕྱག་རྒྱའོ། །དེ་བཞིན་དུ་གཡོན་པའི་ཕྱག་གསུམ་ན་ཡང་རིན་པོ་ཆེའི་གདུགས་དང་། གཞུ་དང་ཕྱག་ཟེད་པ་ལ་གནས་པའི་དབུམ་པའོ། །རྒྱན་རྣམ་པ་སྒོ་ཚོགས་པ་དང་སྣྲེག་པའི་ཉམས་བཀ་དང་ལྷན་པ་དང་། གཞོན་ནུ་མ་ལང་ཚོལ་བབ་པ་དང་། ཟླཔའི་གདན་དང་ཟླཔའི་འོད་ཟེར་དང་ལྷན་པ་དང་། སྒྲོལ་ཀྱང་གིས་བ་ཞུགས་པ་དང་། ངོན་ཡོད་གྱབ་པ་དབུ་རྒྱ་ན་ལ་བཞུགས་པར་བདག་ཉིད་བསྐོམ་པར་བྱ་བའོ། །

[2]　　ད་ནས་བདག་གི་མགོ་བོ་དང་། མཐིན་པ་དང་། སྙིང་ག་དང་ཕྲེ་བ་ལ་གནས་པའི་ཟླ་བ་ལ་རིམ་པ་ཇི་ལྟ་བ་བཞིན་དུ་ཨཾ་ ཨཱཿ་མཾ་ཏཾ་ཞས་བྱ་བའི་ཡི་གེ་བཞི་སྦྱོ་བ་དང་སྦྱ་བའི་བྱ་བ་དང་ཕྲན་པར་རྣམ་པར་བསྐོམ་པར་བྱ་བའོ། །[3]དེ་ནས་ཐུགས་བཟླས་པར་བྱ་སྟེ། ཨཱཿམ་ཏཾ་མ་ཡཱ་རི་པི་ཏ་ར་ཏ་ཀ་ཡ་ཏ་ས་ཏཾ་ཞེས་བྱ་བའོ། །འཕགས་མ་རྒྱ་བྱ་ཆེན་མོའི་སྒྲུབ་ཐབས་སོ། །

[4]　　། །ཨ་ཏྲ་ཡ་ལས་དགེ་སློང་ཚུལ་ཁྲིམས་རྒྱལ་མཚན་གྱིས་བསྒྱུར་བའོ། །

3.1.5　No.198「聖大千摧砕明妃成就法」

རྒྱ་གར་སྐད་དུ། མ་དཱུ་ས་ཏ་ཐ་ཡ་མ་ཏ་ཎི་སཱ་ཏ་ཀཾ། བོད་སྐད་དུ། ཐུགས་ཆེན་མོ་རབ་ཏུ་འཇོམས་པའི་སྒྲུབ་ཐབས།

[1]　　ཐུར་བཤད་པའི་ཚོགས་ཆུལ་གྱིས་སྟོ་ཚོགས་པཎ্ཌ་དང་ཟླ་བཞི་ཡི་གེ་ཙཾ་ལས་ངེས་པར་བྱུང་བའི་ཐུགས་ཆེན་མོ་རབ་ཏུ་འཇོམས་མར་བདག་ཉིད་བསྐོམ་པར་བྱ་སྟེ། སྐ་མདོག་དཀར་མོ་ཞལ་གཅིག་མ། ཕྱག་དྲུག་མ། གཡས་པའི་ཕྱག་གསུམ་གྱིས་ནི་རལ་གྲི་དང་མདའ་བསྟན་ཏེང་མཚོག་སྦྱིན་པའི་ཕྱག་རྒྱ་མཛད་པའོ། །གཡོན་པའི་ཕྱག་གསུམ་གྱི་སི་ནི་གཞུ་དང་། ཞགས་པ་དང་། མདའ་བ་སྟན་པའོ། རྣམ་པ་སྟོ་ཚོགས་པའི་རྒྱན་རྣམས་དང་ལྡན་པ་གི་ཟླུགས་དང་ལང་ཚོ་དང་སྐེག་པ་དང་ལྡན་པར་གྱུར་བ། དབུ་རྒྱན་ལ་རྣམ་པར་སྣང་མཛོ་དང་དཔལ་བ། ཟླ་བ་དང་པདྨའི་གདན་དང་ལྡན་ཞིང་ཟླ་བའི་འོད་དང་ལྡན་པའོ། །འདི་ནི་ ཐུགས་ཆེན་མོ་རབ་ཏུ་འཇོམས་པའི་སྒྲུབ་ཐབས་སོ། །། ཨ་བྷ་ཡ་ལས་ཆུལ་ཁྲིམས་རྒྱལ་མཚན་གྱིས་བསྒྲུར་བའོ། །

3.1.6　No.199「聖密呪随持明妃成就法」

རྒྱ་གར་སྐད་དུ། མ་དཱུ་མ་ཧཱ་ན་ཝ་ཏི་ས་ཏ་ཀཾ། བོད་སྐད་དུ། གསང་སྔགས་ཀྱི་རྟེས་སུ་འཛིན་པ་ཆེན་མོའི་སྒྲུབ་ཐབས།

[1]　　གསང་སྔགས་ཀྱི་རྟེས་སུ་འཛིན་པ་ཆེན་མོ་ཞལ་གཅིག་མ་ཕྱག་བཞི་མ་སྐུ་མདོག་ནག་མོ་སྟེ་གཡས་བའི་ཕྱག་གཉིས་ན་ནི་རྡོ་རྗེ་དང་མཚོག་སྦྱིན་པ་དང་ལྡན་པའོ། །གཡོན་པའི་ཕྱག་གཉིས་ན་ན་མདུང་དང་ཞགས་པ་དང་ལྡན་པའོ། །ས་བོན་གྱི་ཡི་གེ་ཙཾ་ལས་གྱུར་པ་དང་། མེ་བསྐྱོང་པ་དབུ་ལ་བཞུགས་བ་དང་། ཉེ་མའི་གདན་དང་འོད་ཀྱིད་ཡིན་ནོཞེས་བྱ་བ་ནི་འཕགས་མ་གསང་སྔགས་ཀྱི་རྟེས་སུ་འཛིན་པ་ཆེན་མོའི་སྒྲུབ་ཐབས་སོ། །མཁས་པ་ཨ་བྷ་ཡ་ལས་དགེ་སློང་ཆུལ་ཁྲིམས་རྒྱལ་མཚན་གྱིས་བསྒྲུར་བའོ། །

3.1.7　No.200「聖大寒林明妃成就法」

རྒྱ་གར་སྐད་དུ། མ་དྲ་སྲི་ཏ་བ་ཏྲི་ས་ཏ་ཀཾ། བོད་སྐད་དུ། བསིལ་བའི་ཚལ་ཆེན་མོའི་སྒྲུབ་ཐབས།

[1]　　བསིལ་བ་ཚལ་ཆེན་མོ་ནི་ཞལ་གཅིག་ཕྱག་བཞི་མ། སྐུ་མདོག་དམར་མོ་སྟེ། གཡས་པའི་ཕྱག་གཉིས་ན་ནི་བགྲང་བའི་ཕྲེང་བ་དང་། མཆོག་སྦྱིན་པ་དང་ལྡན་པའོ། །གཡོན་པའི་ཕྱག་གཉིས་ན་ནི་རྡོ་རྗེ་དང་ཐུགས་ཀྱིས་སྟེང་གན་གནས་པའི་པོ་ཏི་དང་ལྡན་པའོ། །ས་བོན་ཧཱཾ་ལས་གྱུར་པ་དང་། དབུ་རྒྱན་སྣང་བ་མཐའ་ཡས་དང་སྐྱེལ་ཀྱང་ཕྱེད་པས་གནས་པ་དང་། །རྒྱན་རྣམ་པ་སྣ་ཚོགས་དང་ལྡན་པ་དང་། ཉི་མའི་གདན་དང་། འོད་ཟེར་དང་ལྡན་པ་ཡང་ཡིན་ནོ་བྱ་བས་ནི་འཕགས་མ་བསིལ་བའི་ཚལ་ཆེན་མོའི་སྒྲུབ་ཐབས་རྫོགས་པ་ཡིན་ནོ། །ཨ་རྒྱ་ཡ་ལས་དགེ་སློང་ཚུལ་ཁྲིམས་རྒྱལ་མཚན་གྱིས་བསྒྱུར་བའོ། །

3.1.8　No.201「偉大な五護陀羅尼儀軌」

རྒྱ་གར་སྐད་དུ། ཨ་ཐ་མ་ནཱ་ཡ་རྒྱ་རི་ཏ་ཀ་ཆུ་དེ་བ་ཏཱ་ཁྱེའུ། བོད་སྐད་དུ། དེ་ནས་གདམས་ངག་གཞན་གྱི་ལྟ་ཐུ་ལེགས་པར་བསྟན་པར་བྱ་བའོ། །

[1.1]　　དེ་ལ་ས་སོར་འབྱང་མ་ཆེན་མོས་སོ་ཞལ་གསུམ་མ་སྟེ། ཞལ་ས་སོར་སྦྱན་གསུམ་གསུམ་མ། ནག་མོ་དང་དཀར་མོ་ནི་གཡས་པ་དང་ཅིག་ཤོས་ཀྱི་ཞལ་འོ། །ཕྱག་བཅུ་ལས་གཡས་ཀྱི་ཕྱག་ལྔ་ན་ནི་རིན་པ་ཆེ་ལྔ་བ་བཞིན་དུ་རལ་གྲི་དང་རྡོ་རྗེ་དང་། མདའ་དང་མཆོག་སྦྱིན་པ་དང་སྟེང་གར་གནས་བའི་ཕྱག་གིས་གཏུགས་འཛིན་པའོ། །དེ་བཞིན་དུ་གཡོན་པའི་ཕྱག་ལྔ་ན་ཡང་གཞུ་དང་། རྒྱལ་མཚན་དང་རིན་པོ་ཆེའི་གཏུགས་དང་། མདུང་དང་དྲྭ་བོ། །དབུ་རྒྱན་ལ་ནི་རིན་ཆེན་འབྱུང་ལྡན་ནོ། །སྟོང་ཤག་ནི་ནག་པོའོ། །སྟོང་གཡོགས་དམར་པོ་བསྟན་པའོ། །སྐྱེལ་ཀྱང་ཕྱེད་པའི་འཇོལ་པས་བསྐོང་པ། ལྷ་ཛས་ཀྱི་རྒྱན་རྣམས་ཀྱིས་ཀྱང་བརྒྱན་པ་ནི་རྫོགས་སོ། །

[1.2] ། །རྡ་བྱ་ཆེན་མོ་ནི་སྐུ་མདོག་ལྷང་ཀུ་ཞལ་གཅིག་ཕྱག་གཉིས་མ་སྟེ། ཕྱག་གཡས་པ་དང་གཡོན་པས་ནི་མཆོག་སྦྱིན་པ་དང་ལྷ་ཇས་ཀྱི་རྡ་བྱའི་མཇུག་སྦོ་བསྟམས་པས་ཀྱང་ཇོག་པ་ཡིན་ནོ། །

[1.3] སྟོང་ཆེན་མོ་རབ་ཏུ་འཇོམས་མ་ནི་ཐུ་མ་ཉིད་ཁོ་ན་བཞིན་ནོ། །

[1.4] གསང་སྔགས་རྗེས་སུ་འཐང་བ་ཆེན་མོ་ནི་ཞལ་གཅིག་ཕྱག་བཞིམ་སྐུམ་དོག་ནག་མོ་སྟེ། གཡས་པའི་ཕྱག་གཉིས་ན་རལ་གྲི་དང་མཆོག་སྦྱིན་པའོ།། གཡོན་པའི་ཕྱག་གཉིས་ན་ནི་མདུང་དང་ཞགས་པ་སྟེ་ཇོག་པ་ཡིན་ནོ། །

[1.5] བསེལ་བའི་ཚལ་ཆེན་མོ་ནི་སྐུ་མདོག་དམར་མོ་ཞལ་གཅིག་ཕྱག་བ་ཞེ་མ་སྟེ། གཡས་པའི་ཕྱག་གཉིས་ཀྱིས་ནི་རལ་གྲི་དང་མཆོག་སྦྱིན་པའོ། །གཡོན་པའི་ཕྱག་གཉིས་ཀྱིས་ནི་མདུང་དང་ཞགས་པ་ཡིན་ནོ། །

[2] ཡི་གེ་གསུམ་གྱིས་མཚན་བའི་རང་གིས་བོན་བར་དུ་རང་གི་མིད་དང་བཅས་པ་ནི་ཆེ་གེ་མོའི་སྔགས་སོ། །

3.1.9 No.206「五護陀羅尼成就法」

རྒྱ་གར་སྐད་དུ། པঞ্চ་རཀྵ་པི་ཏ་ནཱ་ཡ། བོད་སྐད་དུ། བསྲུང་བ་ལྔའི་ཆོ་গ།

[1.1.0] འཕགས་མ་ས་སོ་སོར་འབྱང་མ་ལ་ཕྱག་འཚལ་ལོ། །

[1.1.1] དང་པོར་རེ་ར་ཞིག་སྔགས་པས་ཞལ་བསང་བ་ལ་སོགས་པ་བྱས་ནས་ཡིད་དང་མཐུན་པའི་གནས་སུ་སྐྱན་བདེ་བ་ལ་ཉེ་བར་འདུག་སྟེ། ཨོཾ་ཨཱཿར་ཀཱ་ར་ཀཱ་ཏཱ་ས་ཏ། ཞེས་པས་རྣལ་འབྱོར་པའི་གནས་དང་བདག་ཉིད་བསྲུང་ཞིང་ལྷག་པར་གནས་པར་བྱའོ།

[1.1.2] ། དེ་ནས་རང་གི་ཐུགས་ཀར་ཨ་ཡིག་ལས་སྐྱེས་པའི་རླུ་བའི་དཀྱིལ་འཁོར་ལ། དེའི་སྟེང་དུ་སྤོ་ཡིག་ལས་འོད་ཟེར་འཕྲོས་པས་ཏླ་མ་དང་སངས་རྒྱས་དང་བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔའ་རྣམས་སྣང་བར་མཛད་ནས་མདུན་དུ་བལྟས་ཏེ་སོ་སོར་འབྱང་མ་ཆེན་མོ་ལ་སོགས་པའི་

འགོར་དང་བཅས་པ་མཆོད་པར་བྱའོ། །མེ་ཏོག་དང་། བདུག་སྤོས་དང་། མར་མེ་དང་། དྲི་
བཟང་ས་དང་། གཏོར་མ་དང་། ཞལ་ཟས་ལ་སོགས་པ་རྣམས་ཕུལ་ནས་སྒྲིག་པ་སོ་སོར་
བཤགས་པ་དང་། དགེ་མཆོག་གསུམ་ལ་སྐྱབས་སུ་འགྲོ་བ་དང་། བྱང་ཆུབ་ཏུ་སེམས་བསྐྱེད་
པ་དང་། དགེ་བའི་རྩ་བ་ཡོངས་སུ་བསྔོ་བ་དང་། བཟོད་པར་གསོལ་བ་རྣམས་བྱའོ། །དེ་ནས་
ཚད་མེད་པའི་གནས་བཞི་བསྒོམ་པར་བྱ་སྟེ། དེ་ལ་སྡུག་བསྔལ་བ་རྣམས་འདོན་པར་འདོད་
པའི་སྙིང་རྗེ་དང་། བདེ་བ་ལ་རབ་ཏུ་དགོད་པའི་བྱམས་པ་དང་། བདེ་བ་ལ་གནས་པ་ཉིད་
ཀྱིས་དགའ་བ་དང་། དེ་བཞིན་ཉིད་ཀྱི་ངོ་བོ་ཉིད་ཀྱིས་བཏང་སྙོམས་སུ་བྱའོ། །

[1.1.3] དེ་ནས་ཆོས་ཐམས་ཅད་ལ་ཡིད་ཀྱིས་དམིགས་ནས་རྣམ་པར་མི་རྟོག་པ་རྣམ་པར་
བསྒོམས་ཏེ། ཨོཾ་ཥུ་ཏྲ་ཏ་ཨ་ཏ་ཝ་ཏ། ས་ཎ་བ་ ཤ་ཏ་ཀཱ་ཏཱ་ཞེས་སོ།

[1.2.1] ། དེ་ནས་ཏཱ་ཡིག་གིས་ས་གཞི་སྟ་ཚོགས་ཏོ་རྟེའི་རང་བཞིན་དུ་བྱིན་གྱིས་བརླབ་པར་
བྱའོ། །དེ་ནས་དེ་བཞིན་དུ་ཏོ་རྟེའི་གུར་དང་། ཏོ་རྟེའི་ར་བ་དང་། ཏོ་རྟེའི་ཐྭ་ཟེ་སཀྱང་རྣམ་
པར་བསམ་པར་བྱའོ། །དེའི་དབུས་སུ་སུམ་ཡིག་ཡོངས་སུ་གྱུར་པ་ལས་རི་བོ་མཆོག་རབ་
མཐར་པ་ཆེན་པོའི་གོང་ཁྱེར་དུ་གྱུར་པ་མེ་ཏོག་སྟ་ཚོགས་མངོན་པར་བཀྲམ་པས་སོ། །དེའི་
སྟེང་དུ་ཏཾ[711]ཡིག་ཡོངས་སུ་གྱུར་པ་ལས་སྟ་ཚོགས་ཏོ་རྟེ་ལ་པཾ་ཡིག་ཡོངས་སུ་གྱུར་པ་ལས་སྟ་
ཚོགས་པདྨ་གེ་སར་དང་བཅས་པའི་རྩེའུ་འབྱུ་ལ། དེའི་སྟེང་དུ་ཟླ་བའི་དཀྱིལ་འཁོར་གྱི་
དབུས་སུ་ཕྱོ་ཡིག་ལས་འོད་རྩེར་ཡང་དག་པར་འཕྲོ་བ། དེས་ཡེ་ཤེས་ལྡའི་བདག་ཉིད་སྲུན་
ཏྲངས་ནས་དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་ཐམས་ཅད་དང་ལྷན་ཅིག་ཏུ་བྱས་ནས་ས་བོན་ཡོངས་སུ་
གྱུར་པ་ལས་འཚང་པར་འགྱུར་བའི་སྐུ་མདོག་གི་རྣམ་པ་ཅན་དང་རོ་གཅིག་ཏུ་གྱུར་ནས་སོ་
སོར་འབྱང་མ་ཆེན་མོ་སྐུ་མདོག་དཀར་མོ་ལོ་བརྒྱད་གཉིས་ལོན་པའི་རྣམ་པ་ཅན་སྲོ་བོར་བླ་
བའི་གادན་ལ་མཆོད་ཁེན་གྱིས་བརྒྱན་པ། ཉི་མའི་དཀྱིལ་འཁོར་ལ་ཞབས་གཡས་བརྒྱང་སྐྱིལ་
ཀྲུང་ཕྱེད་པས་བཞུགས་པ། ཞལ་བཞི་པ། སྲུན་གསུམ་པ། ཕྱག་བརྒྱད་པ། རྣ་རྒྱན་གཡོ་བས་

[711] A puṃ

མཇོས་ཤིང་དོ་ཤལ་དང་ཤུང་གཏུབ་ཀྱིས་བཆུན་པ། ཕྱག་གཏུབ་དང་། དཔྱང་ཆུན་དང་། ཆུ་རགས་ཀྱིས་མཇོས་ཤིང་ཆུན་ཐམས་ཅད་ཀྱིས་བཆུན་པ། བཅོམ་ལྡན་འདས་མ་དེའི་ཞལ་དང་པོ་ནི་རྒྱ་མདོག་ལྟར་དཀར་པོ། །གཡས་ནས་པོ། ཆུབ་སེར་པོ། །གཡོན་དམར་པོའོ། གཡས་ཀྱི་ཕྱག་དང་པོ་ན་འཕོར་ལོ། །གཉིས་པ་ན་རྡོ་རྗེ། །གསུམ་པ་ན་མདའ། བཞི་པ་ན་རལ་གྲི། གཡོན་གྱི་ཕྱག་དང་པོ་ན་རྡོ་རྗེའི་ཞགས་པ། གཉིས་པ་ན་རྩེ་གསུམ། གསུམ་པ་ན་གཞུ། བཞི་པ་ན་དགྲ་སྟའོ། །བྱང་ཆུབ་ཀྱི་ཤིང་གིས་ཉེ་བར་མཇོས་པ། སྟ་ཚོགས་པའི་རིན་པོ་ཆེའི་མེ་ཏོག་དང་འབྲས་བུ་ལ་སོགས་པས་བཆུན་པ། ཚངས་པ་དང་། ཁྱབ་འཇུག་དང་། དབང་ཕྱུག་ཆེན་པོ་དང་། དགའ་བྱེད་དབང་ཕྱུག་ལ་སོགས་པ་རྣམས་ཀྱིས་ཡང་དག་པར་བསྟོད་པ་དང་། ལྷ་དང་། ཀླུ་དང་། གནོད་སྦྱིན་དང་། དྲི་ཟ་རྣམས་ཀྱིས་གཡས་ཕྱོགས་ནས་ཡང་དག་པར་བསྐྱེན་བཀུར་བར་བྱེད་པ། དཔང་པོ་དང་། གཤིན་རྗེ་དང་། ཆུ་བདག་དང་། རྣམ་ཐོས་སྲས་དང་། ལྷ་མ་ཡིན་དང་། ནམ་མཁའ་ལྡིང་དང་། མིའམ་ཅི་དང་། ཁྱོ་འཕྲེ་ཆེན། པོ་ལ་སོགས་པ་རྣམས་དང་། ལྷ་རྣམས་ཀྱིས་བསྟོད་པ་དང་། འདོད་ཆགས་དང་། ཞེ་སྡང་དང་གཏི་མུག་གི་བག་ཆགས་ལས་སྐྱེ་བའི་རྣམ་པར་སྨིན་པ་རྣམས་གཅོད་པར་མཛད་པ། གསང་སྔགས་མཆོག་གི་ཕྱག་རྒྱས་དཏུ་བང་སྟེམ་རྣམས་འཇོམས་ཤིང་ཕྱེ་མར་མཛད་པ། ཞེ་སྡང་རབ་ཏུ་སྤོང་བའི་མངོན་སྤོད་ཀྱིས་ཀྱང་གཏུག་པའི་སེམས་དང་ལྡན་པ་རྣམས་རྣམ་པར་འཇོམས་པར་མཛད་པ། སངས་རྒྱས་དང་བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔའ་ཐམས་ཅད་དང་འཕགས་པའི་ཚོགས་རྣམས་ཡང་དག་པའི་མཆོད་པ་རྣམས་ཀྱིས་མངོན་པར་དགའ་བ་རྣམས་ཡོངས་སུ་སྐྱོང་བར་མཛད་པ། ཐེག་པ་ཆེན་པོ་ལེན་པ་དང་། ཡི་གེ་འདྲི་བ་དང་། ཀློག་པ་དང་། འཆང་བ་དང་། ཁ་དོན་བྱེད་པ་དང་། ཉན་པ་དང་། འཛིན་པ་དང་། མངོན་པར་ལྡན་པ་རྣམས་ལ་ཡོངས་སུ་སྤྱོང་བར་མཛད་པ་

[1.2.2] དེ་ལྟ་བུར་གྱུར་པའི་བཅོམ་ལྡན་འདས་མ་སྤྲོ་བ་དང་། བསྡུ་བའི་སྤྱོར་བས་དུས་རྟག་ཏུ་རྒྱུན་མི་འཆད་པར་གོམས་ཤིང་བལྟ་བར་བྱའོ། །དེའི་བརྒྱས་པའི་སྡུག་ནི། ཨོ་མ་ཏེ་ཌ་རི་

བཛྲེ་ཙི་མ་ཏྲ་ཧྲ་ཏེ་སྭཱ་རེ་ཧཱུྃ་ཧཱུྃ་ཕཊ་ཕཊ་སྭཱ་ཧཱ།

[1.2.3] སོ་སོ་འབྲང་མ་ཆེན་མོ་དེའི་ཤར་ཕྱོགས་སུ་ཇི་ལྟ་བ་དེ་བཞིན་དུ་སྔོན་མའི་སྦྱོར་བས་ལྷག་པར་བྱས་ཏེ། སྣ་ཚོགས་པདྨའི་དབུས་སུ་ཧཱུྃ་ཡིག་གི་ས་བོན་དང་མཚན་མ་ཡོངས་སུ་གྱུར་པ་ལས་སྟོང་ཆེན་མོ་རབ་ཏུ་འཇོམས་མ་སྐུ་མདོག་ནག་མོ་དབུ་སྐྲ་ཁམ་པ་གྱེན་དུ་བརྗེས་པ་མིའི་ཐོད་པས་བརྒྱན་པ། སྤྱིན་མཚམས་སུ་ཁྲོ་གཉེར་བསྡུས་ཤིང་ཞལ་མཆེ་བ་གཙིགས་པ། འོད་ཟེར་འཕྲོ་བ་ཉི་མའི་དཀྱིལ་འཁོར་གྱི་གདན་ལ་རོལ་པའི་སྟབས་ཀྱིས་འབྱུང་པོ་ཆེན་པོ་དང་། གནོད་སྦྱིན་ཆེན་པོ་ཀུན་ནས་གནོན་པ། ཕྱག་གདུབ་དང་། དཔུང་རྒྱན་གྱིས་བརྒྱན་པ། དོ་ཤལ་དང་། ཞབས་གདུབ་ཀྱིས་མཛེས་པ། དེའི་ཕྱག་གཡས་ཀྱི་དང་པོ་ན་མཆོག་སྦྱིན་དང་རྡོ་རྗེ། གཉིས་པ་ན་ལྕགས་ཀྱུ་དང་། གསུམ་པ་ན་མདའ། བཞི་པ་ན་རལ་གྲི། ཕྱག་གཡོན་གྱི་དང་པོ་ན་སྡིགས་མཛུབ་དང་། ཞགས་པ་དང་། གཉིས་པ་ན་དགྲ་སྟ། གསུམ་པ་ན་གཞུ། བཞི་པ་ན་པདྨའི་སྟེང་དུ་རིན་པོ་ཆེ་ཆ་དྲུག་པའོ། །དེའི་རྩ་བའི་ཞལ་ནག་པོ། །གཡས་དཀར་པོ། །རྒྱབ་སེར་པོ། །གཡོན་ལྗང་གུ་ཐམས་ཅད་སྤྱན་གསུམ་གསུམ་པ། སྐུ་ལ་རིན་པོ་ལ་སོགས་པ་སྣ་ཚོགས་པས་བརྒྱན་པ། ཕ་རོལ་གྱི་སྟོབས་ཆེན་པོ་གནོན་པ། སྟག་གི་མོའི་ཆ་ལུགས་ཅན་ཏྲ་གྲོ་ཧྣའི་ཤིང་ལྗོན་པ་ཉེ་བར་མཛེས་པ། མ་མོ་བདུན་ལ་སོགས་པའི་ལྷ་མོ་སྐྲག་པར་མཛད་པ། ནམ་གྲུ་ལ་སོགས་པའི་གཟའ་་རྣམས་འཇོམས་པར་མཛད་པ། ནོར་རྒྱས་ལ་སོགས་པའི་ཀླུ་བརྒྱད་ཡང་དག་པར་སྐྲག་པར་མཛད་པ། རླུང་དང་མཁྲིས་པ་དང་། བད་ཀན་ལ་སོགས་པ་རྣམས་སྦྱོང་བར་མཛད་པ། དྲག་པོའི་མུན་པ་སྡུག་པོའི་སྤྲིན་རྣམས་སེལ་བར་མཛད་པ། འཆི་བདག་ཐམས་ཅད་ཟད་པར་བྱེད་པའོ།

[1.2.4] ། དེའི་བཟླས་པའི་སྔགས་ནི་ཨོཾ་ཨ་མྲི་ཏ་བ་རཱི་བ་ར་པྲ་བ་ར་བི་ཤུདྡྷེ་ཧཱུྃ་ཧཱུྃ་ཕཊ་སྭཱ་ཧཱ།

[1.2.5] དེ་ནས་སོ་སོར་འབྲང་མ་ཆེན་མོའི་ལྷོ་ཕྱོགས་སུ་སྣ་ཚོགས་པདྨའི་སྟེང་དུ་ཟླ་བའི་དཀྱིལ་འཁོར་གྱི་དབུས་སུ་མཾ་ཡིག་གི་ས་བོན་ཡོངས་སུ་གྱུར་པ་ལས་སྐད་ཅིག་གིས་རྨ་བྱ་ཆེན་མོ་སྐུ་མདོག་སེར་མོ་ཉི་མའི་དཀྱིལ་འཁོར་ལ་ཞབས་གཡས་བརྐྱང་བའི་སེམས་དཔའི་སྐྱིལ་ཀྲུང་

གཞོས་བཞུགས་པ། ཞལ་གསུམ་པ་སྤྱན་གསུམ་པ། ཕྱག་བརྒྱད་པ། རིན་པོ་ཆེའི་ཅོད་པན་ཅན་
རྒྱན་ཐམས་ཅད་ཀྱིས་བརྒྱན་པ། དེའི་གཡས་ཀྱི་ཕྱག་དང་པོ་ན་མཆོག་སྦྱིན། གཡོས་པ་ན་རིན་
པོ་ཆེའི་བུམ་པ་བསྣམས་པ། གསུམ་པ་ན་འཕོར་ལོ། །བཞི་པ་ན་རལ་གྲི་དེ། །གཡོན་གྱི་ཕྱག་དང་
པོ་ན་ལྷུང་བཟེད་ཀྱི་སྟེང་ན་དགེ་སློང་། གཡོས་པ་ན་རྒྱ་བྱའི་མདོངས། གསུམ་པ་ན་ཐུམ་པའི་
སྟེང་ན་སྣ་ཚོགས་རྡོ་རྗེ། བཞི་པ་ན་རིན་པོ་འི་རྒྱལ་མཚན་ནོ། །དེ་ནས་རྩ་བའི་ཞལ་ནི་སེར་པོ།
གཡས་ནས་པོ། གཡོན་དམར་པོའོ། །ཐུ་ངན་མེད་པའི་ཞིང་ལྷོན་པས་ཉེ་བར་མཛེས་
པའོ། །དེའི་ལོགས་ན་གནས་པ་བི་ཤིཿབདུན་ཀྱིས་གཡོགས་པ། ཏྲ་པོ་དང་བཅས་པའི་སེར་
སྐྱ་ལ་སོགས་པའི་སྲིན་པོ་རྣམས་འཇོམས་པར་མཛད་པ། ཟླ་ལ་སོགས་པ་ཐམས་ཅད་སྒྲུག
པར་མཛད་པ། ལྷ་དང་། ཟླ་དང་། གནོད་སྦྱིན་དང་། ཏེ་ཀ་རྣམས་ཀྱིས་ཕྱག་བྱ་བའི་འོས་སུ
གྱུར་པ། རྒྱ་རྐར་ཉི་ཤུ་རྩ་བདུན་དང་བཅས་པའི་གཟའ་ལ་སོགས་པ་རྣམས་ཀྱིས་བསྟེན
བཀུར་བྱ་བའི་འོས་སུ་གྱུར་པ། བསྟན་པ་དང་། གཡོ་བའི་དུག་ཐམས་ཅད་ལས་རྣམ་པར
གྲོལ་བ། ལྷ་དང་བཅས་པའི་ལྷ་མ་ཡིན་རྣམས་ཡང་དག་པར་རྨོངས་པར་མཛད་པའོ། །བཅོམ
ལྡན་དས་མ་

[1.2.6] དེའི་བཟླས་པའི་སྔགས་ནི། ཨཱཾ་ཨ་ཐྲི་ཏ་བི་ལོ་ཀེ་ནི་གཱ་ཏ་ས་ཀ་ལ་ཏ་ཨ་ཡ་ཀ་ཏ་ཨ་ཏ་ཏ་ཏཾ་
ཕཏ་ས་ལ་ཏ་ཞེས་སོ།

[1.2.7] ། སོ་སོ་ར་འབྱང་མ་དེའི་ནུབ་ཕྱོགས་སུ་ཆོགས་པའི་སྟེང་དུ་ཟླ་བའི་དཀྱིལ་འཁོར
གྱི་དབུས་སུ་མཁ་ཡིག་གི་ས་བོན་ཡོངས་སུ་གྱུར་པ་ལས་སྒྲོས་པའི་གསང་སྔགས་རྗེས་སུ་འཇོན
མ་བསྒོམ་པར་བྱ་སྟེ། སྒྲ་མདོག་དཀར་མོ་ཞལ་གསུམ་པ། ཕྱན་གསུམ་པ་ཕྱག་བཅུ་གཉིས་པ།
ཞེ་མའི་དཀྱིལ་འཁོར་འོད་འཕྲོ་བ་ལ་གཡས་བརྒྱང་གིས་བཞུགས་པ། རིན་པོ་ཆེའི་ཅོད་པན
ཅན། རྒྱན་ཐམས་ཅད་ཀྱིས་མཛེས་ཤིང་ལང་ཚོ་གཞོན་ནུ་དང་ལྡན་པ། དོ་ཤལ་དང་། ཤུང
གཏུབ་དང་། ནོ་རྒྱན་གྱིས་བརྒྱན་པ། ཤྲི་ཏེ་ཤྲའི་ཤིང་ལྷོན་པས་ཉེ་བར་མཛེས་པ། དེའི་ཕྱག
དང་པོ་ཆོས་ཀྱི་འཁོར་ལོའི་ཕྱག་རྒྱ། གཉིས་པ་ཏིང་འཛིན་གྱི་ཕྱག་རྒྱ་གསུམ་པ་མཆོག་སྦྱིན།

བཞི་པ་མི་འཇིགས་པ། ལྷ་པ་ན་ངོ་རྡེ། དྲུག་པ་ན་མདའ། །གསོན་གྱི་གསུམ་པ་སྲིགས་མཐུ་བ་
དང་བཅས་པའི་ཞགས་པ། བཞི་པ་ན་མདའ། ལྷ་པ་ན་རིན་པོ་ཆེའི་དོག་པ། དྲུག་པ་ན་
པད་ཆགས་མཚན་པའི་ཚུ་སྐྱེས་སོ། །རྩ་བའི་ཞལ་དཀར་པོ། གཡས་ནག་པོ། གཡོན་དམར་པོའོ། །མེ་
ཏོག་སྣ་ཚོགས་པ་མངོན་པར་བཀྲམ་པ། འཇིག་རྟེན་སྐྱོང་བ་བརྒྱད་ལ་སོགས་པ་དང་བཅས་
པའི་ལྷ་རྣམས་ཀྱིས་ཡང་དག་པར་མཆོད་པའི་འོས་སུ་གྱུར་པ། རྒྱལ་པོ་ཆེན་པོ་བཞི་དང་
བཅས་པའི་ཚོགས་རྣམས་ཀྱིས་ཡང་དག་པར་བསྟོད་པ། མེ་ཏོག་མོ་དང་བཅས་པའི་རིག་
འཛིན་མ་རྣམས་ཀྱིས་མཆོད་པའོ།

[1.2.8] ། དེའི་བཟློས་པའི་སྔགས་ནི་ཙཾ་བི་མ་ལེ་བི་ཏུ་ལེ་ཪ་ཡ་བ་རེ་ཞ་ཐ་ཕྱི་ཏེ་བ་ར་ཛེ་ཏུཾ་ཏུཾ་ཕཏ་
ཕཏ་སྭཱ་ཧཱ་ཞེས་སོ།

[1.2.9] ། དེ་ནས་སོ་སོར་འབྱང་མ་དེའི་བྱང་ཕྱོགས་སུ་སྔ་ཚོགས་པཏྨའི་སྟེང་དུ་ཟླ་བའི་དཀྱིལ་
འཁོར་གྱི་དབུས་སུ་ཏཾ་ཡིག་གི་ས་བོན་ཡོངས་སུ་གྱུར་པ་ལས་སྐྱེས་པའི་བསིལ་བའི་ཚལ་ཆེན་
མོ་སྐུ་མདོག་ལྷང་ཀུ་ཅའི་མའི་དཀྱིལ་འཁོར་ལ་གཡས་བརྒྱང་གིས་བཞུགས་པ། ཞལ་གསུམ་མ།
སྒྲོན་གསུམ་མ། ཕྱག་དྲུག་པ། དེ་བཞིན་གཤེགས་པའི་དབུ་བརྒྱན་ཅན། རྒྱན་ཐམས་ཅད་ཀྱིས་
བརྒྱན་ཅིང་ལྟའི་ན་བཟས་ཉེ་བར་སྒྲུས་པའོ། །དེའི་ཕྱག་དང་པོ་མི་འཇིགས་པའི་ཕྱག་རྒྱ།
གཉིས་པ་ན་ངོ་རྡེ། གསུམ་པ་ན་མདའ། །གསོན་གྱི་དང་པོ་ཞགས་པ་དང་བཅས་པའི་སྲིགས་
མཐུ། གཉིས་པ་ན་གཞུ། གསུམ་པ་ན་རིན་པོ་ཆེའི་རྒྱལ་མཚན་མོ། །རྩ་བའི་ཞལ་ལྷང་ཀུ།
གཡས་པ་དཀར་པོ། གཡོན་པ་དམར་པོའོ། །ཙམ་པ་ཀའི་ཤིང་ལྟོན་པས་ཉེ་བར་མཛེས་པ།
འདོད་ལྷ་དང་བཅས་པའི་ལྷ་རྣམས་ཀྱིས་མཆོད་ཅིང་བསྟོད་པ། འཕྲིན་མ་དང་བཅས་པའི་
གཞོད་སྲིན་དང་གཞོད་སྲིན་མོ་རྣམས་རྣམ་པར་འཇོམས་པར་མཛད་པ། ཏྲ་ར་ཎ་དང་། ཌཱ
པ་དང་། ཏྲ་ཆོད་དང་། ཁ་དང་། ཀ་པོ་ར་ལ་སོགས་པ་རྣམས་འཇོམས་ཤིང་འདེད་པར་
མཛད་པ། འཇྲུང་པོ་དང་། ཡི་དགས་དང་། ཤ་ཟ་དང་། ར་ལངས་དང་། སྲིན་པོ་ལ་སོགས་པ་
དང་བཅས་པ་རྣམས་ཡང་དག་པར་རྒོངས་པར་མཛད་པའོ།

[1.2.10] ། དེའི་བཟླས་པའི་སྒྲགས་ནི། ཨོཾ་ཕ་ར་ཕ་ར། ཥཾ་ཕ་ར་ཥཾ་ཕ་ར། ཨེཀཏྲི་ཡ་བ་ལ་བི་ཤོ་ཕ་ནི་ཏཱཾ་ཏཱཾ་ཥཊ[712]།

[1.3] དེ་བཞིན་དུ་ཇི་ལྟར་གསུངས་པའི་མཆྭལ་རྣམ་པར་བསྒོམས་ནས། དེའི་འོད་ཟེར་གྱི་ཚོགས་ཀྱིས་ཁྱབ་པ་ལས་རང་རང་གི་ས་བོན་ལས་བྱུང་བའི་འོད་ཟེར་གྱིས་བསམས་གསུམ་མ་ཡིས་པ་མངོན་པར་ཁྱབ་ནས་དེ་ལ་དེ་བཞིན་དུ་ཡི་གེ་ལ་རབ་ཏུ་གཞུག་པར་བྱའོ། །སྣར་ཡང་ནམ་མཁའི་མཐོངས་སུ་སྦྲོས་ནས་ཡེ་ཤེས་ཀྱི་འཕོར་ལོ་སྤྱན་དྲངས་ནས་ཡང་དག་པར་བསྡོད་ཅིང་གང་དན་དྲངས་པ་རང་གི་དམ་ཚིག་གི་འཕོར་ལོ་རབ་ཏུ་གཞུག་པར་བྱའོ། །དེ་ནས་གཉིས་སུ་མེད་ཅིང་རོ་གཅིག་ཏུ་གྱུར་པར་རྣམ་པར་བསྒོམས་ལ། དེའི་འོད་ཟེར་རྣམས་ཀྱི་དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་ཐམས་ཅད་གང་དན་དྲངས་ཏེ་ཡང་དག་པར་མཆོད་ནས་དབང་བསྐུར་བར་གསོལ་བ་བཏབ་ནས་བདག་ཉིད་ལ་དབང་བསྐུར་བར་བགྱི་བར་བྱའོ།

[1.4] ། མཆོད་པ་དང་། བསྟོད་པ་དང་། བདུད་རྩི་མྱང་བ་སྦོན་ཏུ་འགྲོ་བས་མཁས་པས་བསྒོམ་པར་བྱའོ། །མིག་ལ་གཏི་མུག་ངོ་རྫི་ས་ས་ར་འབྱང་མ་ཆེན་མོའོ། །རྣ་བ་ལ་ཞེ་སྡང་ངོ་རྫི་སྟོང་ཆེན་མོ་རབ་ཏུ་འཇོམས་པ་ཆེན་མོའོ། །སྣ་ལ་ས་ར་སྣ་ངོ་རྫི་རྫ་བྱ་ཆེན་མོའོ། །ཁལ་ལ་འདོད་ཆགས་ངོ་རྫི་གསང་སྒྲགས་རྫས་སུ་འཇོན་ཆེན་མོའོ། །རེག་བྱ་ལ་ཕྲག་དོག་ངོ་རྫི་བསེལ་བའི་ཚལ་ཆེན་མོའོ། །དེ་བཞིན་དུ་གཟུགས་དང་ཚོར་བ་དང་། འདུ་ཤེས་དང་། འདུ་བྱེད་དང། རྣམ་པར་ཤེས་པ་རྣམས་ཏེ། ཕུང་པོ་དང་། ཁམས་དང་། སྐྱེ་མཆེད་ཀྱི་རང་བཞིན་རྣམས་ལ་དེ་བཞིན་དུ་ལྷ་རྣམས་ཀྱི་རྣམ་པར་དག་པའི་ཁྱད་པར་ཤེས་པར་བྱའོ།

[1.5] ། དེ་ལ་དེ་ལྟ་བུའི་དམ་ཚིག་ཏུ་གྱུར་པས་ཆོ་ག་འདིས་སྒྲགས་བཟླས་པར་བྱའོ། །གོང་གི་སྒྲགས་ཀྱི་ཡི་གེ་བརྗོད་པར་བྱ་བ་དེའི་ལྟའི་སྟོར་བས་བསྒྲུབ་བྱའི་མིང་སྒྲོལ་ནས་ཞི་བའི་སེམས་ཀྱིས་རྒྱུན་མི་འཆད་པར་བཟླས་པར་བྱའོ། །རིམས་དང་། དུག་དང་། དེ་བཞིན་དུ་ནད་དང་། གཡུལ་ལ་ཡང་དེ་བཞིན་དུ་བྱའོ། །མཁའ་འགྲོ་མ་དང་། འཕྲུང་པོ་དང་། རྒྱགས་བྱེད་དང་།

712 A -phaṭ phaṭ svāhā/

གཙང་པོ་དང་། དགྲས་རབ་ཏུ་འཚོ་བ་དང་། ཐོག་དང་། སྐར་མདའ་ལྷུང་བའི་འཇིགས་པ་རྣམས་ལ་རེ་དང་། ནགས་དང་། ལམ་དག་ཏུ་དེའི་ཐུགས་དྲན་པས་རྒྱ་ཏུ་བག་ཚ་བ་ཐམས་ཅད་སེལ་བར་བྱེད་དོ།

[2.1] ། དེ་ལ་རིམ་པ་འདི་བཞིན་དུ། །སེམས་ཅན་ཀུན་ལ་ཕན་དོན་ཕྱིར། །སེམས་ཅན་ཀུན་ལ་ཕན་འབྱུང་བ། །གང་དང་གང་གིས་གསོལ་འདེབས་པ། །དེའི་ཚེ་ནི་འཕེལ་བའི་རྒྱུ། །བསྡུང་བ་ཐུ་ཡི་ཆོ་ག་འདིས། །བདེ་ལེགས་འབྱུང་བ་བདག་གིས་བྱ། །སེམས་ཅན་ཀུན་ལ་ཕན་དོན་ཕྱིར། །དགེ་བའི་མཆྱལ་ཟླུམ་པོ་བྱ། །ས་ཕྱོགས་གཙང་ཞིང་ཉམས་དགའ་བར།

[2.2.1] ། བ་ཡི་ལྷེ་བས་ཉེ་བར་བྱུགས། །ཟླ་རེ་ཡིས་ནི་སྟོང་གཡོགས་ཤིང་། །རྣམ་པ་སྣ་ཚོགས་གོས་རྣམས་བཙད། །ཙོན་ད་ན་ཁྱད་པར་ཅན་དག་དང་། ཏྲི་བཟངས་དག་གི་ཀུན་ནས་བྱུགས། །སོར་མོ་ཉི་ཤུ་རྩ་བརྒྱད་ཀྱི། །མཆྱལ་ཟླུམ་པོར་བྱ་བར་བྱ། །དེ་ནས་ཕྱལ་ཚོན་དཀར་པོ་ཡིས། །ཞི་བའི་ལས་ལ་རབ་ཏུ་བསྟན། །རེཏ་འབྱུ་གི་སར་དང་བཅས་པའི། །པདྨ་འདབ་མ་བརྒྱད་པར་བྱ།

[2.2.2] ། བྱམ་པ་ལྷ་ནི་ཡང་དག་དགོད། །མེ་ཏོག་ཕྲེང་བ་གོས་ཀྱིས་མཛེས། །ལོ་མ་དག་གིས་ཁ་བརྒྱན་ཅིང་། །གཏུགས་དང་བ་དན་ཡང་དག་ལྡན། །ཤུ་རེ་དང་ནི་ཚོས་དབྱིངས་དང་། །བྲིས་སྐུ་མཏུན་ཏུ་ཡང་དག་བརྒྱད། །མེ་ཏོག་སྒོས་དང་ཏྲི་དང་ནི། །གཏོར་མ་ཞལ་ཟས་དབུལ་བར་བྱ། །ཏྲུར་བ་ཀུན་དང་ཡང་དག་སྦྱོར། །མེ་ཏོག་དཀར་པོ་ཁྱད་འཕགས་རྣམས། །ཕྱོགས་དང་ཕྱོགས་མཚ�་ལྟ་རྣམས་ཀྱི། །ཆོ་ག་ཇི་བཞིན་མཚོད་པར་བྱ། །ཟན་དང་བུ་རམ་མེ་ཏོག་དཀར། །འོ་མ་ཡི་ཁྱེ་བག་རྣམས། །ཤར་ཕྱོགས་གནས་སུ་དགོད་བྱས་ནས། །ཏྲི་ཟ་རྣམས་ལ་གཏོར་མ་དབུལ། །ཏིལ་ནག་དང་ནི་ཚང་གིས་བཀང་། །ཤ་དང་ཉ་ཤ་སྦོག་པ་རྣམས། །ལྟོ་ཕྱོགས་སུ་ནི་ཡང་དག་དགོད། །གླུལ་བྱུམ་རྣམས་ལ་གཏོར་མ་དབུལ། །འོ་མ་ཞོ་དང་འོ་ཐུག་དང་། །བཙན་ན་ཡི་ཁྱེ་བག་རྣམས། །ནུབ་ཀྱི་ཕྱོགས་སུ་ཡང་དག་དགོད། །གཏོར་མ་ཆེན་པོ་གླུ་ལ་དབུལ། །མོན་གྲེཏ་ཐུང་གི་རྒྱ་ཐབ་དང་། །ཛོག་ཏེ་དང་བུར་ཚང་རྣམས། །བྱང་གི་ཕྱོགས་སུ་

ཡང་དག་དགོད། །གནོད་སྦྱིན་རྣམས་ལ་གཏོར་མ་དབུལ། །དབང་ཕྱུག་ནས་ནི་བརྩམས་ནས་ནི། །ཇི་སྐད་ཆུང་གི་སྤྱོད་ཡུལ་བར། །[713]ནག་པོ་དམར་པོ་སེར་པོ་དང་། །ལྷང་གུ[713]འི་མེ་ཏོག་ཕྲེང་བ་སྤྲད། །དབུས་སུ་མེ་ཏོག་ཕྲེང་བ་དཀར། །མེ་ཏོག་སྣ་ཚོགས་ཁྱད་འཕགས་རྣམས། །འོ་མ་ཁྲག་གི་ཁ་ཕོར་རྣམས། །ཞོ་ཟན་ཏི་རྣམས་དེ་བཞིན་དུ། །དེ་བཞིན་དངོས་པོ་མ་ལུས་རྣམས། །ཇི་ལྟར་རིགས་པས་མཆོད་ཡོན་དབུལ། །འཕགས་བྱ་རྩ་བ་ཇི་སྙེད་དང་། །ལ་དུ་མ་ད་ཀ་ཆང་བྱ། །ཇི་སྐད་གསུངས་བཞིན་ཆང་བྱ་སོགས། །ཀ་ར་འོ་མའི་ཟྭ་ཐག་གིས། །གཏོར་མ་སྟོ་ཡི་ཕྱོགས་སུ་བཞག། མཚན་མ་བརྒྱད་ཀྱིས་རབ་མཛོས་པ།

[2.3.1] ། དེ་བཞིན་དུ་ཡང་ཆོས་འཆད་པ་ཡི་སློབ་དཔོན་དང་། །ལས་ཀྱི་རྗེ་རྗེ་དེ་བཞིན་དུ། །ཟླུས་བྱས་གཙང་མའི་གོས་བགོ་ཞིང་། །དེ་བཞིན་སྟན་ཡང་གཙང་མར་འདོད། །ཞལ་ནི་ཤར་དུ་མངོན་ཕྱོགས་ནས། །སྟྲ་བཅད་ནས་ནི་རྒྱ་ཏུ་བལྟ། ། དགེ་སློང་ཚུལ་ཁྲིམས་གཙང་མ་ཡི། །བསོད་སྟོམས་པ་རྣམས་མཆོག་ཏུ་བསྟན། །སྦྱིན་བདག་སློབ་དཔོན་གང་ཞིག་ གིས། །ཡོངས་སུ་དག་པར་བལྟ་བར་བྱ། །ལན་ཅིག་ལ་སོགས་བརྩམས་ནས་ནི། །ཉི་ཤུ་རྩ་གཅིག་ལ་སོགས་བལྟ། ། ཆོ་ག་ཆད་པ་ལ་སོགས་པས། །ལྷག་མ་པས་ཡང་དག་འགྲུབ་མི་འགྱུར། །བློ་དང་བརྩོན་འགྲུས་ཕུན་ཚོགས་པ། །བརྩེ་བས་སེམས་ཅན་དོན་བརྩོན་པས། །དེ་ཡིས་བདེ་ལེགས་སྒྲུབ་པར་ནི། །ཐོན་ཀྱི་ས་ངམ་རྒྱས་རྣམས་ཀྱིས་གསུངས། །ཁ་ཟས་དཀར་པོས་སྟོན་མོ་བྱས། །ཤ་ཡི་བཟའ་བ་རྣམ་པར་སྤང། །བསྟན་བཅོས་ཀུན་ལས་མཐུན་པར་ནི། །ཀུན་ལ་ཤ་ནི་མེད་བྱས་ལ།

[2.3.2] ། སློབ་དཔོན་བྱང་དུ་ཞལ་ཕྱོགས་པས། །དེ་ལ་ལས་ནི་ཡང་དག་བརྩམ། །བསྐོམ་པ་ཐོན་དུ་གསུངས་པ་བཞིན། །ལྟ་རྣམས་སོ་སོ་ལ་དམིགས་ནས། །མཆོད་ཅིང་བསྟོད་པ་དང་ལྡན་པས། །དྲིལ་བུ་དགྱེལ་ཞིང་དེ་བཞིན་ལ། །མཐའ་ཡས་སྦྱོང་ཡུལ་སངས་རྒྱས་ལ་ནི་ཕྱག་འཚལ་འདུད།

713 A śuklaraktaṃ ca haritaṃ

[2.3.3] ། བདེན་པ་གསུངས་མཛོད་སངས་རྒྱས་ལ་ནན་ཕྱག་འཚལ་འདུད། །བདེན་པ་ལ་ནི་རབ་གནས་རབ་ཏུ་རྒྱལ་གྱུར་ཅིག ། འདོད་པ་ཀུན་ལས་གྲོལ་ཞིང་འཕགས་བྱ་དང་བཅས་ཤོག ། རྒྱས་བྱ་དགའ་བོ་ཕྱག་འཚལ་འདུད། །དེ་བཞིན་གཤེགས་ལ་ཕྱག་འཚལ་འདུད། །ལྷ་རྣམས་ཀུན་ལ་ཕྱག་འཚལ་འདུད། །ཆོས་ཀྱི་དབྱིངས་ལ་ཕྱག་འཚལ་འདུད།

[2.3.4] ། དྲུར་བླ་ཀུན་ད་ཡང་དག་སྦྱར། །བསྟོད་བྱའི་མིང་ནི་ཐུགས་ཀྱིས་སྒྲོལ། །ལྷ་རྣམས་ཀུན་ནི་མཆོད་བྱ་ཞིང་། །ཆོས་ཀྱི་དབྱིངས་ཀྱི་རང་བཞིན་དུ། །ཐུགས་ནི་ལན་ཅིག་བརྗོད་ནས་ནི། །ལན་ཅིག་སྦྱོར་བས་མཆོད་པར་བྱ།

[3] ། ཁྲི་ཕྲག་གཅིག་གི་ལས་ཀྱིས་ནི། །ཚེ་ནི་ཀུན་དུ་འཕེལ་བར་རིག། །གང་དང་གང་གིས་གསོལ་འདེབས་ན། །དེ་ཡི་མཆྲལ་ཐེ་བར་བྱ། །རྒྱལ་ཕྱིད་ཡུལ་དང་དེ་བཞིན་གྱོང་། །ལྷས་དང་རྒྱུད་མོས་ཚལ་དེ་བཞིན། །མི་མ་ཡིན་པ་བཞུགས་གྱུར་པའི། །འཆི་ནད་དང་ནི་མུ་གེ་རྣམས། །དེ་ཡི་ལས་ཀྱིས་བསྡུང་བར་བྱ། །ཤིང་རྣམས་ལ་ཡང་ལོ་འབྲས་འབྱུང་། །ལས་ཀྱི་ཕྱག་བསྟལ་བས་མ་མི་ཁྱབ། །བྱ་བ་གང་ཞིག་བསྟོད་འདོད་ན། །དེ་ནས་བསྡུང་བའི་ཚེ་ག་ཡིས། །ངེས་པར་བསྡུང་བར་བྱེད་པར་འགྱུར། །ཆུང་དང་མཁྲིས་པ་ལས་རྒྱས་ནས། །བད་ཀན་འདུས་པ་ལས་གྱུར་པའི། །མ་ཡིས་པ་ཡི་ནད་རྣམས་ཀུན། །རྐྱ་ཁུ་བདེ་ལེགས་ཉིད་དུ་འགྱུར། །ཏྲོག་དང་ཁ་ཏོན་སྦྱོར་བ་ཡིས། །ངེས་པར་བགེགས་རྣམས་མེད་པར་འགྱུར། །བསྡུང་བ་ཐ་ཡི་ཚེ་ག་རྫོགས་སོ། །

＊＊＊　　謝　辞　　＊＊＊

主指導教授の山口しのぶ先生より、学問や研究についての学術的な知識をはじめ、語学、アプローチの方法、研究に対する心構えなど、非常に多くのことを一からご指導して頂いた。大変貴重なお時間を分けてくださり、心から感謝の気持ちと、御礼を申し上げる。副指導教授である渡辺章悟先生には、著者が大学入学時からお世話になり、講義の時間以外にも多くのことを教えて頂いた。東洋大学東洋思想文化学科の先生方に今日まで御指導賜ることが出来、誠に有り難かった。東洋大学東洋学研究所の先生方、東洋大学関係者の方々、今日まで研究を支えてくださった多くの皆様に、この場をお借りして改めて厚く御礼申し上げる。